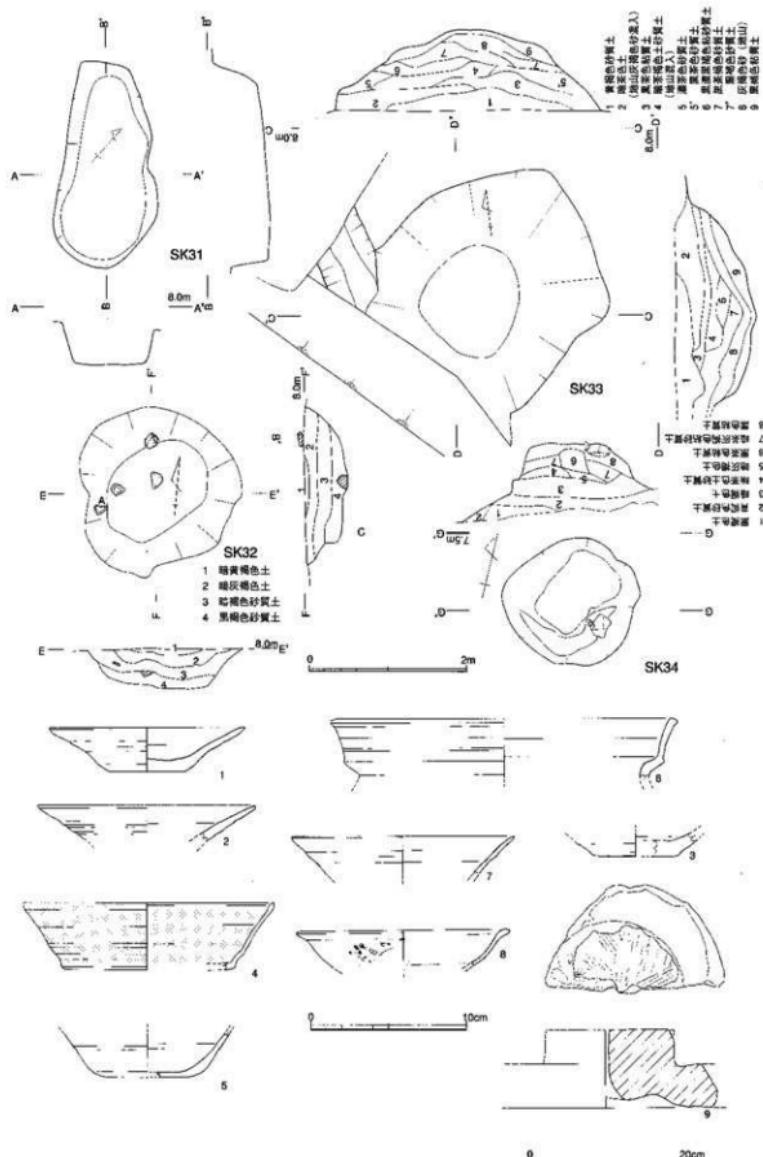
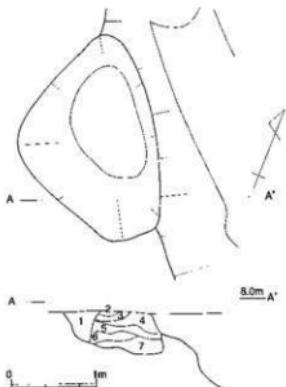


第95図 古志本郷遺跡SK25~34実測図1 (S=1/60)



第96図 古志本郷遺跡SK25~34実測図2・出土遺物実測図 (地盤S=1/60 遺物S=1/3)

が想定される。調査時にも多量の湧水があった。このような前提に立つと、2段にみえる上部第1・2層部分は、井戸の廃棄にかかる掘削を示す可能性もある。



第97図 古志本郷跡SK35実測図 (S=1/80)

SK 28 (第95図)

規模・構造 C区中央北寄りにあり、規模は、推定で長径3.5mの梢円形をなす。深さは40cm程度の浅い土壌で、SD 33に切られる。

出土遺物 (第96図-1・2) 1・2は土師質土器坏である。1は立ち上がりが急で途中から外反するタイプで、典型的な土師質土器IV期中段階の坏である。

年代・性格 SK 28の時期は出土遺物から土師質土器IV期に当たる。

SK 29 (第95図)

規模・構造 C区中央南端、SE 0.5の東に位置し、右群がない点を除くと、形態などSE 0.5に類似する。規模は上端で長径3m、短径2.6mほどで深さは1.3mを測る。断面は半円形をなし、底部の標高は6.4mである。なお、いくつかのステップを中間に持っている。

土層堆積状況 SK 27同様、最初の掘削とは別に再度掘削があったことが推測される(第1・2層)。ただし、最初の掘削から上部のステップ(第6層)はあったと考えられ、再掘削はその部分まで及んでいない。

年代・性格 出土遺物(第96図-3)は小片であるが、中世の土師質土器であることは明らかである。性格については素掘りの井戸がまず想定される。ただし、上部の再掘削については、全体が埋没した後に行われているので、素掘り井戸の廃棄に伴うものとは考えづらい。

SK 30 (第95図)

規模・構造 C区中央やや南寄りに位置する。規模は長径2.2mを測る梢円形で、深さは60cmほどである。SD 36に切られており、第95図第1・2層はSD 36の堆積土である。

土層堆積状況 第3・4層で中央と側に区分され、側は地山に近い砂質土である。

出土遺物 (第96図-4) 4は土師器坏で、底部を除き内外面赤彩である。

年代・性格 SK 30の時期は奈良・平安時代と考えられる。土塙墓の可能性がある。

SK 31 (第96図)

規模・形態 C区中央南寄り、SK 30の西に位置する。規模は長径2.6m、短径1.3m、深さ0.5mを測り、SK 30に類似する。なお、埋土は黒褐色系の土であった。SD 37を切る。

出土遺物 (第96図-5) 5は、回転ナデによって整形される土師器坏で、底部外面を除き内外面赤彩である。底部は最終的にはナデられている。

年代・性格 出土遺物からSK31の年代は、奈良・平安時代と考えられる。性格については、SK30同様、土壤墓の可能性がある。

SK32(第96図)

規模・形態 C区西側中央に位置する。直径2m前後のほぼ円形をなし、深さは0.5mを測る。底部も直径1.2mほどの円形で、断面は半円形をなす。径30cm大の石が埋土に含まれていた。SD38を切る。

年代・性格 出土遺物はなく、年代は不明であるが、SD38を切ることから、古墳時代前期以降であり、埋土などからは中世の遺構と推測される。

SK33(第96図)

規模・構造 C区調査区西片に位置する。規模は上端で直徑3mの不整円形をなし、下端で直徑1.5m、深さは1.0m程度で、底部の標高は6.7m前後である。SD39を切る。

出土遺物(第96図-6) 6は口径22cmを測る大型の複合口縁の壺で、草田6期に相当する。この他、出土遺物には圓化できなかったが土師質土器小片が若干存在する。

年代・性格 SK33の時期はSD39を切ることと、土師質土器小片の出土から、中世以降である。遺構の性格としては素掘り井戸が想定される。

SK34(第96図)

規模・構造 C区南西隅に位置する。直徑1.8m深さ1.0mを測り、底部の標高は6.4m前後である。なお、図示していないが、上面には多数の石が埋め置かれていた(図版30)。完全にSD18埋土上に掘り込まれている。

土層堆積状況 上層の第1~3層と下層6~8層に別れる。下層は6層と7層の間に木質の土壌化した個所があり、この部分が井筒であったと考えられる。

出土遺物(第96図-7~9) 7は土師質土器壺である。8は磁器碗で内面に3条の界線を廻らし、外面に染付する。9は茶臼である。高さ10.5cm、擦り面の直徑18cmを測り、擦り面は6区に別れ4~5条が施条される。

年代・性格 年代は出土した遺物から中世末~近世初頭のものと推測される。遺構の性格は井戸と考えられ、廢棄時に上部を破壊されたものと思われる(第1~3層、上層の右群)。

SK35(第97図)

規模・構造 C区西側中央に位置し、長辺2.5m、短辺2.0mの三角形状をなし、深さは50cm程度で、黒褐色系の砂質土が堆積していた。SD17に切られている。

年代・性格 出土遺物はなく、遺構の時期は明確でないが、SD17に切られていることから、古墳時代前期以前である。性格は不明である。

H、大溝

SD 16 (第62、98~103図)

規模・形態 C区中央を、南東から北西に向かって貫流する大型の溝である。全体で50m程を検出しておらず、航空写真では南側に連続すると思われる、土壤の黒い部分が検出されている(図版49)。溝はちょうど調査区の中央付近でくの字状に西側に約30°振れ、おむねN-40°-Wを指向する。ただし、基本的には直線的な溝ではなく、若干蛇行するものである。規模は、基本的には上幅で2.0~2.5m、底部で0.5~1.0m前後で、深さは1.2~1.5mを測り。底部の標高は、南側で6.8m、北側で6.65mである。問題となるのは、調査区中央、第102~103図付近で、ここでは、上幅が3.5~5.0mに広がり、断面E'E'(第98図)で見るよう浅い溝状の遺構が東側に位置し、溝の本体部分に切られていることがわかる。この東側に広がる浅い溝状の遺構については、出土遺物なども異なっていることから、SD 16先行溝(以下先行溝と略)と仮称する。

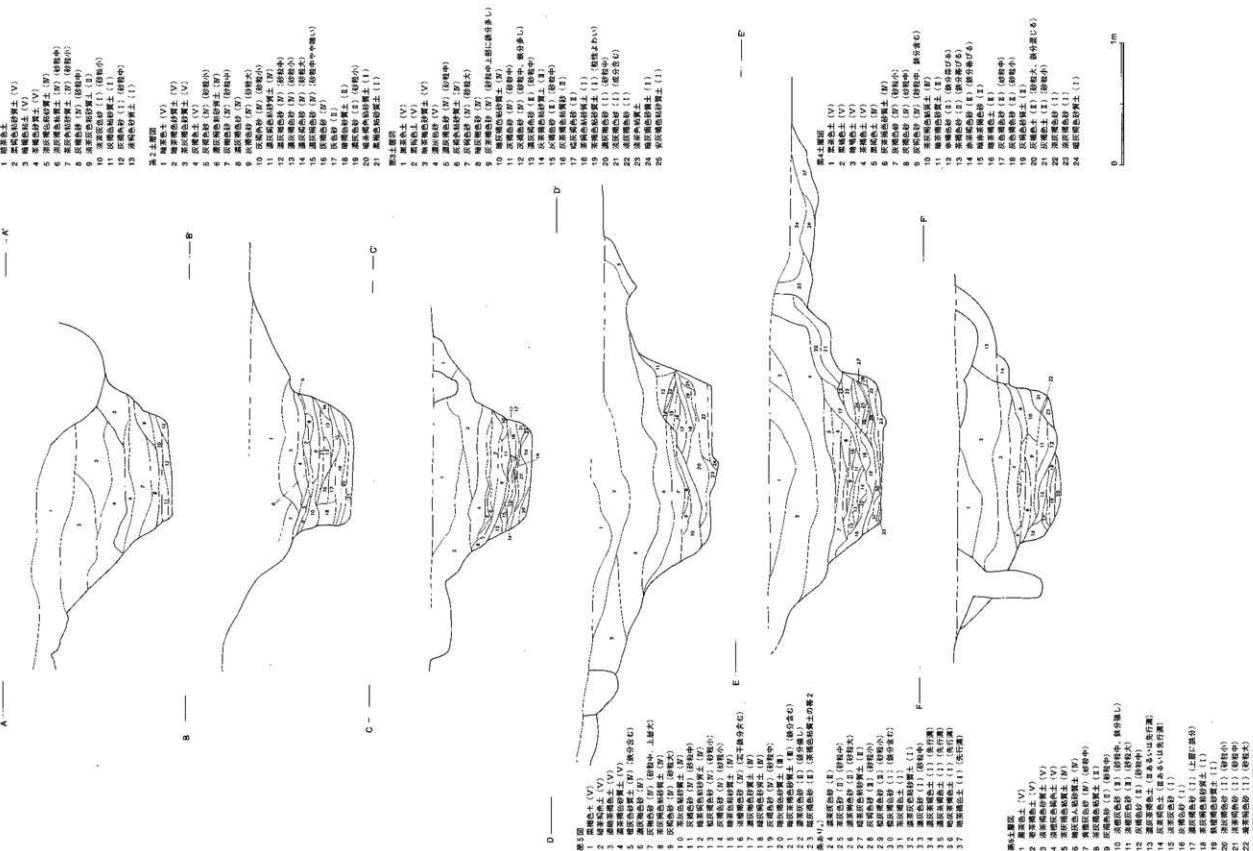
この東側に広がる部分を除くと、断面は逆台形に統一されているが、これは最初の掘削段階の形状で、掘り返し時の形状はそれぞれに異なっている(後述)。また、南側には長径2.6mほどの楕円の土壤状の部分があるが、この土壤状の遺構は完全にSD 16に切られており、出土遺物もないことからSD 16との関係、機能等は不明である(第103図参照)。

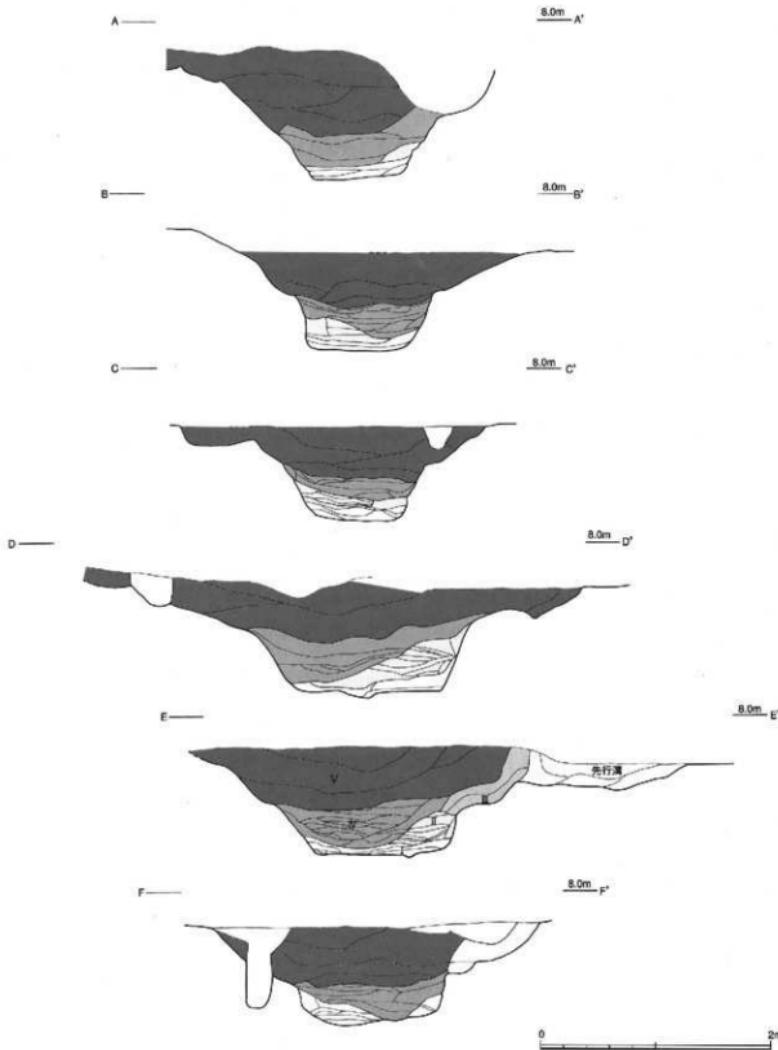
土層堆積状況 土層堆積状況は合計6カ所で確認した。第98図はすべて南側から見通した図面になっているが、実際の観察は北側から行ったもの(C'C'・DD'・E'E')があり、それらの写真図版と第98図は左右が逆になっている。また、確認した地点の設定が不適切なものがあるが(C'C'・DD')これらの部分でも、実際の幅に大差はない。なお、AA'・BB'の間をI区とし、以下VI区(F'F'以南)までを設定した。最初に概要を述べると、本大溝は最後に埋没するまでに最低4回の再掘削が認められる(先行溝除く)。これに、最初の掘削の埋土が加わるので土層は5層に大きく分けることができる。以下、最初の掘削の埋土をI層、第一回目の再掘削層をII層とし、都合V層までを設定し、土層AA'~FF'に説明を加える。

AA' 調査区北片で確認した土層図である。地山以上はすぐに調査区の堆積土層(奈良・平安時代以降)が及んでおり、本来の溝の上端は検出できないことがわかる。また、SD 32がSD 16を切る様子も見ることができる。I層は上からV層(2~4層)、IV層(5~8層)、II層(9層)、T層(10~13層)が堆積する。V層は黒褐色系の土で粘性もあり、遺物を包含する。一方砂層は見られないことから、この時点ではほぼ流水はなかったと推測される。調査時にも湧水はほとんどなかった。断面は半円上を呈し、IV層以下の溝の上端を切っていることから、この時点でSD 16は幅的には最大に達したものと考えられる。IV層以下は無遺物層である。IV層は褐色系の粘砂質土と、砂層が堆積する土層で、AA'では上層のみが粘性を持っている。9層はその標高からII層と考えられる。粘砂質土である。T層は砂層と粘質土層の互層をなし、確実に流水があったと考えられる土層である。13層のように、溝内部で局所的に現れる層もあるが、流水によるものか、再掘削によるものかは判然としない。

BB' 北から一番目に確認した土層である。上からV層(1~4層)、IV層(5~15層)、II層(17~19層)、I層(20~21層)からなる。遺物を包含していたのはAA'同様に第V層のみである。この地点では、IV層を詳細にとらえることができた。IV層はAA'と異なり、V'字状の断面

第98図 古志本郷遺跡SD16土層図1 (S-1/30)





第99図 古志本郷遺跡SD16土層図2 (S=1/40)

を呈している。また、砂・砂質土の互層から、IV層でも流水を想定できる。12～14で横並びに堆積する土層を確認することができ、一時期における流水の幅は12層を形成する程度であったと考えられる。II層は西側18層と東側の16・17層に分けられる。このうち18層は地山は異なるやや腐植土化した土層であり、溝の肩が崩れたというような状況は想定しづらく、II層の中で再掘削が行われたことを推測させる。I層の下から2番目の層は砂層である。

C C'は北から二番目の土層図である。上からV層(1～4層)、IV層(5～12層)、II層(13～18層)、I層(19～25層)が堆積する。遺物包含層はV層のみである。IV層は断面図中東側に寄る。II層18は、B B'の18層に対応するものであり、I層の一部にもみえるが17層の底部と18層の底部のレベルが一致することからII層と判断した。B B'同様にII層内での再掘削を想定させる。I層の下から2層目はB B'と異なり地山に近い砂質土層である。

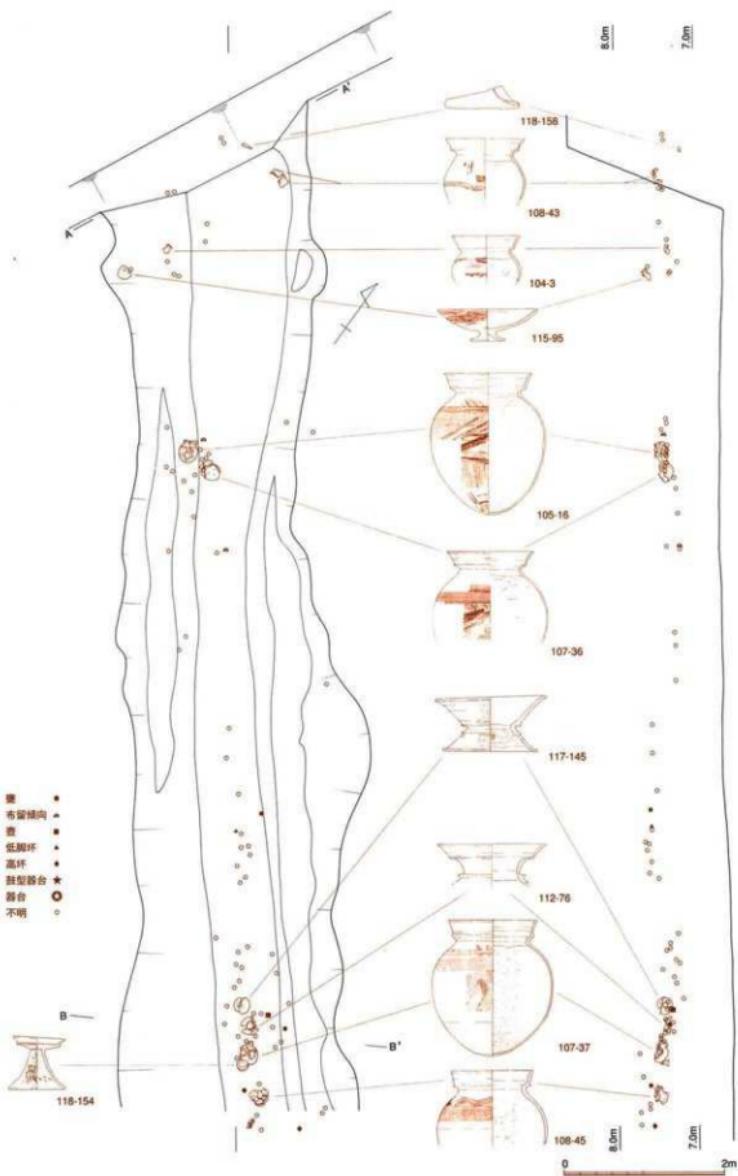
D D'は中央近くの土層図である。溝の軸と直交しない位置で確認したために、他の上層図より溝が広めにみえる。上からV層(2～5層)、IV層(6～10層)、II層(11～21層)、I層(22～24層)の順で堆積する。遺物包含層はV層のみである。IV層を見るとC C'までと異なり断面図中西側に寄り、7層と8・9層の間に不自然な断絶が見られ、この間に再掘削が想定できる。第I層の下から2層目はC C'同様砂質土である。

E E'中央は南寄りで確認した土層断面で、先行溝が検出されている部分である。上からV層(1～4層)、IV層(5～19層)、III層(20・21)、II層(22～29)、I層(30～33)とすべての土層が検出され、III層に切られる先行溝(34～37)が確認された。IV層は断面西側により、5～14層までと16～19層までに二分することができ、両者の間に再掘削を読み取ることができる。III層は残存する部分が少なく、元の形状を窺いづらいが、IV層に中央部を完全に切られることから浅いものであったと考えられる。先行溝は茶褐色系の砂質土を主体とする堆積で、III層に切られるのは確実であるが、出土遺物からは弥生中期、松本IV-2期には埋没したと考えられる(後述)。

F F'は一番南で確認した上層断面である。上からV層(1～4層)、IV層(5～12層)と堆積する。IV層はまたや東寄りに寄る。次の第13・14層は、位置的にはIII層、あるいは先行溝に当たる。堆積土は茶褐色系の砂質土であるので、先行溝の可能性を考えておきたい。その下にI層(15～23層)が堆積し、II層は確認できない。遺物はV層から出土する。

土層堆積状況のまとめ SD16の十層堆積状況をまとめると、次のようなことを指摘できる。

- 1 溝の断面形状はIV層でV字、V層は半円をなす。II層はI層同様逆台形である。
- 2 遺物が出土するのはV層だけである。また、V層では流水は確認できないことから、IV以下とは性格が異なっている。
- 3 IV・II層内でさらに再掘削があったと考えられる。
- 4 I層の堆積状況(下から二番目の上層を例示)は土層ごとに異なっており、これは溝の縦方向にラミナが形成されたこと、すなわち流水を想定させる。ただし、砂層の間には黒褐色化した土壤も見られるので、流水の停滞していた時期もある。すなわち、各再掘削された溝はある程度の期間、埋没せずに存在したものと考えられる。
- 5 流水が想定されるIV層までは遺物はまったく含まれていなかった。流水時には土器が流入し



第100図 古志本郷遺跡SD16遺物出土状況図1 (遺構S=1/60 遺物S=1/9)



第101図 古志本郷遺跡SD16遺物出土状況図2 (遺構S=1/60 遺物S=1/9)

ないような状態だったと考えられる。

6 Ⅲ層はE E'でしか確認できなかった。すなわちⅢ層からⅣ層にかけては溝の拡張があったと見てよいものと思われる。

7 先行溝も、大部分がSD16に重なって消滅したものと思われる。

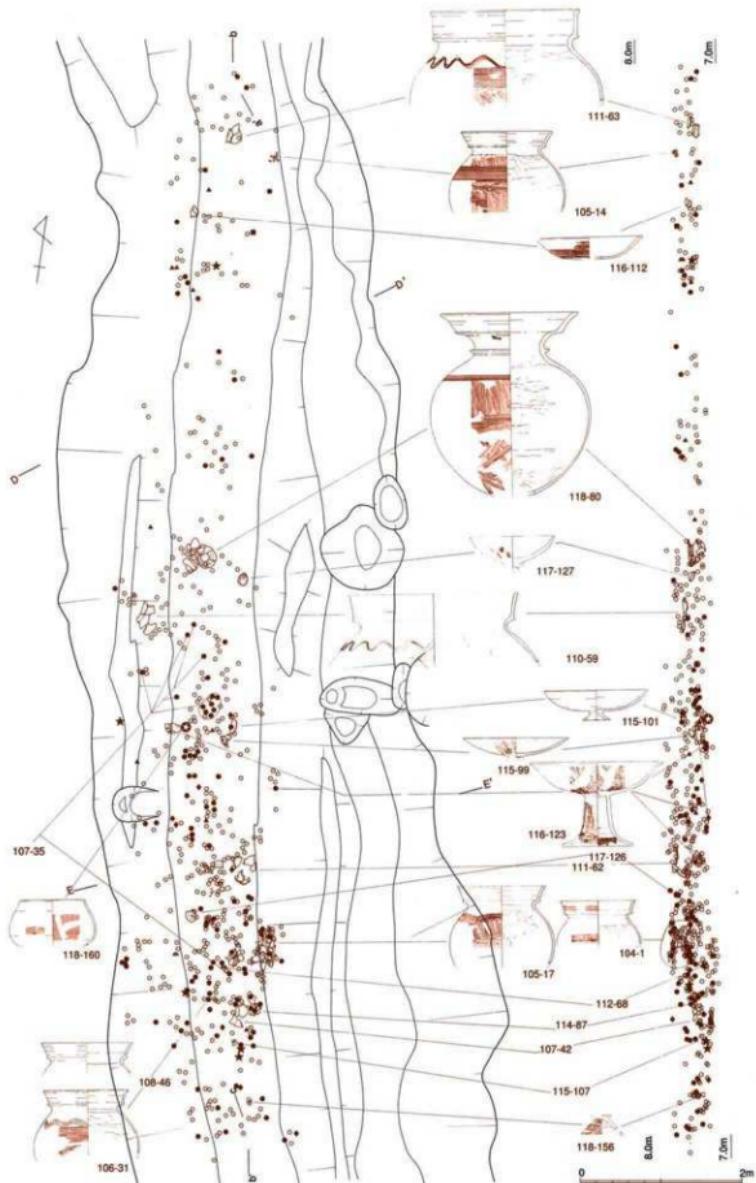
8 Ⅳ期の溝の位置を見ると、溝全体が西にふれる部分では東寄りに(A~C, F)、溝が東に張り出す調査区中央部では東に振れおり(D~E)、完掘状況より屈曲は弱く、滑らかな円弧状をなしていたと考えられる。

9 1・2・6・8から、時期は不明であるがⅣ層の形成期、V層の形成期に大溝SD16の中でものを期を認めることができるであろう。

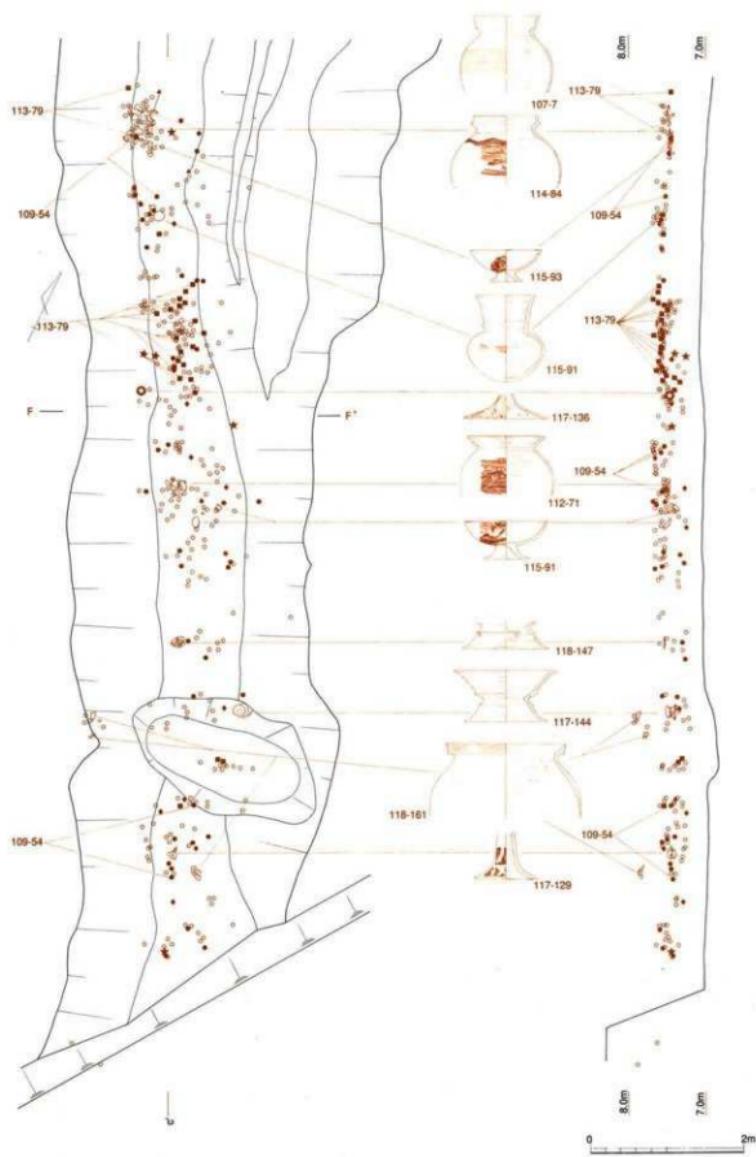
遺物出土状況(第100~103図)

遺物の出土地点 遺物出土状況図の器種を記号で示してあるものは、実測図を掲載したものの出土地点である。したがって、遺物の大小にかかわらず点で示してある。特に破片が大きく出土状況がわかるものは図化した。

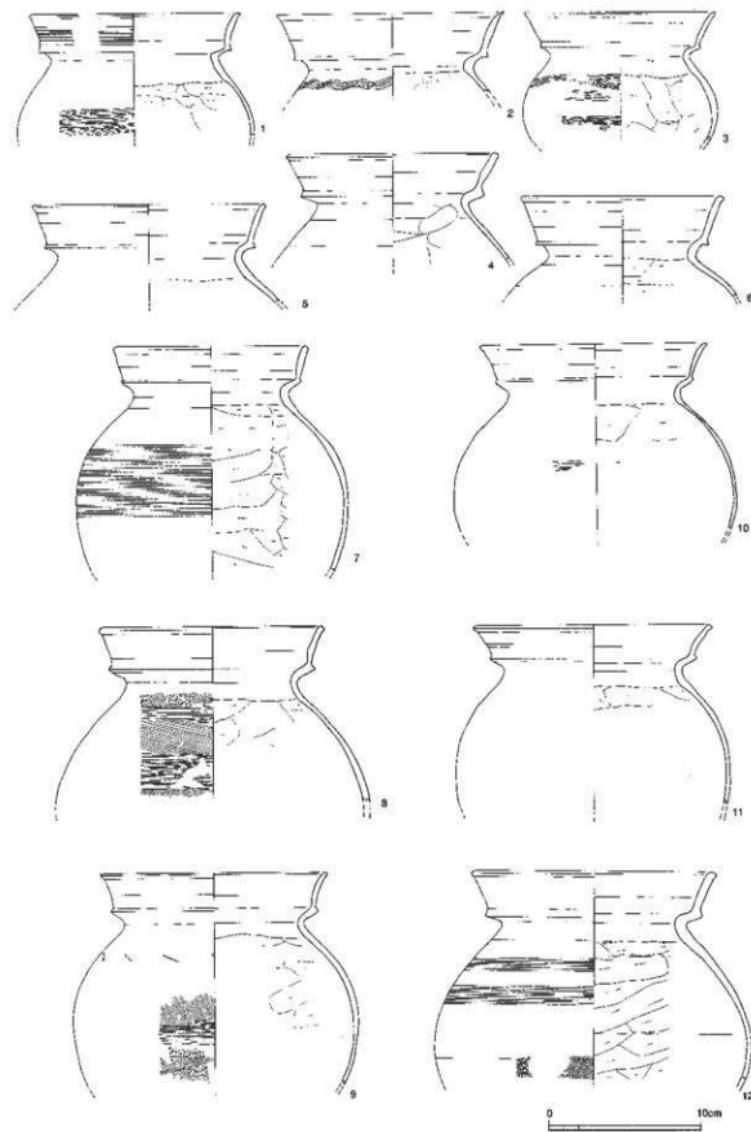
出土の形態 遺物出土状況は、溝内でも地点によって異なる。



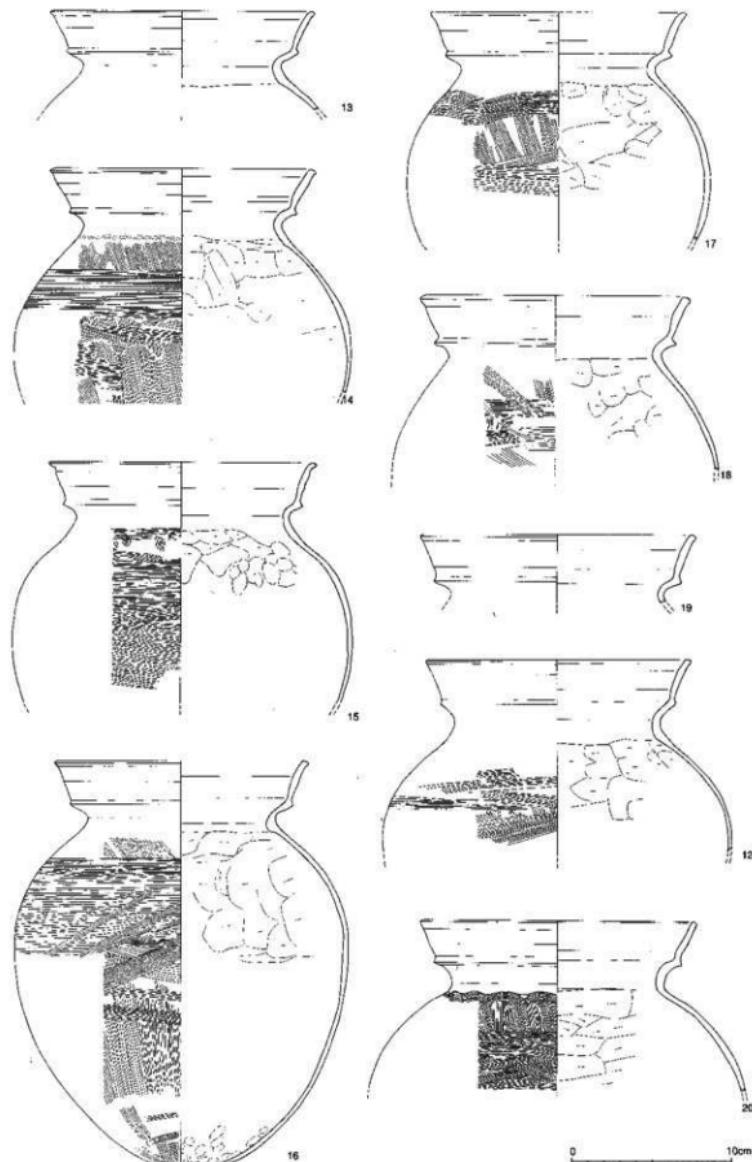
第102図 古志本郷遺跡SD16遺物出土状況図3 (遺構S=1/60 遺物S=1/9)



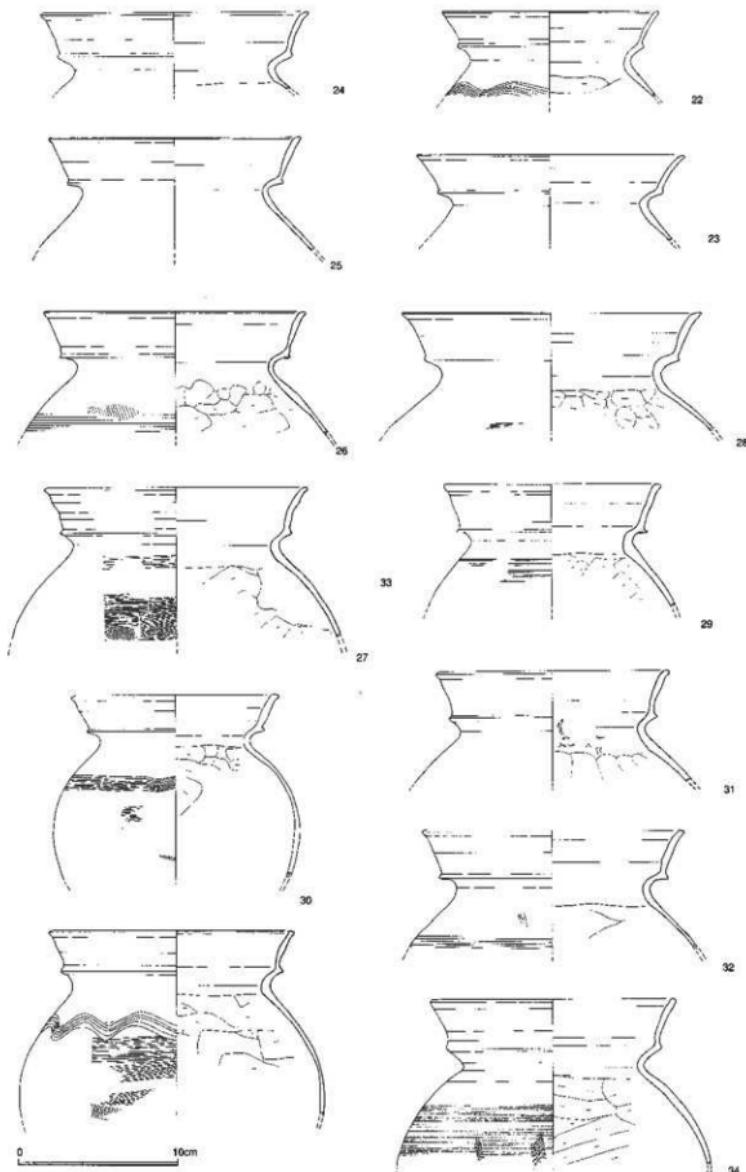
第103図 古志本郷遺跡SD16遺物出土状況図4 (遺構S=1/60 遺物S=1/9)



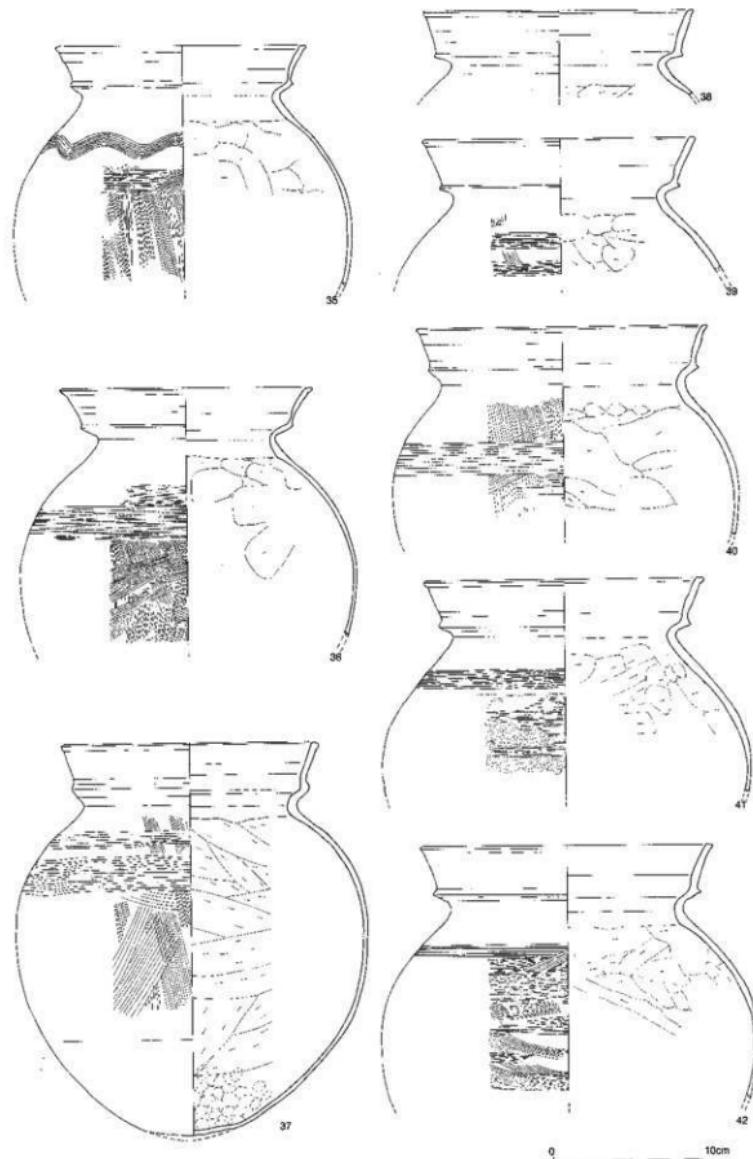
第104図 古志本郷遺跡SD16出土遺物実測図1 (S=1/3)



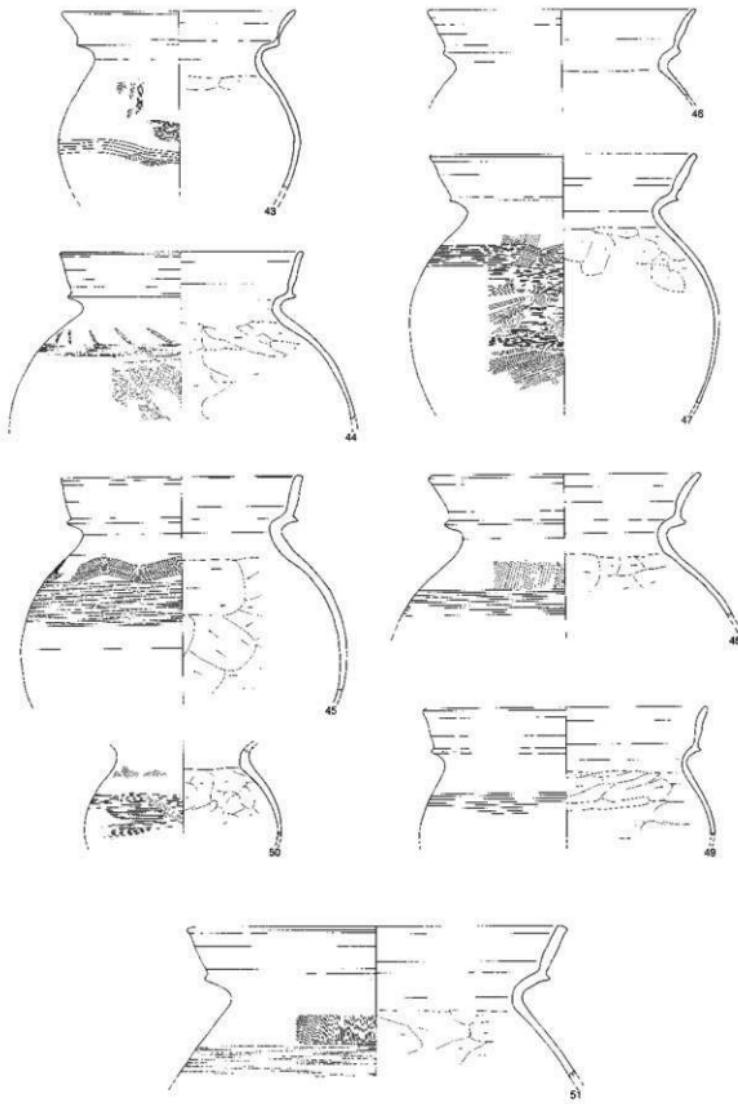
第105図 古志本郷遺跡SD16出土遺物実測図2 (S=1/3)



第106図 古志本郷遺跡SD16出土遺物実測図3 (S=1/3)



第107図 古志本郷遺跡SD16出土遺物実測図4 (S=1/3)



第108図 古志本郷遺跡SD16出土遺物実測図5 (S=1/3)

0 10cm

A 完形品がまとまって出土する部分 ア第100図中央北より、イ同南端、ウ第102図中央、エ南端、オ第103図北端などで、いずれも壺2~3個体と鼓型器台、小型器台などが完形品で出土している。

B 完形品に限らず出土量の多い部分 第102図南端と第103図北端で、溝の屈曲部に相当する。ただし、屈曲の下流側からも出土すること、土層堆積状況でも示したように流水が考えられないことからすると、いわゆる流水の良くない地点である、ということではないよう、溝の屈曲部には何か意味があったと考えたい。

接合関係 出土下遺物の接合関係は、実測したものの中でも主要なもののを図100~103に示した。全体としてみると同一個体は同一個所にまとまっており、上下で接合されるものは多いが、水平距離が離れているもの同士が接合する例は、第103図の壺片(109-54)が10mに渡って3カ所で出土した例、同じく、第113図79の壺が3m離れて2カ所で出土した例を除くと他にはあまり見られない。むしろ示した二つは、接合するとかなりの部分が復元できたにもかかわらず、完全に粉砕されて出土しており、特異な廃棄形態と見ることができる。また、遺物が集中する部分の第102図南部分、第103図北部分などを見ると、出土した土器には地表に対して直立した状態のものがあり、水中に沈降したり、長期間風雨にされされたとは思えないとの指摘も受けた。

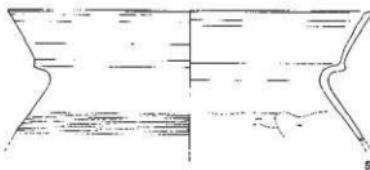
器形と出土状況 壺は、広く外反する口縁を持つものと(76~81)、口縁が内傾するもの(82~85)がある。前者には完形品があるが、後者は小片のみであり、出土状況に差がある。ただし、後述するSD17には後者にも完形品がある。

遺物の廃棄について 総体としては、完形に近い土器を、一括的に廃棄し(ただし廃棄の回数は不明)、溝を埋めたものと思われる。

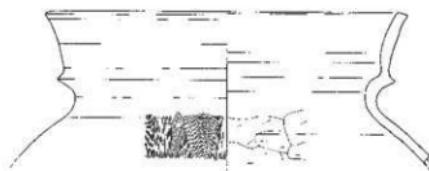
出土遺物(第104~119図)

SD16からは、多量の土器片が出土しており、実測図を掲載したのは主要なものである。

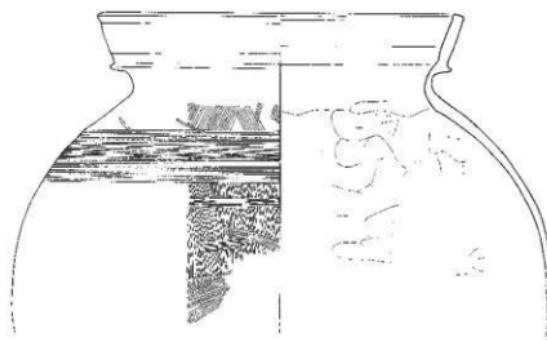
1~63は複合口縁を持つ壺である。1~3は口縁部を薄く引き伸ばしやや外反させる一群である。1は複合口縁部に平行沈線を残し、ナデ消すもので、本遺構出土の壺片では最も古い様相を残すものである。2は頸部に波状文を施す。1~3は草田4期に相当する。4~21は口縁端部を外に折り、外側に面を持つ一群である。3・4・6・7は口径が1.5cm以下の小型の壺で、7は口縁部を比較的直立させるタイプである。5、8~21は口径1.6~1.7cmの中型の壺で、普遍的な大きさのものである。8・12・14・20・21は口径と最大径との差が大きいタイプである。8は体部縦ハケの後、肩部に横ハケを廻らすが、横ハケに別な原体を使用したか否かは明らかでないものである。12・14も同様で、12は横ハケを二条に別けて施す。21は頸部近くに波状文を廻らし、さらに体部上面は横ハケで仕上げるものである。9~11、14~18は体部が倒卵形をなすと考えられる一群で、9は頸部に列点文を廻らす。原体はハケ状工具の小口か。14は一辺縦ハケを施した後、逆向きに傾く縦ハケを施したもの。16は完形品で底部には指頭圧痕が残る。底部は尖る倒卵形をなす。17は球胴化の進んだ個体で、肩部に右回りの横ハケを廻らす。22~28は口縁端部を外側に折り、口縁端部内面が平坦になるグループである。22・23は口縁がやや外反するもので、22は肩部に波状文を施される。29~42は、口縁端部上方に面を持つグループである。29・30・32は口径1.5cm以下の小型の壺である。31は余り例のない口縁端部を



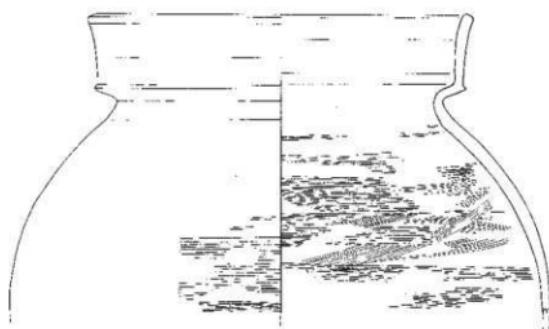
52



53



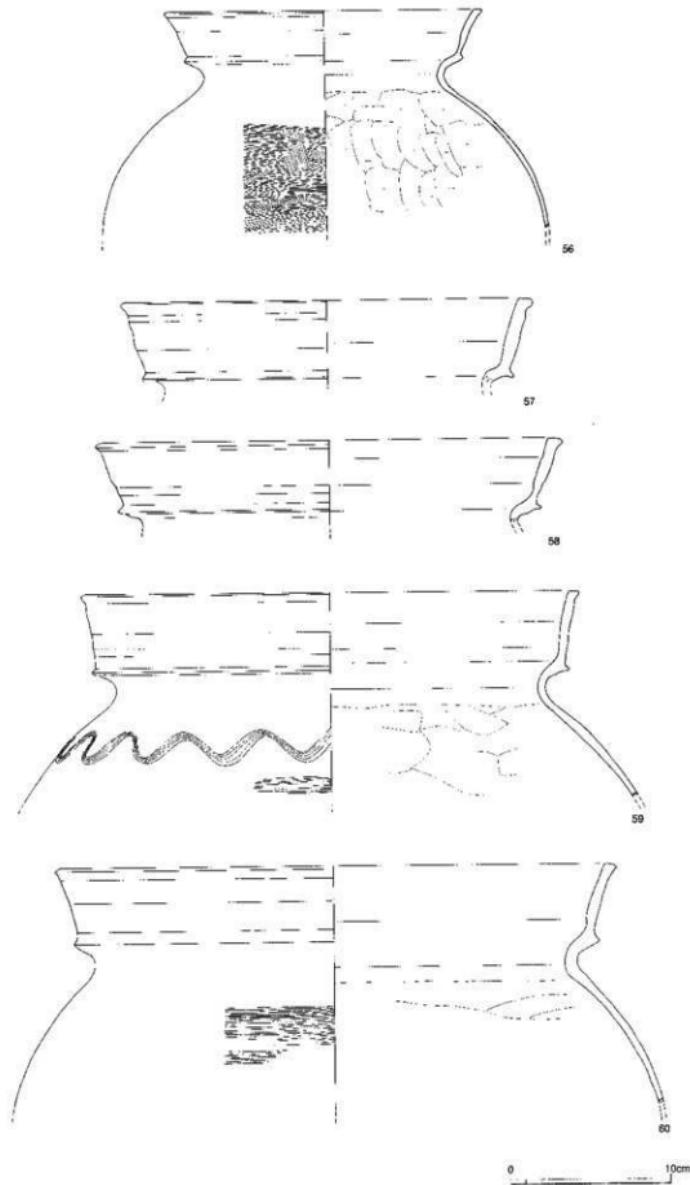
54



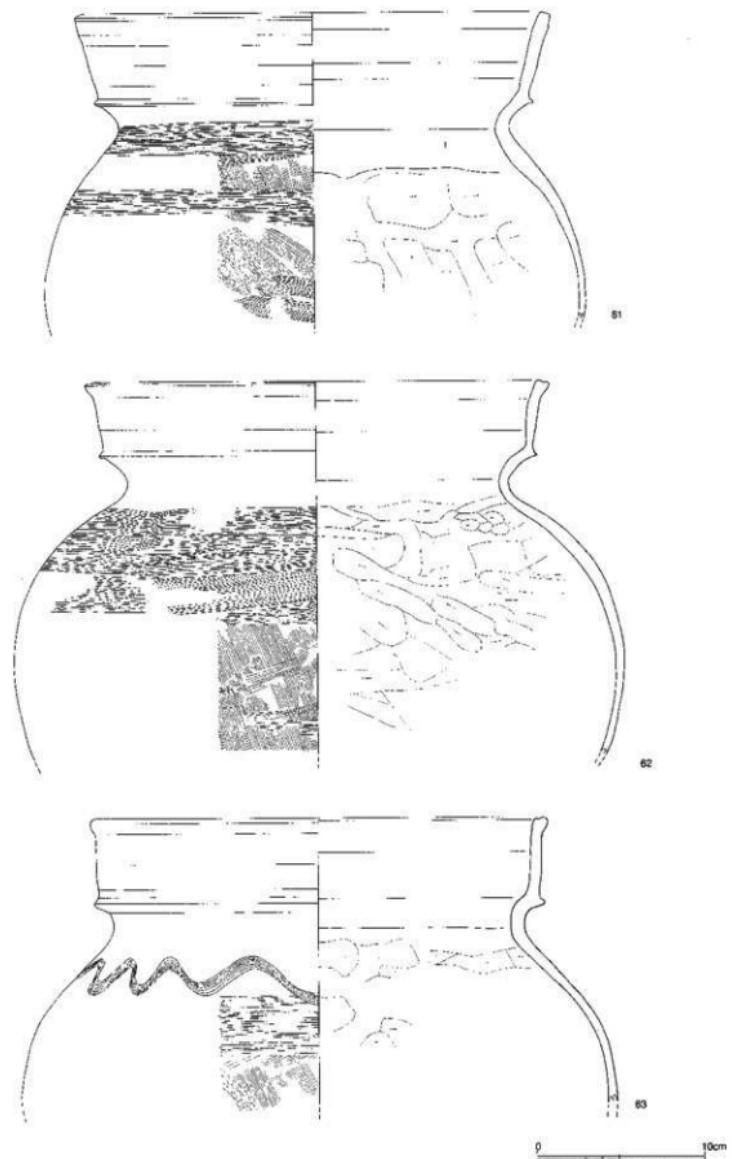
55

0 10cm

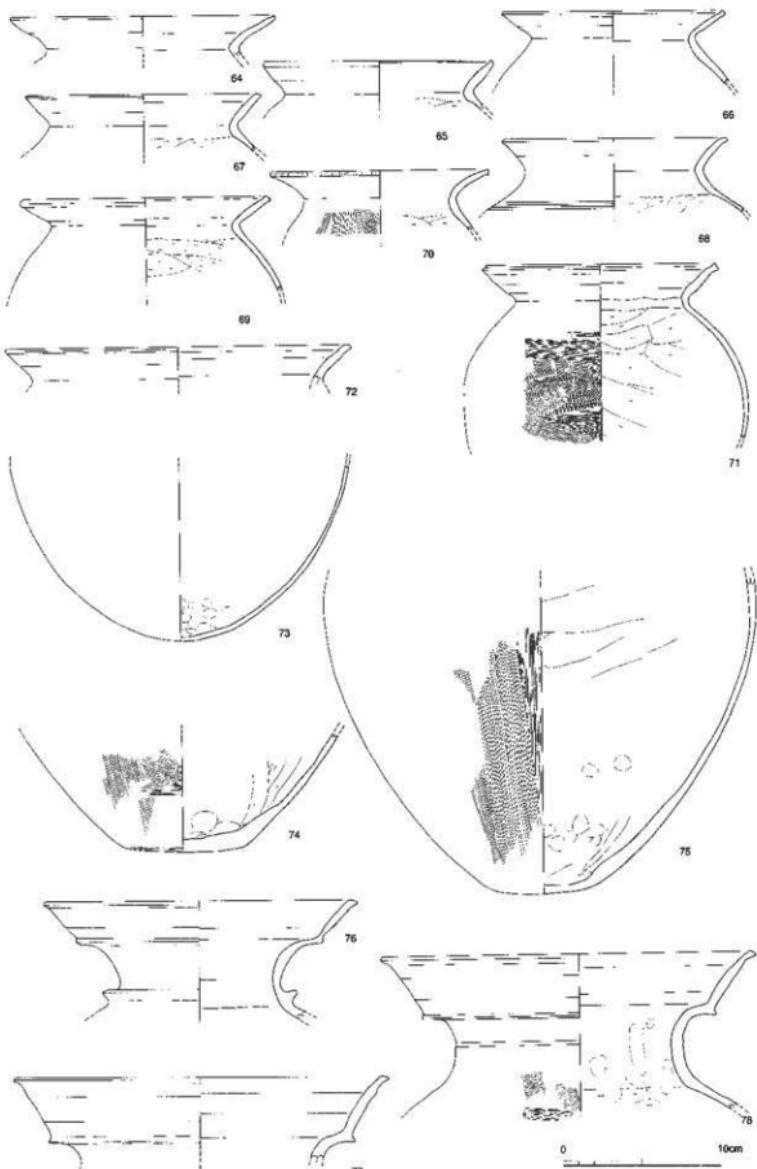
第109図 古志本郷遺跡SD16出土遺物実測図6 (S=1/3)



第110図 古志本郷遺跡SD16出土遺物実測図7 (S=1/3)



第111図 古志本郷遺跡SD16出土遺物実測図8 (S=1/3)

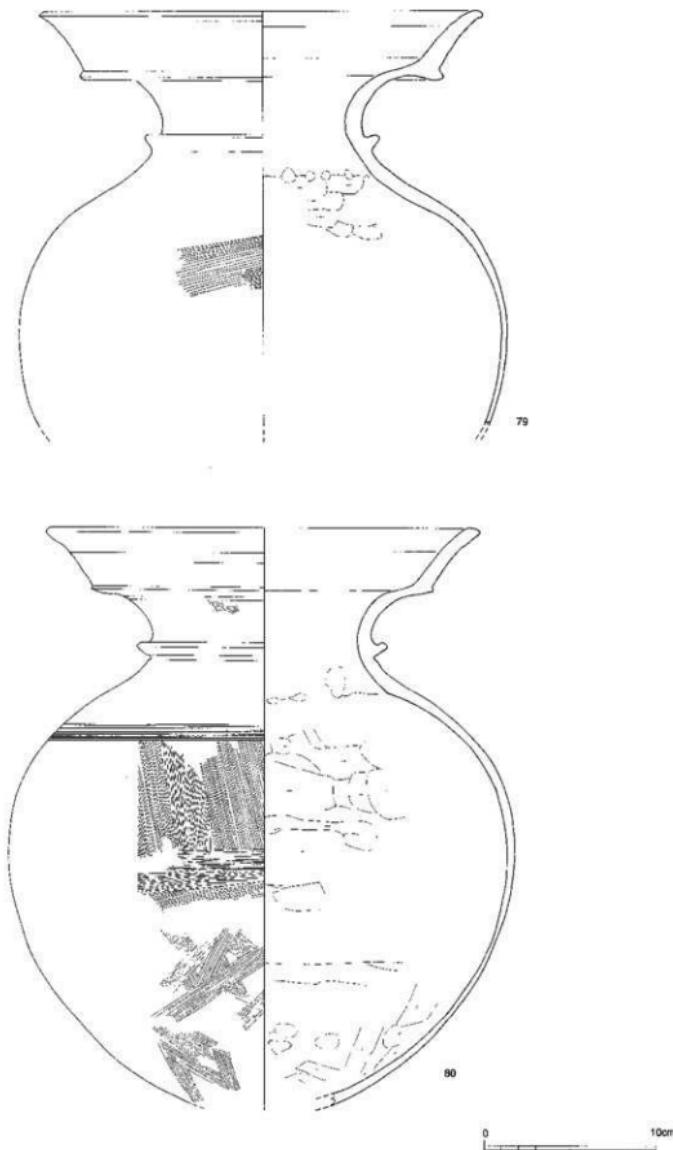


第112図 古志本郷遺跡SD16出土遺物実測図9 (S-1/3)

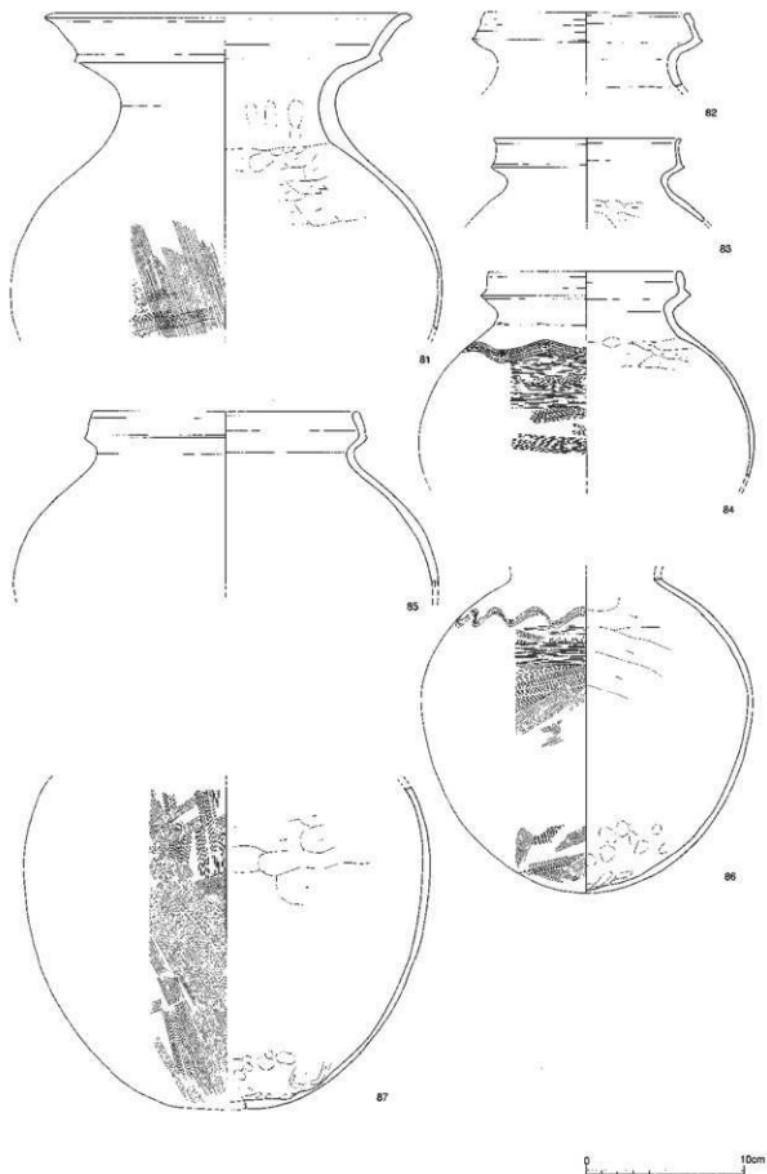
内側に肥厚させるもので、比較的明瞭な波状文を肩部に廻らしている。34はやや頭が長くなり、複合口縁部の突出も鈍いものである。35・36は体部最大形が口縁に比して大きくなる器形のもので、40は逆に口径が大きく、体部最大形との差の小さいものである。37は完形品で、複合口縁部も突出しない。ただし、底部は16などに比して球形化しているとはいえ、未だに倒卵形をなす個体である。底部は火を受けたのか、剥離していた。37は第100図・図版35にみえるように154の小型器台とセットで出土した。43～49は摩耗によって、口縁端部の調整が明らかでないものである。43・46・48など口縁が外反するものは、草田4期頃に位置づけられる可能性もある。49は口径が大きく体部最大径と余り変わらないもので、全体にいびつな壺である。他の壺が明褐色の胎土を持つ中で、本個体のみが茶褐色の胎土であった。51～63は口径2.0cmを越える大型の壺である。これら大型の壺は、51・52・56のような比較的薄い器壁を持ち、口縁も外反するものと、口縁が厚く口縁端部に明確な面を持つ53～55、57～63に分別される。なお、後者には口径3.0cmを越える超大型が含まれる。55・59～63はこれらの中でも口縁が直立するもので、55は内面をハケによって調整する。59・63は肩部に波状文を廻らす。64～71は単純口縁のいわゆる布輪傾向壺である。72を除くといずれも口径は1.5cm以下である。64～66、69のように口縁端部を内側にやや突出させるものだけでなく（次山淳氏a類）、外反させるもの（68・70）、溝状になるもの（次山b類・71）などがある。68には肩部に沈線が4条引かれるなどバラエティーに富んでいる。これらの胎土は、いずれも淡褐色で複合口縁の壺と同色である。70は図では口縁部に刻印文を入れたが、痕跡は明瞭でなく、傷の類の可能性もある。73～75は壺・壺の底部である。

76～87は壺、あるいは壺と考えられる底部破片である。76～80は大きく外反する口縁を持つ壺で、このうち76・79・80は肩部に凸帯を廻らす。また、79・80が複合口縁部の内側を滑らかにするに対し、76～78は比較的しっかりした段を有している。81は79・80に近いが頭部上半が、やや外側にふくらむ。80は第102図・図版38にみえるように完形のままおしつぶされた状態で出土した。ただし、底部の復元が完全でないため、底部穿孔の有無は不明である。82～85は、内傾する口縁を持つ壺のグループである。84は肩部に波状文を廻らす。82が頭部が長いのに対し、85のように頭部がほとんどない個体もある。なお、口縁が内傾する壺は、すべて小片であり、76～81までとは出土状況も異なっている。86・87は壺の体部である。86は肩部に波状文を廻らす。88～91は直口壺である。特に完形品の91は、これら4点の中でも特に口縁端部の張出が鈍いもので、90とともに口縁端部は外反する。

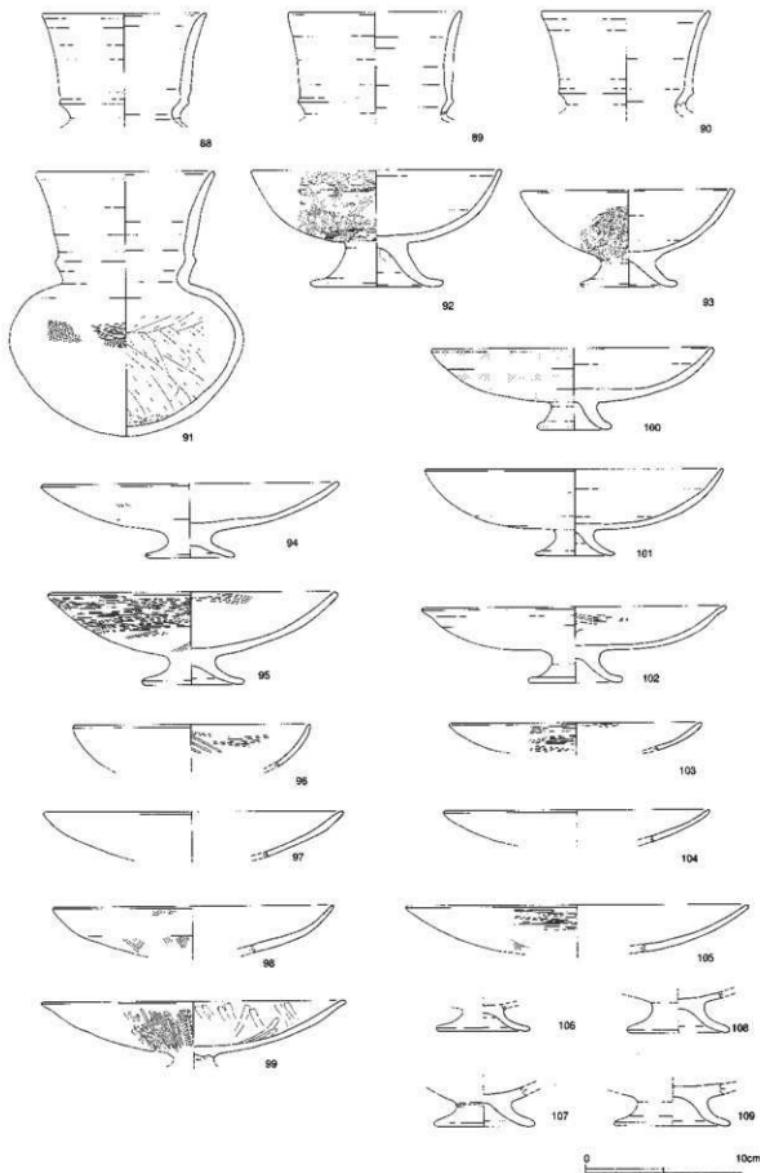
92～109は低脚壺である。92・93は器高が高く、口径が小さいタイプで、92は外面に縦ハケののち横ハケを施し、93は横向に幅1～2mmの細かいミガキを施す。94～100までは、低平なタイプの低脚壺である。多くは内面ミガキ、外面ナデの調整を施されるが、内面のミガキは単位が明確でない。95は逆に外面に幅2mm程度のミガキを横向に施し、内面はハケのナデの調整を施すものである。103・105も外面に横向のミガキを施す。99は外面に縦方向のミガキを施すもので、口縁端部が外反するのも特徴である。口縁の外反するものには、この他に102がある。なお、低脚壺の胎土は、壺・壺のように淡褐色系にしほられるわけではない。図版110、口縁カラー図版1に示されるように茶褐色のものもある（92・93・98・100・103・107）。また、100は外面が赤彩されている可能性がある。



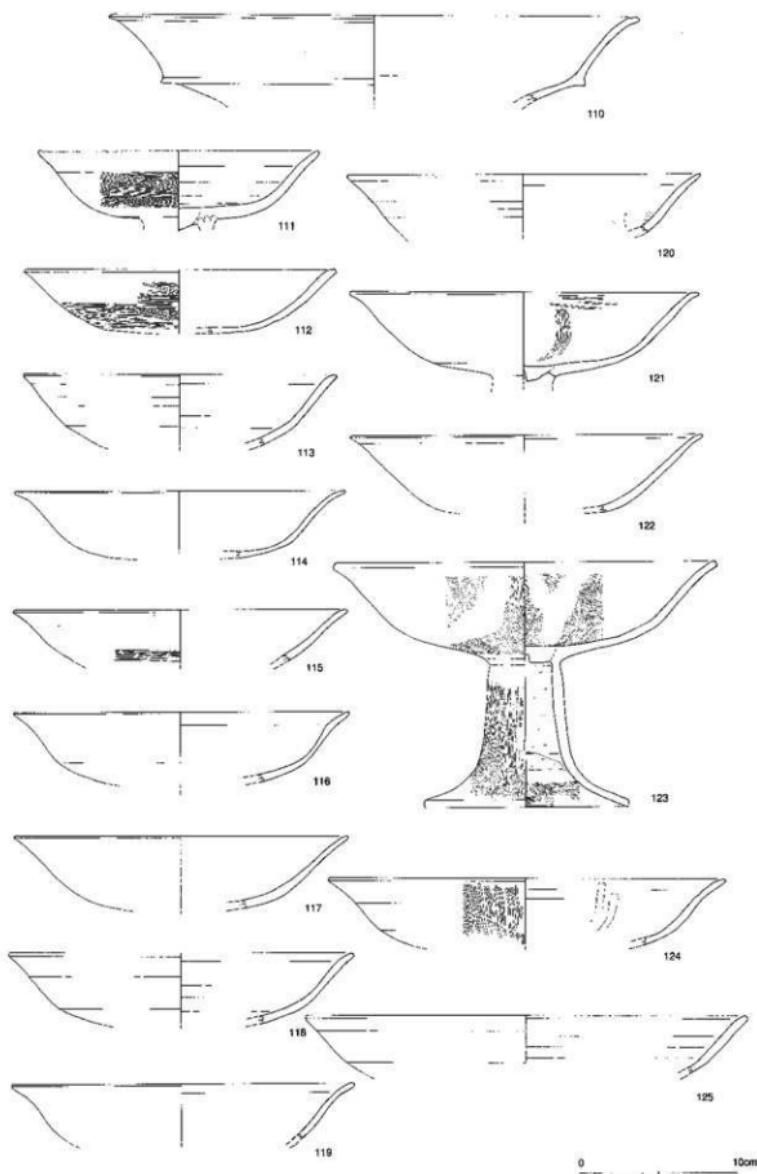
第113図 古志本郷遺跡SD16出土遺物実測図10 (S=1/3)



第114図 古志本郷遺跡SD16出土遺物実測図11 (S=1/3)



第115図 古志本郷遺跡SD16出土遺物実測図12 (S-1/3)



第116図 古志本郷遺跡SD16出土遺物実測図13 (S=1/3)

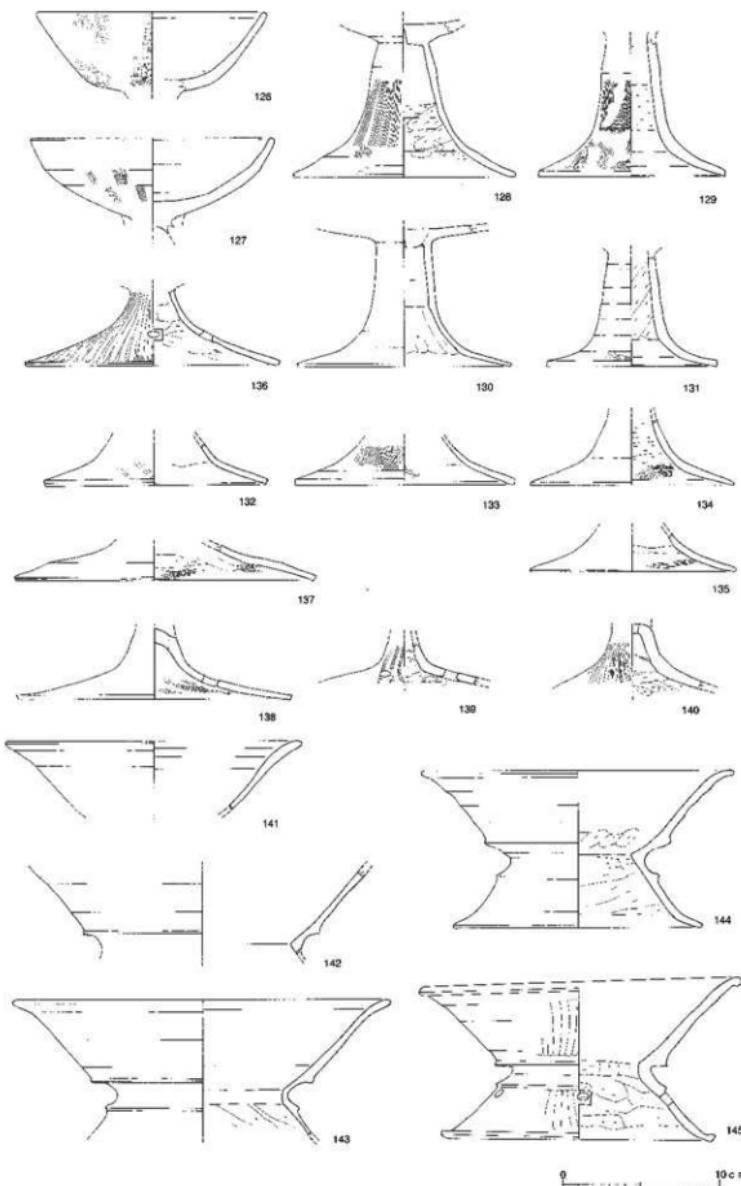
110～135は高坏である。なお、110は段の下がややふくらむ形状から高坏部の可能性を想定したが、口径の大きさなどから、壺口縁部の可能性もある。¹³⁵ 111は外面に横ハケを施すもの、112は横向のミガキを施すものである。111は松山接続法^aによって坏部が充填されている。13～21は、高坏部小片で、これらの中には同一個体のものもあるであろう。116・118・119は口縁部がやや外反するもの。113は坏下部に段を有するものである。123は、胸部及び坏部外面が縱方向のハケ、坏部内面底部は縱方向のミガキで、上部は横方向のミガキを施す丁寧な作りの高坏である。124は内外面に縱方向のミガキを施す。松山接続法^aによって充填されている。125・126は深さの大きい高坏で、共に外面には縱方向のハケが見られる。128～135は高坏の脚部である。128・129は外面に縱ハケを施すもの、134・135は脚部内面にハケを施すものである。136～140は低脚高坏である。136・139は脚部に穿孔されている。136・140は外面に縱方向のミガキ、139は同ハケ日を持つ。

141～153は鼓型器台である。142・144は受部・台部接続部に平坦面を持たず、棱線になっているもので、特に142では受部内面のナデが下方で省略され、ケズリが残存している。なお、142はほぼ完形でSD16南部（第103図・図版40）から出土した。145・147は台部に透かしを持つタイプである。145は外面は縱方向のミガキを加え、6方向に透かしを持つ比較的丁寧な作りのものである。同様の器形、調整、穿孔を施すものは山持川岸遺跡S101からも出土している。¹³⁶ 147は四方向に穿孔するが穴の位置は均等で割りつけられてはいない。また、穴の内側が欠けているものがあり、焼成前穿孔であることを考えると興味深い。146は受部内面に横方向のミガキを施すものである。154～157は小型器台である。154は受部が一部欠ける以外は完形で、壺37と一緒に出土した（図版35）。松山接続法^aによって接続されており、受部には人間の爪痕が残る。脚部は縦方向のハケ日の後に縦の方向のミガキが施される。胎土は明褐色である。155は同受部で、内面にミガキがみえる。156・157は同台部で、156は穿孔・横方向のミガキが施されており、胎土も暗茶褐色を呈し、近畿地方の小型器台の作りに忠実なものである。¹³⁷ 159・160はワイングラス型の土器である。160は内外面に横ハケを施されていた。類似のものは本遺跡のSD17、東出雲町勝負遺跡S105などからも出土している。158は注口土器の注ぎ部である。

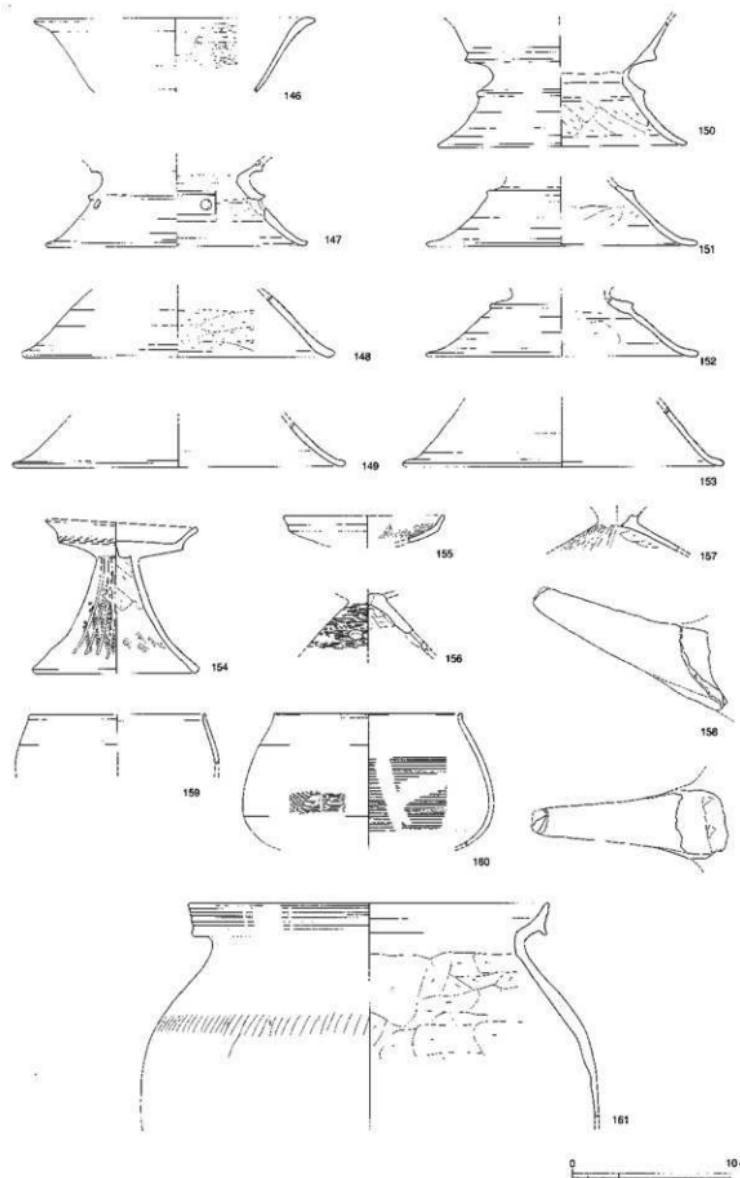
161～170は混入品など、160までの造物との時代の異なる遺物である。161・162は口縁部に擬凹線をもつ壺で草田1期に相当するものである。161は明らかに上層から出土しており、SD16の掘削年代を示すものではない（第103図）。163は口縁端部に凹線を持つ弥生土器広口壺口縁部で、松本IV-2様式のものであろう。この遺物は、遺物出土状況図には図示していないが先行溝から出土した唯一の遺物である。¹³⁸ 164・165は松山II期新段階に当たり、古墳時代中期の遺物に降るものである。166は瓶把手、167・168は土師器碗、169は須恵器低脚無蓋高坏、170は土師質土器皿である。

大溝SD16の年代 遺物の出土状況で説明したとおり、遺物は先行溝から出土した1点（163）を除き、すべてV層堆積土から出土している。

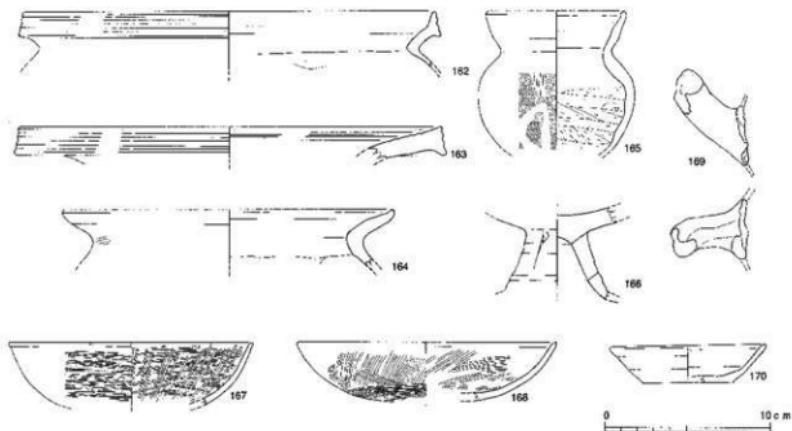
まず、先行溝の年代は、163から弥生中期末、松本IV-2期には埋没したと考えられる。出土遺物は1点であるが、古志本郷遺跡全体の中で、弥生中期末が画期となり、西側に集落が営まれること、同時期の大溝SD40でもほとんど遺物が見られない点が類似することから、この時期と考え



第117図 古志本郷遺跡SD16出土遺物実測図14 (S=1/3)



第118図 古志本郷遺跡SD16出土遺物実測図15 (S=1/3)



第119図 古志本郷遺跡SD16出土遺物実測図16 (S-1/3)

てよいと思われる。したがって、SD16本体部分の最初の掘削は、もっとも古く遡って考えて、弥生時代後期初頭になろうか。

一方、SD16が機能を停止し、埋没する時期に当たるV層の遺物の年代は1~160までの土器群によって捉えることができる。まず、複合口縁の壺であるが、最も古い様相を持つのが口縁が外反し、先細りになる1~3、4~4~6などで草田4期に当たる。ただし、これらの土器は概めて少数といってよく、状態の良いものが小型品に限られることも特徴的である。これに対し、口縁端部を外側に折り内側に面を持たせる1~3~28が数量的にも意味のある一群となる。次いで、口縁端部を外に折り、外側に面を持つ4~12、口縁上部に平坦面を持つ29~42が位置する。これらの時期は、草田5期の新段階から草田6・7期に当たると思われる。次に壺を見ると、頸部に凸帯を廻らすもの(76、79・80)が含まれること、複合口縁部の直立するものの(草田5期)がないことが注目される。凸帯を持つものは草田遺跡ではF-3区出土土器にみえ、7期に位置づけられている。ただし、F-3区出土の壺に比して76、79・80の凸帯のつき方は定型化していると言いうことができ、複合口縁部の甘いF-3区出土壺のおそらく前に位置づけられよう。直口壺は、いずれも複合口縁部の突出が甘く、口縁が外反することから草田7期に相当する。低脚壺は、低平なものが主流を占めており、草田6・7期と見てよいであろう。これらの遺物全体としては、草田6・7期を中心としたものであると見てよく、草田7期が溝の最終的な廃絶時期と見てよいように思われる。ただし、器種によっては年代がさらに限定されるものがあるのも事実であり、これは後述のSD17の廃棄状況などとも考え合わせ、器種ごとの土器の利用状況、廃棄の契機などをなどを反映している可能性もある。

最後に、単純口縁の壺、及び小型器台などの年代観であるが、直接近畿地方からの搬入と断定きるものではなく、初期の布留式土器の類似するものである。⁽²²⁾

大溝SD16の性格 遺構の性格については、第3章まとめで考察を加える。

SD 17 (第62図、120~124図)

規模・形態 SD 17はC区西側三分の一の地点東南から北西に向かって貫流する大溝である。溝の規模は上幅2.0~2.4m、下幅が0.4~0.7mで、深さは1.0mほどで、約35m分を検出した。全体の断面は逆台形を示しているが底部幅が狭く、V字状に深い部分もある。調査区の中でSD 16が存在する部分の地山は褐色の砂礫で、大変崩壊しやすい環境であることから、本来はV字溝を指向したものかもしれない。SD 16同様、両掘削が認められ、その度に断面形状は異なる。底部の標高は南側で6.95m、北側で6.7mと、SD 16より20cmほど高い。C区調査区北端の土層(第63図)で確認するかぎり、地山面より上は、奈良・平安時代の包含層に覆われる状況であり、溝本体の上端は確認できなかった。溝は南から10mほどの地点で東側に張り出すように蛇行する。溝は、おむねN-30°~W前後を指向している。

土層堆積状況(第120~121図) 土層断面は合計6カ所で確認した。このうちDD'は北側から観察を加えている。最初の掘削の後、都合4回以上の再掘削が認められる。以下、SD 16同様に、上からV層とし、再下層の最初の掘削堆土を1層とする。以下、北側の土層断面図AA'から検討を加えていくこととする。なお、SD 16同様、AA'・BB'をT区とし、南端のIV区まで設定した。

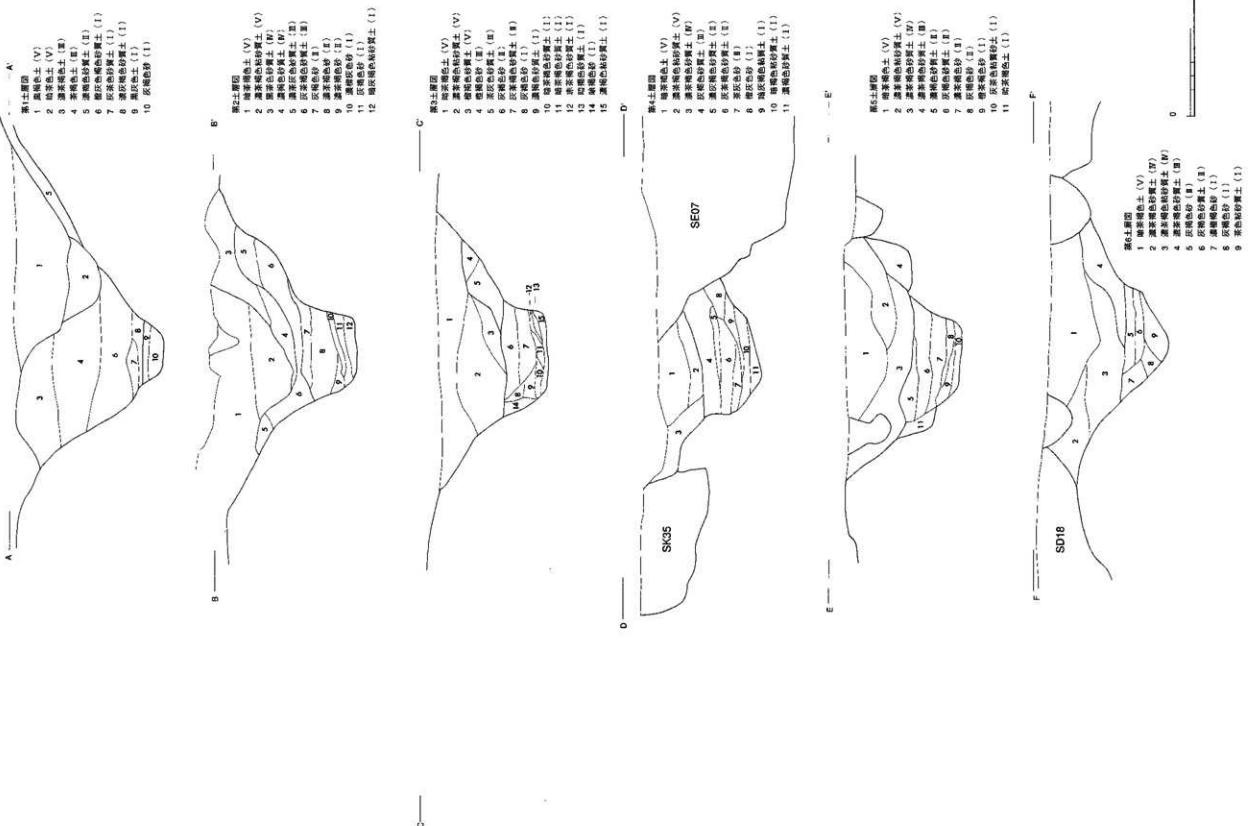
AA' C区調査区北端での検出状況である。上から、まず黒褐色系の土が含まれるV層(1~2層)が堆積する。V層はこの北端では東に寄っており、断面形状は半円状をなしている。次いでIV層については、次の第2十掻図でみるようにV層とほとんど合致するものであり、△△'では明確に認めることが出来なかった。第5層があるいはIV層である可能性がある。次いで茶褐色系の土を主とするIII層(3~4層)が堆積する。その下にII層(6~8層)あるが、ここでは地山に近い灰褐色砂が主要な堆積物となる。最下層I層は地山灰褐色砂(下)と黒色化した黒灰色土の薄い二層からなる。遺物はV層からは確実に出土している。

BB' 北から二番目の土層図で、I~V層が比較的明瞭に確認できる(図絵図版3)。上からV層(1~2層)、IV層(3~4層)、III層(5~6層)、II層(7~9層)、I層(10~12層)と堆積する。本土層図ではIV層が比較的明瞭に確認できる。すなわち、IV層は黒茶色系の砂質土を主体とし、形状がV層と同様の断面半円状で底部標高もほぼ同じであることが理解される。III層は砂質土ではあるが、茶灰色を呈し、ある程度土壤化が進行しているようである。遺物はV~IV層から出土しているが、III層からも若干の遺物の出土が認められた。

CC' 北から三番目の土層図でT層の細分が可能であった。全体としては、上からV層(1~3)、III層(4~5層)、II層(6~7層)、T層(8~15層)が堆積する。I層は再下層に1~5層の褐色粘質土層があり、その上に10~13層が東側から堆積し、流水が想定される。14~15層と8~13層の間に再掘削があった可能性がある。

DD'は調査区中央付近で確認した土層図である。SD 17は東側でSE 07に切られ、西側ではSK 35を切っている。上からV層(1~3層)、III層(4~5層)、II層(6~7層)、I層(8~11層)が堆積する。これらの土層のうち第3層はIV層の可能性があり、T層は8~9層、10~11層で2分され、CC' T層同様、I層の中での再掘削があった可能性がある。

EE'は上からV層(1~2層)、IV層(3層)、III層(4層)、II層(5~8層)、I層(9~11層)がある。第11層は褐色粘質土で、地山褐色砂礫の崩落は想定できず、9~10層とは異なる



第120図 古志本郷遺跡SD17土層図1 (S-1/30)

掘削によるとみられる。

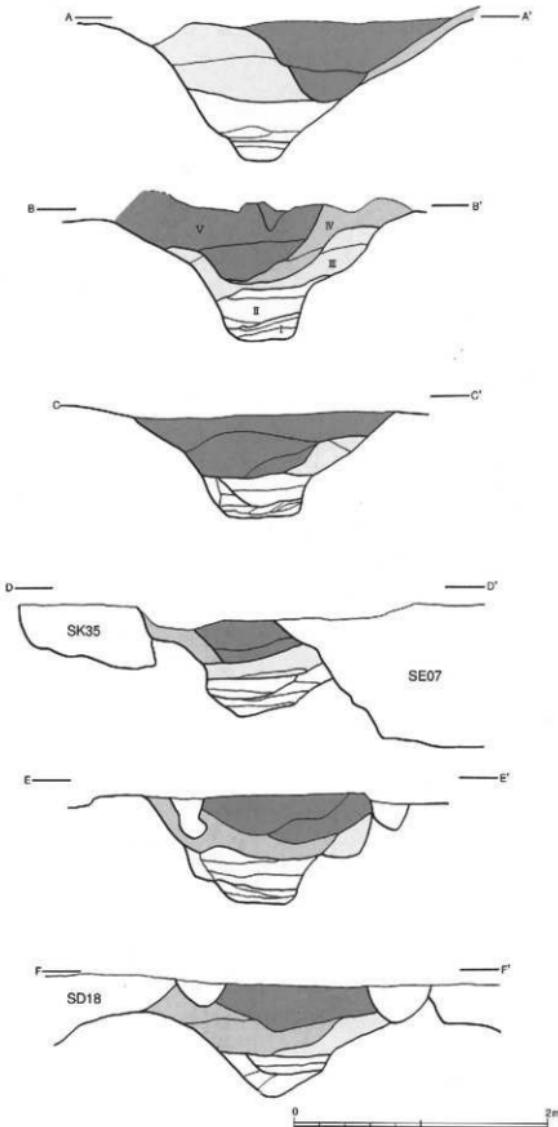
F F'は一番南端で観察した土層である。ここでは後述する SD 18 に SD 17 V 層が切られていることがわかる。上から V 層（1 層）、IV 層（2・3 層）、III 层（4 層）、II 层（5・6 層）、I 层（7～9 層）が堆積する。

土層まとめ 以上上の観察から、SD 17 について、以下の点を指摘できる。

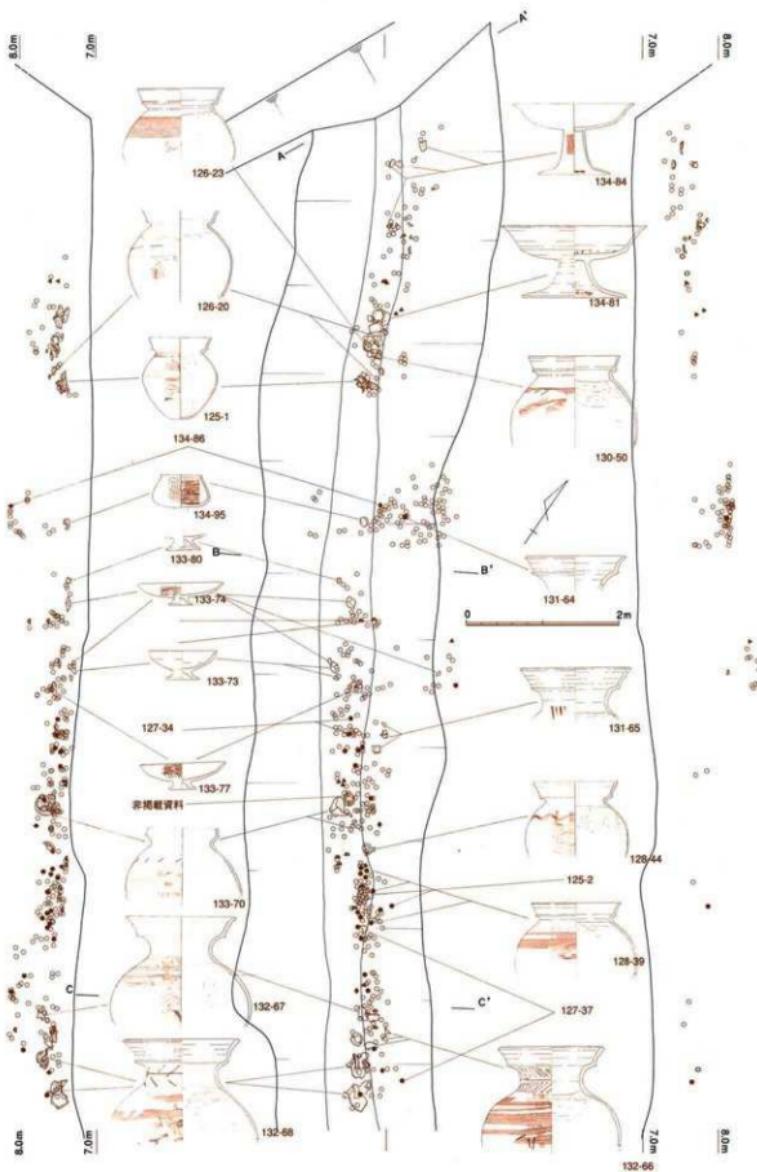
1 SD 17 は最低 4 回の再掘削が行われた。最後の二回、IV・V 層が形成された時の溝は断面半円状で、規模も同規模であった。

2 V・IV 層はいずれも土壤化が進んだ堆積土で、この時点での溝内の流水は想定しづらい。III 層も類似した状況である。

3 一方、II 層以下は、地山に近い褐色砂が含まれており、流水が考えられる。



第121図 古志本郷遺跡SD17土層図2 (S=1/40)



第122図 古志本郷遺跡SD17遺物出土状況図1 (道構S-1/60 遺物S-1/9)

4 主要な遺物包含層はV層で、IV・III層にも若干の遺物が含まれている。遺物の出土状況は後述するものとして、SD16と同様に流水の有無と遺物の有無には相関関係がある。

5 以上のことから、SD17は、流水を前提に掘削、おそらく管理された時期と（I・II層堆積時）、流水がなく、遺物が廃棄されるようになる時期（III～V層堆積時）に大きく区別できる。

6 SD16とは遺物が廃棄されるようにならっても、2回の再掘削があった点が異なっている。

遺物出土状況（第122～124図） 遺物出土状況図は、SD16同様、実測した遺物について器種ごとに記号を用いて表現し、出土状況を理解できるもののみ図化した（以外の遺物は○で表現）。この記号は出土地点を示すもので、出土した土器の大きさなどは無関係であることを指摘しておく。また、主要な遺物の接合関係のみ図中に示した。なお、第122～124図は引き出し線が交差しないように、中央より左側の遺物を左側に、右側の遺物を右側に配置している。

出土土層 前述のようにSD17ではⅢ～V層から遺物が出土しているが、遺物の大部分は中央より、すなわちV層から出土している。V層は北端では東側に寄るが、第122図にみるとように出土遺物も東側に寄っている。IV層はほとんど存在せず、III層の遺物はごく少量であるので再掘削による搅乱を考慮に入れても、III層とV層の遺物の投棄は明らかに異なっていたとみるべきである。

出土の形態 2～3個体の壺を中心に、高杯などが関係品で出土する部分（第122図北側、SD16のAに当たる）、破片が多数出土する部分（第122図南側、第123図SE07付近、SD16のBに当たる）に加え、特定の器種が集中する部分がある（壺は除く）。

器種と出土状況 すなわち、第122図の南側では壺が3個体まとまって完形に近い状況で出土している（図版44）。壺は、この他にも第123図でも出土するが、こちらは頸部破片であって、上記の出土状況とは異なる。また、その北側では低脚壺3個、ワイングラス型土器1個が同様に完形に近い状況で出土している（他に完形でないもの2個体）。本遺構出土遺物の中心をなす草田6・7期に普遍的にみられる壺型器台が1点も出土しない点も、器種によって出土地点が異なることと関係すると思われる。なお、SD16では口縁部が内傾する壺に完形品はなかったが、SD17では確認されている（第122図）。ただし、口縁が開く壺とはやや離れて出土する。

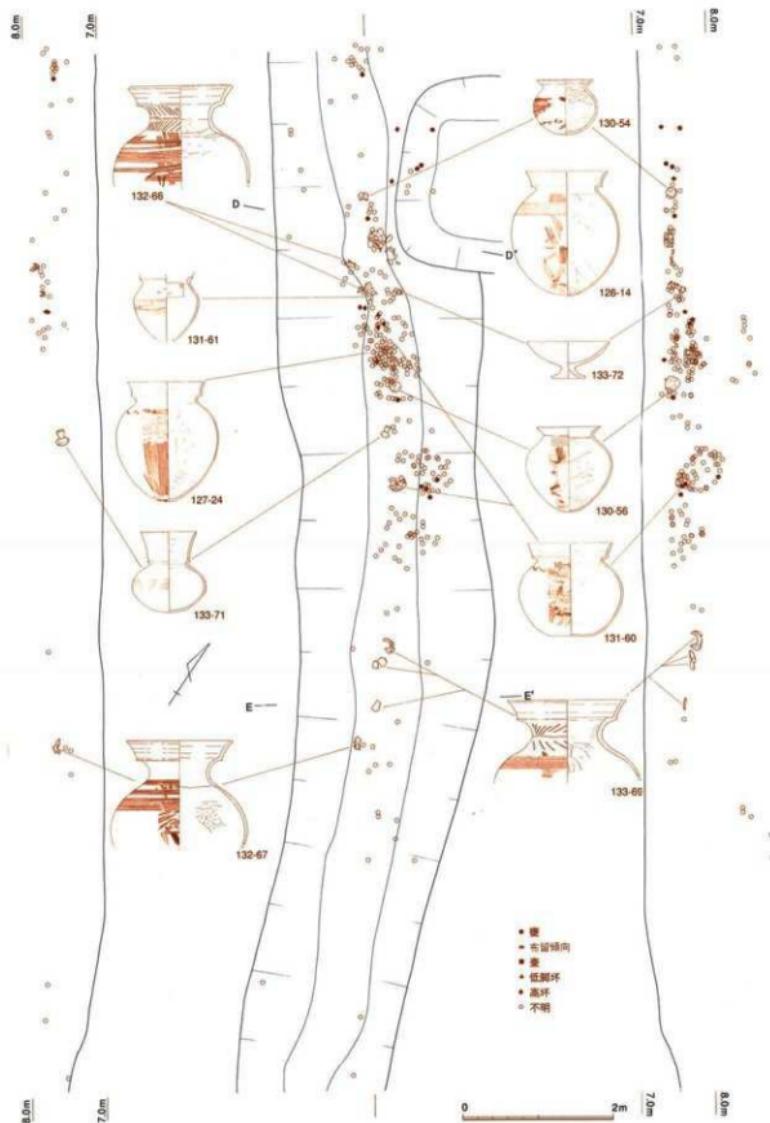
接合関係 上下で接合するものはあったが、水平距離が離れて接合されるものではなく、その点はSD16よりも顕著であった。第129図49の大壺は、第123図中央付近壺24の下層から小片に別れて出土した。個々の破片は小さいため図化してはいないが、接合によってほぼ完形近くまで復元できた。意図的な破砕の上、廃棄された可能性がある。

遺物の廃棄 総体としてはSD16同様に、完形に近い遺物を一括的に廃棄したものと思われる（廃棄回数は不明）。前述のようにV層にみえる投棄はIII層ではみられないことから、やはり、これらの廃棄状況は溝の機能停止とかかわるものであるとみられる。また、器種別の廃棄についても、器種の用途、廃棄の契機などとかかわることが想定される。

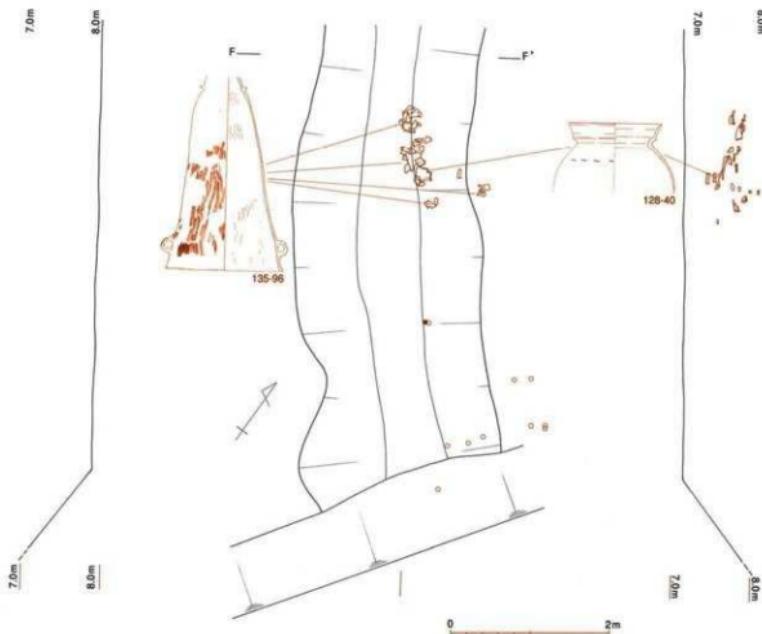
出土遺物（第125～132図） 出土遺物は図化できるものはすべて図化した。

1～53は複合口縁を持つ壺である。1～3は、口縁端部に面を持たない一群で、2・3は複合口縁部を外反させる。1は口径1.2cmの小型品で、体部がソロバン玉状をなし、明瞭な平底を残す。

4～17は、口縁部端部を外に折り、外側に面を持つもので、8は肩部にハケ状工具小口のようなもので列点文を廻らすものである。14は底部には平底には残らず、内面に指頭圧痕を残す。肩部の横ハケは、縦方向のハケに比して間隔が荒いようであるが、縦方向のハケも多様であり明確な区別

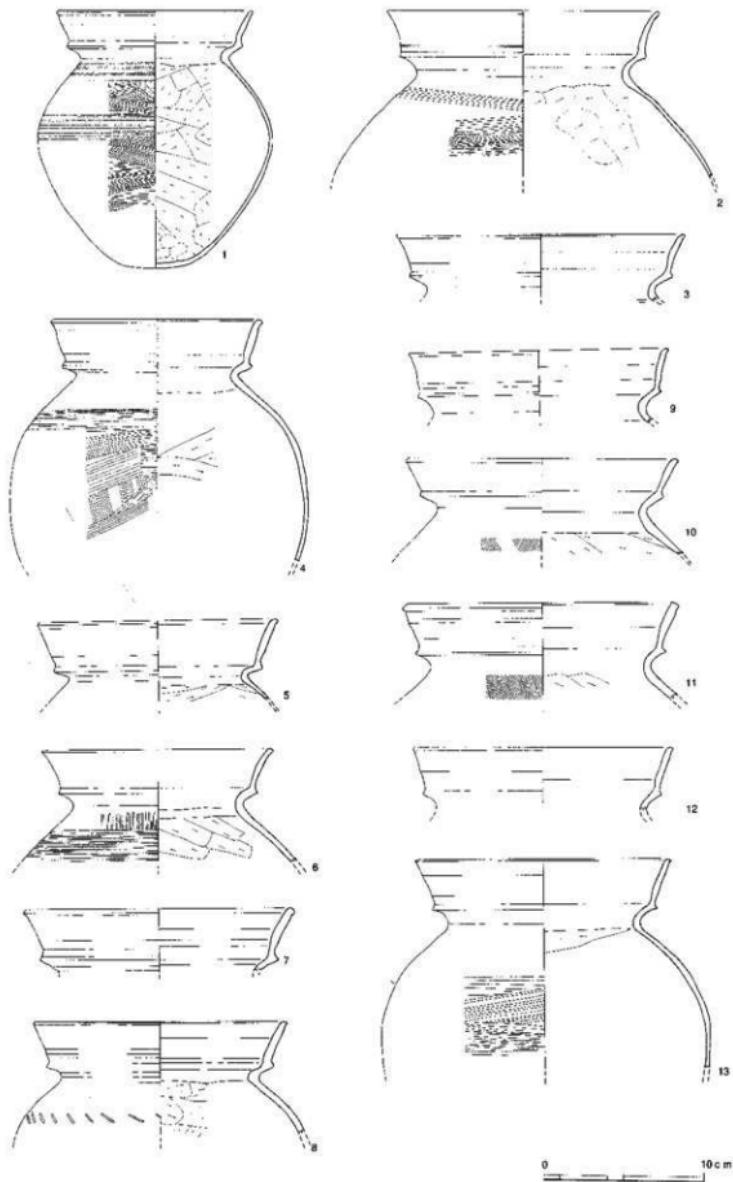


第123図 古志本郷遺跡SD17遺物出土状況図2 (遺構S=1/80 遺物S=1/9)

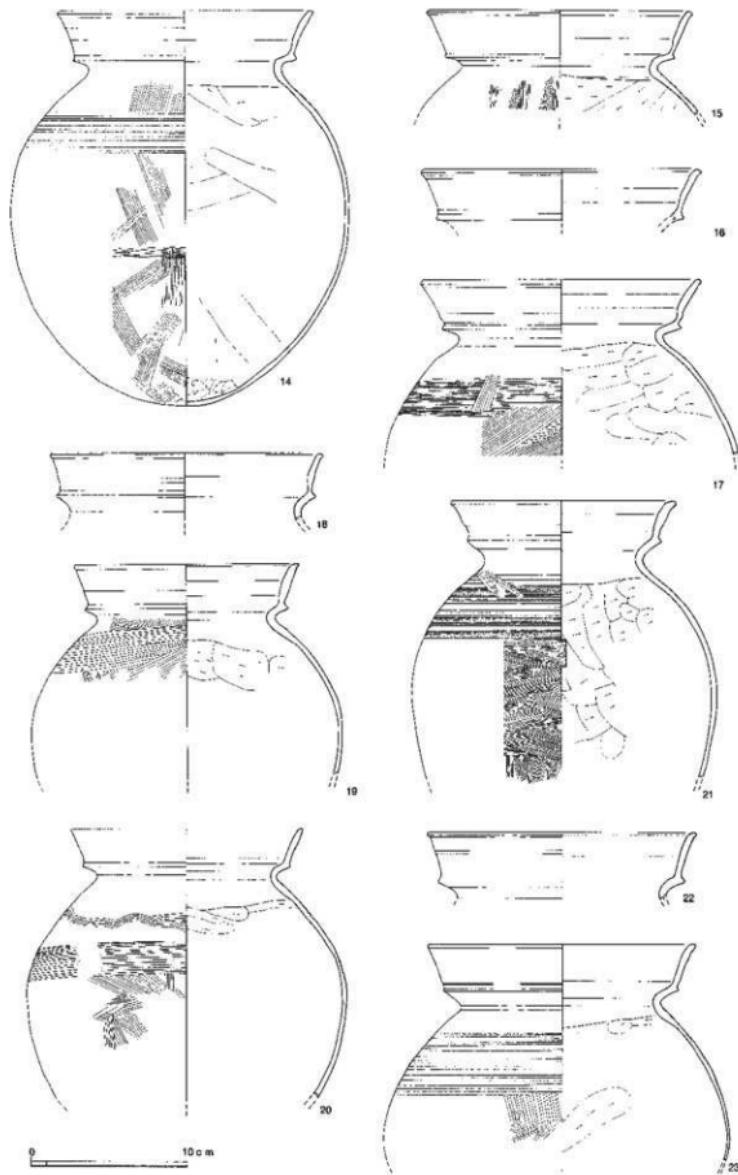


第124図 古志本郷遺跡SD17遺物出土状況図13 (遺構S-1/60 遺物S-1/9 135-96のみ1/18)

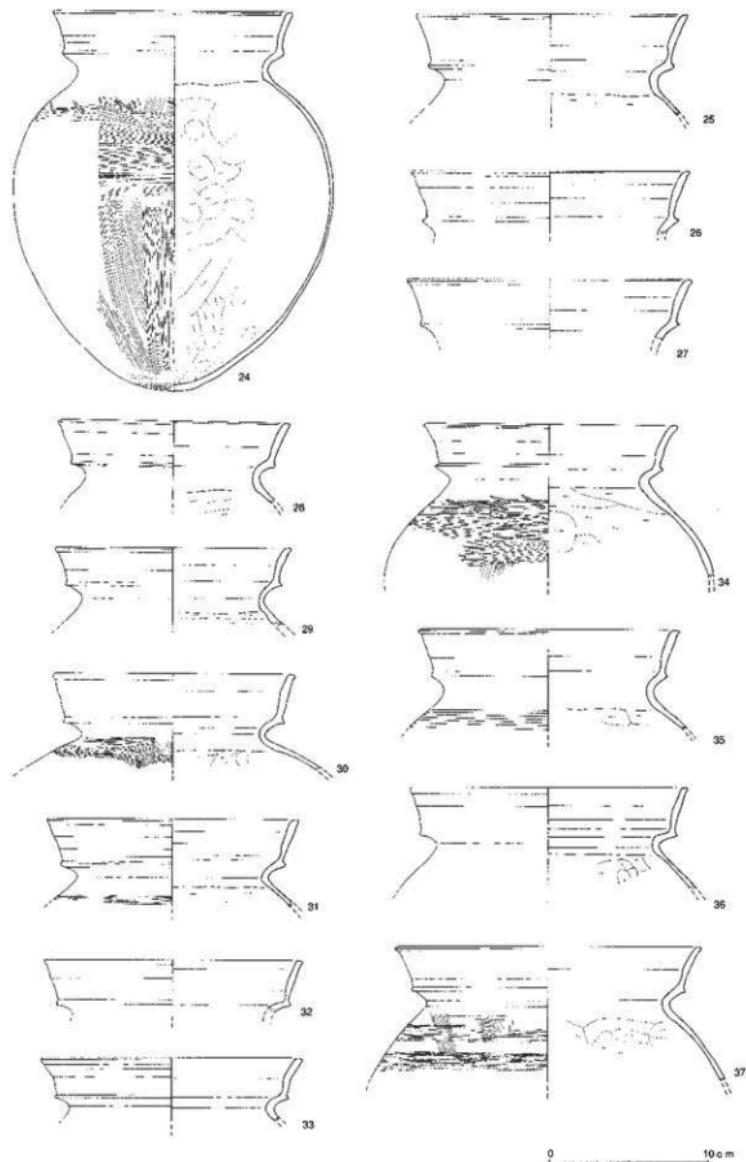
はつけづらい。潰れた状態で出土した（第123図）。19～29は口縁端部を外側に折り、内側に面を持つ一群である。端部は外側に細く引き出されている。この一群のうち、19・20などは、口縁端部を引き伸ばす形態であり、21・29も複合口縁部全体が外反するなど1～3にあげたものに類似する。20は肩上部に乱れた波状文を施す。24は口縁端部内側が凹線状になるもので、肩部には若干波打つ波状文を廻らしその上からハケ状工具の木口と思われるもので列点文を廻らす。底部は若干の平底を残している。潰れた状態で出土した（第123図）。30～42、44は口縁端部上面に面を持つグループである。30は肩が張る体部で、肩部上面に崩れた波状文を施す。37は口径20cm近い大型壺で、肩部上面に2廻りの横ハケを廻らす。上のものは右回りである。33は複合口縁部の中ほどで折れて外反するもの。40は外面が摩耗するが肩部に列点文が廻らされていることがわかる。42・43、45～55は口径20cmを越える大型の壺である。これらは、複合口縁部が外反し器壁の薄いもの（42・43・45・46・48・50）と、口縁が直立気味で器壁の厚いもの（47・49、51～55）に別けられる。第129図49は後者の最大のもので、口径29.5cm、器高47cmを測る。口縁は直立し、肩部は横ハケの上に波状文を廻らす。そして、内部もケズリの後ハケを施すものである。前述のように破碎された可能性がある。



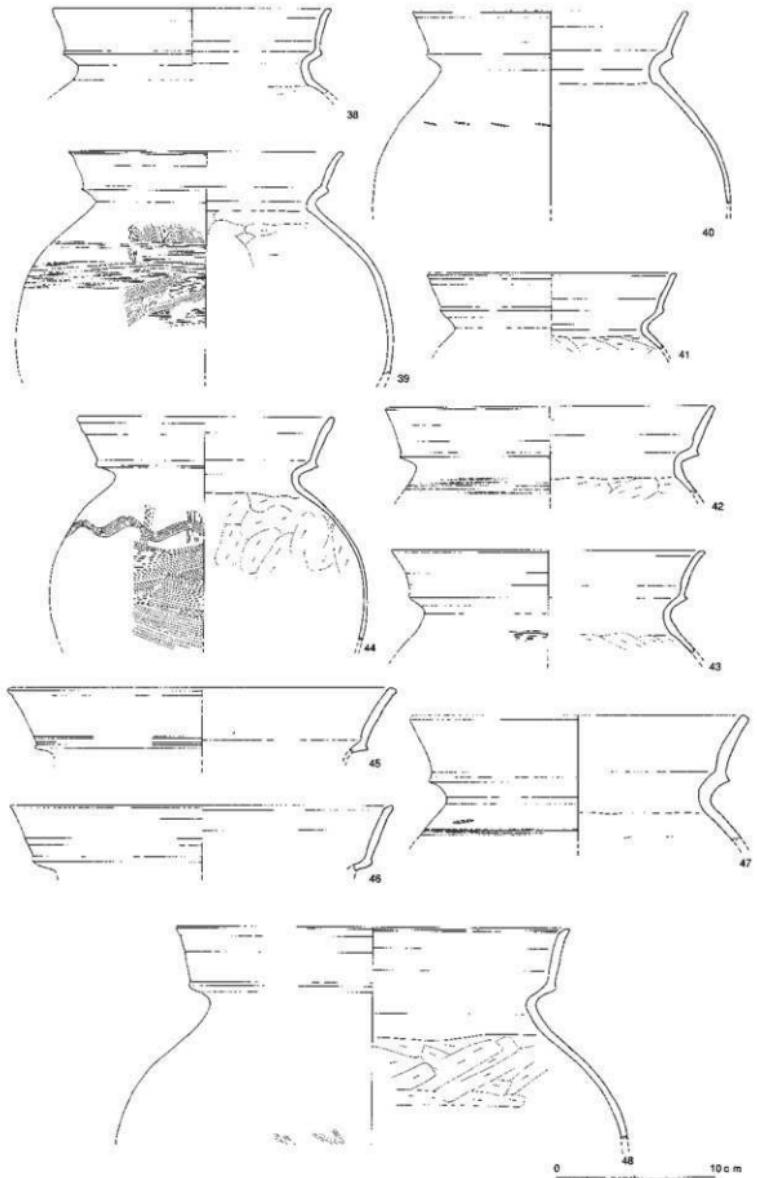
第125図 古志本郷遺跡SD17出土遺物実測図1 (S-1/3)



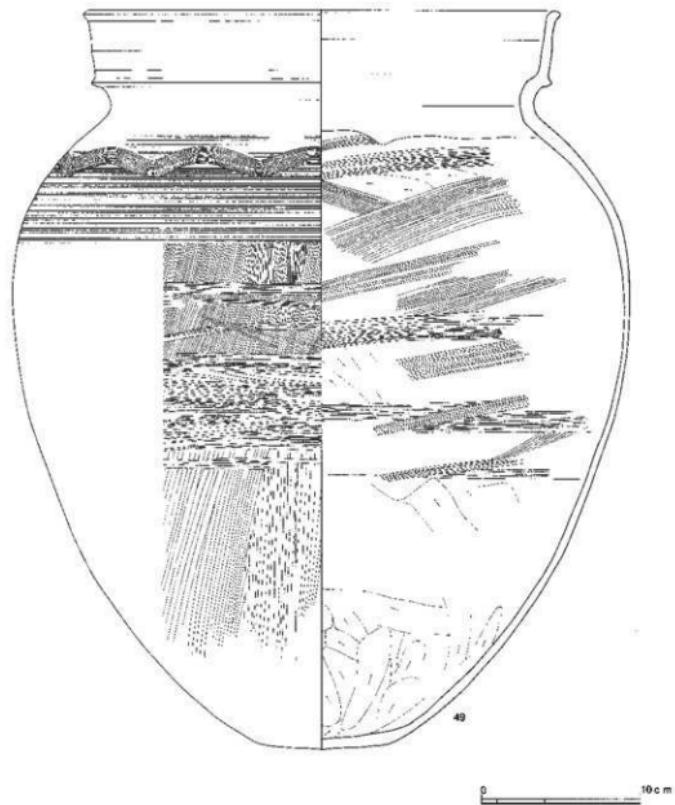
第126図 古志本郷遺跡SD17出土遺物実測図2 (S=1/3)



第127図 古志本郷遺跡SD17出土遺物実測図3 (S-1/3)



第128図 古志本郷遺跡SD17出土遺物実測図4 (S=1/3)



第129図 古志本郷遺跡SD17出土遺物実測図5 (S=1/3)

54～59は單純口縁をもついわゆる布留傾向甕である。このうち54・56は完形で出土している(図版45)。内傾する口縁、端部が内面肥厚するものではなく、全体に口縁の外形がきつく、外反氣味である。57は口縁端部を折り曲げ面を持たせるもので(次山e類)⁽²³⁾、複合口縁の端部の調整と酷似する。以上4点の胎土は、複合口縁甕と同じ明褐色である。これに対し58は茶褐色の胎土で、口縁中途がやや厚くなるものである。60は底部が平底になる甕で、肩部に波状文を廻らす。胎土は他の甕と異なり茶褐色であった。61は口縁部の欠損する複合口縁の小型の甕で、肩部に次山氏の述べる米粒状列点文が3個みられる。また頭部に穿孔される。63は大型の甕、あるいは甕の底部である。48と接合する可能性が高い。

64～70は甕である。65は頭部に余り目立たない縱方向のハケを施す。66・68・69は頭部に綾杉文を廻らせる一群である。ただし、68の綾杉文は、66・69に比べて相当乱れてい

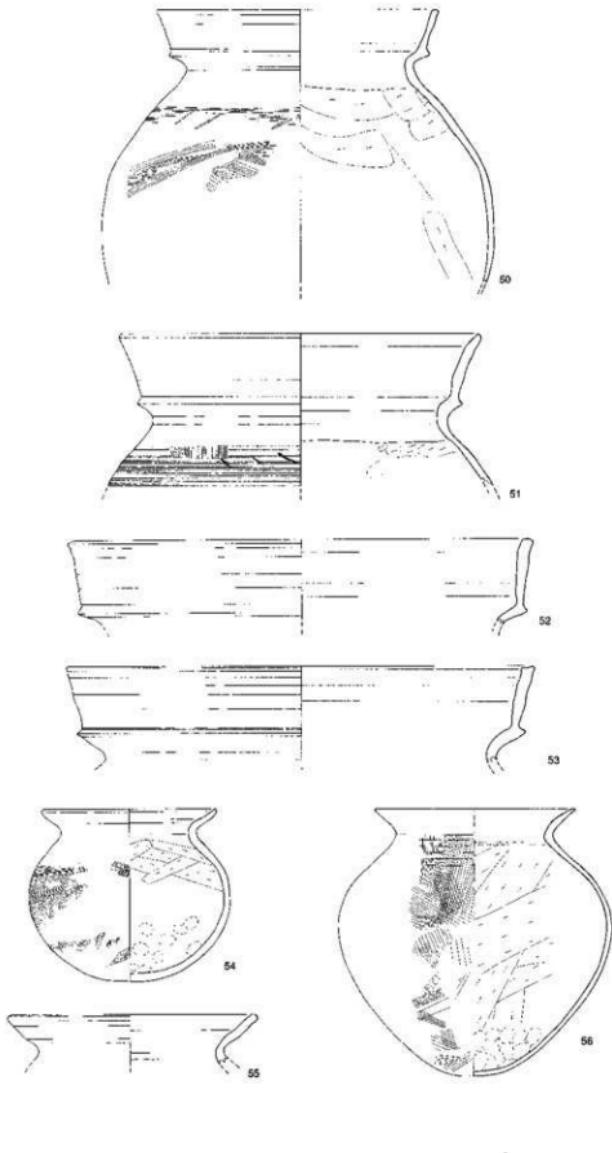
る。70は口縁部が内傾する壺で、肩部には3条の横ハケとハケ工具小口による列点文が廻らされる。71は直口壺で、完形品。SD16出土のものに比して、複合口縁部の突出が鋭い。口縁部はやや外反する。72~80は低脚壺である。72・73は口径が15cm以下と小さく、器高が7cm程度と高いグループである。74~80は反対に低平なものである。74・77は外面に縱方向のハケを入れ、その後に横方向のミガキを加えるもの。ただし両者ではハケの施す方向が異なる。75・76・78は内面に単位不明のミガキを施す。79は内外面ミガキで外面は縱ミガキの後横ミガキを施すものである。74のみが赤褐色の胎土を持ち、他は壺と同じ明褐色の胎土であった。

81~93は高壺である。81は口径29cm、高さ14cmを測る大型の高壺で、壺下部に段を持ち底部は肥厚する。松山接続法γによって壺部と脚部が接合されるもので、脚部が外面ミガキ、内面一部ハケで四方向に透かしを持つ。壺部のみ割れた状態で、壺1・20・50など一緒に出土した(第122図参照)。なお、他の高壺が明褐色の胎土をもつものに対し、本高壺のみ茶褐色である。82・83は同様に壺下部に段をもつ高壺部である。84は81の北側で出土した高壺で、壺下部には屈曲部が認められる。85~88は高壺部片であり、これらの中には同一個体もあるかと思われる。85は外部に横方向の細かいミガキを施す。89~93は高壺脚部で内面ケズリ、外面は縦ハケを施す。94は低脚高壺部で、外面ハケ後縦ミガキ、四方向に透かしをもつ。95はSD16でも出土しているワイングラス型土器である。ただし、95は口縁が外側につまみ出され、縁状をなすこと、外面が幅広の縦ミガキの後横ミガキを受け、内面が細かいミガキによってよって調整されており、全体にSD16出土のものより丁寧な作りであるといえる。また、底部には円盤充填によって足がついていた痕跡が認められる。胎土は壺などと同じ明褐色である。

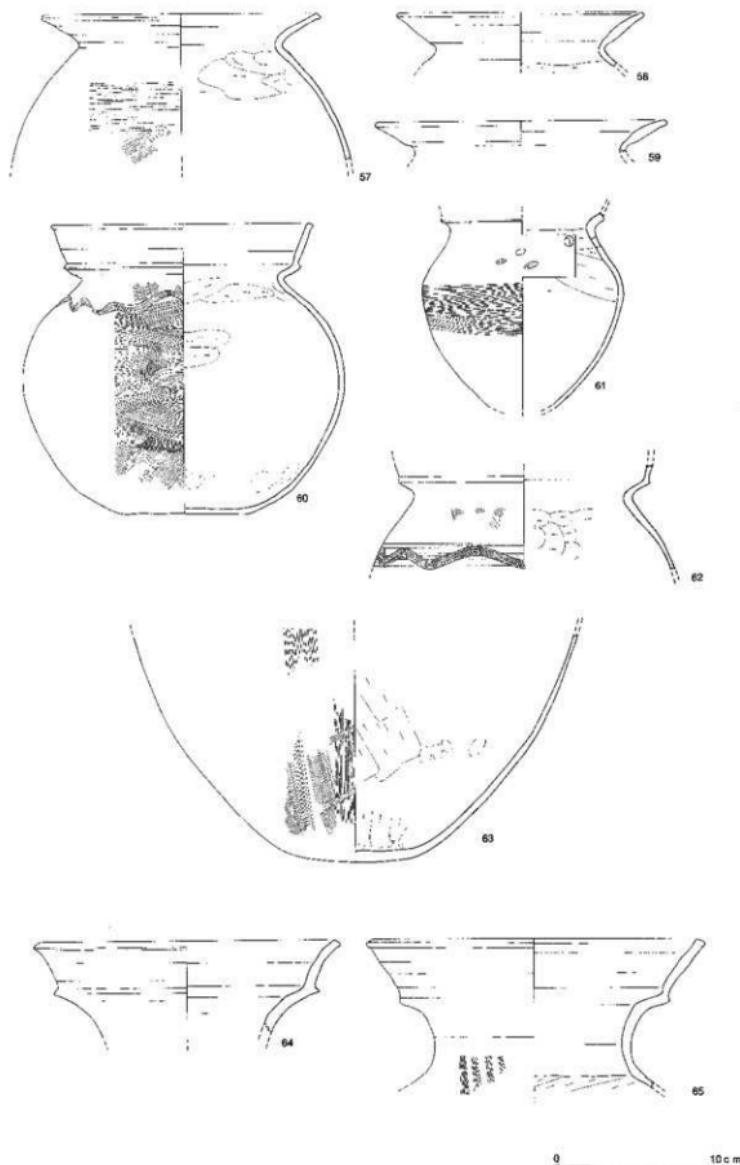
96はいわゆる瓶型土器である。SD17の調査区南寄りで、1個体が四散した状態で出土した(124図)。上部と下部から復元したが、両者は厳密には接合しない。図では示していない上部の把手も、欠ける部分に存在したと思われる。上部径11cm、底径4.7cmを測る。外面は縦方向のハケが施され、内面は上部が縦方向のケズリ、下部が横方向のケズリを施されていた。なお、内外面ともに煤などの付着は認められなかった。

97~101は混入品と思われる他の時代の遺物である。97は口縁部に凹線をもつ弥生土器壺で松本IV様式に当たる。98~100は口縁をくの字状にする土師器の壺で、100は口縁部内面にハケを施す。101は高台をもつ土師質土器壺で、本報告では余り扱うことのない器形である。

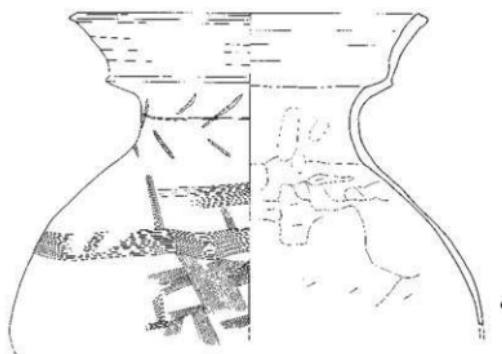
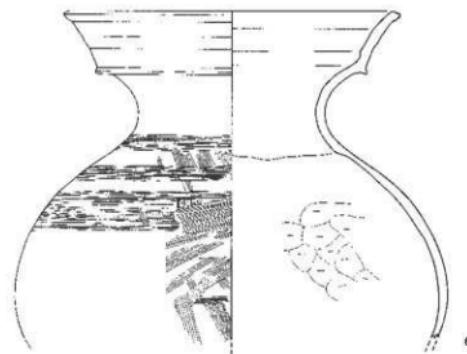
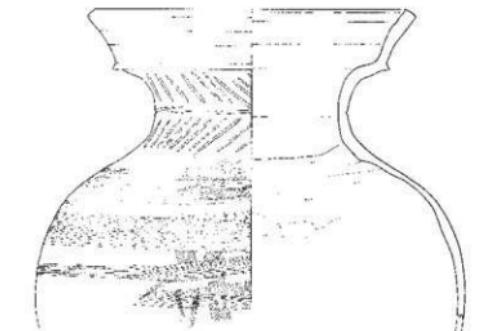
大溝SD17の年代 これまで説明を加えてきた遺物は、V層出土のものが主体であり、確実にIII層出土の年代の推定できる土器がないことから、III層の他積年代で明確には出来ない。V層の年代はSD16同様、1~96までの土器群から考察することができる。まず壺であるが、SD16から出土する複合口縁部に平行沈線を施すもの(第104図1)はみえないが、口縁端部が先細りになるもの等は同じように出土し、口縁端部を外に引き伸ばすように折り、内側に面をもたせるもの(19~29)、口縁端部を外に折り外側に面をもつもの(4~17)、口縁端部上方に面をもつもの(30~41・44)が同様に出土している。したがって、出土土器の中心は草田6・7期に収まる事になる。低脚壺などの状況も同じである。また、布留傾向壺の年代も初期の布留式~布留丁期に当たり、SD16と大差はない。しかし、壺だけはやや様相が異なって折り、SD17ではSD16にはない頸部に綾杉文を施すのがみられ、逆にSD17では頸部に凸筋を廻らせるものがみ



第130図 古志本郷遺跡SD17出土遺物実測図6 (5-1/3)

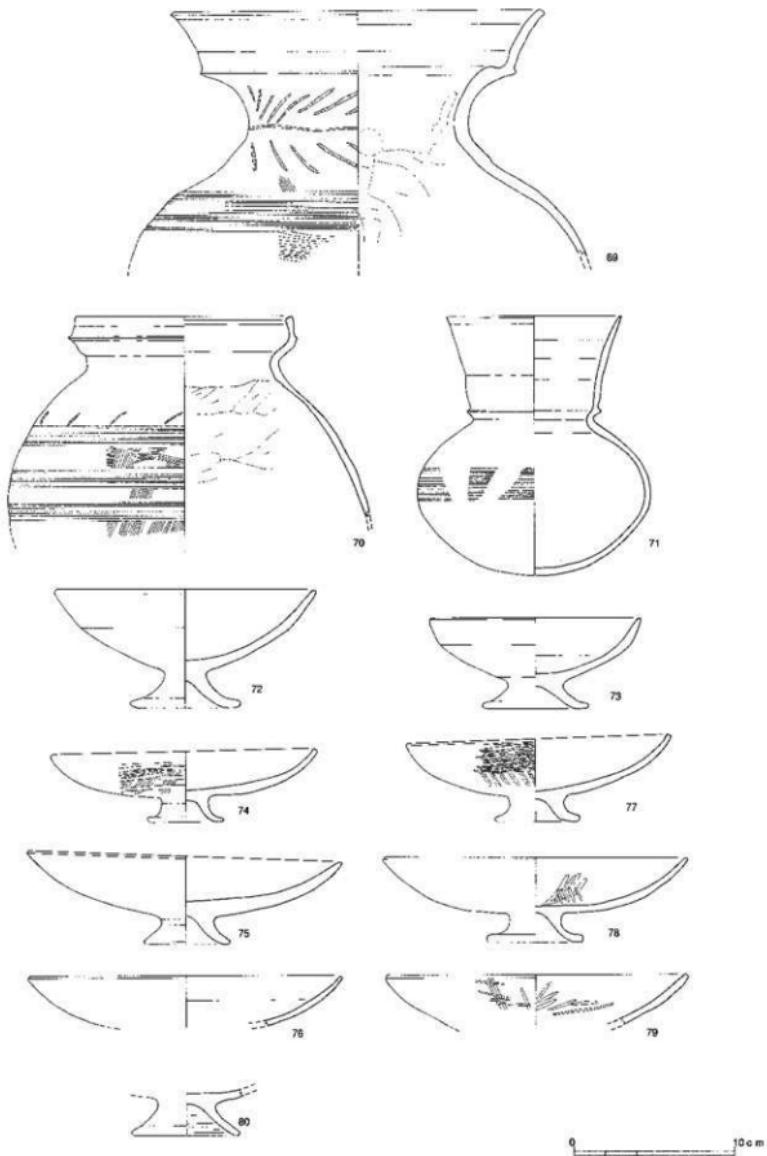


第131図 古志本郷遺跡SD17出土遺物実測図7 (S=1/3)

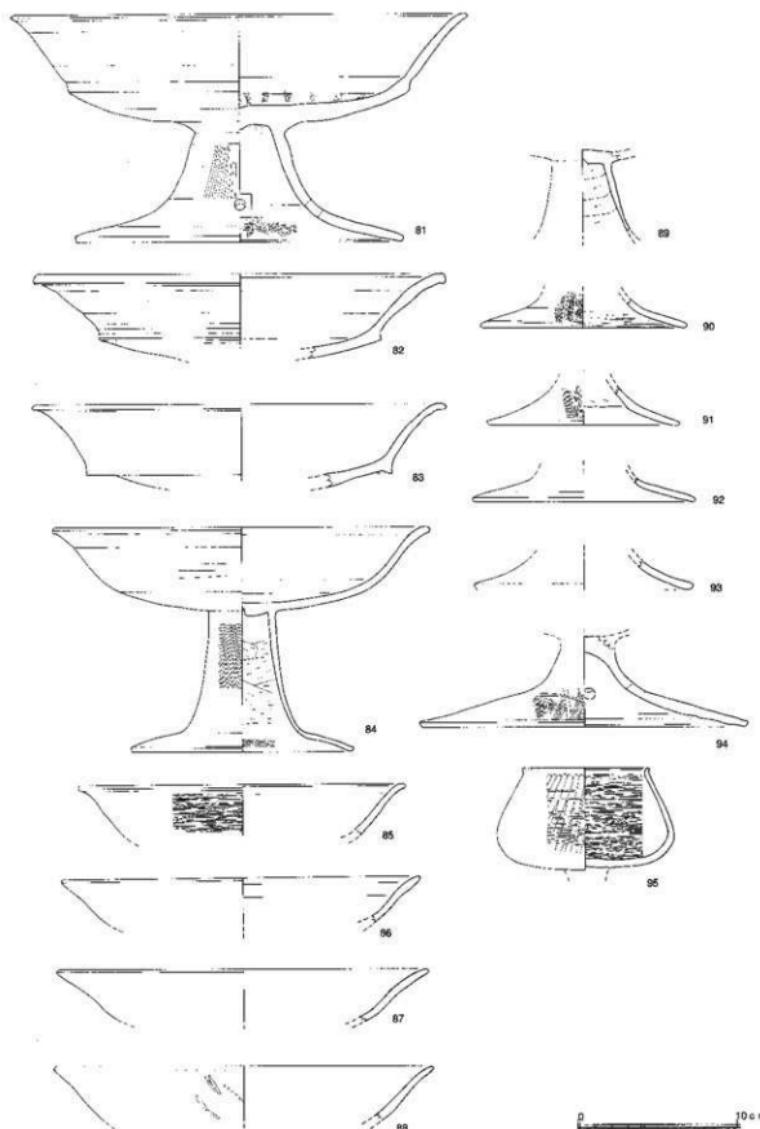


0 10 cm

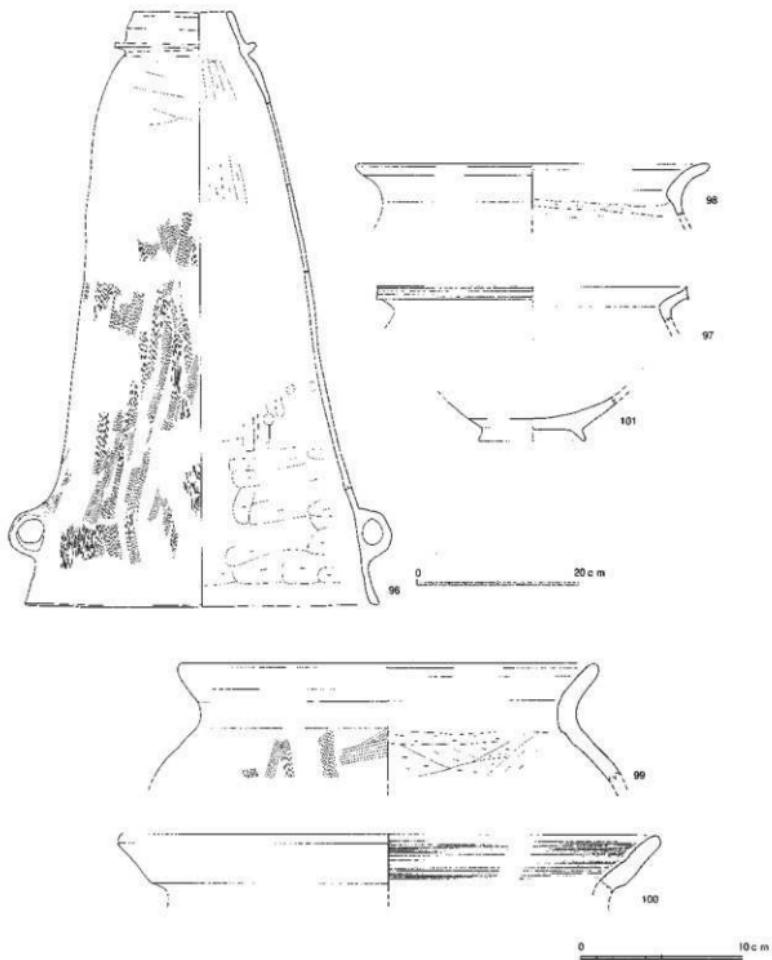
第132図 古志本郷遺跡SD17出土遺物実測図8 (S-1/3)



第133図 古志本郷遺跡SD17出土遺物実測図9 (S=1/3)



第134図 古志本郷遺跡SD17出土遺物実測図10 (S=1/3)



第135図 古志本郷遺跡SD17出土遺物実測図11 (S=1/3, 98のみS=1/6)

えない。ただし、これらいずれの器形も草田6・7期の範疇に入るものであるので、この両者の差が時期差であるかは不明である。このように大溝SD17のV層の形成時期、すなわち溝の廃棄の時期は、SD16とほぼ同じ草田7期になる。また、SD17の掘削開始年代もSD16の掘削開始年代以上に手がかりがない、おおむね、弥生時代後期のある時期と考えるより他はない。このように、SD17の機能した年代はほぼSD16と重なるとみられるのである。

大溝SD17の性格 SD16同様、第3章まとめで考察を加える。

SD18(第62、136~138図)

規模・構造 SD18はC区西寄りに位置し、南東から北西へ貫流する大溝である。後述するよう完全掘削状況で断面逆台形の溝となるが、平成8年度の調査部分では地山に類似する砂質土の堆積層を壊したまま調査を終了してしまい、第138図ではその部分には遺構下端を入れていない(同図DD'以南の部分)。

溝の規模は、本報告中でも最大級で、上幅4.0m、深さ1.0mを測り、完全掘削状況で断面は逆台形を呈する。底部の標高は南側で6.8m、北側で6.7mほどである。調査区内で約30m分を検出する他、航空写真を見ると、南側水田部にはにはさらに連続するソイルマークがみえる(図版4-9)。溝は調査区内ではほぼ直線的に掘削されており、おおむねN-35°-Wを指向する。

なお、SK34、SB20は本遺構の上に作られている。加えて、南端ではSD17との切り合があるが(第120図SD17上層断面図参照)、この点については後述する。

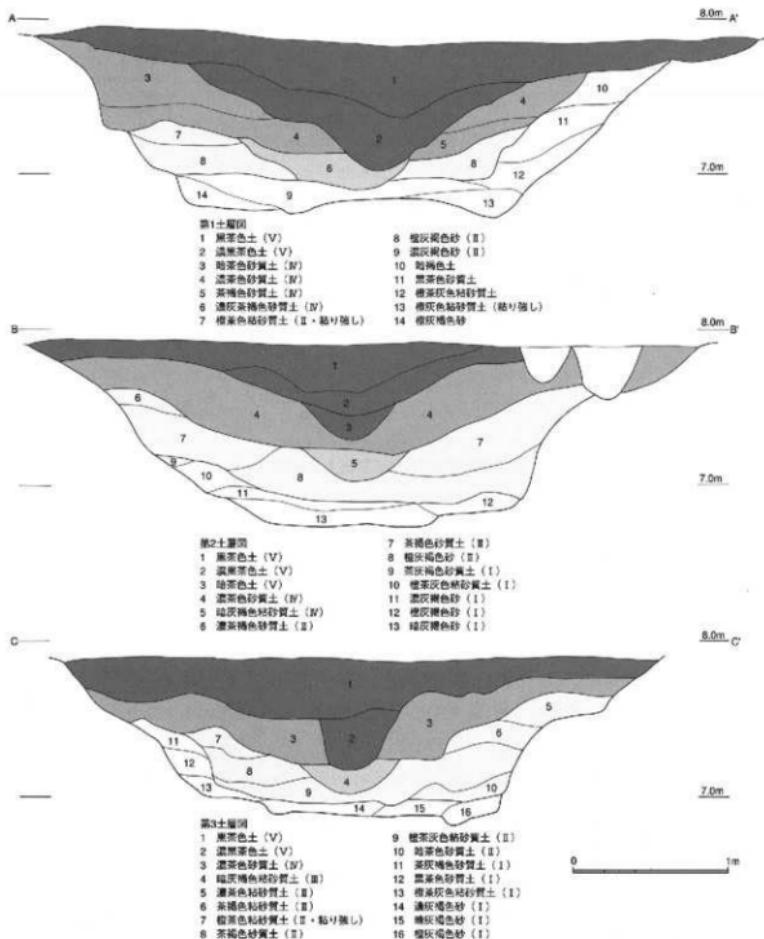
土層堆積状況(第136図) 上層断面は合計4カ所で確認したが、前述の様に、南側DD'についてはI・II層を未確認であった。したがって、残る三カ所の土層図のみを提示する。なお、第4土層断面DD'の堆積状況については図版4-7を参照されたい。

土層堆積状況の概要を述べると、最低4回の再掘削が認められる。以下、最後の掘削時の埋土をV層とし最初の掘削時の埋土を1層とし、北側の上層断面から順次説明を加える。

第1土層図(AA'、口絵カラー図版3参照) 調査区北壁で確認した上層図である。したがって、溝と直交せず、断面がやや長めになっている。第63図でもわかるように、本遺構の地山より上の部分は奈良・平安時代の遺物包含層であり、本来の遺構掘り込み面は確認できなかった。上からV層(1・2層)、IV層(3~5層)、III層(6層)、II層(7~9層)、I層(10~14層)の順に分層できる。V層は黒茶色系のやや粘り気のある締まった土が堆積する。断面形状はV字を呈する。底部の標高は7.05mであった。次いで、IV層は茶褐色系の砂質土が堆積する。断面は箱状で底部の標高は7.25mである。III層は、IV層に切られ、再下層のみが逆三角形形状の形狀に残る溝で暗灰褐色の粘砂質土が堆積する。幅広なV層にはほとんど切り取られ、V字の先端のみが残っているものと思われる。底部標高7.9mである。II層は幅という観点から言うとSD18がもっとも拡張された時の溝の埋土で、鉄分を含んだ粘砂質土と、流出した地山の灰褐色差からなる。この上層が形成される時期には流水があったものと考えられる。断面は逆台形をなし、底部の標高は7.8mである。I層は一部のみが残存する。堆積物には地山砂層を含むものが複数あり、流水があったものと思われる。断面は逆台形と推定され、底部標高は7.8mを測る。

第2土層図(BB') 溝の主軸方向と直交しない角度で確認したため、若干横方向に長くなっている。上からV層(1~3層)、IV層(4層)、III層(5層)、II層(6~8層)、I層(9~13)に分層できる。IV層の最上層になる第6層では、AA'同様に茶褐色の砂質土が確認され、IV層の上部は土壤化した堆積土をもっていたことが窺える。またI層でも最上層第9層で茶灰褐色砂質土がみられ、ある程度土壤化した土によって埋まったことが窺える。I層の11層と12・13層の間に、再掘削の可能性がある。

第3上層図(CC') 第1~3の中で一番溝に直交して確認した土層図である。上からV層(1~2)、IV層(3)、III層(4)、II層(5~9)、I層(10~16)に分層できる。IV層は下端の幅が1.5m、II層が2.5m、I層も2.5mを測る。I層の堆積層は分層することができ、左から

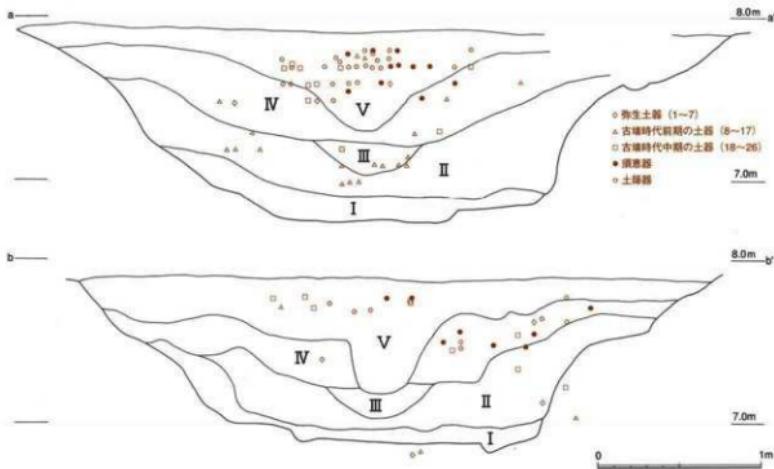


第136図 古志本郷遺跡SD18土層図 (S=1/30)

右に堆積していく様子がよくわかる。ここでも流水が想定できる。

土層堆積状況のまとめ 以上の堆積状況をまとめると、次のことが指摘できる。

1 溝は、最初の掘削時（Ⅰ層堆積）、第1回目の再掘削時（Ⅱ層堆積）は逆台形をなしていた。この時点では溝内での流水が考えられる。なおかつ上層には土壌化した砂質土が堆積することから、



第137図 古志本郷遺跡SD18遺物出土状況図1 (S-1/30)

流水がなくなり、溝が埋まつた段階ではほぼ同じ規模に再掘削されたと考えられる。

2 第2回再掘削時(Ⅲ層堆積)には、V字が指向される。そしてこの溝はの下層も茶灰色の粘砂質土が埋土となっていることから流水は考えづらい。

3 第3回再掘削時(Ⅳ層堆積)には再び底部の広い断面箱型の溝が指向されるが、続く第4回再掘削時にはまたV字の断面が指向される。最終的なV字溝は流水はなく埋没する。

4 覆土から、平安時代には溝は完全に機能を停止し埋没していたと考えられる。

5 以上、1~3から、掘削時ごとに溝の構造・機能が変化しつつ再掘削されたことがわかる。

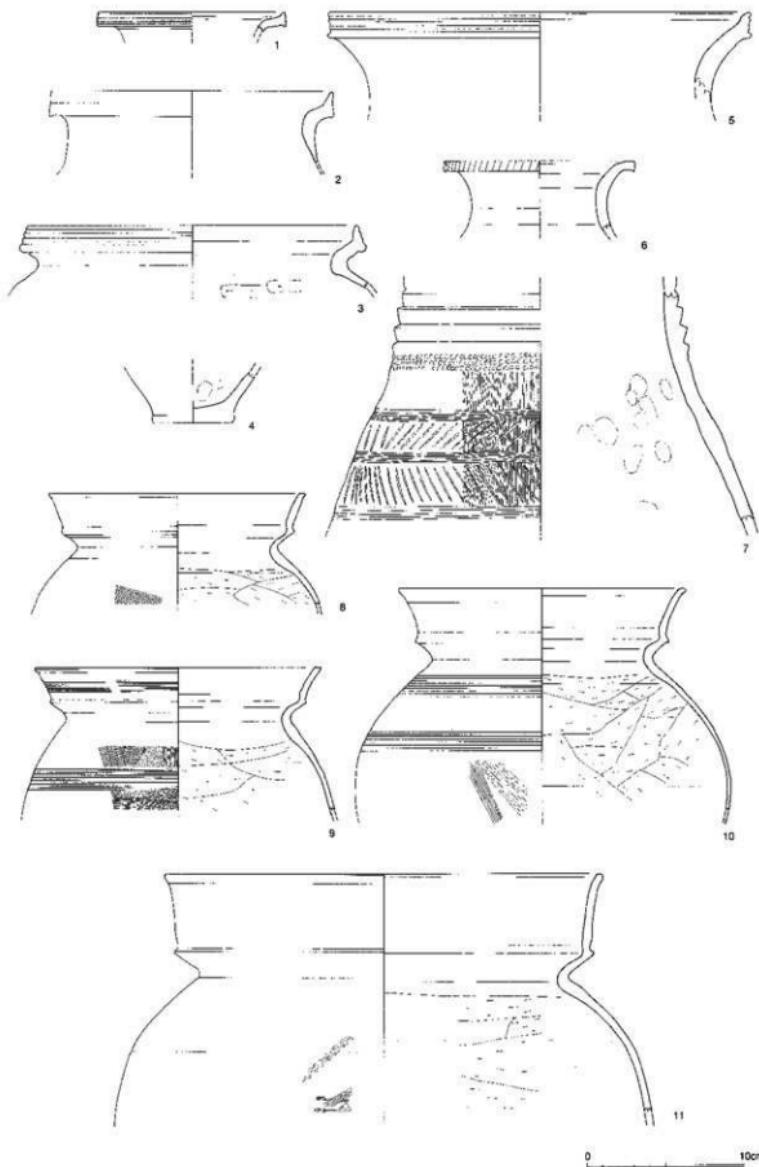
遺物出土状況(第137・138図) SD16、17と異なり、大溝SD18ではI~Vの各層から遺物が層位的に出土した。第137図はそれを溝の上流方向から下流方向に対して見通した図である。第137図上側の垂直分布図が第138図の左側の平面分布図をa'a'に直交する方向から見たもの、下側が同右側をb'b'に直交する方向から見たものである。ただし、第138図D'D'以南についてはI・II層を調査していないので、その部分の出土土器はその上層のものも含めて第137の下側の図面に入れていない。凡例で時期区分の後にかかれた番号の遺物が、その記号の地点から出土したことになる。なお、時期不明の土師器片については垂直分布図では煩雑になるため省略している。また、第137図には出土遺物と土層の関係がつかみやすいようにB'B'C'C'での土層を入れてある。

第137図を見ると、弥生土器が上層、下層から散在して出土するのに対し、古墳時代前期・古中期の土器は明らかに出土する土層に対応関係がある。須恵器・土師器の出土土層についても同じことが言える。すなわち、I・II層からは古墳時代前期の土器が出土し、III・IV層からは古墳時代検出面近くからまとまって出土した(図版48)。また、第148図96・97は第138図南側の

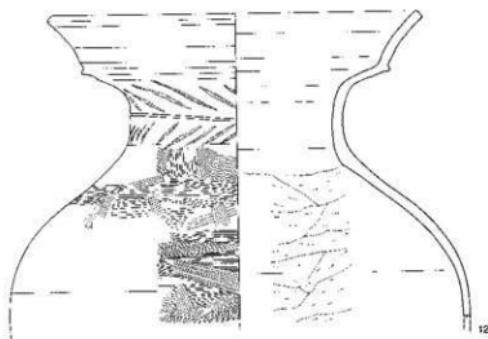
- ◊ 狩生土器
- △ 古墳時代前期の土器
- 古墳時代中期の土器
- 漢唐器
- 土師器
- ◎ 土師器（壺・支脚）
- 時代不明の土器



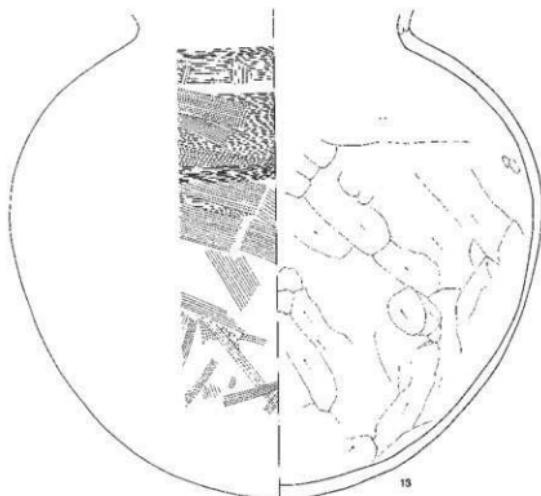
第138図 古志本郷遺跡SD18出土遺物実測図2 (S-1/90)



第139図 古志本郷遺跡SD18出土遺物実測図1 (S=1/3)



12



13



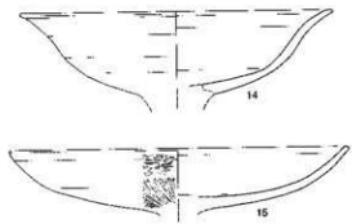
14



15



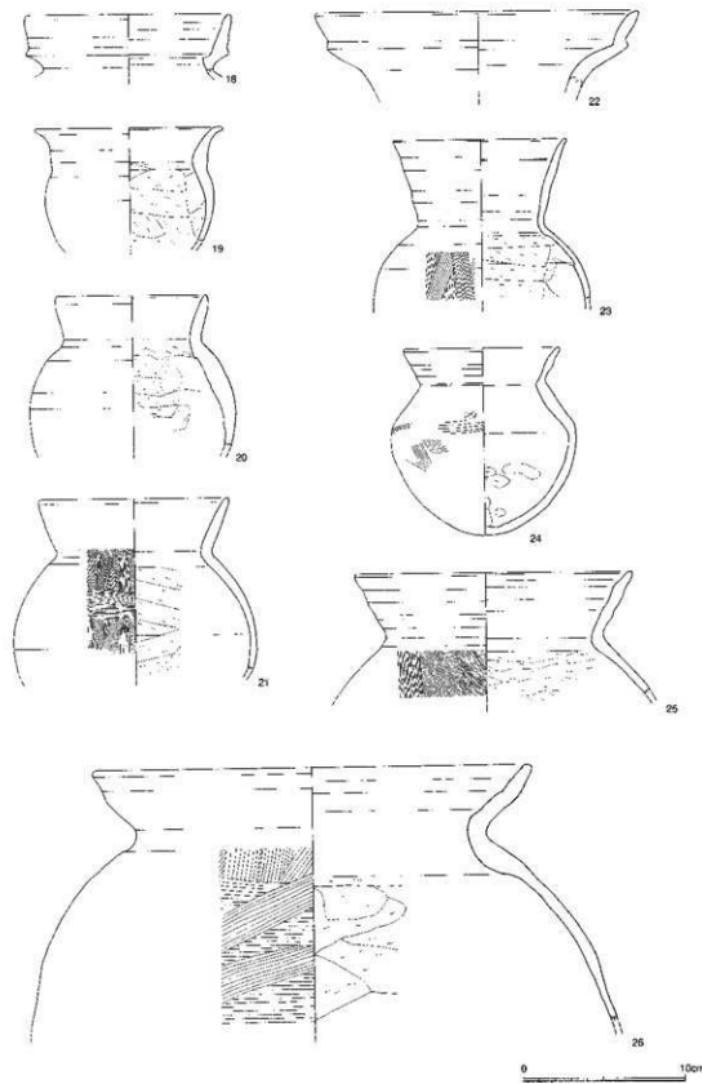
16



17

0 10cm

第140図 古志本郷遺跡SD18出土遺物実測図2 (S=1/3)



第141図 古志本郷遺跡SD18出土遺物実測図3 (S=1/3)

壺片の集中する部分から出土し、約半分ほど復元できた。

各層の年代 土層堆積状況と遺物の出土状況の対応から、I・II層が古墳時代前期に埋没、III・IV層が古墳時代中期に埋没、V層が古墳時代後期以降、奈良時代までに埋没したことがわかる。SD 18は、形状、性格を変えながら長期間に渡って利用され続けられたのである。

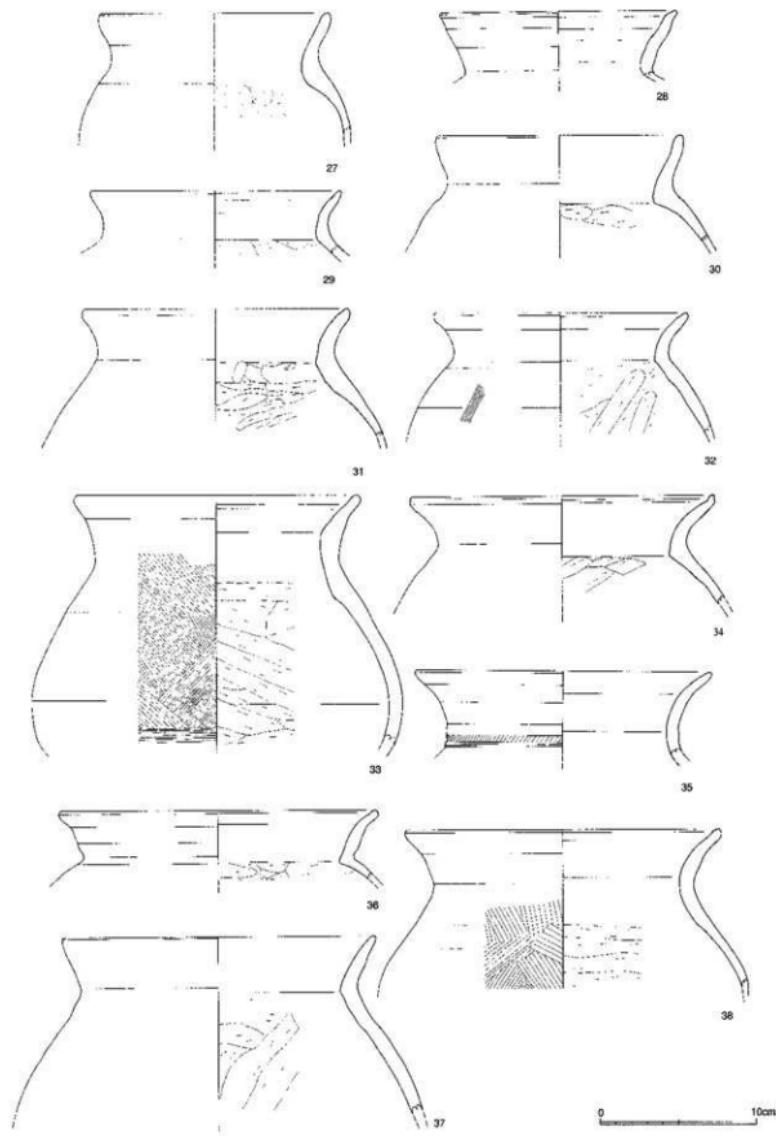
出土遺物（第139～150図） 出土遺物は、弥生土器～古墳時代中期の土器、須恵器は実測可能なもののすべてを実測し、古墳時代後期以降の土師器については主要なものののみを掲載した。

1～7は弥生土器である。1・6は小型の広口壺、5はやや大きな広口壺である。口縁部には3条程度の凹線・擬円線を廻らす。6は口縁部に斜めの刻印文を施すもの、2は凹線のないものである。4は壺などの底部。7は肩が余り張らず、背の高い広口壺の肩部である。頸部には4条以上のヘラ描沈線が施され、その下に列点文帯、その下は、縦ハケの後3条の沈線帯で区分して、綾杉文を施している。これらの土器は松本IV-2様式のものである。

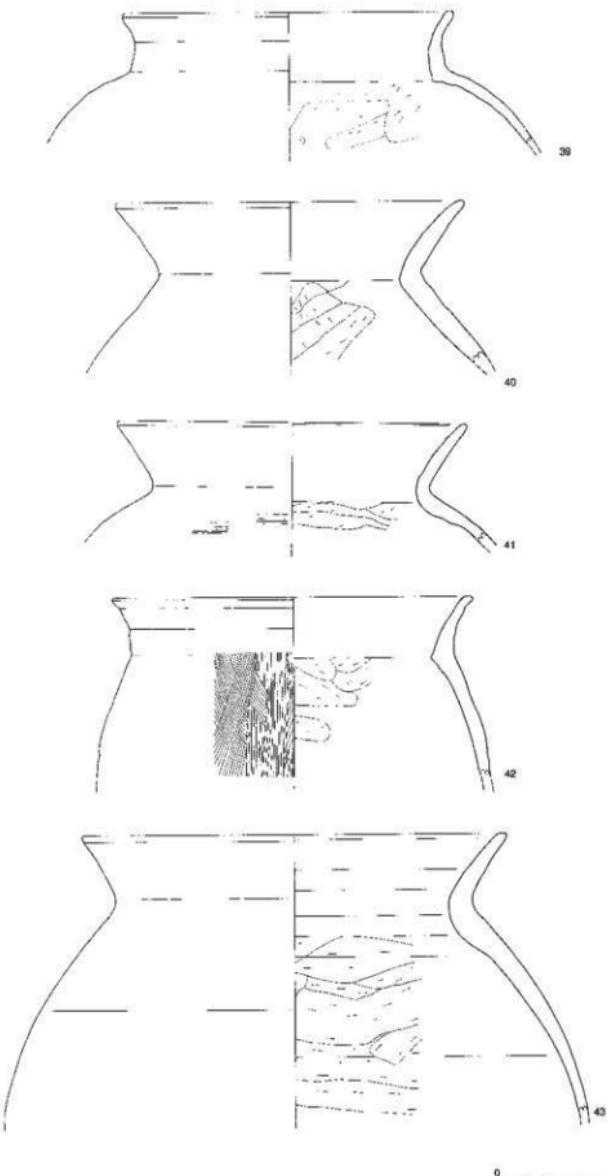
8～17は弥生時代末から古墳時代前期の土器である。8～10は、複合口縁部が外反するもので、9・10は肩部に沈線の帯がやや聞く原体を用いた横ハケがみられる。9は口縁内側に凹線状になるナデ跡を残し、複合口縁部外面にも平行沈線が施されるものである。11は大型の壺で、直立する口縁部をもつ。12・13は壺である。12は頸部中火にくし描沈線を廻らし、その両辺に綾杉文を展開させる。13は頸部のない壺の破片である。14は高坏片で、坏底部は円盤光埴によつて接合される。口縁部は外反する。15～17は低脚壺である。15は外上部を横方向の細かいミガキ、下部をやや幅の広いミガキによって調整する。16・17は脚部である。以上の土器は8～10が草田4～5期、13～17が草田6～7に該当するものである。

18～28は古墳時代後葉～中期の土師器である。18は複合口縁を残す口径13cm程度の小型の壺である。19は口縁部が外側広がり、端部は外に引き出される土器で、内面は壺同様ケズリが施される。小型丸底壺・鉢等の影響を受けたものであろうか。20・21・24は小型丸底壺である。21は外面に横ハケを施す。23は直口壺で、複合口縁部が完全に退化したものである。22は複合口縁部が鈍化した壺である。25、26は単純口縁の壺で、26は口縁部が内湾する。25は外面に横ハケはみられない。以上の土器群の時期は、23が松山I～II期、18・21・24・26が同II期古段階、20・25が同新段階、19・22が同III期であろう。

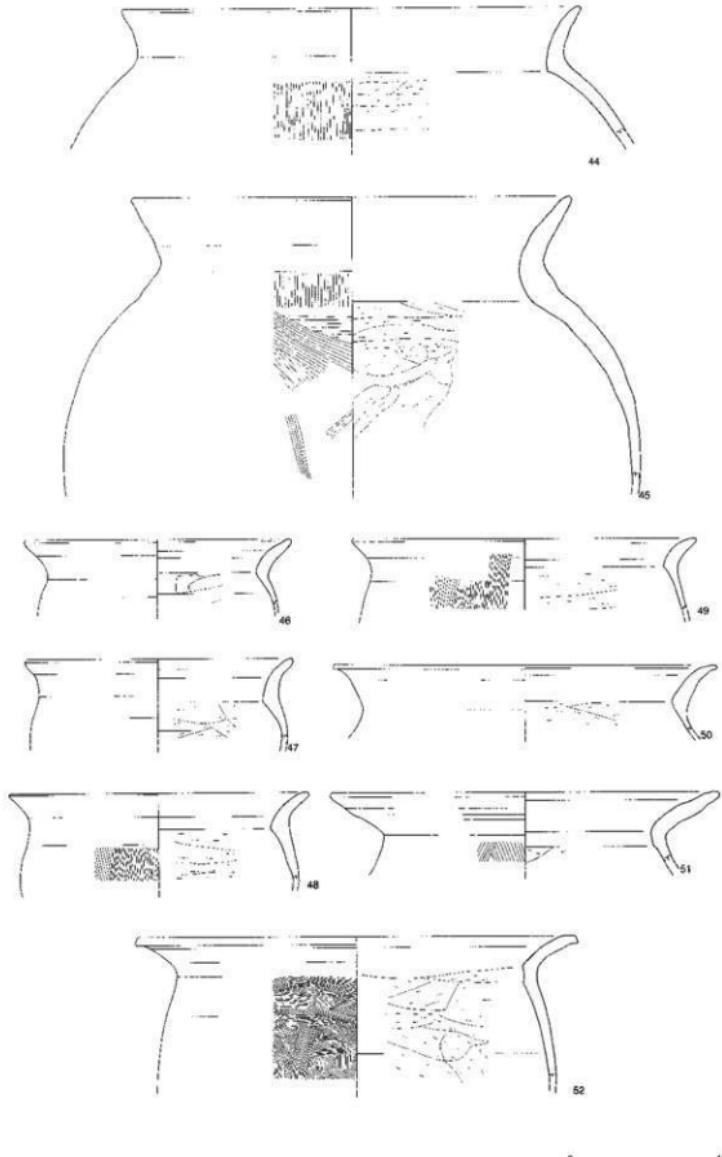
29～58は古墳時代後期以降の土師器壺である。口縁部と体部の境界が明らかでなく、くの字状に外反するものを中心とする。29・33は口縁がやや直立気味で、頸部があり下脹れになるタイプの壺である。33は代表的なもので、外面ハケ、内面は頸部以下に斜め上方へのケズリが施される。28・36は口縁と体部の境が後をなすもので、ともに口縁端部を若干外反させる。34は28・36の程口縁と体部の境は明瞭でないが、口縁端部を上方につまみ出している。39～45、は口径20cm以上のやや大型の壺で、39は口縁が直立するもの、他はくの字状をなすものである。いずれも頸部内面付近までは横方向のケズリで調整する。42は外面に顯著な縦ハケを残し、44は口径30cm、45も口径27cmを測る大型の壺である、両者共に肩部に縦ハケを施し、45では体部には斜め方向のハケが認められるを施す。46～55は体部が余り張らず、口縁部を水平に近い角度で外側に折るるもの一群である。48・49・59は外面に縦ハケを施す。52は口縁端部に面をもち、体部は方向不定のハケを丁寧に施している。これらは、いずれもの体上部以上が残存するが、内面は横方向のケズリを施す。55～58は口縁部くの字の壺で、外面には縦方向の



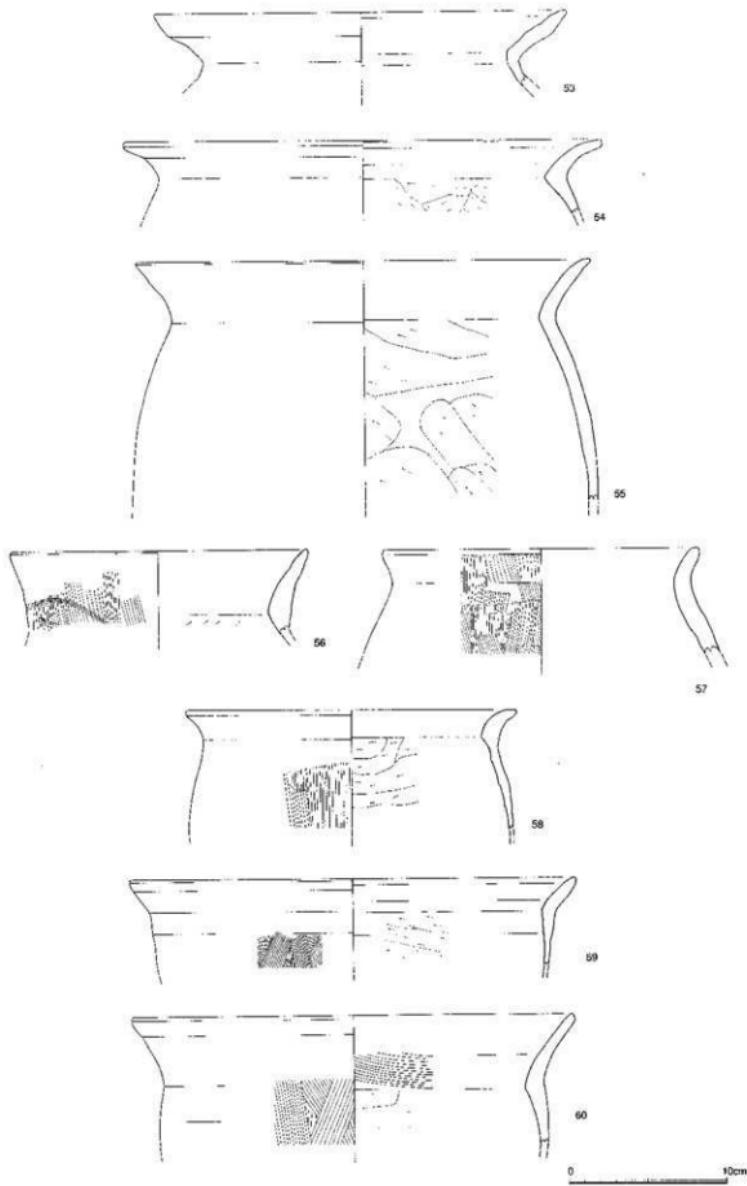
第142図 古志本郷遺跡SD18出土遺物実測図4 (5-1/3)



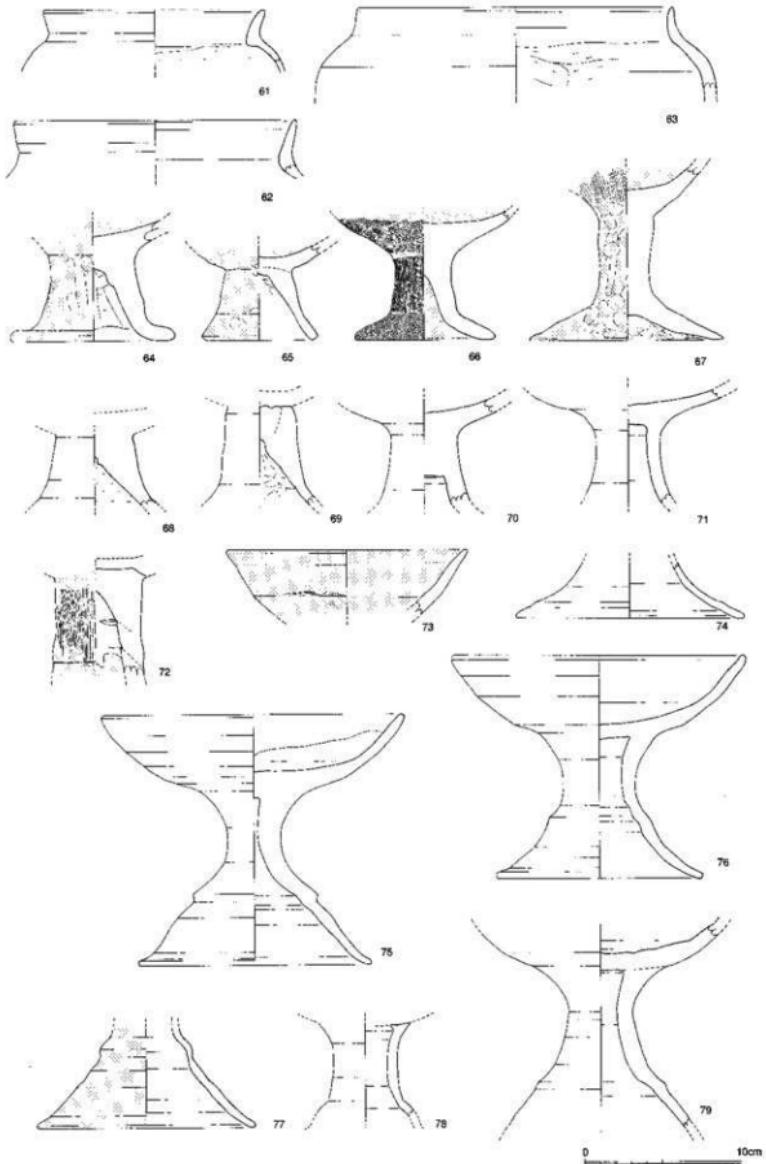
第143図 古志本郷遺跡SD18出土遺物実測図5 (S=1/3)



第144図 古志本郷遺跡SD18出土遺物実測図6 (S=1/3)



第145図 古志本郷遺跡SD18出土遺物実測図7 (S=1/3)



第146図 古志本郷遺跡SD18出土遺物実測図8 (S=1/3)

ハケがみられる。59・60は口径が最大径となるもので、瓶であろう。共に外面に縦ハケが残り、60は頸部内面にもハケを施す。61～63は土師器の短頸瓶である。古墳時後期以降の土師器の年代観は明確になっていないが、44～54は7世紀後半まで降るものであろう。

64～79は土師器高坏である。64～66は低脚の高坏で、64・65は脚部内面を除いて赤彩する。66は外面に精緻なハケを施しており、内外全面に赤彩する。67は棒状の脚部をもつもので脚部には指頭圧痕が多数残る。坏部には縦ハケが施されていた模様である。脚部内面も含め全面赤彩する。68～71は赤彩されないものである。70は脚部上方はケズリが及ばず、下方内面がケズリである。71は脚部有段高坏であろうか。72は厚い筒状の脚部で、外面に縦ハケ、沈線が施される。内側は下部のみ赤彩する。73は高坏部で内外面赤彩である。74は高坏脚部、内外面ナデである。

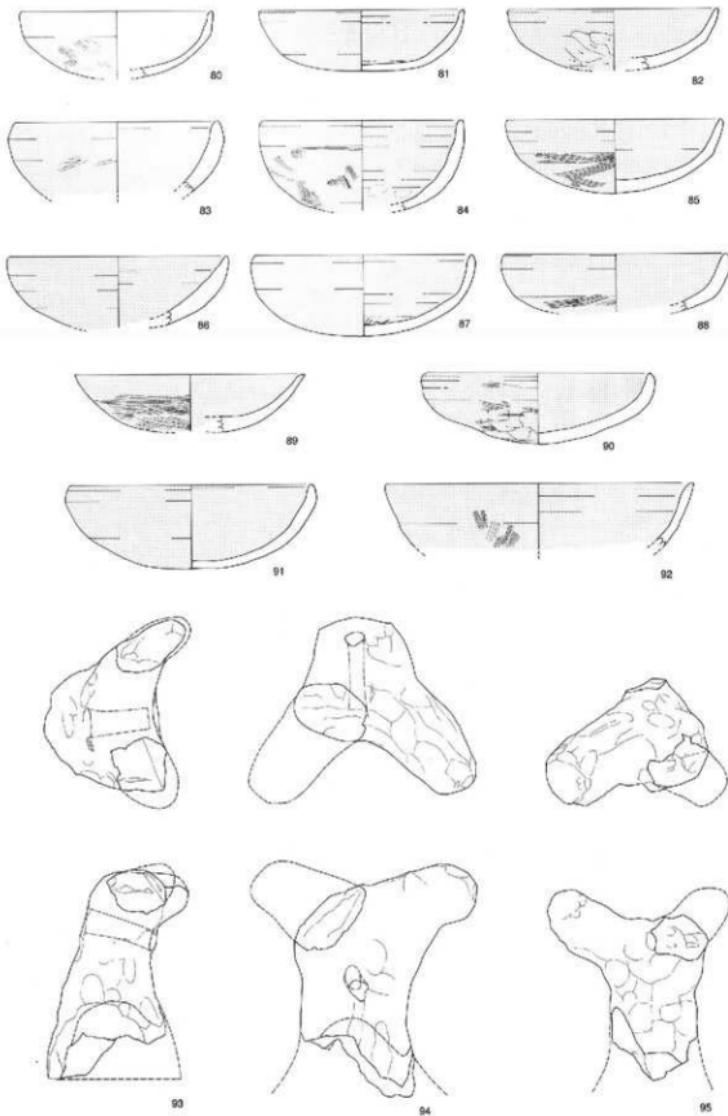
75～79は土師器底部有段高坏である。遺物出土状況で示したように、SD18検出面でまとまって出土した。75は口径19.4cm、器高15.8cm、底径14.6cmを測り、脚部最小径は3.4cm程度と非常に細くくびれた脚部をもつ。脚部の段以下は外側にふくらむ形態である。76は18.4cm、14.2cm、底径13.0cmを測る。75に比較して、太い脚部をもちくびれもそれほどではない。段以下は反り返る点が75とは異なる。なお、坏部内面は激しく剥離している。77は76と同様の形態をもつもので、脚部外面に赤彩が施される。78はくびれのない個体で、坏部は剥離している。脚部有段高坏は78に限らず、松山接続法によって接続されているようである。また、胎土は明褐色（76）あるいは茶褐色（75・79）で、2～3mm大の砂粒が含まれるような胎土が使用されている。79は75と同様のタイプであろうか。外面が赤彩されていた可能性もある。

80～92は赤彩の土師器碗である。80・84・88は口縁が直立するタイプで、下部の碗状になっている部分にハケが施される。81・82・85・87は口縁がやや外反するタイプで、82は下部にケズリが、85にはハケが施される。83・91は口縁部が厚くなり、内溝するもので、内外面ナデを施す。89は底部外面に横ハケを施し、90はヘラによるナデの後に横ハケを施す92は口径18cmを越えるもので、高坏の坏部である可能性もある。

93～95は土製支脚である。93・94は突起を2本もち、前後に穿孔される。94の穴は直径1cm程度と細い。95は突起2本をもち、穿孔の確認できなかったものである。

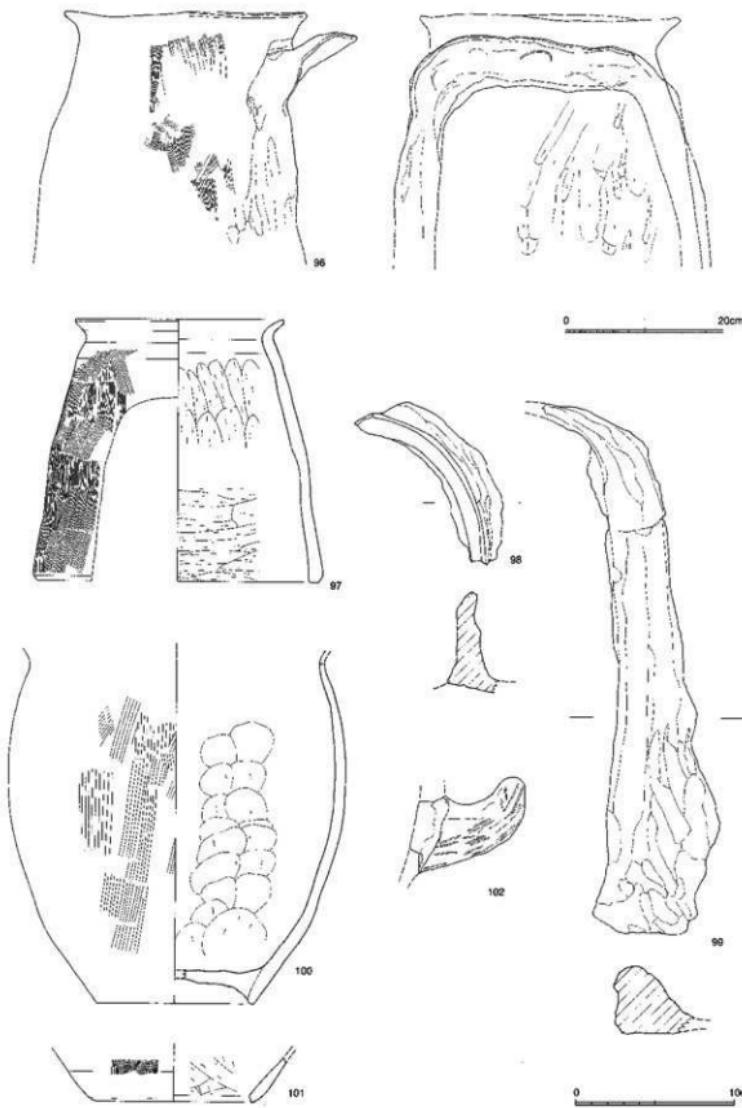
96～99は甌である。96は受部径3.0cm前後で、外面に縦ハケを施し内面は縦方向のケズリがあるもの。底部分が本体径を上回る。97は受部径2.0cm程度で、外面には丁寧な縦ハケが施される。内面は上部が縦方向のケズリ、下部が横方向のケズリである。また、接地部外側の面取り調整がされていた。98・99は甌の底である。100～102は甌である。100・101は同じく底径1.0cmを測り、外面に縦ハケが施される。100はおそらく高さ2.5cm前後になる個体で、内側に一本のブリッジ痕跡がある。また、内面にはハマグリ状のケズリがみられ、切り合と砂粒の移動状況から、下から上へ削っていった過程が窺える。102は甌の把手である。全体にやや細いミガキが施される。基軸部と胴部の接合関係が明確にわかる資料で、把手基軸部を胴部に差し込んだ後、接合部外面に粘土帶を巻つけた痕跡が残る。

103～122は須恵器である。103・104は蓋で返りの残るもので、高広IV A期に相当する、奈良時代のものであろう。105～107は須恵器蓋坏で、105・106は内面に段を有し

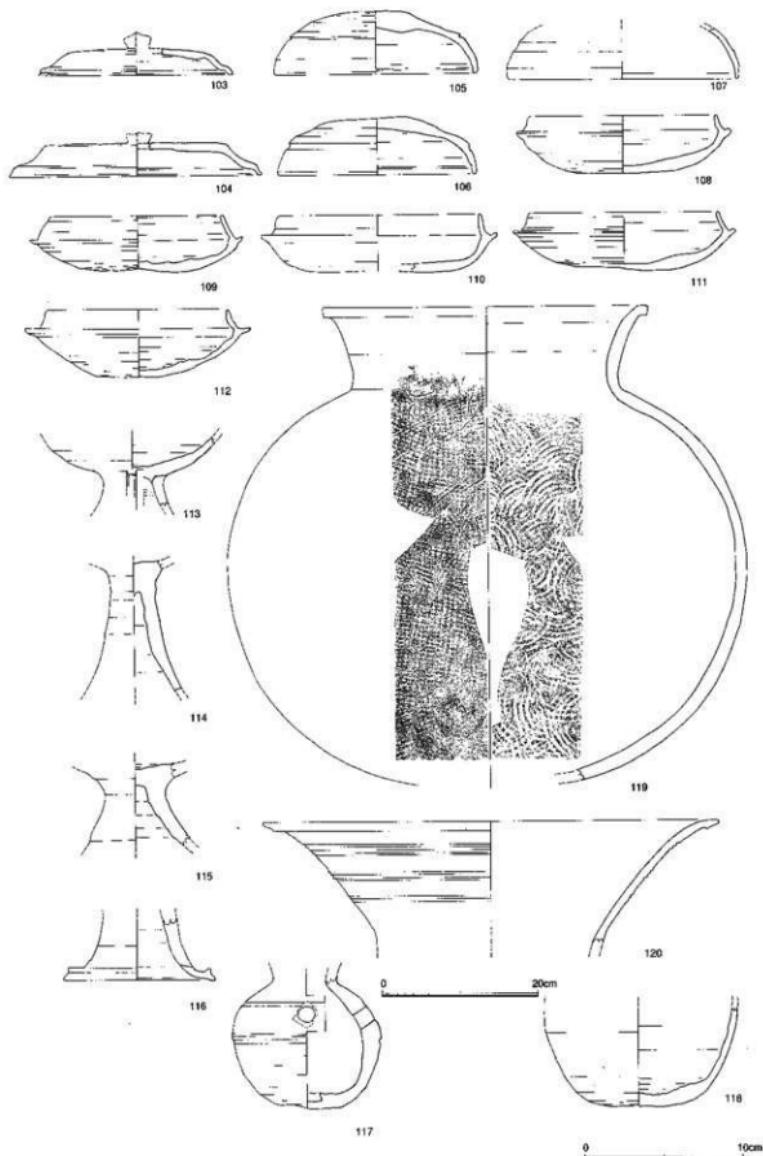


0 10cm

第147図 古志本郷遺跡SD18出土遺物実測図9 (S=1/3)



第148図 古志本郷遺跡SD18出土遺物実測図10 (S=1/3)



第149図 古志本郷遺跡SD18出土遺物実測図11 (S=1/3 96・97のみS=1/6)

外面頂部にはケズリ痕跡を残す。大谷出雲A4・5類の範疇に入る。108～112は壺身である。108は底部のケズリが不十分であり、109～112は底部にやや雑なケズリが施されるもので、108は中心部のケズリが省略されるものである。前者が大谷A4類、後者が同A5類の壺に当たる。113・115・116は低脚無蓋高壺で、113は透かしをもつ。114は長脚の高壺である。117、118は壺である。117は下半をケズリのままでし、沈線を2条廻らす。個々の遺物の年代についてはふれないが、おおむね大谷出雲5期前後の遺物である。109は口径21cm、器高31cm以上を測る須恵器壺であり、外面には格子目彫き、内面に青海波文の当て具痕が残る。120は口径29.5cmを測る大壺の口縁部である。口縁端部は外側に縁を形成し、頸部外面には上から4条・4条・3条の平行沈線が廻らされている。121、122は長頸壺である。121は肩に沈線、波状文を廻らし、沈線の区画内に列点文を施す。122は小型の脚のつるもので、列点文と沈線の組み合わせが肩に2組、下部に1組みられる。脚の取り付けはゆがんでいた。123は製塩土器である。123は口径12cmを測る大型の製塩土器で、口縁部は円く收められている。

124～128は土師質土器である。124～126は壺で土師質土器IV期に当たる。127・128は皿で、127は土師質土器III期に該当する。いずれも、底部は回転糸切りによって切り離されている。129・130は擦石かと考えられる石である。

以上、大溝SD18の出土遺物は弥生時代中期後葉から中世までのものが含まれ、遺物出土状況で述べたような層位から出土する。

SD17との前後関係 問題となるのは、T・II層に含まれる草田4～7期の遺物である。SD17の第6土層図(第120図)では、SD18埋土がSD17を切っているからである。しかし、切る側のSD18の土層は、IV・V層(古墳時代後期以降)であり、T・II層(草田4～7期)が切っていることが確実なわけではなく、出土遺物に矛盾はない。SD17との関係で言えば、SD17が断面半円形で流水のない溝(IV・V層)に移行した後に、その西側すぐの場所にSD18が掘削され、両者は草田7期まで併存したと考えるのが妥当であろう。

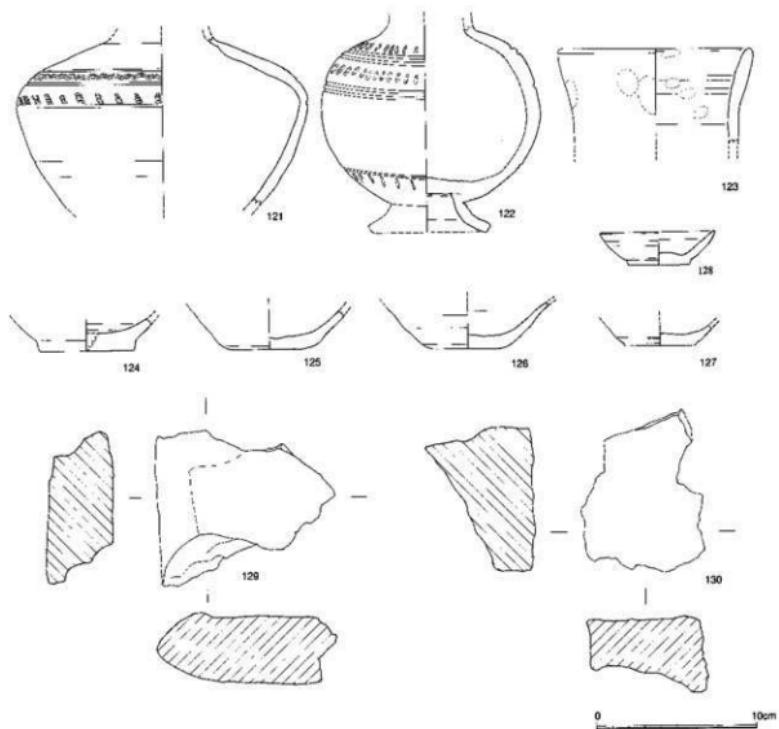
大溝SD18の性格 SD18の性格については、第3章まとめで、SD16・17共々考察を加える。

G、溝

SD19(第62・151図)

規模・形態 C区東側南寄りで検出した。T字状をなし、南から北に貫流する部分と、西から東に流れる部分がそれぞれ約10mほど検出された。規模は上幅が50cm～75cm、底部幅が30cm前後である。底部の標高は7.2mである。溝の西側は調査区内に消えているが、これは西側に行くに従って溝の底部標高が高くなり、最終的には地山への掘り込みがなくなってしまい、それと同時に溝自体も検出できなくなったためで、本来的には溝は西に連続していたものと思われる。東側については、第62図SB11付近を南から北に貫流する溝がSD19と連続するとみられる。なお、本遺構はSD24・26に切られている(第62図ではSD24を切るように表現するが、誤り)。

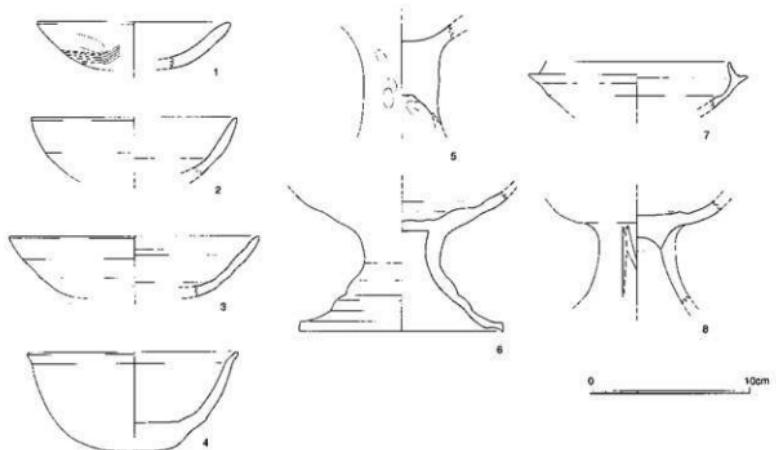
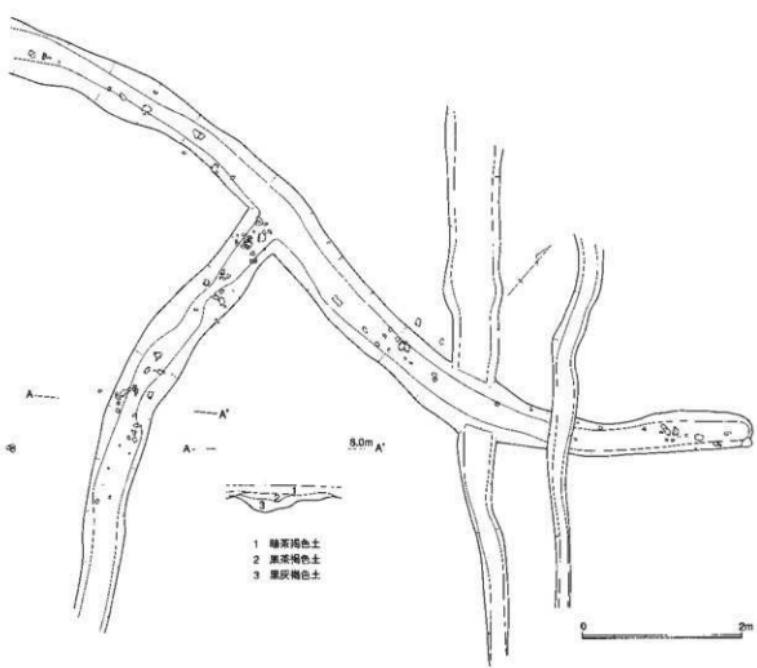
土層・遺物出土状況 堆積土は上層が精緻な暗茶褐色土で、下層がより土壤化の進んだ黒茶褐色土であった。遺物はT時の交差点部分の上流域、及び東西方向の流路の交差点より西側で多く検出さ



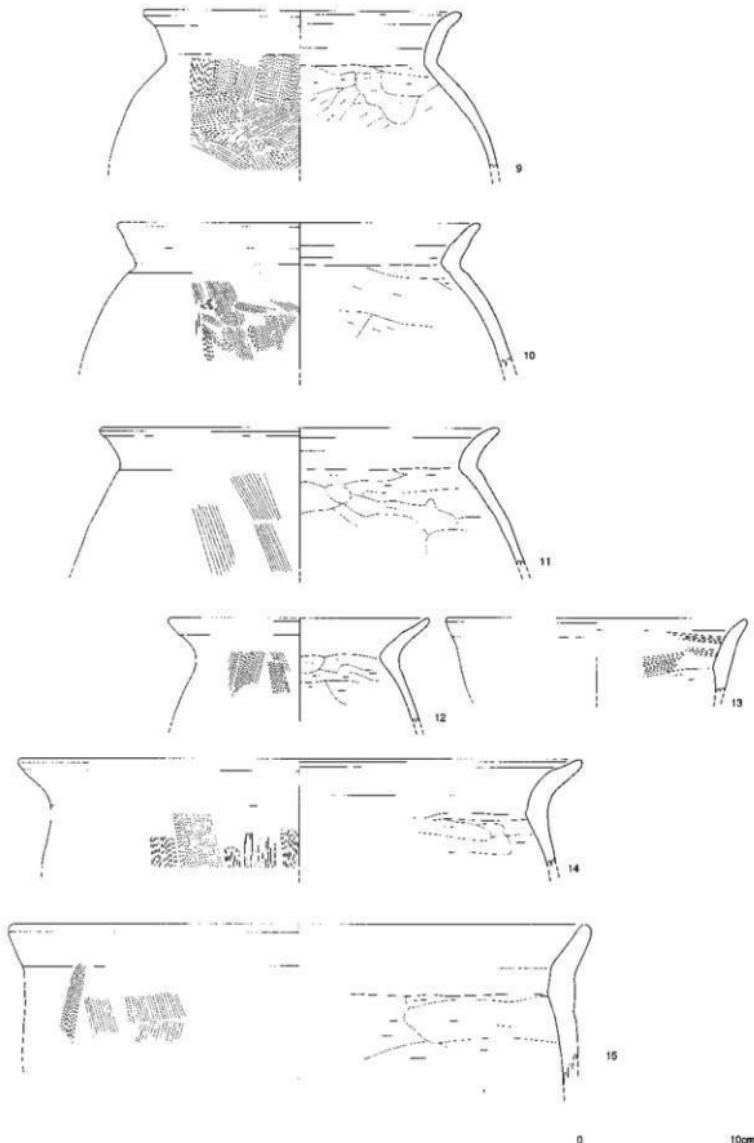
第150図 古志本郷遺跡SD18出土遺物実測図12 (S=1/3)

れた。なお、碗・高环などにはローリングを受けたと思われるものが多い。

出土遺物（第151・152図） 固化した遺物は全体の中の主要なもののみである。1・2は土師器碗か高环の坏部であろう。1は口径1.2cmで、下部に横方向のハケを施すもので、内外面赤彩である。2は口径1.3cmで、深さが現存する部分で3.6cmを測る碗である。口縁部がやや厚くなり内湾する。3は高环の坏部で、口径と深さ、砂粒を多く含む胎土などから脚部有段高环の坏部と考えられる。4は口径1.3.6cm、器高6.2cmを測る土師器碗で、口縁端部が外反しつまみ出される。大変荒い作りで、外面には焼成時にできたものか無数のひびが入っている。胎土は1mm大の砂粒を多量に含んでいる。5は土師器高环である。脚部内面を除き内外面赤彩される。6も土師器高环であるが、脚部に他に例を見ない2つの段のを有し、脚部先端は内側が溝線状を呈す。坏部は松山接続法^アによって接続され、内面には螺旋状のナデ跡が残る。胎土は明褐色で、1mm大の砂粒を多量に含んでいる。脚部は短いが、全体のプロポーションなどから、脚部有段高环に類するものであろう。7は須恵器坏身である。8は須恵器低脚無蓋高环で2方向に透かしをもつ。大谷出雲A5



第151図 古志本郷遺跡SD19遺物出土状況・出土遺物実測図1 (遺構S-1/60 遺物S-1/3)



第152図 古志本郷遺跡SD19出土遺物実測図2 (S=1/3)

類の範疇に含まれ。以上の遺物のうちで 1・2・6・7 がローリングを受けている。9~12 は土師器甕である。9 は口縁と体部が明確に別れ、口縁が直立するものである。体部上面は継ハケで、下部は方向不定のハケが施される。10・11 はくの字状の口縁をもつ甕で、体部には継ハケが施される。12 は口径 1.6 cm の小型の甕で、外面は継ハケが施される。以上の甕は背、内面について横方向のケズリが残る。13 は口縁が外傾する鉢であろうか。口縁部内面に横ハケを施し、下部はケズリである。14・15 は口径 3.5 cm 越える大型の土器で、甕あるいは甕であろう。共に外面継ハケ、内面横方向のケズリである。碗・高坏に対して、甕類にはローリングを受けた痕跡は顕著ではない。

年代・性格 出土した遺物は、須恵器などはから大谷出雲 5 期に当たると思われる。土師器甕類と、碗・高坏類の出土状況が異なりことは、溝が機能を停止し、埋められる前に煮沸・貯蔵具が廢棄されたことを考えさせる。

SD 20 (第 62・153 図)

規模・形態 C 区東側に位置し、南から北に貫流する。規模は幅 7.0 cm、深さ 3.0 cm ほどで、断面は箱形をなす。底部の標高は 6.6 m (下層)、6.9 m (上層) である。SD 21 に切られる。

土層堆積状況 上層第 1・2 層と、下層第 3 層がらり、前者は箱形で深く、後者は幅広で浅い。ただし、下層が検出されたのは南側 3 m ほどのみであった。

出土遺物 (第 153 図 1) 出土遺物には土師器片があり、第 153 図 1 が同化できた。1 は土師器甕で、口縁はくの字状をなし、下腹にへなる。口縁端部を内側に曲げる。

年代・性格 SD 20 の時期は 1 から古墳時代後期になろう。性格については不明であるが、上層は A 区 SD 14、あるいは SD 12 との接続も考えられる。

SD 21 (第 62・153 図)

規模・形態 C 区東側に位置し、南東から北西に貫流する。規模は幅 4.0 cm、深さ 2.0 cm を測り、底部の標高は 6.9 m である。SD 20 を切っている。

土層堆積状況 埋土は濃褐色の粘質土であった。

出土遺物 出土遺物は土器小片のみである。

年代・性格 年代・性格は不明であるが、溝の下流では A 区 SD 02 あるいは 14 と接続する可能性がある。

SD 22 (第 62 図・153 図)

規模・形態 C 区東側を南東から北西に貫流する。規模は幅 4.0 cm、深さ 2.0 cm で、底部の標高は 6.8 m である。

土層堆積状況 堆積土は茶褐色系の土であった。

年代・性格 出土遺物は土器小片のみで、遺構の年代や、性格は不明である。ただし、後述する SD 26 などと方向を揃えるので、これらに関わる溝である可能性はある。

SD 23 (第62図・153図)

規模・形態 C区東側に南寄り位置する。南側は調査区外に伸び、北側は調査区内で終わる。規模は上幅1m、深さ0.5mを測るが、SD 20同様、浅く広い上層（1層）と断面箱形で深い下層（2～4層）からなる。底面の標高は6.8mと6.5mである。

土層堆積状況 上層は黒褐色径の粘質土が堆積するが、下層は地山の流出したような灰色澤の粘質土が堆積する。

年代・性格 出土遺物はなく、年代は不明である。下流になると思われる北側で溝が調査区内で終わっていることから流水目的の溝ではないであろう。

SD 24 (第62図・153図)

規模・形態 C区東側に位置し、東南から北西に貫流する。規模は、上幅20cm、深さ10cm程度である。底部の標高は7.1m。SB 11、SD 19を切る（第62図ではSD 19に切られるよう表現されているがこれは誤り）。

年代・性格 出土遺物土器小片のみで、年代・性格とも不明である。

SD 25 (第62図・153図)

規模・形態 C区東側に位置し、SD 24とSD 26に挟まれる。東南から北西に貫流する。規模は幅20cm、深さ10cm程度で、上流端、下流端とも調査区内で消えている。遺構検出は地山でしか行えなかったので、本米の規模はさらに大きく、当然東南・北西方向連続するものと思われる。底面の標高は、7.1mである。

出土遺物 (第153図3) 3は土師質土器でⅣ期に当たる。

年代・性格 SD 26と位置を東に変えてほぼ同方向に作られており、SD 26に関連するものと思われる。

SD 26 (第62図・153図)

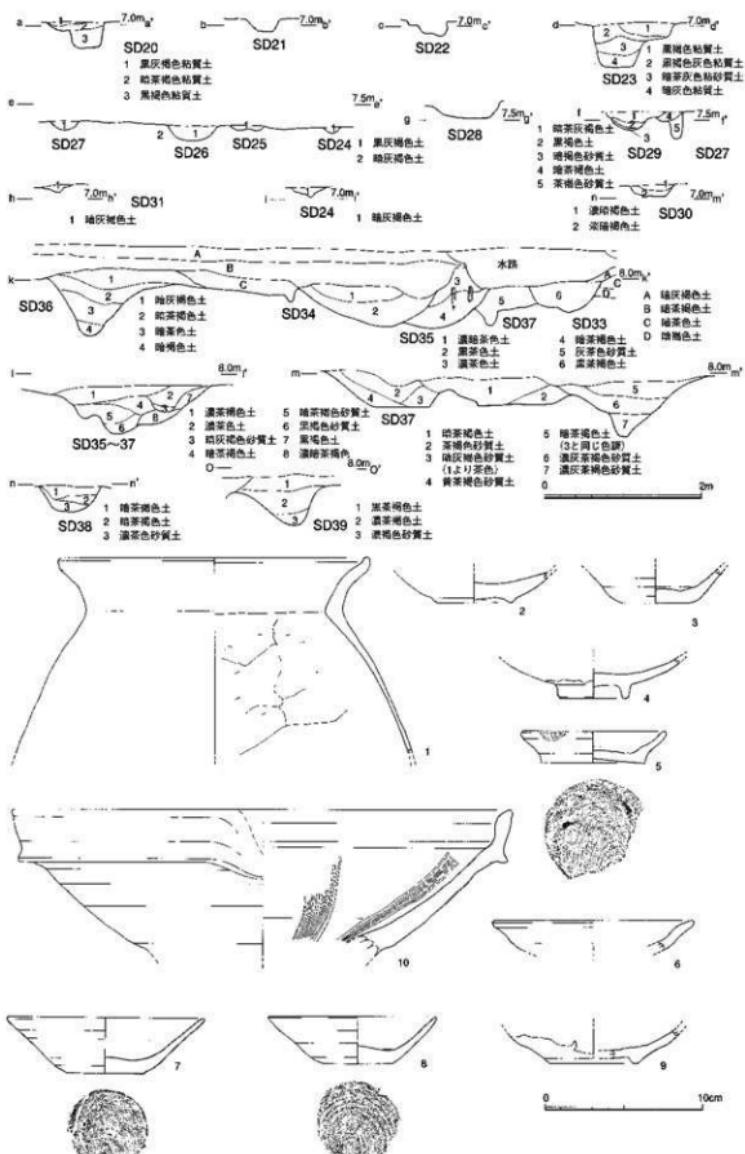
規模・形態 C区東側三分の一地点に集中する、東南から北西に貫流する溝の中でもっとも規模の大きい、中心となるものである。規模は上幅50cm、深さ30cm、底部の標高は7.0mである。SD 19を切る。北側は、SD 32に連続するものと考えられる。黒褐色土が堆積する。

出土遺物 (第153図2) 2は土師質土器である。底部内面をやや繊り高台状にする。類例は少ないが、中世のものと見てよいであろう。

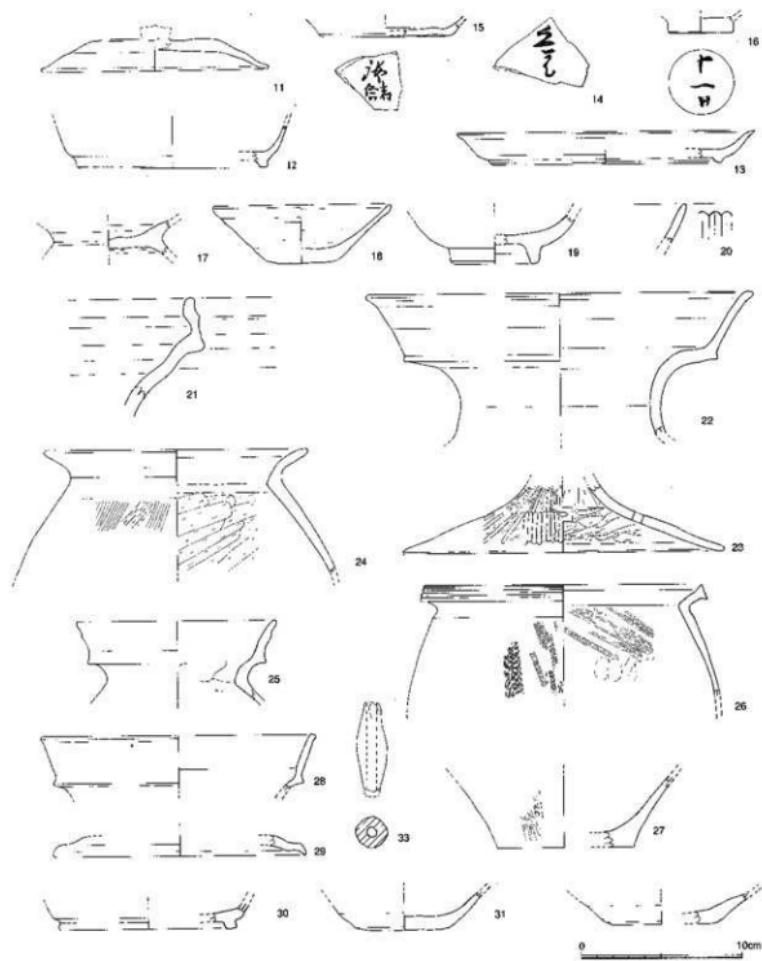
年代・性格 SD 24～SD 26は、第5図で道で表現される部分に当たり、上層遺構では、杭が打たれ、耕作地の境界になっていたようである（第64図）。SD 24～26は近世以降のこれらの遺構に先行する道路の側溝や、土地を区分する溝である可能性がある。

SD 27 (第62図・153図)

規模・形態 C区中央を調査区に沿って南から北に伸び、SD 26付近で北西に折れる。規模は幅30cm程度で、底部の標高は7.2mほどで一定している。堆積土は暗灰色土で、近世以降の堆積土（第63図）と類似する。SD 28、SX 02を切っている。



第153図 古志本郷遺跡SD20～39土層図・出土遺物実測図1 (土層S=1/60 遺物S=1/3)



第154図 古志本郷遺跡SD20~39出土遺物実測図2 (S=1/3)

出土遺物 (第153図4・5) 4は肥前系磁器の粗製の皿で、乳青白色の釉が施される。5は土師質土器で、VI期のものである。

年代・性格 出土遺物や堆积層から、近世17世紀後半頃の溝と推定される。時代は異なるもののSD26などと抵触しない位置で北西に曲がっており、第64図で杭列、図5で道になる部分の区画に関わる溝であったと推定される。

SD 28 (第62図・153図)

規模・形態 C区中央、調査区南端に位置し、東側で調査区外に伸びる。規模は幅60cm深さ20cmを測り、底部の標高は7.5mである。SE 05を切る。

出土遺物 (第153図6~9) 6は、黒斑・白斑の混じる濃灰色の釉が施された陶器で、李朝陶器の皿と推測される。7・8は土師質土器でIV期の資料である。9は肥前系陶器皿で、砂目積みが見込みに残る。ただし、9は混入品の可能性がある。

年代・性格 出土遺物は9を除くと土師質土器IV期、16世紀代のものと考えられ、SD 28の埋没年代もおおむねこのころであろう。位置などからして、SD 28がSD 27に作り替えた可能性がある。

SD 29 (第62図・153図)

規模・形態 C区中央、南壁に沿って存在する。SD 27・28を切る。規模は上幅80cm、深さ30cmで、底部の標高は7.3mほどである。土層は近世の堆積層と同じく黒灰色系の土である。

出土遺物 (第153図10) 10は備前焼の擂鉢である。口縁端部の形状から近世のものと思われる。

年代・性格 出土遺物、切り合い関係から、近世の溝であろう。性格はSD 27と同様、区画溝であろう。

SD 30 (第62図・153図)

規模・形態 C区東側北寄りに位置し、規模は幅40cm、深さ10cm程度である。底部の標高は7.1m。5m程を検出した。本来はこれよりも大きかったと推定される。SD 31を切る。

年代・性格 出土遺物はなく年代は不明である。性格も明確ではないが、SD 26に関連するものであろうか。

SD 31 (第62図・153図)

規模・形態 C区東側北寄りに位置し、SD 30に切られる。規模は幅40cm深さ10cm程度で底部の標高は7.0m。4m余りを検出した。

年代・性格 出土遺物はなく、年代、性格は不明である。

SD 32 (第62図・153図)

規模・形態 C区中央北側を南西から北東に向かって貫流する。規模は幅50cm、深さ20cmで、底部の標高は南西で7.2m、北東で7.0mである。調査区北片でT字状をなし、東南に向かう溝はSD 26に接続するものと思われる。大溝SD 16を切る。

出土遺物 固化していないが、備前焼擂鉢が出土している。

年代・性格 SD 26との接続などから中世のものと考えられる。

SD 33 (第62図・153図)

規模・形態 C区中央を南東から北西に向かって貫流する。規模は上幅50cmほどであるが、調査

区北壁の土層図（第153図k'）では幅80cm余りであったことが確認される。溝の底部の標高は7.6mである。黒茶褐色土が堆積する。SK28・SD37を切る。

年代・性格 出土遺物はないが、SK28を切ることからSD33の年代は中世以降である。性格は不明である。

SD34（第62図・153図）

規模・形態 C区中央を、南東から北西に貫流する。幅1.5m、深さ50cmで、底部の標高は7.4mである。北側の平成9年度の調査区では明瞭に検出したが、南側平成8年度の調査区では検出が不十分であったため、第62図では両側を表記していない。実際は、整理作業中に第153図1'の第1層がSD24に当たることがわかり、南側にも同様の形態で伸びていたと見られる。黒茶色系の土が堆積する。SD35を切っている。

出土遺物（第154図11～20） 奈良・平安時代の遺物包含層の上に掘削されたためか、混入した遺物が多い。11は須恵器蓋で、端部の返りが消失している。12は須恵器坏で、高台が底部外周付近に寄るものである。13は高台付杯である。14は壺皿類の底部であろうか。外面に「足万呂」の墨書きが見られる。15は土師器の坏で、底部外表面を除き赤色し、底部はナデされている。底部外表面には「御儲」の文字が墨書きされている。16～18は土師質上器である。16は皿で、底部外表面に「一・日」が墨書きされる。17は壺で、高台をもつもの。18も壺で、体部は直線的に立ち上がる。16は土師質上器Ⅲ期、18は同Ⅳ期古段階に位置づけられよう。19・20は青磁碗である。19は高台内施釉するもの、20は線書き蓮弁をもつものである。上田B-IV類で、15世紀末から16世紀代のものである。

年代・性格 出土遺物は8世紀後半頃のものと、16世紀のものがあるが、SD36との切りあいなどからも、後者の遺物がSD34に本来的に伴う遺物であると考えられる。第153図土層断面図k'にみえるように、後に作られる畦畔（3層）杭列に沿って、それらに先行する位置にある。区画溝であろうか。

SD35（第62図・153図）

規模・形態 C区SD34に切られる形で、東側のみが確認されている溝である。したがって、規模は明確でないが、上幅1.0mほどになろうかと思われる。底部の標高は7.6m程度である。暗茶色土が堆積し、断面1'では、第2・3層が該当する。断面k'では杭列が見られるが、これの打ち込み面は不明で、おそらくSD35とは直接関係しないであろう。SD36・37を切っている。

年代・性格 出土遺物はなく、年代は明確でないが、SD34に切られ、SD36を切ることから16世紀代に収まるであろう。

SD36（第62図・153図）

規模・形態 C区中央やや西よりを、蛇行しながら、他の溝と異なり北西より南東の底部標高が低い。規模は上幅1.5m、深さ0.7mで、底部の標高はk'で7.3m、mm'で7.2mである。断面はV字状をなし、黒褐色系の土が堆積する。

出土遺物（第154図21） 21は備前焼擂鉢で、問壁V期に当たる。

年代・性格 SD36の時期は、21から16世紀と判断される。性格は不明である。

SD37（第62図・153図）

規模・形態 C区中央北よりで確認される。11'地点以北では、調査区北端を除いて、完全にSD34・35に切られて消滅している。11'では、7・8層がSD37に相当する埋土と思われる。一方、mm'では2~4層がSD37に相当することになるが、この部分では自然流路的な状況を呈している。黒褐色系の土が堆積する。

出土遺物（第154図22~24） 22・23は古墳時代前期の土器である。22は口縁が広く外反する壺である。23は低脚高坏の脚で、外面は縦方向のハケの後ミガキを施し、内面下部は横方向のケズリ、上部は縦方向のケズリを施す。四方向に透かしを持つ。24はくの字状の口縁を持つ土師器壺である。

年代・性格 SD37の年代は24から古墳時代後半になろう。溝は他の溝に切れられ、形態が不明瞭であるが、南側で自然流路的な状況になることが、性格とかかわるのであろう。

SD38（第62図・153図）

規模・形態 C区西側を南東から北西に貫流する溝である。規模は上幅80cm、深さ30cmで断面は逆台形をなしている。底部の標高は7.6mで、茶褐色系の砂質土が堆積し、SB19・SE06、SK24・32に切られている。

出土遺物（第154図25） 25は複合口縁の壺で、口縁が厚く、端部に面を持たないことから、草田4期でも古い時期のものになろうか。

年代・性格 SD38の年代は、25からは弥生時代後期となる。性格は不明である。

SD39（第62図・153図）

規模・形態 C区西よりで検出された。規模は上幅1.0m、深さ0.5m、底部の標高は7.3mで、SE08の東側部分（中世）に切られている。黒褐色土が堆積する。

出土遺物（第154図26~33） 多様な時代の遺物が出土した。26・27は弥生土器で、口縁端部に3条の凹線をもち内面は頸部以下がハケを施す。松本IV-2様式になろう。27は壺底部である。28は複合口縁の壺で、草田7期に相当する。29・30は須恵器である。29は返りの若干残る壺で、30は壺である。高広IV期に当たり、8世紀後半~9世紀にかけてものであろう。

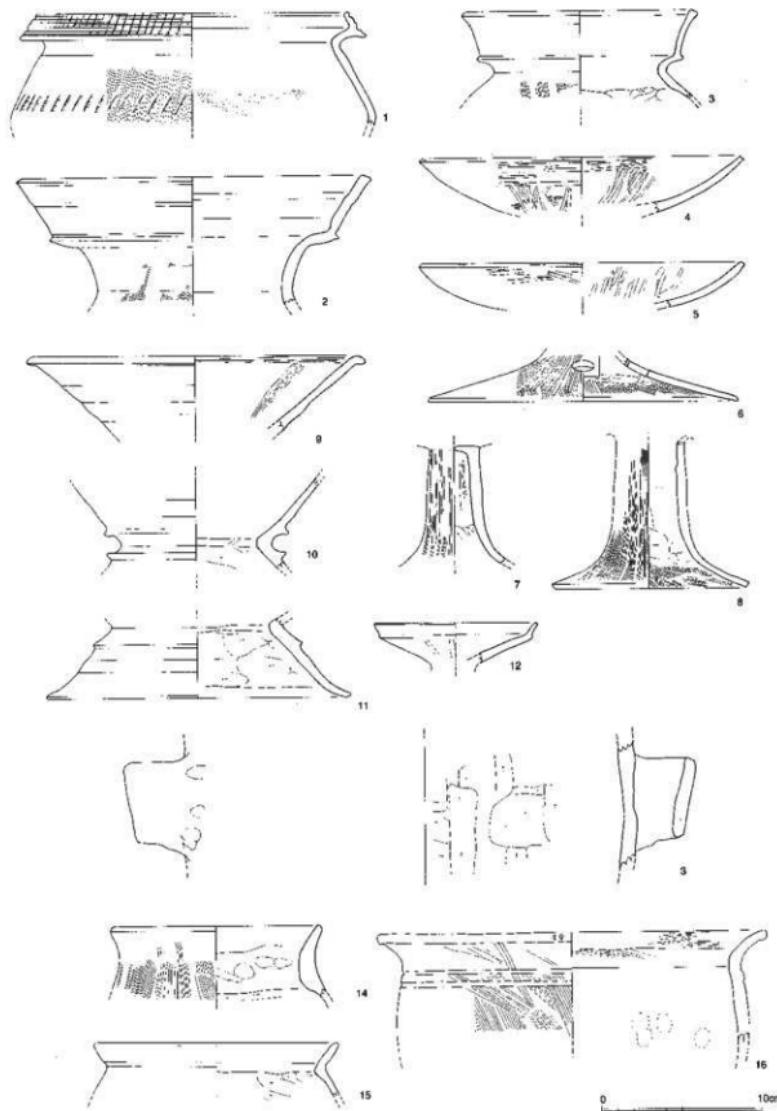
31・32は土師質土器IV期の土師質土器壺である。33は管状土錐である。

年代・性格 SD39の時期は、切り合い関係などから土師質土器IV期と考えられる。

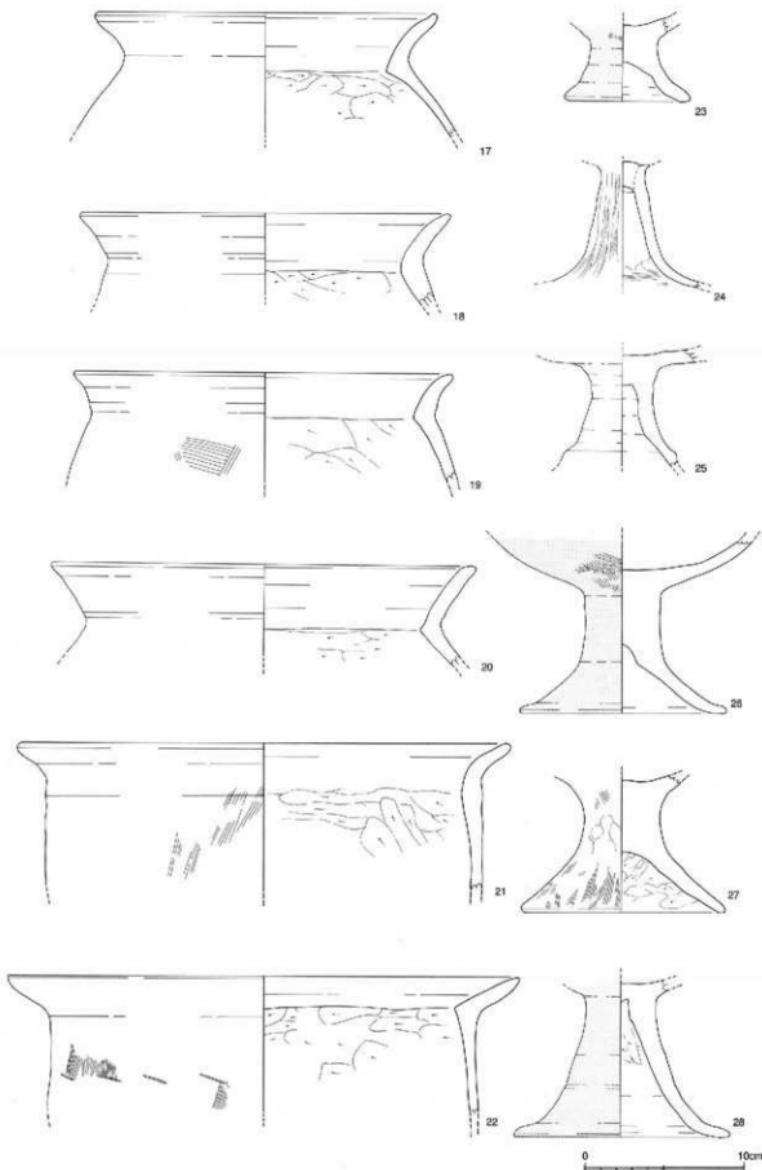
性格については不明である。

C区調査区出土遺物（第155~162図）

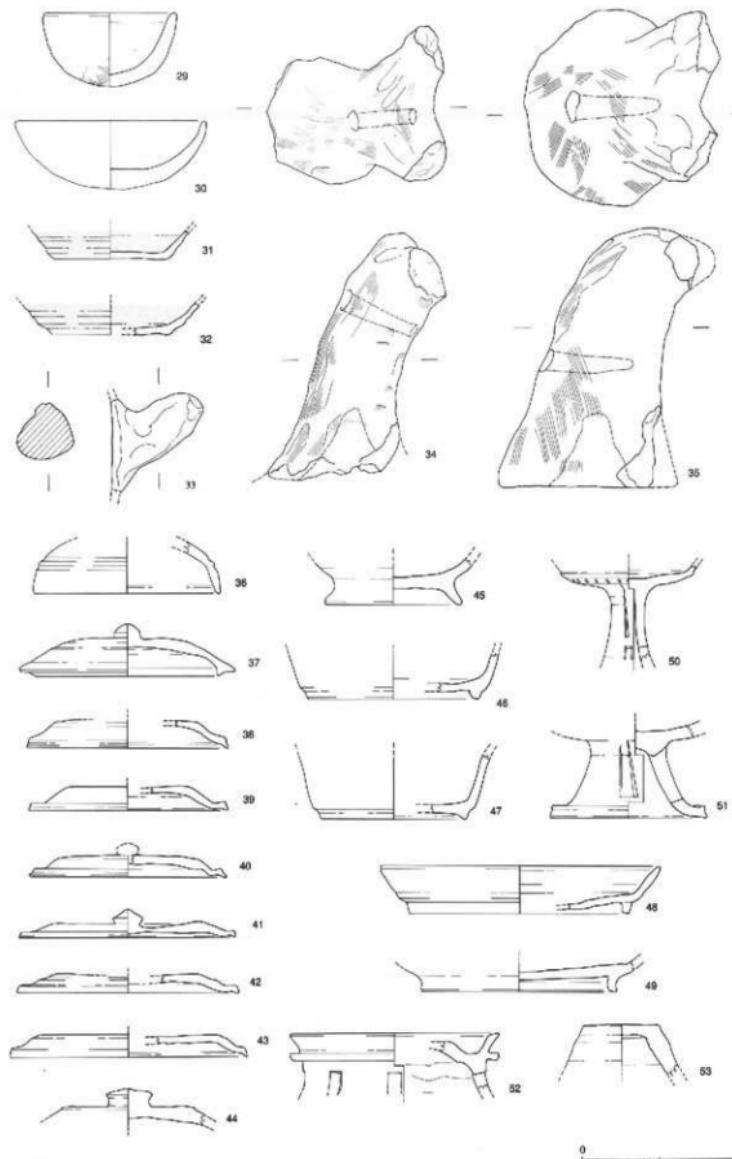
第155~162図に示した遺物は調査区出土の遺物である。基本層序で述べたように、西側に奈良・平安時代の遺物包含層が残存していたことが特徴で、特に第62図中Yで示した地点周辺からの出土が多い。また、管状土錐がX地点からまとまって出土している（図版53参照）。



第155図 古志本郷遺跡C区調査区出土遺物実測図1 (S=1/3)



第156図 古志本郷遺跡C区調査区出土遺物実測図2 (S=1/3)

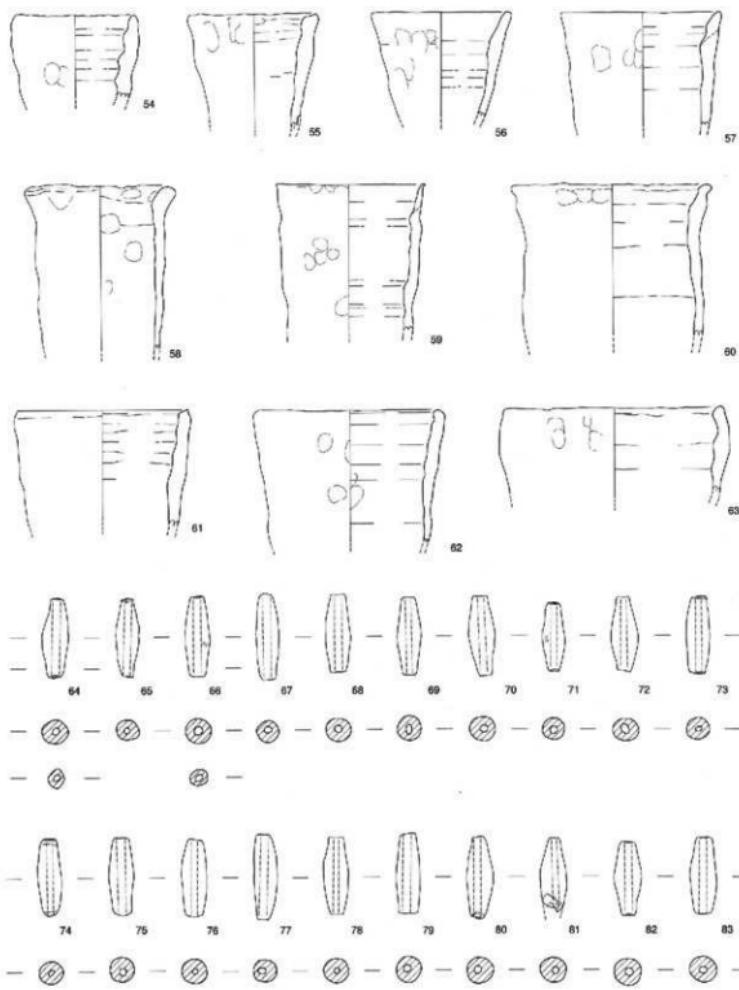


第157図 古志本郷遺跡C区調査区出土遺物実測図3 (S=1/3)

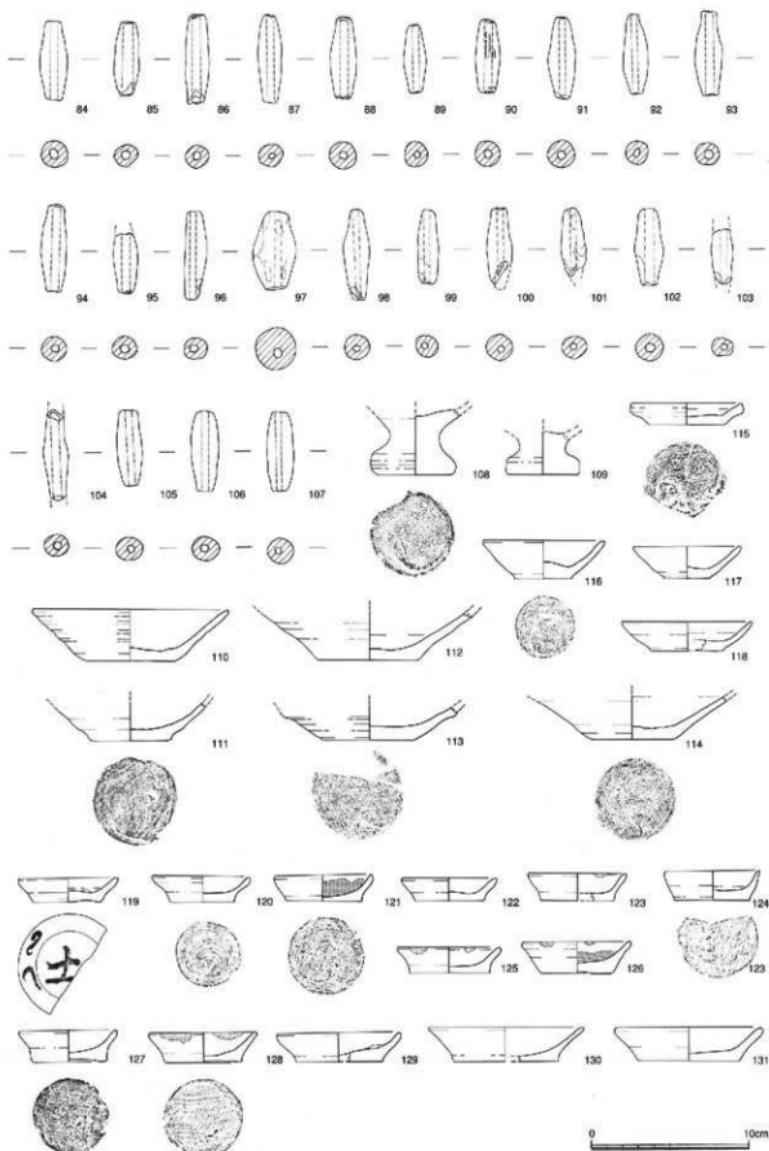
1は弥生土器甕である。口縁部には擬四線を廻らした後、刻日を入れるが、この刻日は全周しない。外面はハケの後に貝殻腹縁によるものと思われる列点文が施される。内面にはハケが残る。松本IV-2様式のものである。2~13は古墳時代前期の土器である。2は壺で、頸部外面に縱方向のハケを若干残す。3は口径14.2cmを測る小型の甕である。4~5は低脚坏の坏部で、4は内外面共に底部が縱方向のミガキ、口縁部近くが横方向のミガキを施す。5は内面縱方向のミガキ、外面が横方向のミガキである。6は低脚高坏で、内外面ともにハケを施す。四方向に透かし穴がある。7~8は高坏の脚である。9~11は鼓型器台は受部で内面にミガキを施す。12は小型器台で、受部は直線的に構成される。胎土は茶褐色でやや精製されたものである。13は瓶型土器の把手で、横方向にまわるものである。把手の作りだし状況が明確にわかる資料で、把手部は本体から作り出され、把手部内側が後から充填されている。16は、弥生土器の甕で、外面にハケ、沈線2条を廻らし、口縁部には刻日文が残る。松木I-3様式、弥生時代前期のもので、第50図105と並んで本遺跡では例外的に古い土器である。ただし、第50図105のようにローリングは受けていない。14は土師器の瓶であろうか。15、17~22は土師器甕である。15、17~20は口縁部がくの字になる甕である。17は口縁端部内側に溝状のへこみを持つ。21~22は口縁が水平に伸びる甕で、頸部付近は内面横方向のケズリである。23~28は土師器高坏で、23~26、28は外面赤彩する。25は脚部有段高坏である。27は高坏で外面はハケが施され、内面はケズリ痕跡が残る。29~30は土師器碗である。29は外底部にハケを施す。31~32は土師器坏で、底部外面を除き、赤彩する。底部は最終的にナデによって調整されている。34~35は土製支脚で、共に2個の突起を持ち、内部はケズリによって歪んでいる。34は比較的高い位置に前後に穿孔され、穴が貫通している。35は中間付近に穿孔するが貫通しない。36~53は須恵器である。36は蓋坏である。37~41は蓋で、残存するものはいずれも擬宝珠つまみを持つ。37は高広II期、38~43は高広IV期に当たるものであろう。45~47は高台のつく坏で、45は坏部が内消し、高台も大きい。46~47は直線的に立ち上がり、高台も退化している。45は高広II~III期に、46~47は同IV期に当たる。48~49は盤で、底部が内消する。高広IVB期に当たる。50は長脚高坏で、2段の透かしを持つ。大谷山雲A3類であろう。51は低脚高坏で2方向に透かしを持つ。大谷山雲A4あるいは5類である。52は円面鏡で、脚部八方向に透かしを持つ。第62図の北側のYから出土した。53は台型土器である。54~63は製塩土器である。製塩土器は、口径7cm前後で、やや外反する体部を持つもの(54~56)、10cm前後の中型もの(57~9、61)、10cmを越える大型のもの(60~62・63)がある。中・大型品は口縁を外反気味にするもの(58~62)、内傾させるもの(61~63)などに分類できる。

管状土錘 64~107は管状土錘である。これらのうち、64~96が第62図X地点から出土したものである。なお、実測図を掲載しものは一部であり、図版128では出土した全点を掲載している。全体に、外形は紡錘形をなし、大きさは長さ4~6cm、直径1.5~2.0cm、重さ9~15gで、上長浜遺跡A2類に相当するものと思われる。⁽²⁵⁾

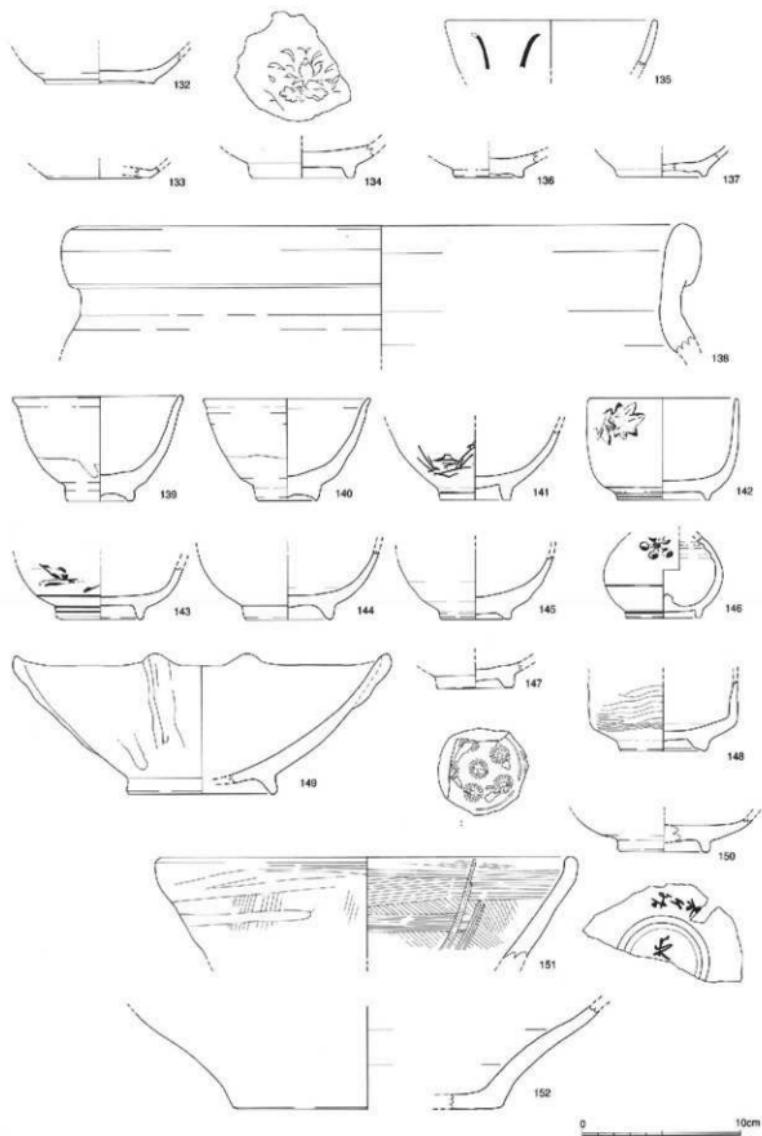
管状土錘の分類 ここでは、はその製作技法から次の2点に注目して分類した。すなわち、①端部の調整…切り落とすもの(A類)、横に引き伸ばしただけのもの(B類)、②穿孔後、穴を変形させせばめるもの(I類)、せばめないもの(II類)である。穴の変形に関しては、両端で穴の形状が異なるものを変形させたと認識した。67はA1類、66~68・73~75・78~79・81~



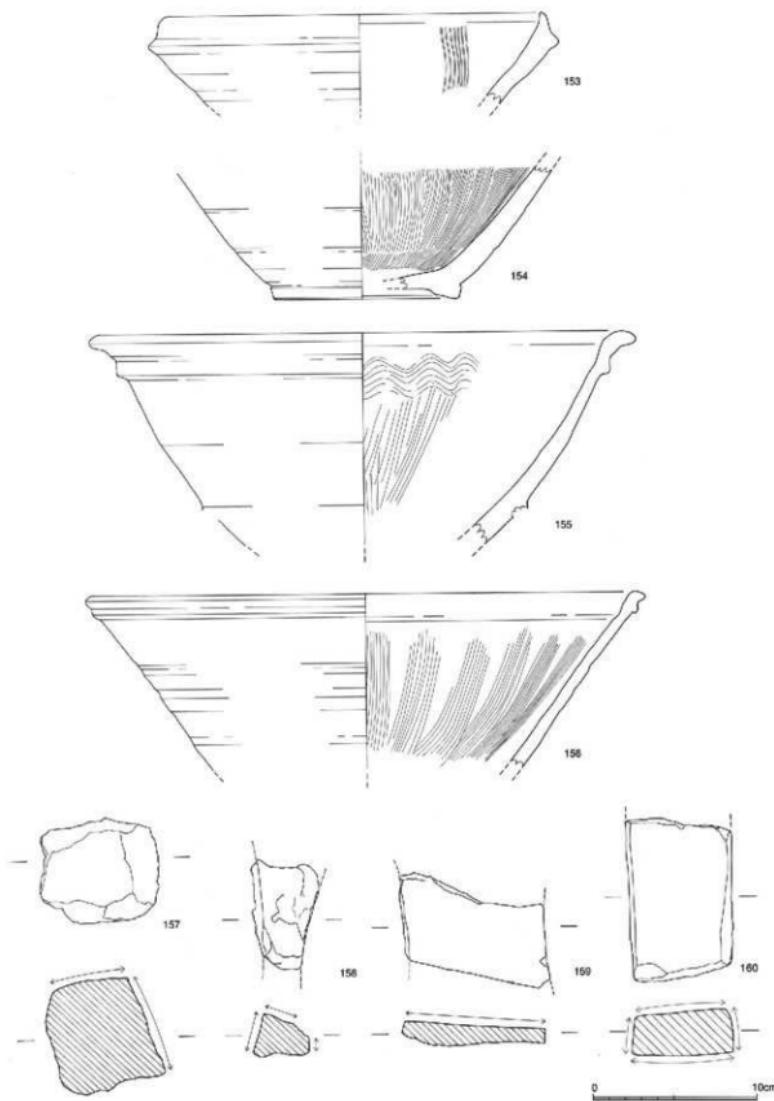
第158図 古志本郷遺跡C区調査区出土遺物実測図4 (S=1/3)



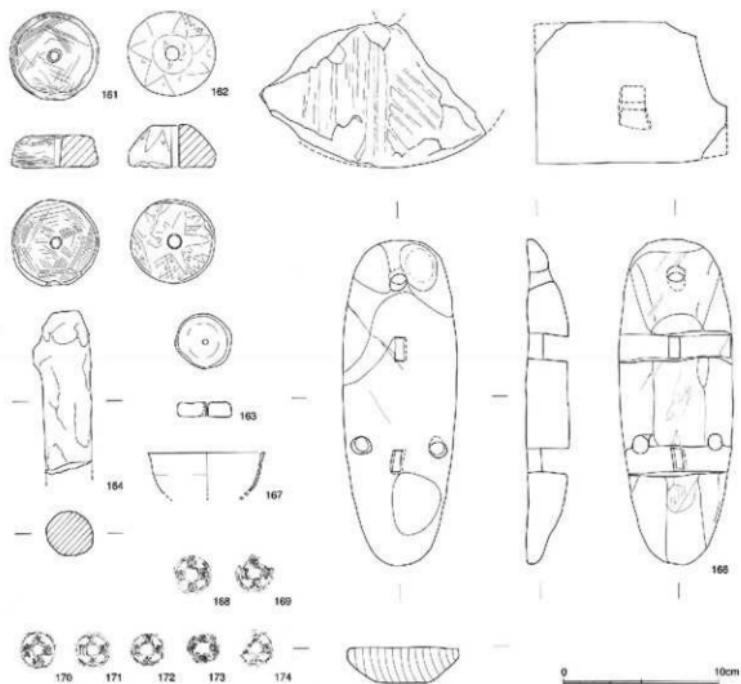
第159図 古志本郷遺跡C区調査区出土遺物実測図5 (S=1/3)



第160図 古志本郷遺跡C区調査区出土遺物実測図6 (S=1/3)



第161図 古志本郷遺跡C区調査区出土遺物実測図7 (S=1/3)



第162図 古志本郷遺跡C区調査区出土遺物実測図8 (S=1/3)

82はA II類、64・65はB I類、69～72、74、76・77、80、83～91、93、95・96はB II類に当たる。非掲載分も含めた点数はA I類11点、A II類32点、B I類9点、B II類76点、不明24点、計152点であった。管状土錘は孔径、縦横比によって刺網系の土錘、袋網系の土錘に分類できるとされるので、先の分類と口径、縦横比を相関させたのが表2である。

土錘の製作技法 表2から、B I類のみが、他とはやや異なる様相を持つことがわかる。つまり、端部を伸ばしたままで、穴をせばめる製作技法は機能的差異による可能性がある（ただし、合理的意味づけは難しい）。逆に残りの3分類は、今回比較した口径・縦横

表2 C区出土土錘孔径・縦横比表

	孔径 最大分布	縦横比 最大分布	資料数
A I類	5mm(7点)	3.1(3点)	11
A II類	5mm(22点)	3.1(7点)	32
B I類	5mm(5点)	3.3(3点)	9
B II類	5mm(43点)	2.9(11点)	76

比からは意味がないもので、あるいは製作者の個性という可能性もある。

97～107は以外の調査区から出土した土錘である。

108～131は土師質土器である。108、109は柱状高台を持つものである。110～114は壺で、体部が直線的な立ち上がりを持つもの（110・111）、立ち上がった後に外反するもの（112）、ただちに外反するもの（114）があり、それぞれ土師質土器Ⅳ期の古段階、新段階に対応する。115は皿で、形状は土師質土器Ⅰ期に近いが、淡褐色の胎土を持つ。116～118は同じく皿で、土師質土器Ⅳ期のものである。119～131は、口径に対し器高が低く低平で、口径底径の差の小さいグループである。底部を回転糸切りとするものと（119～125）、静止糸切りにするもの（126～131）に大別でき、さらに、詳細に見ると、口縁部を直線的に立ち上げるものと外反させるものがあるようである。これらの中には、内面に墨痕が残ることから墨皿に、口縁端部に油煙の残ることから燈明皿に、それぞれ利用されたと考えられるものが少なからず存在する。また、119は底部外面に「土」を墨書きし、体部外面には「S」字の記号を墨書きする。これらは土師質土器Ⅵ期のものである。

132は円盤高台の縁袖陶器である。胎土は淡黄褐色で、淡緑色の釉が施される。山背系縁袖陶器で9世紀段階のものであろう。第62図中の、二つのYの中間付近から出土した。133白磁の皿、134～136は青磁碗である。134は見込に印花を持ち、高台内は施釉しない。135は鍋蓬弁を持つ青磁碗である。136は高台内に施釉する陶器皿で、茶灰色の釉に黒・白斑が混じる。砂目積で李朝のものであろう。137は全面に灰釉が施釉され、灰色の胎土を持ち、瀬戸・美濃系陶器で大窯Ⅲ段階のものであろう。138は口径3.8cm程度に復元される備前焼の壺である。

138～148は肥前系陶器である。139・140は天目に近い形の碗で、黒色の釉が施され共に露胎部分を茶褐色に化粧する（脱稿後同一個体と判明した）。三日月高台である。16世紀末のものであろう。141～143は磁器碗で、141の紅葉はいわゆるコンニャク印判である。146は花瓶で、外面には赤い上絵が施される。147は白色粘土による象眼の施される碗の底部である。高台内も施釉し、砂目が残る。149は緑灰色釉が施される稜を持った鉢で、貝目積み痕跡が残る。150は高台内に「上□」、底部外面に「□□升」が墨書きされる。151～152は瓦質土器鉢である。151は淡褐色の胎土で、内面にハケ目を持つ。153～156は捕鉢で、153は備前焼、154・156は肥前系である。155は赤褐色の精緻な胎土を持ち、外面を白斑を帯びる茶褐色に施釉される。擦り目上部に波状文を廻らす。157～160は砥石。161は土師質の紡錘車で162は石製紡錘車である。163は土師質土器の底部を利用したはずみ車であろうか。165は石臼雄臼で把手を差し込む孔が穿孔されている。164は石棒。166は差し込み歯の下駄である。167は銅碗の破片である。

169～17は貨幣である。168は皇宋通宝、169は熙寧元宝、170は永樂通宝、171～174は寛永通宝で、174のみ古寛永である。

第4節 D区の調査

調査区の立地

C区とE区の中間に位置し、神戸川会館から古志幼稚園に至る道の東側で、神戸側現河道より西に300mほど離れた地点である。調査前の表土標高は9.5mを測り、全調査区内でも最高である。旧正法寺境内地に当たる。

基本層序（第164図）調査前まで宅地・墓地として利用され、擾乱個所が多かった。1～3の茶褐色系の土は近世以降の遺物を含む包含層である。5の暗茶色土は近世初頭の遺物を含む。地山は灰褐色砂あるいは橙褐色砂質土で、標高は8.4m程度でE区の方が高く、現地表面の標高分布とは異なる。A～D区と同様に、遺構の検出は地山面で行った。

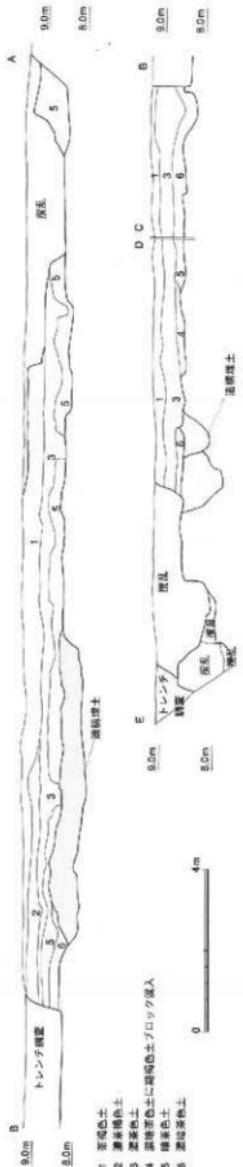
以下、竪穴建物、掘立柱建物、方形溝状遺構、井戸、土壤、溝の順に調査の概要を述べる。



第163図 古志本郷遺跡D区遺構図 (S=1/300)

A、竪穴建物

S I O 1 (第165図)



第164図 古志本郷遺跡D区土層図

規模・形態 S I O 1 は D 区中央南端に位置し、半分程度が調査区外にかかる。地山は橙褐色砂質土である。今回検出した堅穴建物の中では最も規模が大きく、遺存状況も良い。平面プランは円形を呈する。規模は、壁体間の直径 6 m 前後と推定される。建物の壁の掘り込みはやや甘く、丸みを帯びている。東側には約 1.5 m ほどの張出部があり、S I O 1 はこれを切っている。この部分は S I O 1 に先行する堅穴建物などが想定されよう。また、本体部の東側 1 m ほどのところから約 10 cm 程度高い部分がある。なお、S E 1 2 に切られている。貼り床上面の標高は 7.9 m ほどである。

土層堆積状況 1 ~ 3 は黒褐色系の埋土で、遺物はこの中から出土している。5・6 層は貼り床と思われる部分で、地山橙灰褐色土と茶褐色土の混合土層であり、硬化面はなかったがよく縮まっていた。

柱穴・壁体溝 柱穴は 2 カ所存在し、共に直径 3.0 cm 深さ 2.0 cm 程度の小規模なもので、主柱穴かどうかは不明である。壁体溝は明確な形では確認できなかった。中央ピット、焼土面などは検出されなかった。

遺物出土状況 遺物はいずれも破片で、全体から出土している。固化した遺物はいずれも貼り床直上から出土したもので、1・2 層からの出土遺物は固化できなかった。

出土遺物（第 166 図）

1 ~ 5 は壺である。1 は口径 15.5 cm の中型の壺で、口縁に 3 条の凹線を施す。体部最大系はかなり低い所にあり、3 点から構成される列点文を 1 条以上廻らしている。内面は頸部近くまで部分的にケズリを施す。2 は口径 19.5 cm の壺で、1 と似たプロボーションになるが、内面は頸部までナデである。また、頸部内面は面状をなす。4 は口径 19.3 cm の中型の壺で、口縁部に 3 条の凹線を廻らす。外面は継ハケの後、体部最大系のやや下に 4 点からなる列点文 1 条を廻らす。内面はケズリを肩部までとする。幅広のケズリの他に細い工具痕が見られる。5 は口径 21 cm を測る大型の壺である。口縁部は 4 条の凹線を廻らし、外面は継ハケの後、頸部近くに細い横方向のハケを廻らす。体部上面には 4 ~ 5 点からなる列点文を 3 条廻らす。体部内面はケズリを施すが、頸部まで全体に及ぶわけではなく、頸部自体も厚い。6 は口

径1.5cmの小型の壺で、口縁部、並びに頸部に凹線を廻らす。内面は頸部までケズリを施す。7は壺の頸部と思われるものである。外面は縱方向のハケを施した後、沈線3条からなる区画を作り、その間に綾杉文をヘラ状工具の先で施すものである。内面もハケで調整されている。

年代 床面直上の資料は、頸部内面のケズリの状況、口縁端部の状況などから松本IV-2からV-1の特徴をそれぞれ備えており、弥生中期末～後期初頭の年代観が与えられる。破片であるが装飾された壺の存在を考えれば、中期的様相が強いのかもしれない。

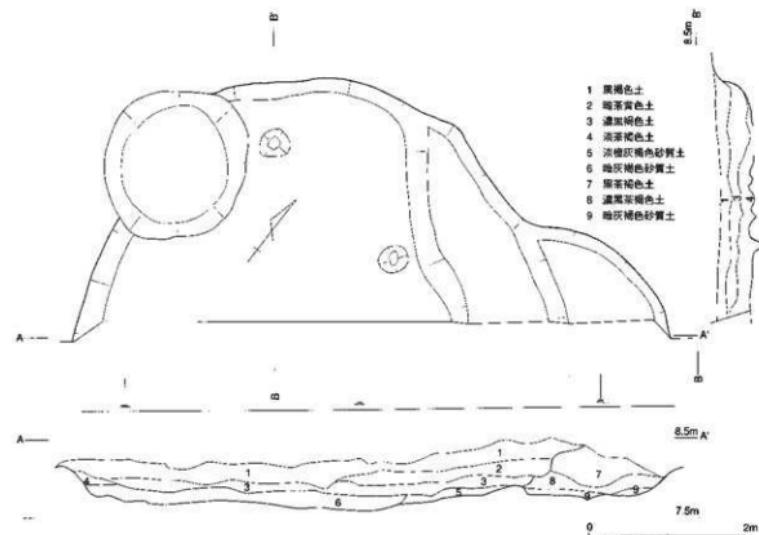
S I 0 2 (第167図)

規模・構造 D1×北西端で検出した。遺物が出土した段階で、調査区を拡張したがなお半分以下しか検出することができなかった。残存状況は悪く、壁の深さも2.5cm程度しか検出できなかった。壁も西側では検出できたが東側では未検出で、規模は明確にできないが直径5m前後の円形プランをなすと考えてよいであろう。底面の標高は8.55mであった。なお、本遺構の地山は灰色砂である。

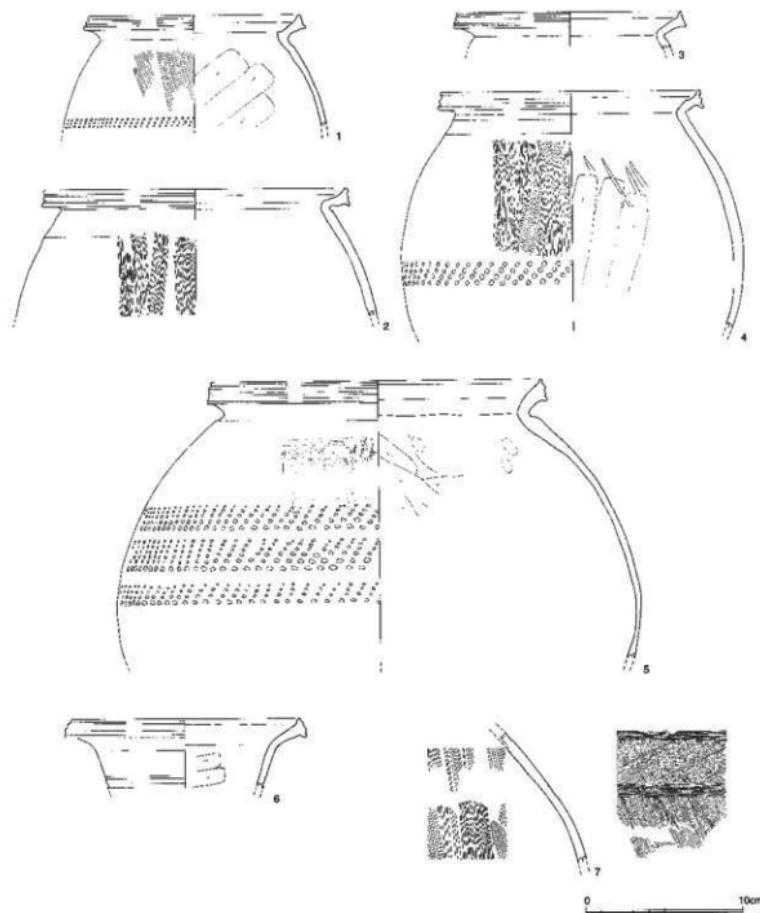
土層堆積状況 黒褐色系の上で、2層からなる。貼り床等は検出できなかった。

柱穴・壁体溝 東南側の一部で、幅3.0cm、深さ1.0cmほどの壁体溝を検出した。柱穴は未検出である。東南側の壁際、壁際南辺で計1mほどのピットを確認しているが、S I 0 2との関係は同時期か先行するものとしか確認できず、横断的にS I 0 2に伴うものであるということは出来ない。

遺物出土状況 (第168図) 遺物は固化したものの中7・9を除いて床面から出土した。8の

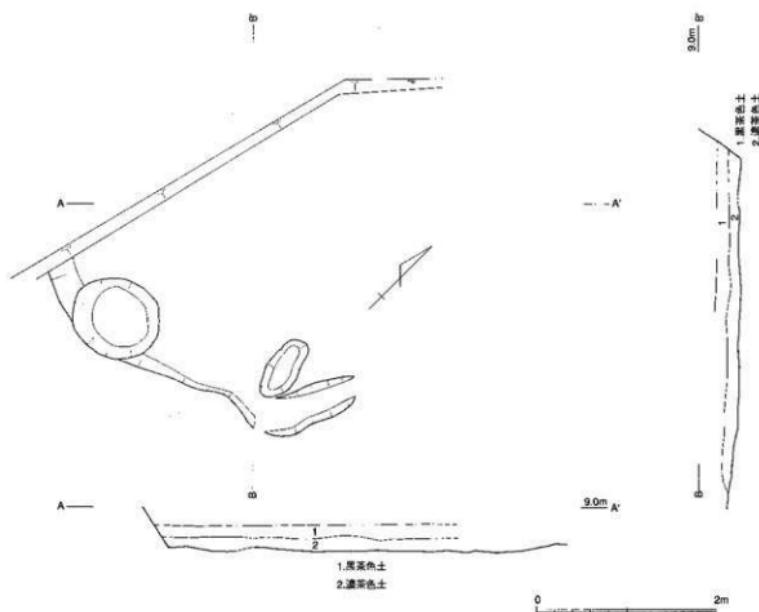


第165図 古志本郷遺跡SI01実測図 (S=1/60)



壺頭部は、第168図に示したように建物内から出るかとも考えられる部分から大部分が出土し、接合する部分が建物内から出土している。出土レベルは同じであるので、あるいは竪穴建物の平面は前述より広かった可能性がある。

出土遺物 1・2は編集時に誤って本図に入れてしまったが、E区Z地点出土の弥生土器である。



第167図 古志本郷遺跡SI02実測図 (S=1/60)

3は口径14.2cmの肩のはるプロポーションを持ったやや小型の壺である。口縁部は内傾し、3条の凹線を持つ。外面は縦ハケの後、体部最大径付近に中央の大きい3点からなる列点文を一周させる。内面は縦方向のケズリが頭部まで届かず、肩部まで止まっている。頭部は厚い。4は壺の底部である。5は口径22.4cmを測る大型の壺で、口縁は内径し立ち上がる外面には凹線3条を廻らす。外面は縦ハケの後、頭部最大径よりやや下に1列5点程度からなる列点文を2条施す(下条は欠損している)。内面はケズリが体部上半程度で止まり、肩部までも届かない。代わって一部にハケが施されている。6は壺底部であり、5と同一個体である可能性がある。7は大型の壺の頭部である。厚さ1cm程度と厚手である。外面は上部に凹線を廻らす他、頭部に全面に立てハケを施し、その上からヘラ上工具の先で羽状文を施すが、大変荒い表現で重なり方や、引き出し位置、間隔が異なっている。頭部肩から下には横ハケも見られる。また、肩部にはヘラ状工具の先によって「#」の印がかかるおり、絵画の一部である可能性もある。また、凹線部にはハケ工具小口のようなもので、列点文が施される。8は擦石の類かと思われる石で、床面から出土した。9は金属塊である。図版131の金属製品(煙管)と共におそらくSI02とは無関係であろう。

年代 出土土器はいずれも松本IV-2の特徴を持ち、本建物の年代も弥生中期末になろう。

B、据立柱建物

S B 2 1 (第

170図)

D区南に位置する。梁間2

間(4.1m)×

桁行4間(8.1m)の側柱

建物である。第170図で

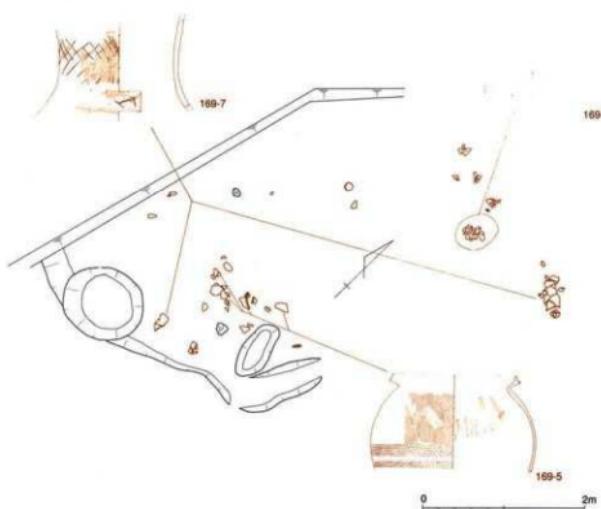
は、西側のSK37、東南

の浅い窪みを完掘した状況

で図化しているが、本来は

これらの遺構に切られてい

る。梁方向の中央柱穴は北



第168図 古志本郷遺跡SI02遺物出土状況図 (遺構S=1/60 遺物S=1/9)

側ではそれ相当するP1があるのに対し、南側では浅い窪みもあって検出しえない。ただし、BB'の断面を見るかぎり、南側にP6・P7大の柱穴をもつ柱があったとは想定できず、北側の柱穴も本遺構とは無関係であろうか。棟持ち柱の検出されない掘立柱建物はSB15やSB20がある。また、北西隅の柱穴は検出されていないので、桁行3間となる可能性もある。地山は灰色砂であった。

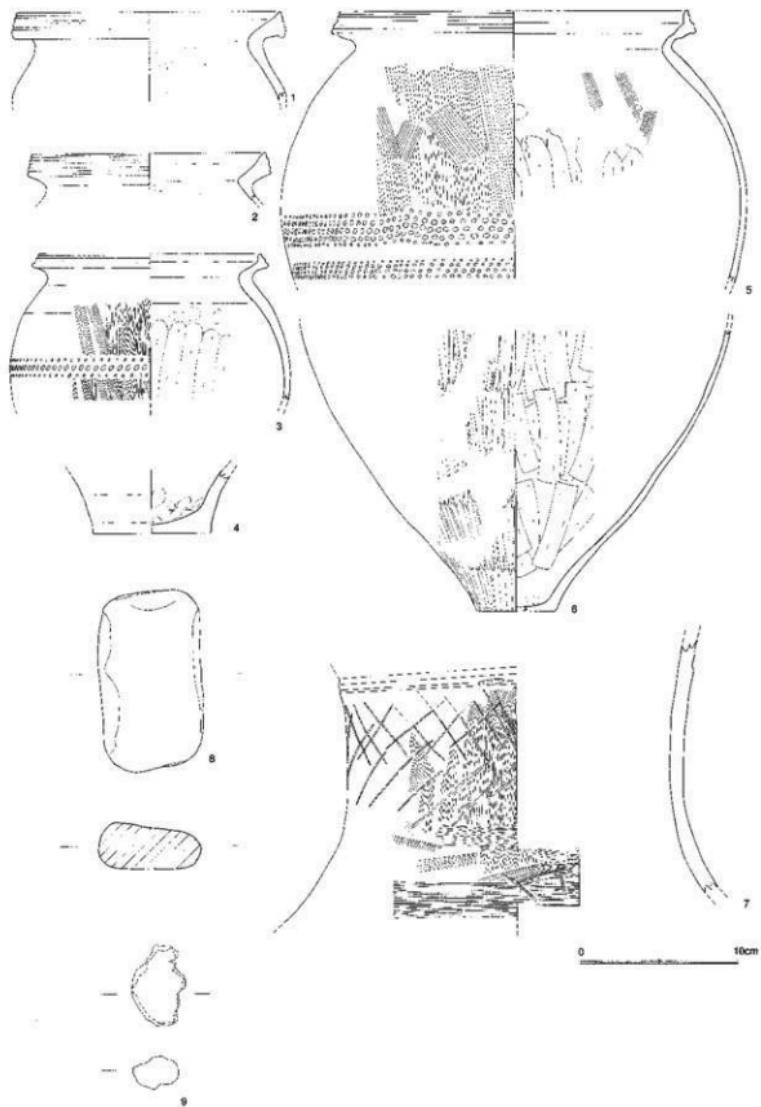
柱穴 最大長さ1m幅50cmの楕円形をなし、深さは40~50cmと大規模であるが、本遺構の他の掘立柱建物との同様、砂質の地山と関係するのであろう。P1では柱の抜き取り痕跡が、P2では柱痕跡が見られた。

年代・性格 出土遺物はないが、SK37と浅い窪地に切られている。後者は18世紀、前者も土師質土器VI期であり、このことからSB21は近世初頭以前と見られる。

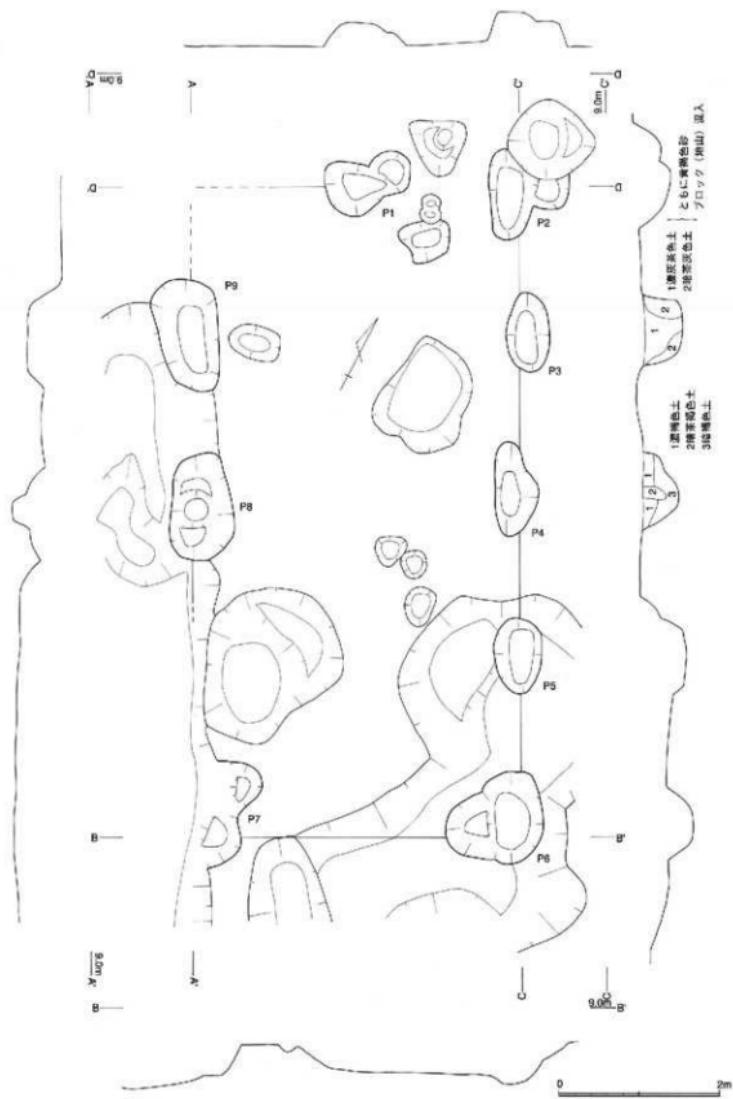
C、方形溝状遺構

S X 0 4 (第171図)

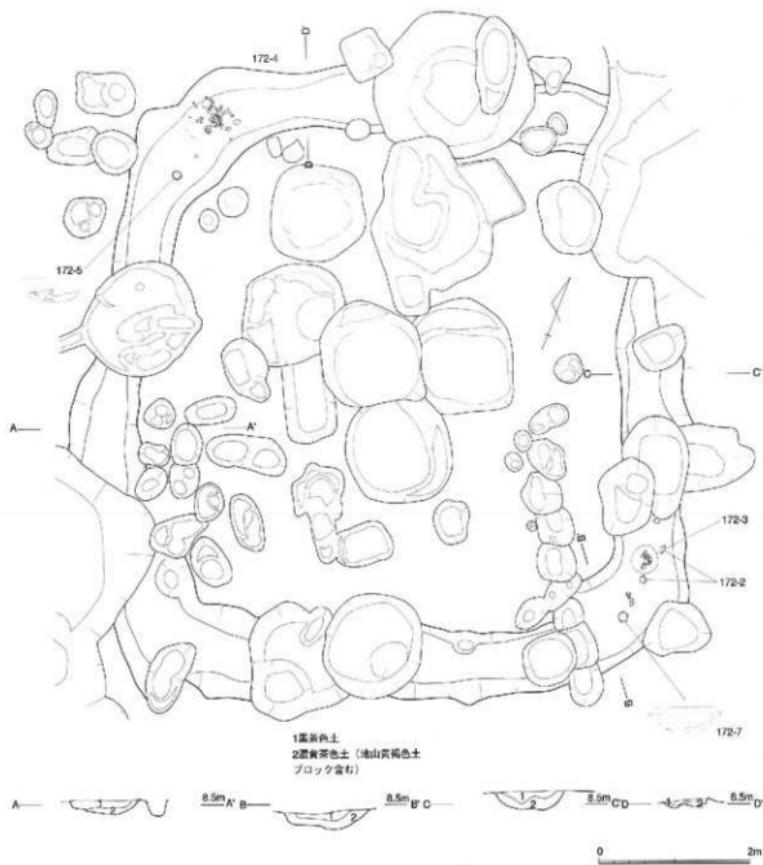
規模・構造 D区中央やや南寄りに位置する。溝の外側で1辺8m前後のほぼ正方形をなす溝状の遺構である。仮に東辺を主軸とする場合、N-20°-W前後を指向することになる。溝は狭いところで幅0.8m、深さは約20cm程度が検出された。溝の底部標高は、東西南北で各辺でやや異なっており、東南隅では8.2m、それ以外では8.5mになる。溝には黒茶色土と地山ブロックが堆積していた。このような形態のものとしては、古墳周溝が考えられるが、中央にSK49~55の土壙があったこともあり、溝を確認した段階ではすでに墳丘部分は掘り下げた状態であった。この掘



第169図 古志本郷遺跡SII-2出土遺物実測図 (3-1/3)



第170図 古志本郷遺跡SD21出土遺物実測図 (S=1/6)



第171図 古志本郷遺跡SX04実測図 (遺構S-1/60 遺物S-1/9)

り下げの際、主体部やそれに関わる遺物は検出されなかったので、結論的に墳丘残存の有無は確認できていない。溝の部分がSK 50・56・57に切られており、溝内部には前述のようにSK 49・51～55が埋り込まっている。

遺物出土状況 遺物は溝の底部から出土した。出土地点は東南隅と北西隅の二カ所に限られる。東南隅からは土師器甕2個体（第172図-2・3）と須恵器有蓋高杯（同7）が、北西隅からは甕2個体分（同1・4）と土師器碗（同5）、須恵器壺（同6）が出土した。これらのうち1・5・7が原位置に近いと推察されることを除くと、以外はいずれも小片であった。

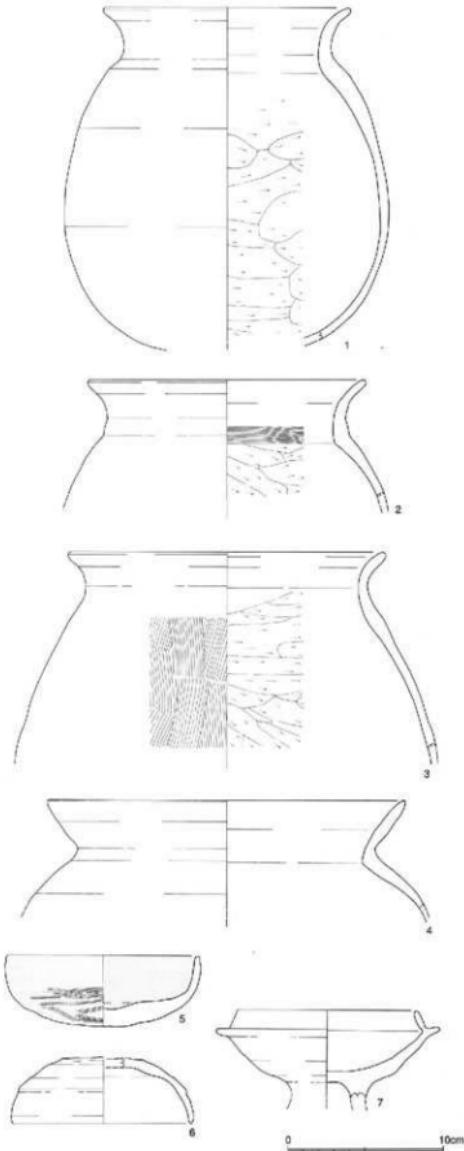
出土遺物（第172図） 1～4は土師器壺である。1・2はやや直立し外反する口縁を持ち、下脛れになるタイプである。2は頸部内面に横ハケを施す。3・4はくの字状の口縁をもつタイプである。3は外面に縦ハケを施す。以上の壺はいずれもない面は頸部以下横方向のケズリである。5は土師器鉢である。口縁部は直立し、端部は若干のくびれを持つ。内外面赤彩され、外面下半部には横ハケが施される。6は須恵器蓋坏で、頂部外側をやや丁寧に削るもので、大谷A4類に該当する。7は有蓋坏で、三方に縦状の透かしを入れる。

年代・性格 出土遺物の中の2点の須恵器は、おおむね大谷4期の所産であり、SX0の構築年代を示すものになろう。造構の性格としては、土師器壺が出土してはいるものの、小型の方墳の周溝と考えられる。

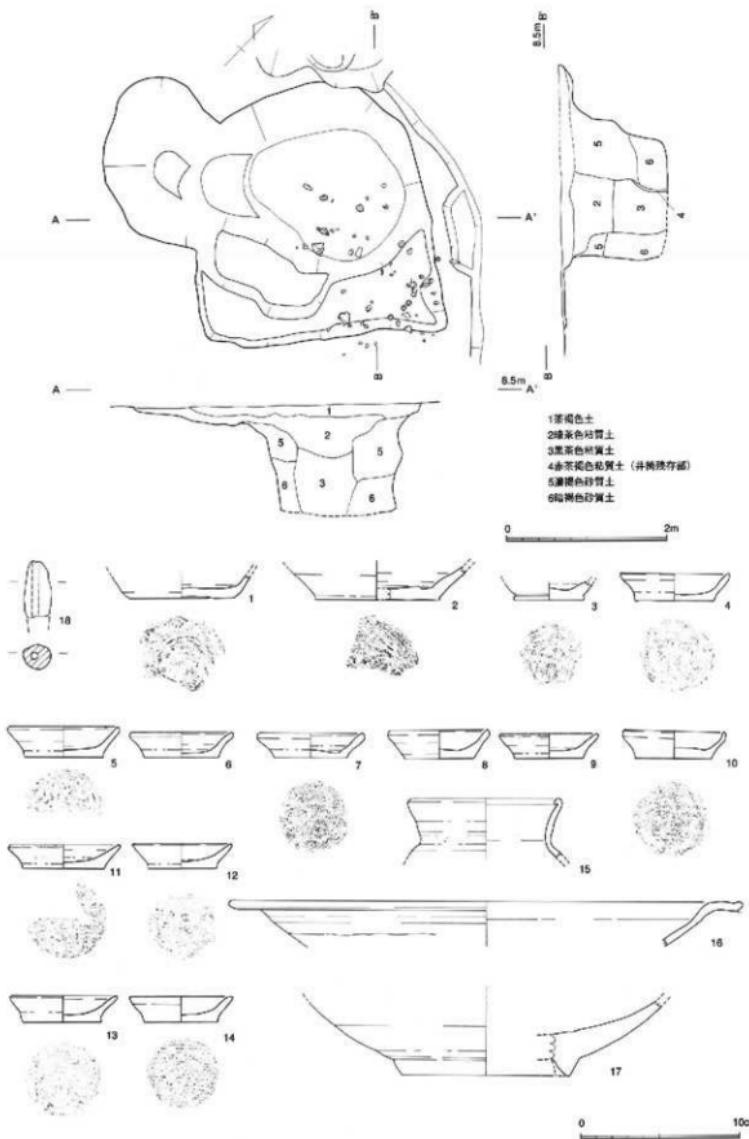
D、井戸

SE09（第173図）

規模・構造 D北東に位置し、掘り方の形状は、上部で1辺2.8～3.0mの方形をなし、下部は直径2mの円形をなす。深さは1.5mで底部の標高は7.2mになる。井側はおそらく素掘りで、直径70cmばかりである。再下層では井側、あるいは井筒の木質が残存した部分があつた。方形の上層部は、後述のよ



第172図 古志本郷遺跡SX04出土遺物実測図 (S=1/3)



第173図 古志本郷遺跡SE09実測図・出土遺物実測図 (遺構S=1/60 遺物S=1/3)

うに廃棄時に井桁を取り払ったものであろう。このことから井桁は方形であったと推定される。なお、北西隅には長径 1 m ほどの貼り出し部がある。調査時にこの張出部と本体の関係を明確に確認しなかったが、第 1 層堆積以前に掘られたことは確實で、中がステップ状の段をなすことから井戸の掘り方掘削時にかかるわる、作業用のステップ遺構ではないかと考えておく。ただし、このよう遺構が明確に検出されている井戸は本遺構のみである。

土層堆積状況 1 は井桁取りだしに関わる掘り込みであり、茶褐色土が堆積する。後述のように、遺物はほとんどすべてがこの土層から出土した。

2・3 は井側埋土である暗褐色系の粘質土で、地山橙褐色砂質土などは一切含まれず、井戸の廃棄時に埋められた、というよりは井戸が自然に埋没する過程で堆積した土の模様である。4 は井側の本質残存部である。以上 2~6 層には乱れがなく、井戸廃棄時に井側抜き取り、破壊などが行われた痕跡はなく井側は素掘りと推定される。

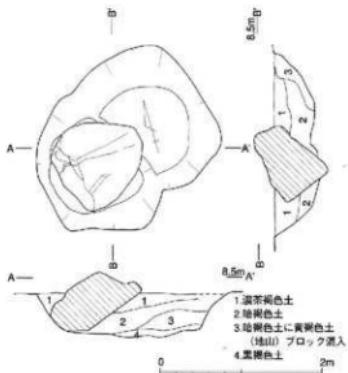
遺物出土状況 第 1~3 図 2 のみが 3 層から出土し、他は 1 層から出土した。土師質土器の多くは完形である。後者の土師質土器は井戸廃棄に関わる祭祀に使用されたものであろうか。

出土遺物 1~14 は土師質土器である。1・2 は壺で、2 は茶褐色の胎土を持ち、大型で口縁部が直線的に立ち上がるるもので、土師質土器 IV 期か。4~14 は土師質土器 VI 期の皿である。口縁部の形状は、外反し端部を内傾させるもの (4・5・10)、外反させるもの (6~9)、内面の底部と縁部の区別が難しいもの (11~14) があり、4~10 は底部回転糸切り、11~14 は静止糸切りである。10 のような器壁の薄いものは土師質土器 V 期の皿の系譜を引くものであろうか。口縁部に油煙の付着する盤明皿も一定の割合で出土している。皿は圓化しないものも含めると 27 個体以上が出土した。15 は陶器の壺である。口縁部を内側に折って縁状にする。濃緑灰色の釉が施釉される。16・17 は同一個体の可能性のある肥前系陶器の大皿である。胎土はともに赤褐色で、乳白色の釉が下地となったその上に綠茶灰色の釉が施される、二彩の大皿である。見込みに砂目が残る。17 世紀代のものであろう。18 は管状土錐である。

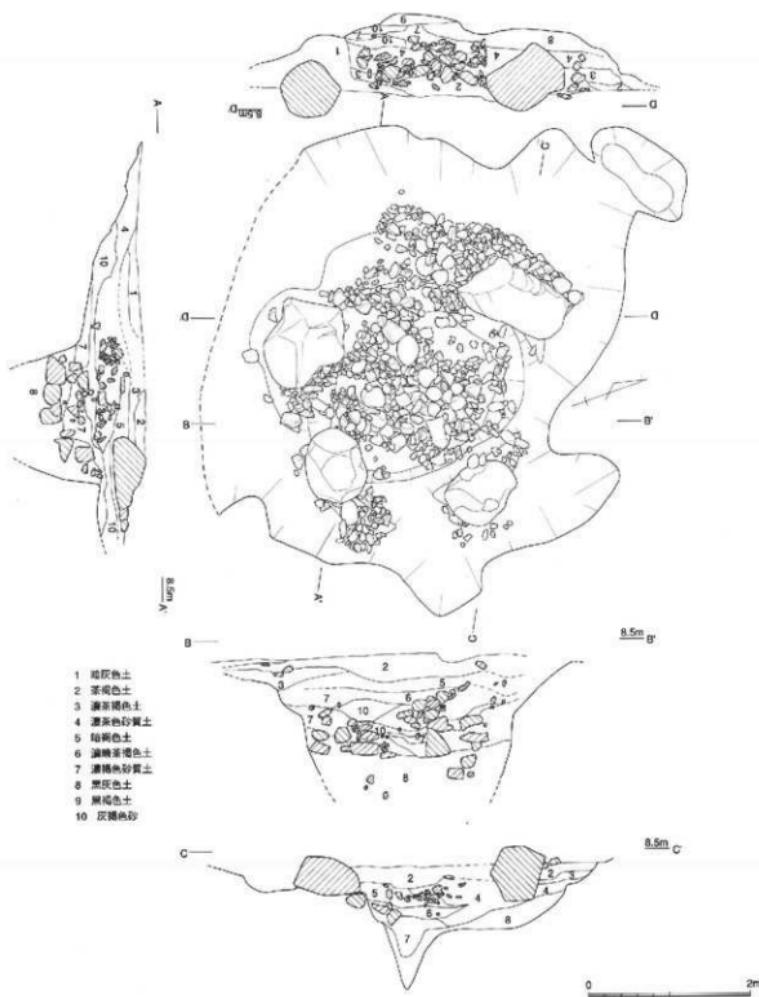
年代 第 1 層出土の土師質土器皿は VI 期で、16・17 の 17 世紀という年代とも矛盾せず、これが井戸の廃棄された年代を示している。一方 2 は、土師質土器 IV 期のものと思われるが、摩耗しているこの井戸の使用開始は中世末~近世初頭前になると推定される。

SE 10 (第 174~176 図)

規模・構造 D 区中央に位置する。掘り方は上下段からなり、上段が上端幅 5 m、下端幅 3 m の不整円形をなし、下段が底径 2 m の不整円形をなす。深さは上段が 80 cm、下段が 1 m ほどである。底部の標高は 6.5 m ほどで、D 区の井戸では最も規模も大きく深い。なお、調査時は湧水が激しく當時電動ポンプを 1・2 基稼働させなければならず、地山は崩れやすい灰色砂で、下段は事実上土層

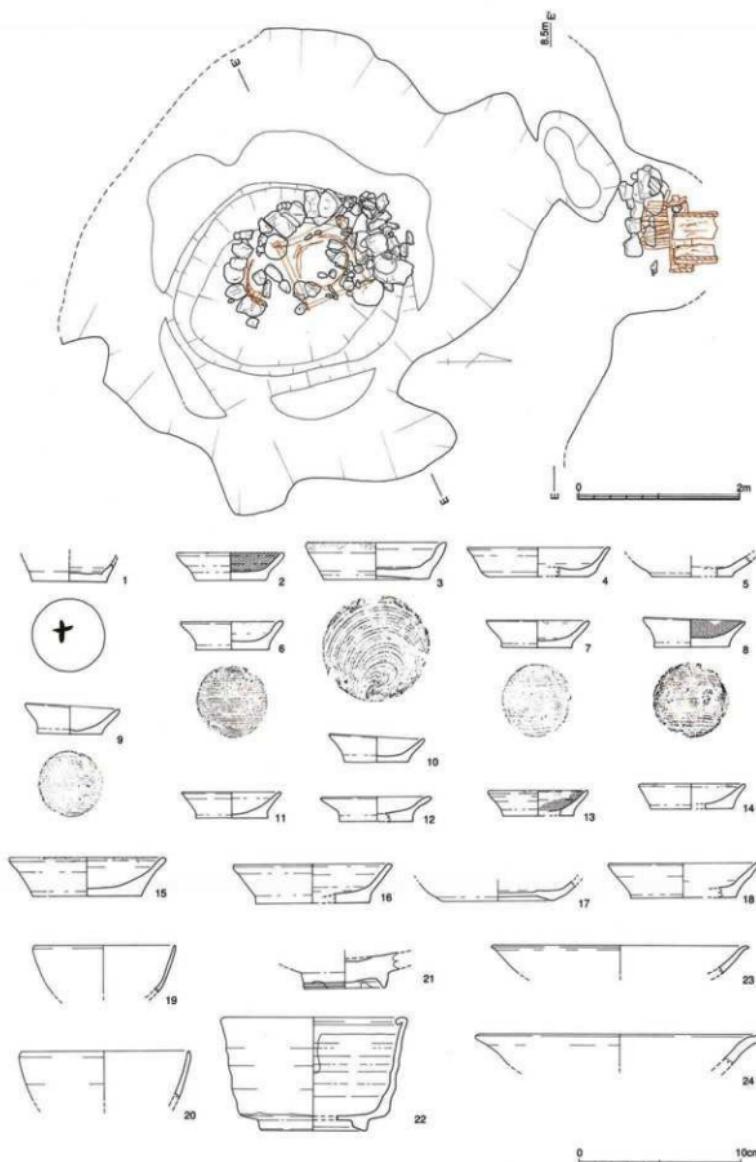


第 174 図 古志本郷遺跡 SE10 実測図 1 (S=1/3)

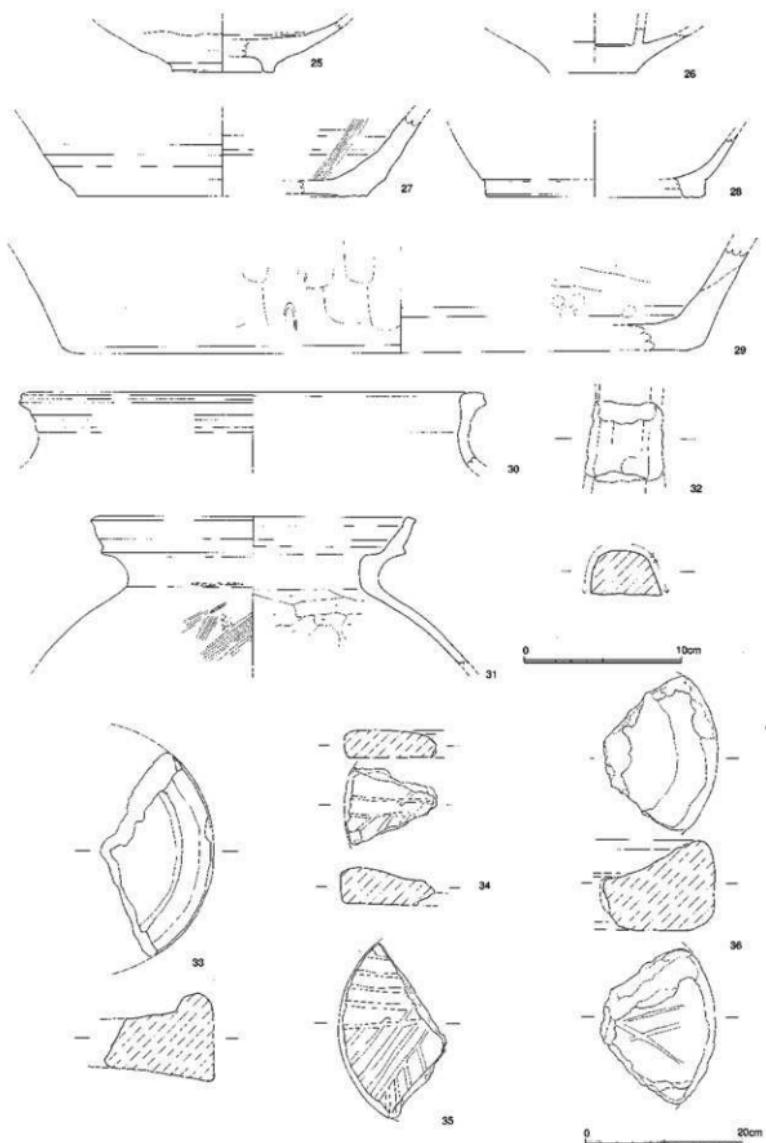


第175図 古志本郷遺跡SE10実測図2 (S-1/60)

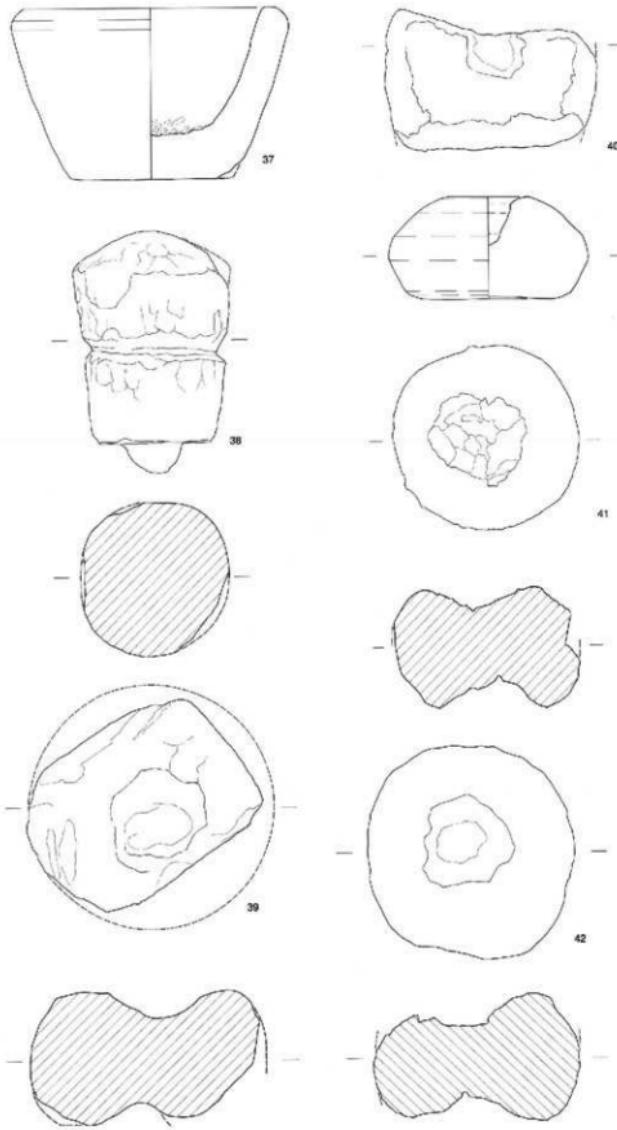
断面を確認できなかった。上層の土層、石組、桶、井筒、横板からは、以下の推定ができる。1桶の井筒と石組は対応することから、先に井筒一桶、井側一石組の井戸が作られた。2次いで北側に拡張し、くり抜いた自然木を中心にはざみによって組み合わせる横板を周囲に配した井筒が設置された。この横板には隅柱や井籠の組みあげではなく、第176図に見るようく石組と相關するので、



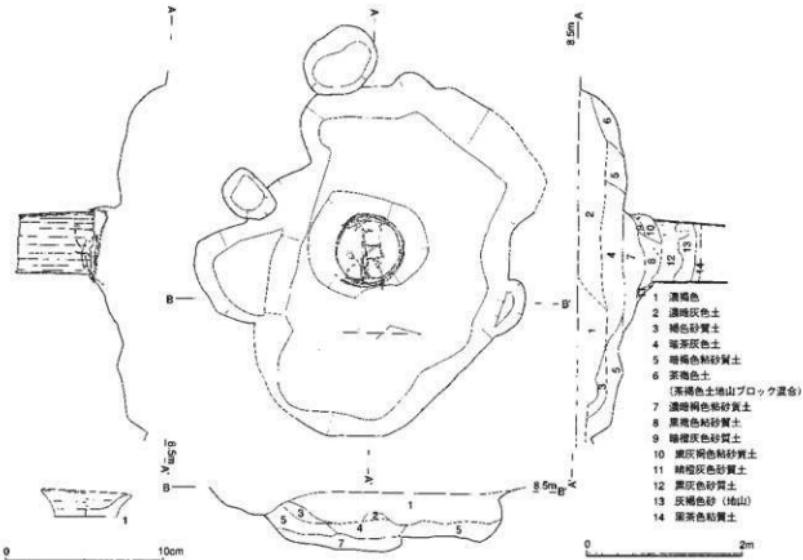
第176図 古志本郷遺跡SE10実測図3・出土遺物実測図1 (遺構S=1/60 遺物S=1/3)



第177図 古志本郷遺跡SE10出土遺物実測図2 (25~32, S=1/3 33~37, S=1/6)



第178図 古志本郷遺跡SE10出土遺物実測図3 (S-1/6)



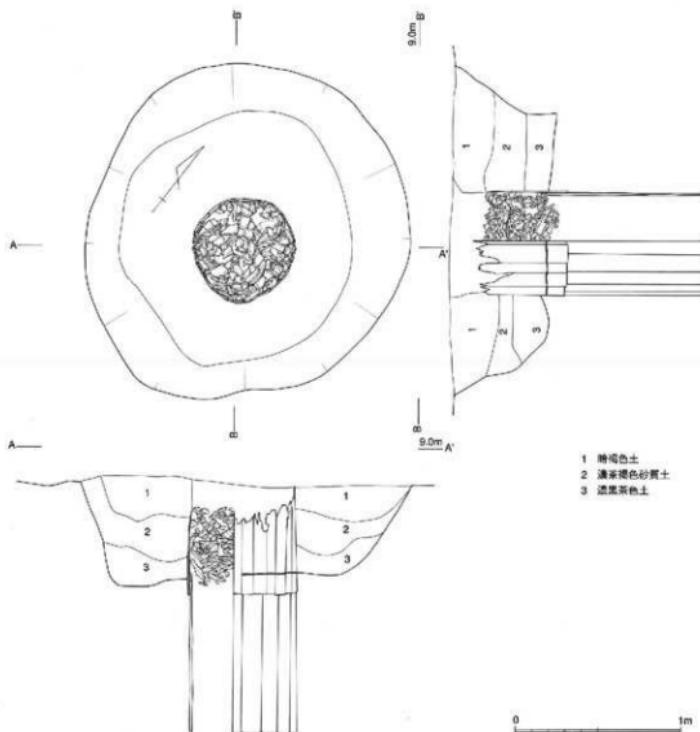
第179図 古志本郷遺跡SE11実測図・出土遺物実測図 (地盤S=1/60 遺物S=1/3)

井筒と見られ、井側は石組であったと考えられる。3・9・10層が本来の井桁掘り方埋土で、上段は戸戸の廃棄時の破壊痕跡と見られる。本来の井桁の設置などは不明である。

遺物出土状況 遺物のはほとんどは上段井戸廃棄時埋土1～7層で出土している。また、1～7層には大量の石と、径1m大の巨石が合計4個落とし込まれていた。何ゆえこのように大きな掘削（上段）を行い巨石を廃棄したのかは不明である。ただし、巨石の廃棄は何らかの理由で必要であったと考えられ、SE09の北にも同様の巨石を埋めた穴が存在する（第163、174図）。

出土遺物（第176～178図） 1～18は土師質土器の皿である。底径4.5～5.0cmのものだけでなく、同6cm前後の大型のもの（3・4・15・16・18）もある。器形も口縁部が直線的に立ち上がるものの（1・3・4）、内面の底部と口縁部の区別が明瞭でないもの（7～16）がある。底部調整も回転糸切り（1～6）がある反面、静止糸切りが増加し（7～16）、大部分を占める。また、墨皿、燐明皿も一定の割合で存在する。全体に土師質土器VI期に該当する。岡化していないものも含め、本遺構からは土師質土器の皿は計24個体以上が出土している。21は青磁碗で、高台内は釉を削り取る。19・20、22～26は陶器の皿、碗類である。22は口縁部を縦状に折り曲げる碗で胎土は黄褐色、外面に濃黃褐色の釉を施す。23～25は灰色の釉が施釉される肥前系陶器の皿である。26は見込みに凸帯のまわるもので、燐明台皿であろう。

27は黒茶色の精緻な胎土を持つ擂鉢である。28は甌などの底部で、灰色の精緻な胎土に淡緑色の釉が施される。いわゆる石見焼と推定される。29は備前焼の甌底部。30は肥前系の甌口縁部



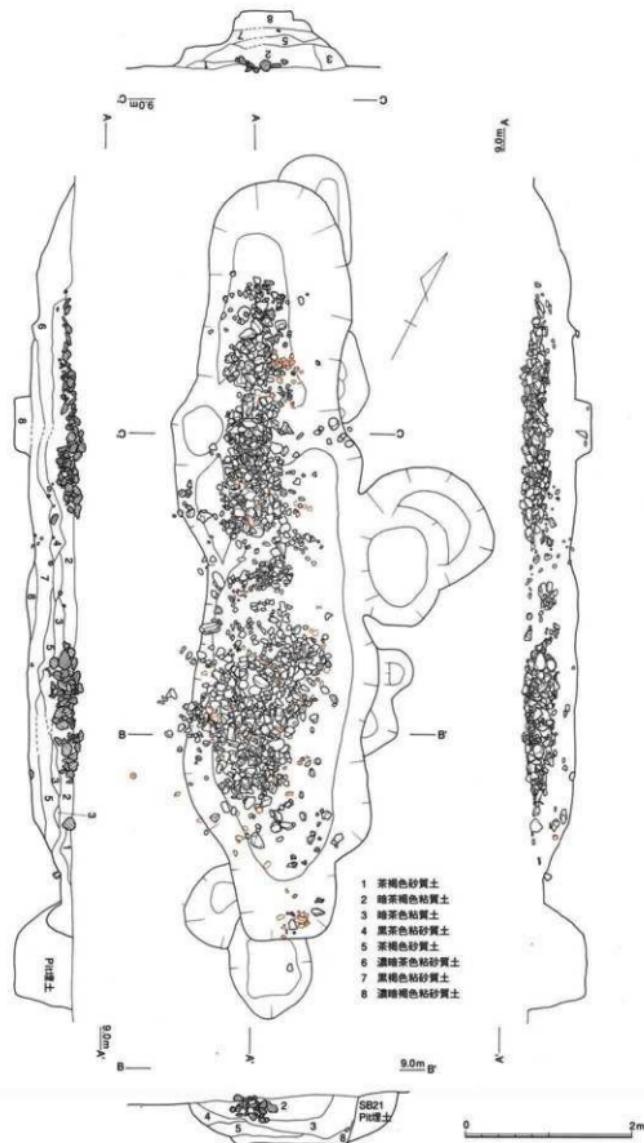
第180図 古志本郷遺跡SE12実測図 (S=1/30)

である。32は砾石、31は古墳時代前期の甕である。33～35は石臼である。33・36は雄白で、33は内側が中央部にが竈むものである。34・35は厚さ3cm程度と薄いもので、同一個体であろうか。35の擦り目は8区で各区5条程度の擦り目が入れられる。37は火鉢であろうか。底部内面火を浮けた痕跡が残る。38は凝灰岩質砂岩製の五輪塔空・風輪である。40は火輪、39(凝灰岩製)・41・42(凝灰岩質角礫岩製)は水輪である。

年代 第1～7層出土の土師質土器はVI期でも新段階に当たり、出土する遺物にも石見焼があることから、井戸の廃棄は18世紀以降と見られる。

SE11 (第180図)

規模・構造 D区中央に位置する。掘り方は上下二段に別れている。上段は直径4.5mの不整円形をなし、下段は直径90cm程度で、井筒桶の幅しかない。深さは上段が0.5m、下段が1.5mで合計2.0m、底部の標高は6.7m程度である。井側は合計26枚の板から構成される桶で、いわゆる桶側井戸である。SK04、SK39を切る。



第181図 古志本郷遺跡SK36実測図 (S=1/60)

土層堆積状況 1～4層（I層）、5・6層（II層）、7・8層（III層）、9・10層（IV層）、11層以下（V層）に分けることができる。上段の構成層I～III層は井桁設置、抜き取りに関わるものであるが、I層を最終的な廃棄時の抜き取りと考えても、1回は付け替えがあったものと見られる。III・IVの関係は不明であるが井側部分が埋まった時点では小規模な掘り返しがあったのであろうか。IV層は粘質土・砂質土の互層をなす。井戸底部として自然な堆積で、井戸の廃棄にかかわって埋められたものではあるまい。

出土遺物（第180図） 前述のIII層から、1の土師質土器が出土した。土師質土器VI期の小皿である。また、井側内部には炭化していない棒状の木製品が多数廃棄されていた。

年代 1から、井戸がある程度利用され、井側が自然に埋まった時点が近世になろうかと思われる。完全な廃棄年代は不明である。

S E 12 (第180図)

規模・構造 D区中央東側に位置する。S I 0 1を切っている。地山は橙褐色砂で、井側桶の側板を引き抜いたときに崩壊してしまった。形態は上段・下段の二段からなり、上段は直径2mの円形をなし深さ60cm、下段は井側直径の60cm、深さ90cmで、底部の標高は7.4m前後と推測される。井側は高さ50cm以上の桶と、90cmの桶の2段組で、桶側組構造である。井戸掘り方の埋土1～3には廃棄時に破壊された痕跡はなかった。井戸内部には多数の遺物が堆積していた。

出土遺物（図版136） 急須、花瓶など陶磁器、ヤマト糊の瓶等のガラス製品が出土した。

年代 出土遺物から、近代まで機能していたものと判断される。

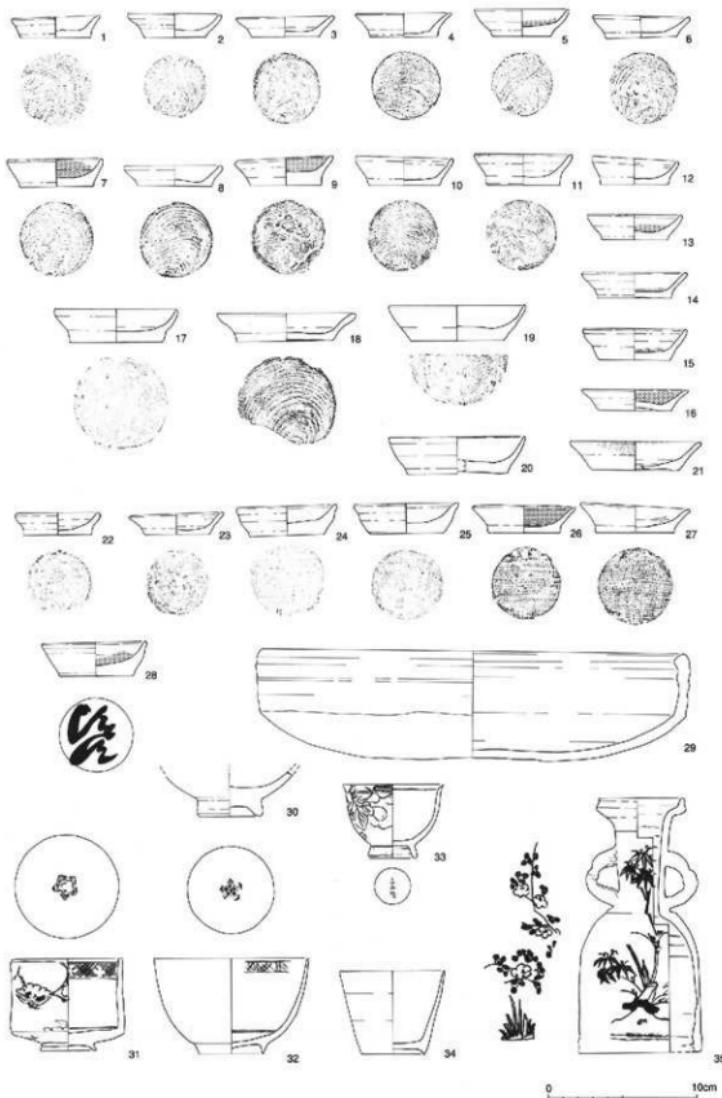
E、土壤

S K 36 (第181図)

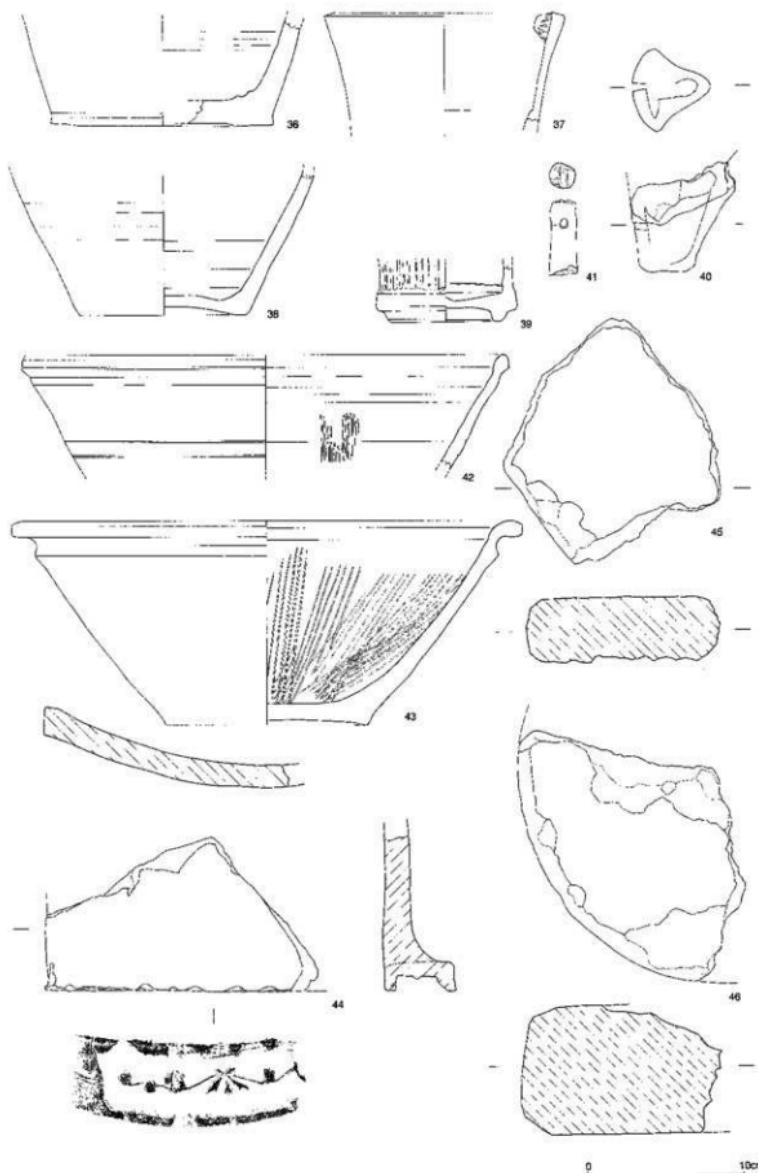
規模・構造 D区西側に位置する。規模は南北10m、幅は2.2mで深さは0.5mで、底部の標高は8.1mである。なお、中央部東側に、径1.4mほどの張り出し分があるが、この部分はSK 37に先行して掘られた土壤と考えられる。東側片でSB 2 1の柱穴を切っており、南側でもピットを切っている。

土層堆積状況 基本的に茶褐色系の土と地山灰褐色砂を含んだ砂質土との互層状況になっている。1～3層までの間に特に顯著に径5～15cm前後の礫が混入されていた。礫層は2・3層を通じて堆積しており（B B'付近）、なおかつ、一塊になっていることから、1～3層は順次堆積したのではなく、一括的に埋められた土層であると考える。5～7層についても、地山が崩れやすい砂層であるにもかかわらず、地山が崩れた土層ではなく、7層は中央から先に堆積しているような状況があるので、1～3層を含めて全体が一時に埋められた土層であると考えられる。8層はC C'付近で円形のピット状をなしており、SK 37に先行するピットの残存部分であろうかと思われる。

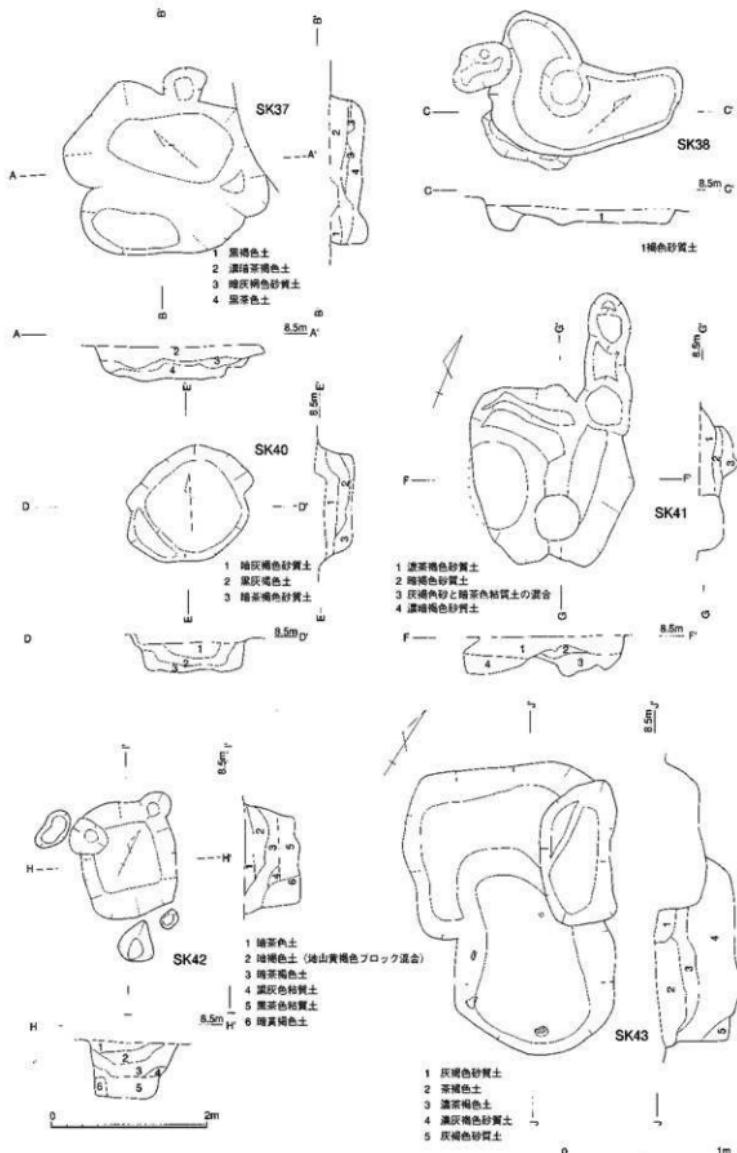
遺物出土状況 遺物は土師質土器皿を中心に多数が検出されているが、土師質土器皿について言えば、遺構検出面（1層の上）でもっとも多くを検出しており（図版59・60参照）、埋土の中からの出土はかえって少なかった。逆にそば猪口・瓶（第182図34・35）、擂鉢（第184図43）、等は集石内あるいは集石直下付近から出土している。このことから考えて、陶磁器類は一般的な廃棄と考えられるが、上層で出土した多量の土師質土器皿については、ほとんどが完形であったこ



第182図 古志本郷遺跡SK36出土遺物実測図1 (S=1/3)



第183図 古志本郷遺跡SK36出土遺物実測図2 (S=1/3)



第184図 古志本郷遺跡SK37~54実測図1 (S=1/60, SK42のみS=1/30)

とも含め、一般的でない廃棄理由を考えるべきであろう。

出土遺物（第182・183図） 1～28は土師質土器皿である。なお土師質土器皿は、この他実測図を掲載していないものも含めて、合計48点以上が出土している。すべて、土師質土器VI期に該当する。土師質土器皿は法量で、底径5cm前後を中心とする小皿のグループ（1～16、22～28）、同6.5cm前後を中心とする大皿のグループ（17～21）に分別することができる。口縁の立ち上げ方については、内湾するもの、直線的なもの、外湾するものなどがあり、特に外碗するもので、内面の底部と口縁部が区別しがた半円上の断面をなすものは、底部調整を静止糸切りとする特徴を持っている（22～27）。土師質土器皿の底部調整は回転糸切りと静止糸切りは2：1程度の比率である。また、他の遺構の土師質土器VI期の皿と同様に、墨皿と燈明皿が一定の割合で見られる。28は底部外面に墨書きをするものである。29は土師質の壇ろくである。底部外面は火を受け剥落し薄くなっている。30～36・38は肥前系陶磁器である。30は黄褐色の胎土を持つ肥前系陶器碗で、呉器手碗と呼ばれるタイプで、三日月高台を持つ。31～34は肥前系磁器碗で、31・32は見込みにコンニャク印判による五角花文を持つ。33は底部外面に「乙山作」の文字が染付される。34は白磁そば猪口、35は花瓶で、表裏に竹と梅の絵柄を染付する。36・38は黒茶色の胎土を持つ壺・壺である。30は17世紀、31～34は18世紀代のものである。37は香炉であろうか。39は肥前系の青磁花瓶である。40は土師質の脚である。41は棒状土錘。42・43は暗赤茶色の胎土を持つ擂鉢である。43は底部をやや内反りにする。44は焼し瓦。45・46は石臼で、共に擦り面は摩耗のためか、溝が確認できない。

年代・性格 SK36の時期は土師質土器VI期、18世紀代になるものと思われる。この時期には正法寺⁽³⁷⁾が確実に存在し、正法寺に関わる廃棄土壙を見ることができる。以上の前提に立つと、遺構検出面で出土した土師質土器群は、正法寺での行事に関わるものである可能性もある。

SK37（第184図）

規模・構造 D区中央南寄りに位置し、規模は長辺2.3m、短辺2.4mを測り、平面型は二つの橢円形土壙が連結したような形状を示す。しかし、土層断面図では、埋土を共有しており、両者は一緒に埋められたものと思われる。埋土は黒褐色系の土が堆積する。

出土遺物（第187図1～5） 1～5は土師質土器皿で、底径5cm前後、器形1.5～2cm前後の皿でいずれも底部回転糸切りである。すべての口縁部に油煙が付着し、燈明皿と推測される。また2は口縁の一部を湾曲させるが、意図的なものであるか否かは不明である。

年代・性格 遺構の年代は土師質土器VI期に当たろう。性格としては廃棄土壙が考えられ、土師質土器が荷物明皿であることが注目される。

SK38（第184図）

規模・構造 D区中央南寄り、SK37の北側に位置する。長辺2.5m、短辺1.3mの不整形をなし、中央部のみを深く掘り込む。深さは50cm程度である。褐色砂質土が堆積する。

出土遺物（187図6・7） 6・7は土師質土器の壺である。いずれもIV期に収まる。

年代・性格 出土遺物からSK38の年代は中世末と考えられる。性格は廃棄土壙であろうか。

SK 39 (第185図)

規模・構造 D区中央やや南寄りに位置し、SE 11に切られる。規模は長辺2.2m、短辺1.2mの隅丸長方形をなし、深さは南側に深い部分があり60cm程度である。南側には5~20cm大の石が集積されていた。暗茶色系の土が堆積する。

出土遺物 (第187図8~10) 土壌上面近くから8の軒棧瓦が出土した。9・10は土師質土器皿で、VI期に位置づけられる。

年代・性格 出土遺物からSK 39の年代は土師質土器VI期と見られる。性格は廃棄土壌か。

SK 40 (第184図)

規模・構造 D区中央に位置する。SK 41に切られる。規模は直径1.5mの梢円形で深さは40cmを測る。暗灰色系の土が堆積する。

年代・性格 出土遺物は土器小片のみであるが、埋土などから近世のものと推察される。

SK 41 (第184図)

規模・構造 D区中央に位置する。SK 40に隣接し、SK 40を切っている。長辺2.0mほどの梢円土壌部と、長さ1.5mの長梢円形土壌部分となる。梢円形部分は西側でやや袋状になる。黒茶色土が堆積する。

年代・性格 出土遺物はなく、年代・性格は不明である。

SK 42 (第184図)

規模・構造 D区東側北寄りに位置する。規模は一边1.5mの隅丸方形で、深さ70cmを測る。底部標高は7.5mである。断面は逆台形をなし、全体に整った掘り方を持つことやある程度の深さを持つことから、井戸掘りの井戸ではないかと考えられる。また三方に小柱穴を伴うが、井戸覆屋などの可能性がある。

土層堆積状況 埋土は地山黄褐色土ブロックを含む2層までと、黒褐色系の3~6層に大別できる。後者は自然堆積、前者は埋め土と考えられる。

年代・性格 出土遺物はなく、遺構の時期は不明である。性格は素掘りの井戸であろう。

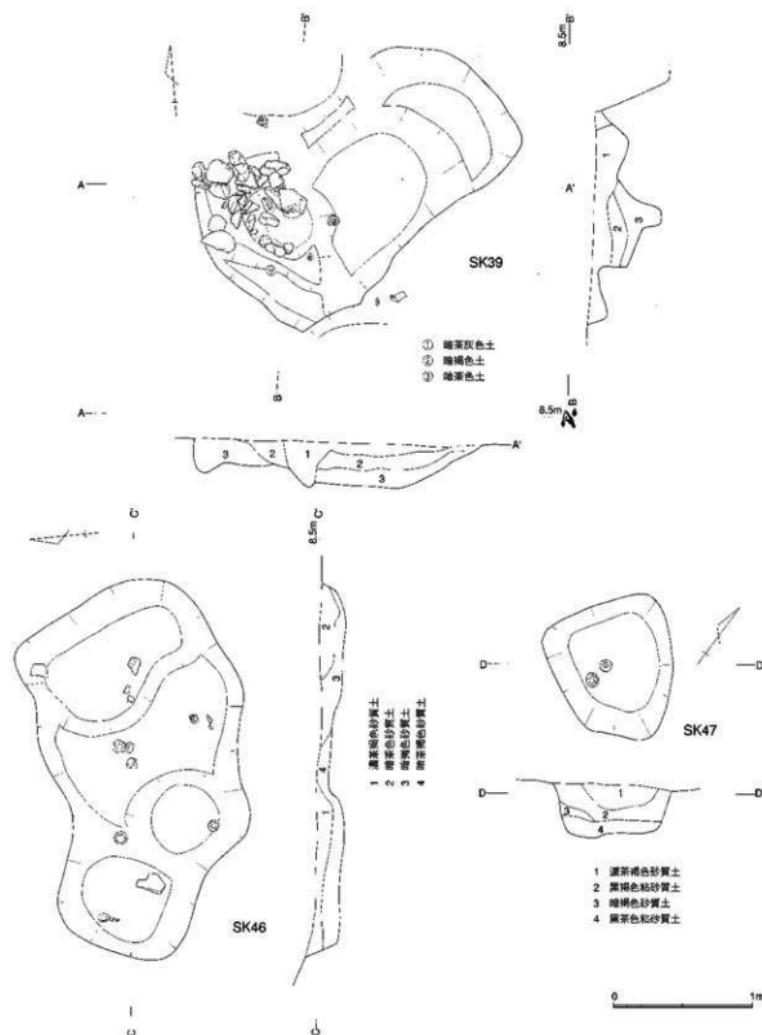
SK 43 (第184図)

規模・構造 D区西側南辺近くで検出された。長辺1.2mほどの土壌が二つ切り合っており、南側は深さ50cmを測る。

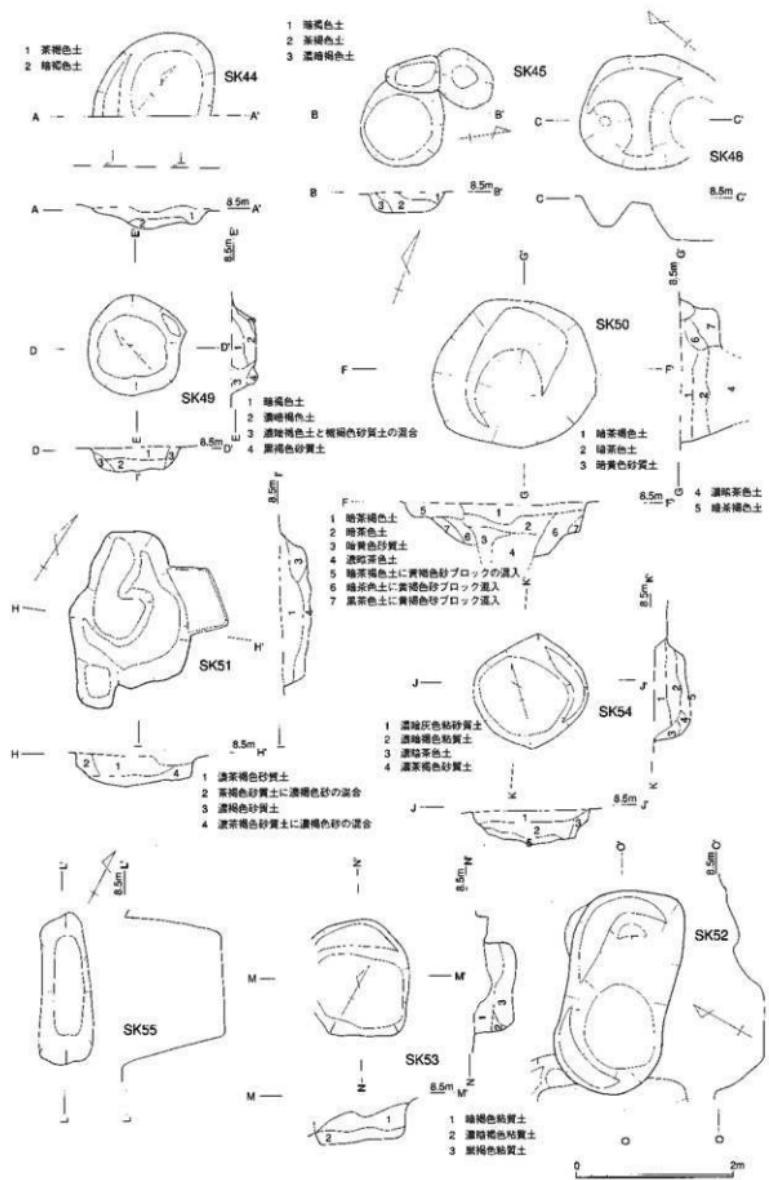
土層堆積状況 中心となる4層は地山に近い灰褐色砂質土であり、2・3層が中央部のみ落ち込んでいる点が注目される。

出土遺物 (第187図11~13、図版141) 11~13は土師質土器皿で、底径は6cm前後、器高も2cmを越える、大型である。この他木漆塗櫛 (図版141)、金糸 (実測図・写真図版とも未掲載) が出土している。

年代・性格 出土した土師質土器皿はVI期に属するので、SK 43の時期は近世に当たるめられよう。性格としては、装飾品の出土から、土壌墓を考えたい。



第185図 古志本舞遺跡SK37~54実測図2 (S+1/30)



第186図 古志本郷遺跡SK37~54実測図3 (S=1/60)

S K 4 4 (第186図)

規模・構造 D区西側南辺に位置し、規模は直径1.6m、深さ30cmほどで半分は調査区外に残る。茶褐色土が堆積する。

出土遺物 (第187図14) 14は土師質土器皿で、底部は静止糸切りである。

年代・性格 上層の時期は、出土遺物が土師質土器VI期に当たり近世以降かと考えられる。性格は明らかでないが、S K 4 9との類似から土塙墓の可能性もある。

S K 4 5 (第186図)

規模・構造 D区西側南辺に位置し、S K 4 4の北側で隣接する。規模は直径1mほどの円形で、深さは30cmほどである。ビットがS K 4 5を切っている。茶褐色系の土が堆積する。

出土遺物 (第187図15) 15は土師質土器皿で、底径・口径が余り変わらないが器高が2.8cmと比較的高い。土師質土器V期に当たる。また、小片ではあるが肥前系陶器が出土している。

年代・性格 出土遺物から遺構の時期は近世初頭と見られる。性格はS K 4 9との類似から土塙墓の可能性を考えたい。

S K 4 6 (第185図)

規模・構造 D区西側南辺に位置する。規模は全体で長径2.6m、短径1.5mを測るが、実際は3個以上の土壙が切り合ったものである。一つは東側の上層で、東側の一一番低い部分（上層図2・3層）からなる。もう一つは西側で部分（上層図4層）である。そして西側部分の上の第1層の堆積部分である。堆積土はいずれも黒褐色の砂質土で類似しており、平面プランを検出した際にも、切り合い関係は明確にし得なかった。このうち、第1層、第2・3層から遺物が出土している。

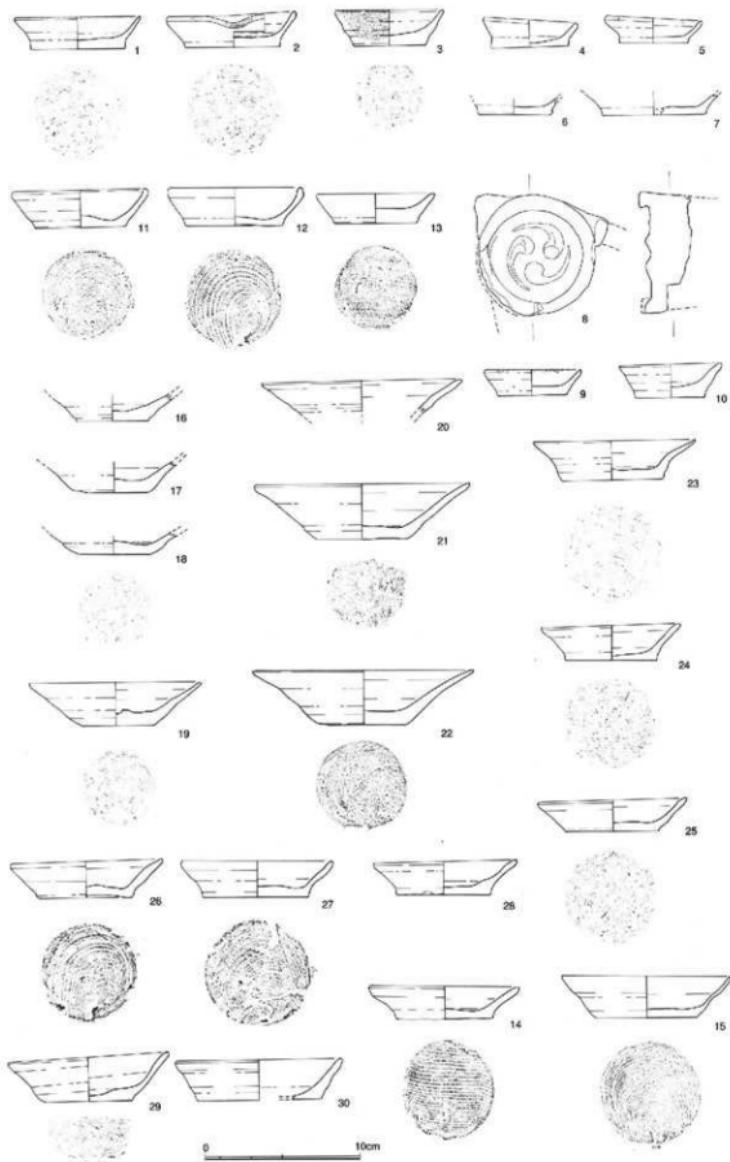
出土遺物 (第187図16~25) 16~25は土師質土器で、16~22が第2・3層、23~25が第1層から出土している。20は口縁が直線的に伸びる壺で、21・22は広く外反する壺である。前者が土師質土器IV期古段階、後者が新段階のものであろう。16~18・20はいずれも破片であるが、外反する傾向が見られ、土師質土器IV期中~新段階に当たる。23~25は土師質土器の皿である。23は口縁部が途中で折れ広く外反し器高も高く土師質土器V期に近い。24は底部が静止糸切り、25は回転糸切りで、共に土師質土器VI期のものである。

年代・性格 遺構の時期は層位によって異なるようである。すなわち、再上層の第1層は土師質土器VI期（近世以降）に掘りこまれ、第2・3層の土壙は土師質土器IV期新段階（中世末）に掘りこまれたと考えられる。性格については、土塙墓の可能性もある。

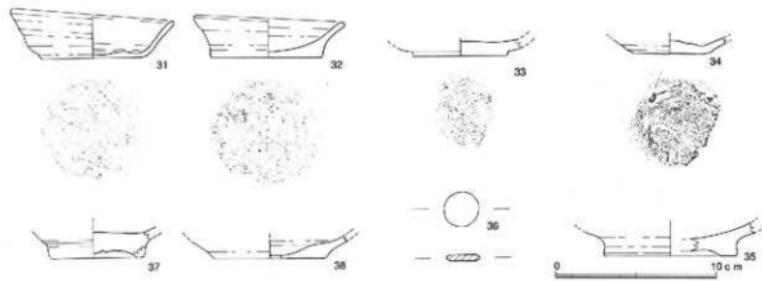
S K 4 7 (第185図)

規模・構造 D区西側南端に位置する。S K 4 8を切っている。規模は一辺1.5mほどの隅丸の一角形状をなしている。深さ40cm程度である。茶褐色系の土が堆積する。

出土遺物 (第187図26~28) いずれも土師質土器皿で、底径6cm前後の大皿で、回転糸切りである。土師質土器VI期に当たる。



第187図 古志本郷遺跡SK37~54出土遺物実測図1 (S-1/3)



第188図 古志本郷遺跡SK37~54出土遺物実測図2 (S=1/3)

年代・性格 SK47の時期は近世の前期にあたるものと思われる。土壙墓であろうか。

SK48 (第186図)

規模・構造 D区西南端に位置し、半分は調査区外に出ているものと推測される。全体で直径1.6mほどの楕円形をなすが、北側と南側の関係は確認できなかったが別な土壙であろう。それぞれ深さ40cm、50cmを測る。

出土遺物 (第188図29~33) いずれも土師質土器である。31は器高2.7cmを測り、底部回転糸切りである。32は口縁が外反し内面の底部と口縁部の区別のない器形で、底部静止糸切りのものである。土師質土器V~VI期のものである。

年代・性格 年代は全体として近世初頭と考えることができる。土壙墓であろうか。

SK49 (第186図)

規模・構造 D区中央やや西よりに位置する。直径1.5m、深さ30cmの円形土壙である。

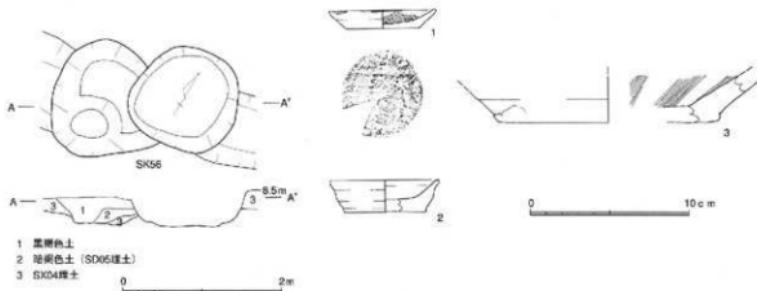
土層堆積状況 中央1・2層に黒色土が、側方3・4層に地山に近い砂質土が堆積する。これはC区SK20・21に類似し、中央に何かが置かれて埋められたことを示す。

年代・性格 土層堆積状況から、土壙墓ではないかと推測される。

SK50 (第186図)

規模・構造 D区中央に位置する。井筒・井筒はないが、素掘りの井側を持つ井戸であろう。SX04を切る。調査は湧水に悩まされ、地山が崩れやすい砂であったことから、地山面より1.5m地点で停止した。構造は上下二段からなり上段が直径2mの不整円形、下段は直径1mの楕円形である。深さは上段が50cm、下段が1m以上である。底部の標高は7.5m以下になろう。

土層堆積状況 1層は上段及び井戸内部に及ぶので、井戸廃棄時以降の堆積層である。2~4層は井戸内堆積層、5~7層は井戸掘り方堆積層である。5層は6・7層を切るので、上段（おそらく井桁設置場所）については掘り返しがあったと考えられる。第2~4層が自然堆積層であるのか埋め土であるのかは判断できなかった。



第189図 古志本郷遺跡SK55・56実測図・出土遺物実測図 (遺構S=1/60 遺物S=1/3)

年代・性格 出土遺物はなく、時期は不明である。

SK 51 (第186図)

規模・構造 D区中央西寄りに位置する。規模は長辺2m、短辺1.5mの隅丸方形をなす。東側に浅い張り出し部を持つ。中央に茶褐色土、側方に地山に近い砂質土が堆積する。

出土遺物 (第188図34・35) 34は土師質土器の坏でIV期に当たる。35は削り出し高台状のものがつく土師質土器である。本報告では余り類例がない (同図37参照)。

年代・性格 遺構の年代は中世末期で、性格は土壙墓であろう。

SK 52 (第186図)

規模・構造 D区中央やや西よりに位置し、SK 53を切る。規模は長辺2.7m短辺1.6mで、深さは最大50cmを測る。断面は逆三角形状をなし、SK 43～49、51とも異なる。

年代・性格 出土遺物は幕石状石製品 (第188図36) のみで、遺構の時期は不明である。性格についても、断面形状が他の土壙とは異なり、土壙墓とは考えづらい。

SK 53 (第186図)

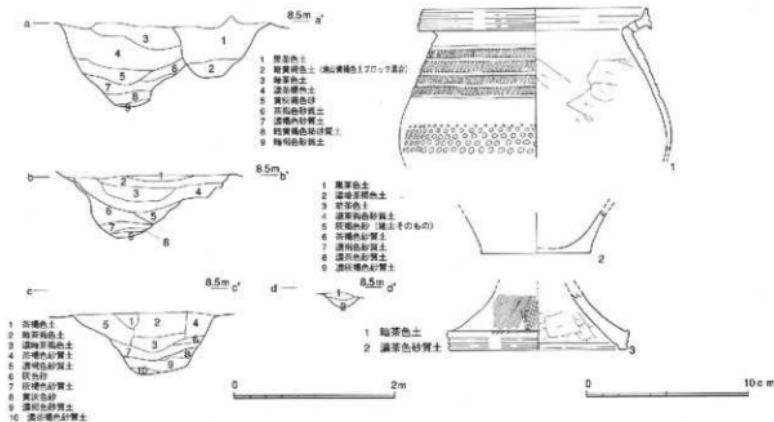
規模・構造 D区中央西寄りに位置し、SK 52に切られる。規模は一辺1.5m前後の隅丸方形で、深さは0.5mを測る。暗褐色系の土が堆積する。

年代・性格 出土遺物はなく、遺構の年代は不明であるが、埋土などから中・近世のものと推測される。土壙墓であろうか。

SK 54 (第186図)

規模・構造 D区中央西寄りに位置する。規模は直径1.5m、深さ0.5mほどである。堆積土は1・2層と3～5層の二重構造になっており、前者が粘質土、後者が砂質土である。

年代・性格 出土遺物は削りだし状高台の土師質土器一点 (第188図37) で、これにより遺構の年代は中世と考えられる。性格は土壙墓であろう。



第190図 古志本郷遺跡SD40・41実測図・出土遺物実測図 (遺構S=1/60 遺物S=1/3)

S K 5 5 (第186図)

規模・構造 D区中央西側に位置する。上端は長さ2m、幅60cmの隅丸長方形をなし、深さは1.3mを測る。底部の標高は7.1m前後である。

年代・性格 遺物として第188図38が上層から出土した。38は低く広がる壺で、土師質土器IV期に当たる。性格は不明である。調査時には湧水に苦慮した遺構であった。

S K 5 6・5 7 (第189図)

規模・構造 D区中央南寄りに位置する。西側のSK57が東側のSK56に先行する。共に直径1.3m深さ40cmほどの規模を持つ円形の土壙である。SX04を切っている。

出土遺物 (第189図1~3) 1~3はSK56より出土した。1・2は土師質土器で土師質土器VI期のものであろう。3は備前焼鉢底部である。

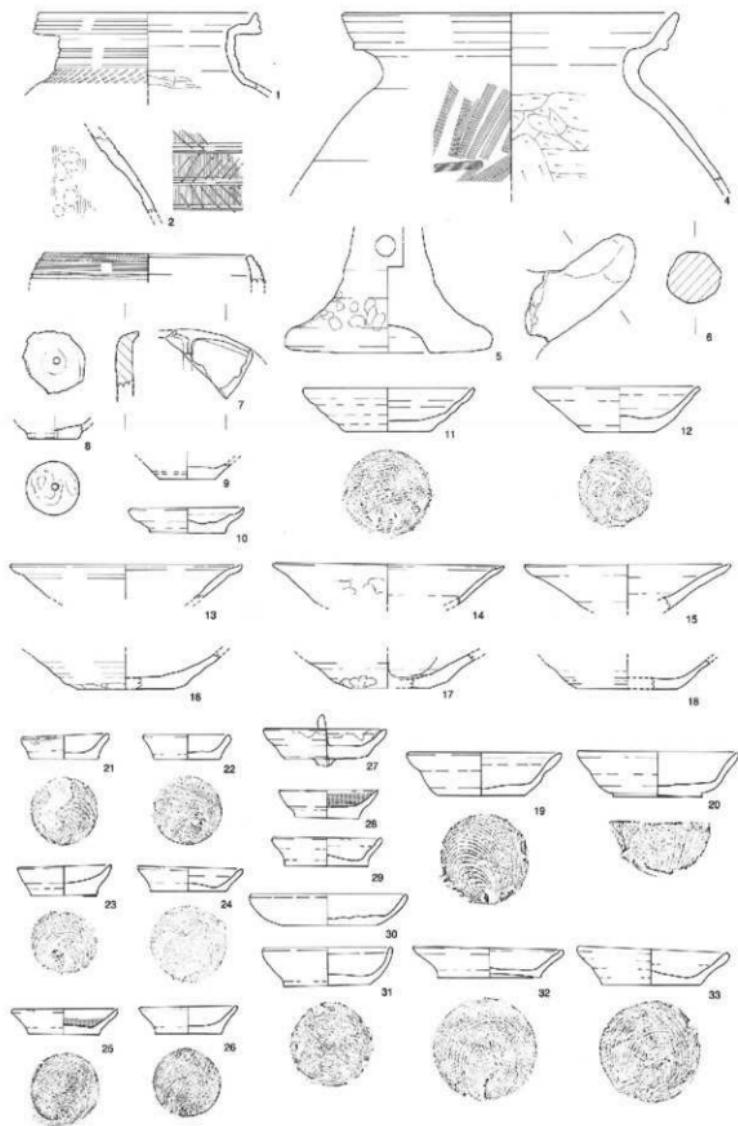
年代・性格 SK46の年代は近世以降と判断される。土壙墓であろうか。

F、溝

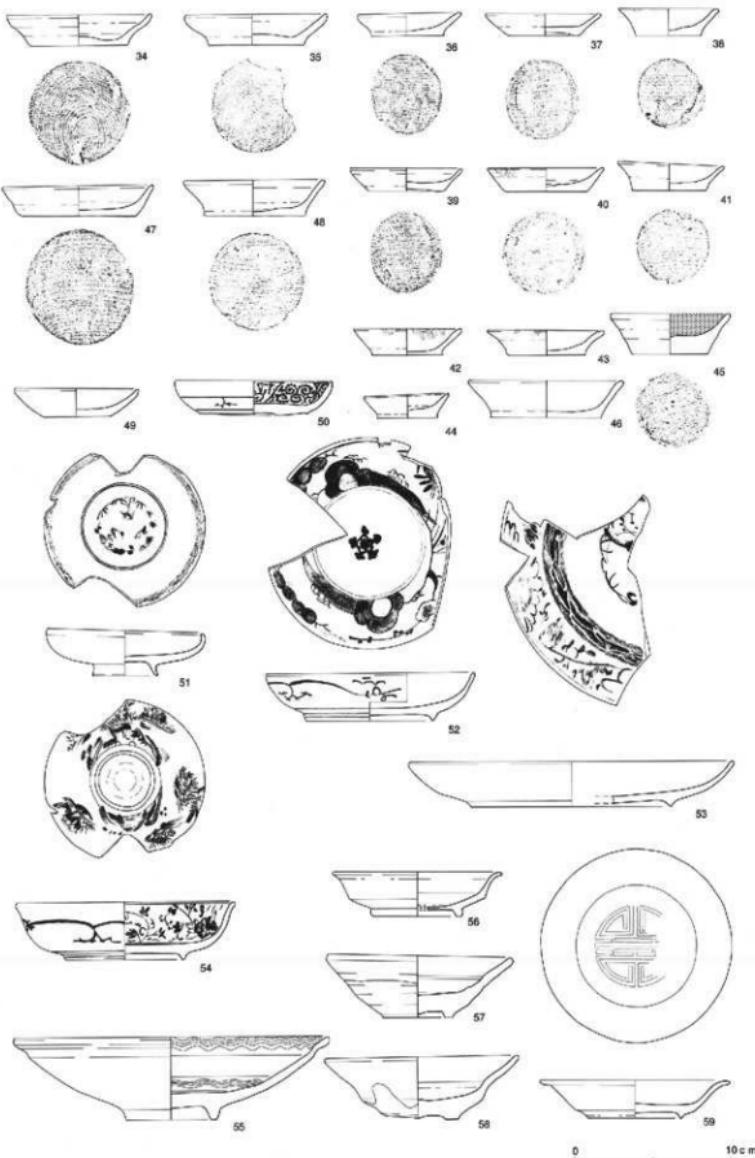
S D 4 0 (第163・190図)

規模・構造 D区東側を南東-北西に方向に走っている。約20mを検出した。規模は上幅2.0m、深さ0.7mで、底部の標高は南側・北側とも7.4mである。

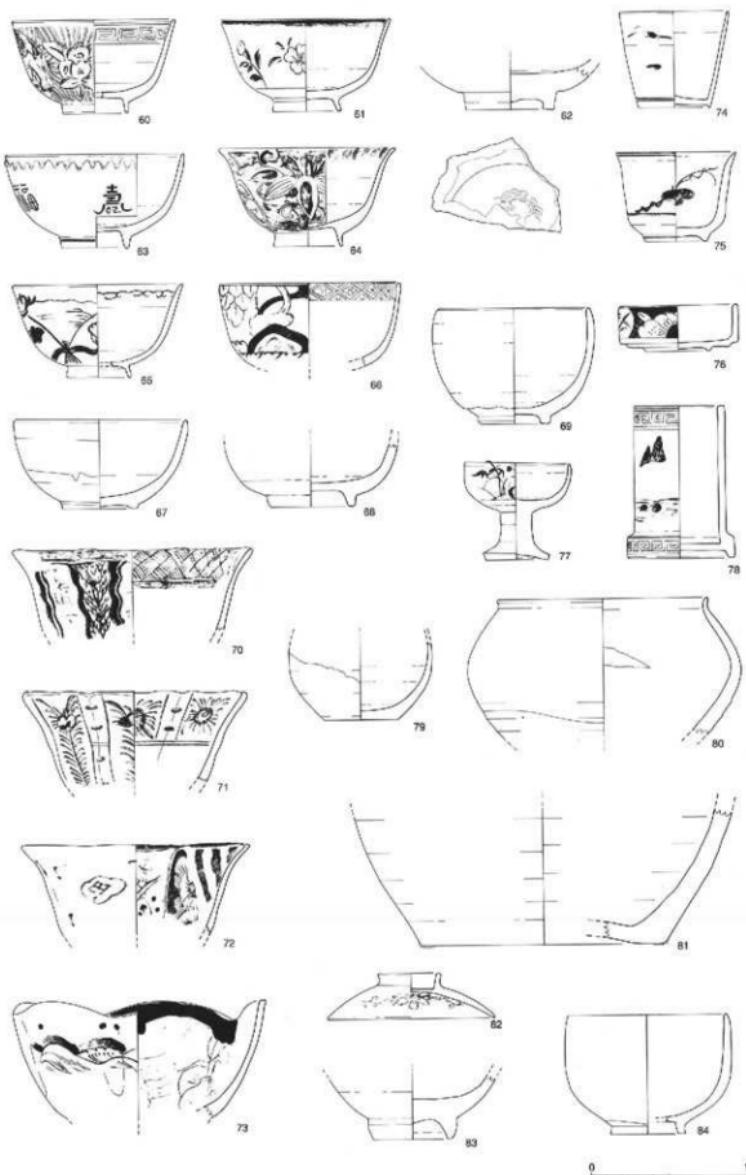
土層堆積状況 基本的に、茶褐色土と、地山灰(黄)褐色砂の互層をなし、a'a'b'b'c'c'とともに上下2層に別れる。上層はa'a'3~5層、b'b'1~5層、c'c'3~5層である。C'C'a'a'b'b'はいずれも最下層に地山の二次堆積層を持つ。下層はa'a'6~8層、b'b'6~9層、c'c'6~9層に当たり、下層は砂層と砂質土の互層で一定の流水を考えさせる。上層下層とも断面はV字を指向していたと見てよい。上層の地山の堆積は流水によるものというより、急な崩落によるといった



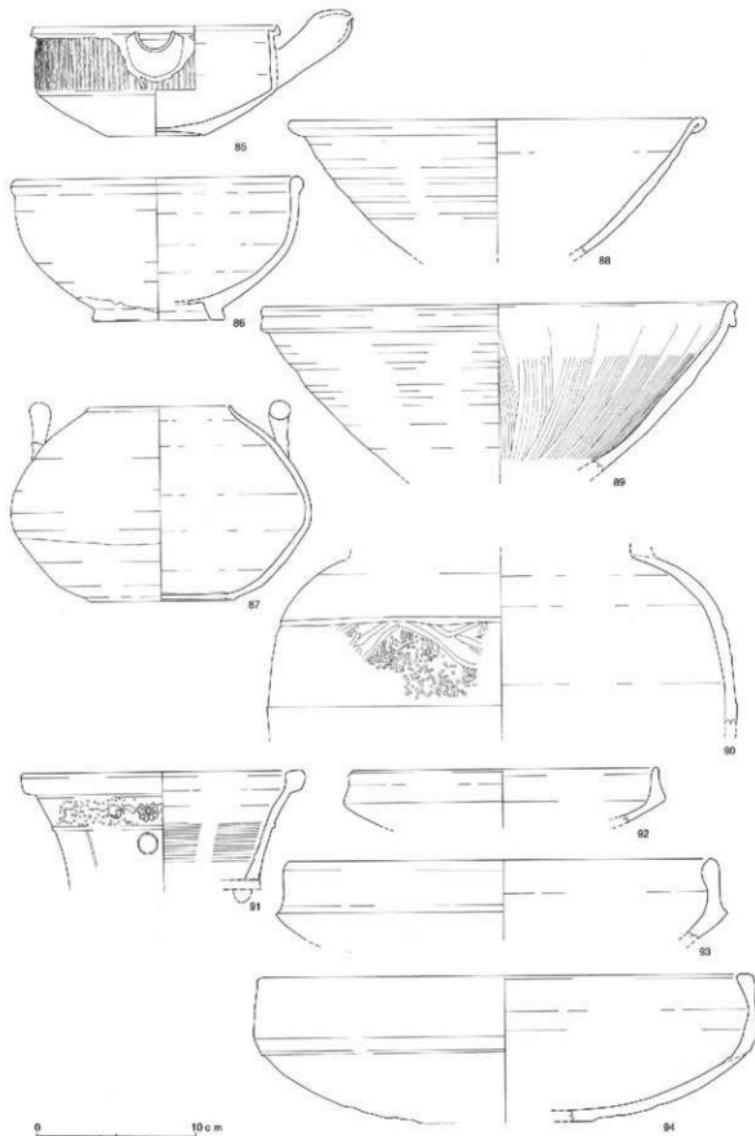
第191図 古志本郷遺跡D区調査区出土遺物1 (S-1/3)



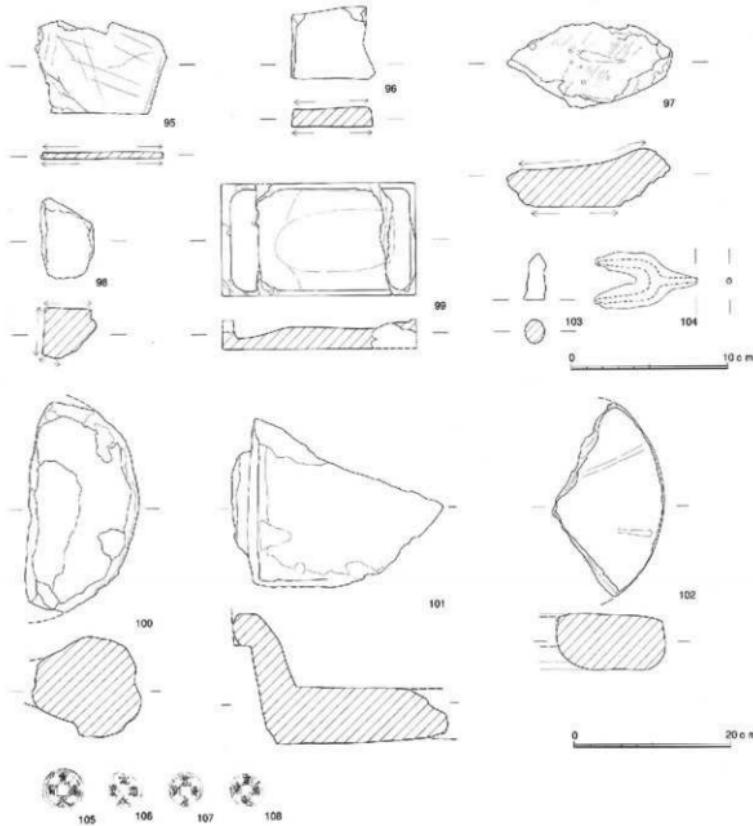
第192図 古志本郷遺跡D区調査区出土遺物2 (S-1/3)



第193図 古志本郷遺跡D区調査区出土遺物3 (S=1/3)



第194図 古志本郷遺跡D区調査区出土遺物4 (S=1/3)



第195図 古志本郷遺跡D区調査区出土遺物5 (92~96、100、101、105~108 S=1/3 97~99 S=1/6)

感を受ける。

出土遺物 (第190図1~3) 1・3は上層、2は下層から出土した。他には後世の搅乱遺物を除いて、若干の小片が出土するのみであった。1は弥生土器甕で、口縁部に凹線2状を廻らす。さらに肩部上方には、凹線によって区分された刻み目文帯が4条あり、体部最大径付近にも、5点以上(下半欠損)からなる列点文帯が施されるいわゆる塩町式の土器である。なお、刻目文帯はそれぞれ独自に施し、後に凹線で区分するするタイプである。内面は頸部以下までケズリを施す。

3は高杯の脚で、接地部に3条の凹線を廻らし、脚部外面は縱方向のミガキを加える。

年代 出土遺物の年代はいずれも松本IV-2様式に収まるものと考えられる。1・3は上層より出土しているので、この時期には溝は埋まったと見られる。

溝の性格 溝の性格については、第3章まとめで考察を加える。

SD 41 (第163・190図)

規模・構造 他の溝と異なり、D区東よりを北西から南東に向かって貫流する。規模は上幅1m、深さ50cmほどで、黒茶色系の土が堆積する。底部標高は北8.3m、南7.9mほどである。

年代・性格 遺物は図化していないが、赤彩された土師器高坏片が出土しており、古墳時代中期以降のものと考えられる。性格は不明である。

D区調査区出土遺物 (第191~195図)

第191~195図は調査区出土の遺物の一部である。1~3は弥生土器である。1は壺で口縁部、頸部に四線を、肩部に列点文を廻らす。2は壺の頸部で建てハケの後、沈線と綾杉文を施す。3は高坏で口縁部に四線、上下に刻目文を施す。4は退化した複合口縁を持つ壺である。5は土製支脚、6は瓶把手である。7は厚さ1cmで外周に縁を持つ須恵器で風字鏡の一部と推定される。8~46は土師質土器である。8~10は土師質土器I~IV期の皿で、8は底部に穿孔され内外面に判読不明の墨書きが施される。11~18は壺で、このうち11・12は土師質土器IV期占段階、13~18は同新段階の所産になろう。なお、16・18は底部及びその周辺をヘラケズリするタイプである。19・20はやや器高の高い皿で、土師質土器V期に相当する。21~46は同VI期の皿である。22~35は底部回転糸切りのもので、36~46は内面の底部が明確でなく、断面半円状をなすタイプで、静止糸切りである。27は焼成後中央に穿孔、釘を打ったもので、底部には柱日の木質が残っていた。木製の把手の先に土師質土器をつけ、手持ちの燭台にしたものと思われる。49は茶褐色の施釉をした陶器皿である。50~61、63~78は肥前系陶磁器である。なお、62は高台内無釉の青磁碗である。50はタコ唐草の染付の皿、51~54は内外面・見込みに松・竹・梅・柳などを染付した皿である。52は見込みに五弁花のコンニャク印判を押したもので、同様のものが3点以上出土した(カラー図版3)。55は黄褐色の釉が、56は黒茶色の釉が施される皿である。いずれも18世紀代のものである。57・58は胎十日の陶器皿で16世紀末の所産。59は白磁の皿で見込みに押印がある。60・61、63~66は磁器の碗である。いずれも内外面に手のこんだ染付を施すもので、19世紀代のものになろう。67~69は陶器の碗である。70~73は磁器の鉢で、陵を持つもの(70~72)、5弁の花形を呈するもの(73)などがあり、いずれも19世紀代のものであろう。74はそば猪口、75は小壺、76は小鉢、77は高坏、78は花瓶である。79~81は陶器の壺・壺類である。83~87は布志名焼であろうか。83・87は淡褐色の胎土に黄褐色の釉が、84・87は緑灰色の釉が施される。85は急須で茶褐色の釉が施される。把手には「寿」と亀甲文の浮き彫りがある。87・88は石見焼であろうか。精緻な灰色の胎土に淡緑灰色の釉が施される。89は肥前系の摺鉢である。90は瓦質の火鉢、91は小型の鉢である。92~94は熔ろくで、口縁下端が突出するものとなめらかなものがある。いずれも外底部は火を受け剥落する。95~98は砥石である。99は硯、100は五輪塔火輪、101は用途不明の石製品である。102は右向雄臼である。103は窓道具であろうか、陶器質である。104はJ字の鉄旗である。105~108は寛永通宝で、106は古寛永である。

第5節 E区の調査

調査区の立地

E区は本報告書で扱う中でもっとも西よりの調査区で、幅約12m、長さ85mの細長い調査区である。E区の西側には、出雲市による古志木郷遺跡第6次調査の調査区が存在し、さらに市道新宮線を越えると下古志遺跡群が広がっている。現地表の標高は9.0m程度と、D区より低い。E区東端は、D区同様調査前の状況は宅地であり、大部分が搅乱されていた。中央より西側は畠であった。

基本層序（第197図）

西側は暗灰褐色粘砂質土（4層）と暗茶褐色土（6層）が基本的な上層である。後者には近世の遺物が含まれているので、基本的には地山以上はすべて近世以降の堆積と見られる。ただし、場所によってはこの下に中世の遺物を含む黒褐色土（7層）が堆積する。一方、東側には中世の遺物が出土する7層、弥生時代の遺物が出土する濃黒褐色土（9層）がかなりの部分で残存していた。なお、中央部で現表土が低く落ち込んでいる部分があるが、この地点は調査前池になっていた。地山は灰褐色砂、褐色砂質土などであった。標高は8.3m程度で、D区とはほとんど一緒である。以上のような状況のため、遺構の検出は他の調査区同様、基本的には地表面で行った。以下、竪穴建物、掘立柱建物、柵列、井戸、土壙、溝の順に概要を述べることとする。

A、竪穴建物

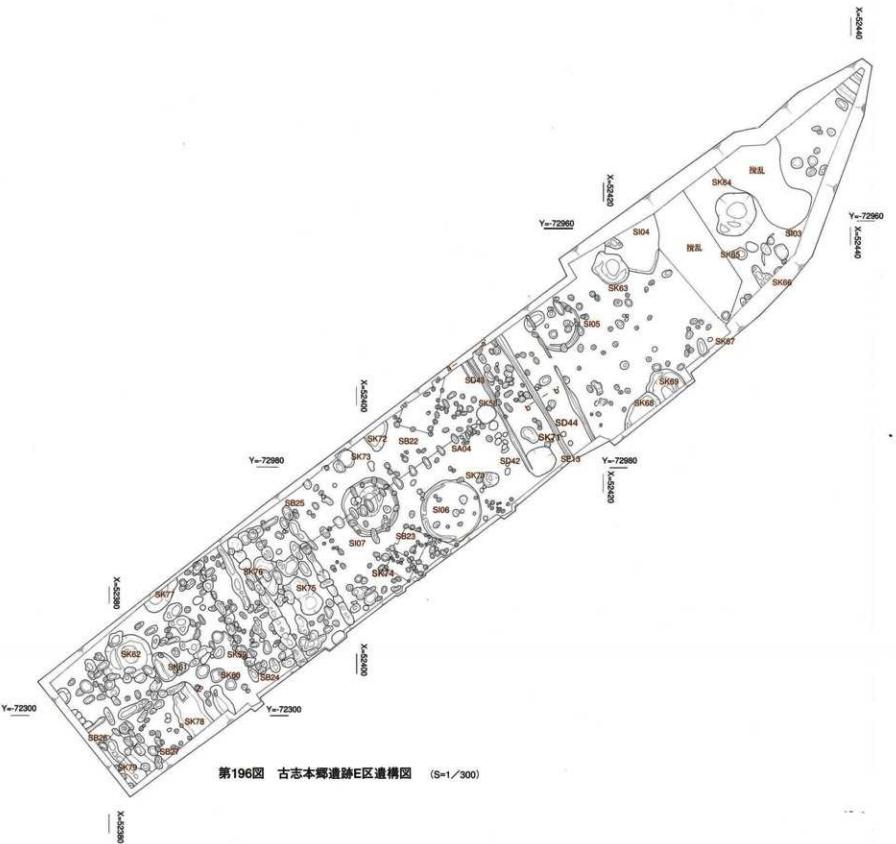
S I 0 3（第198図）

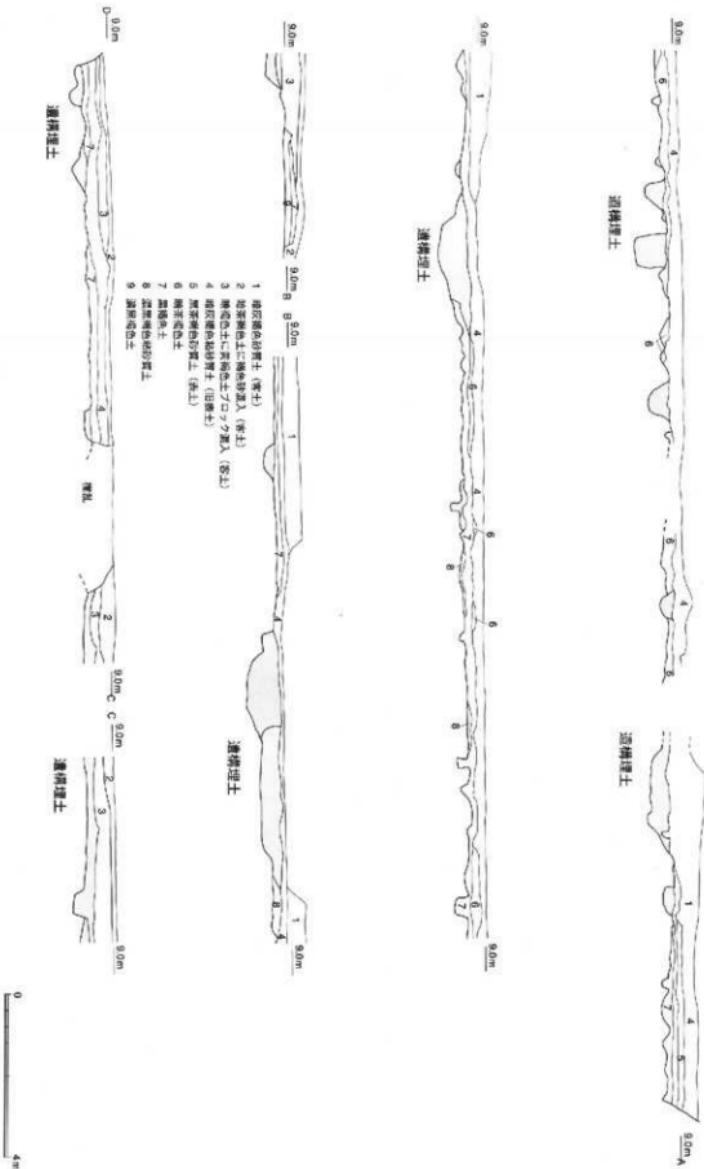
規模・形態 E区東側で約半分ほどを検出した。南側は調査区外に続くものと思われる。調査区内では弥生時代の遺物包含層が残る部分に当たるが、遺構内埋土と弥生時代の遺物包含層の区別が困難で検出状況は良好ではなかった。規模は推定で直径6m前後の円形をなすものと思われる。深さは、南壁面でおよそ30cmを確認することができた。なお、本遺構はSK66を切っている。

土層堆積状況 遺構の埋土は分層不能の濃黒褐色土1層からなっていた。張り床などは確認できなかった。遺物は地山直上から出土している。床面の標高は8.7mである。なお、遺構周辺の地山は崩壊しやすい灰褐色砂である。

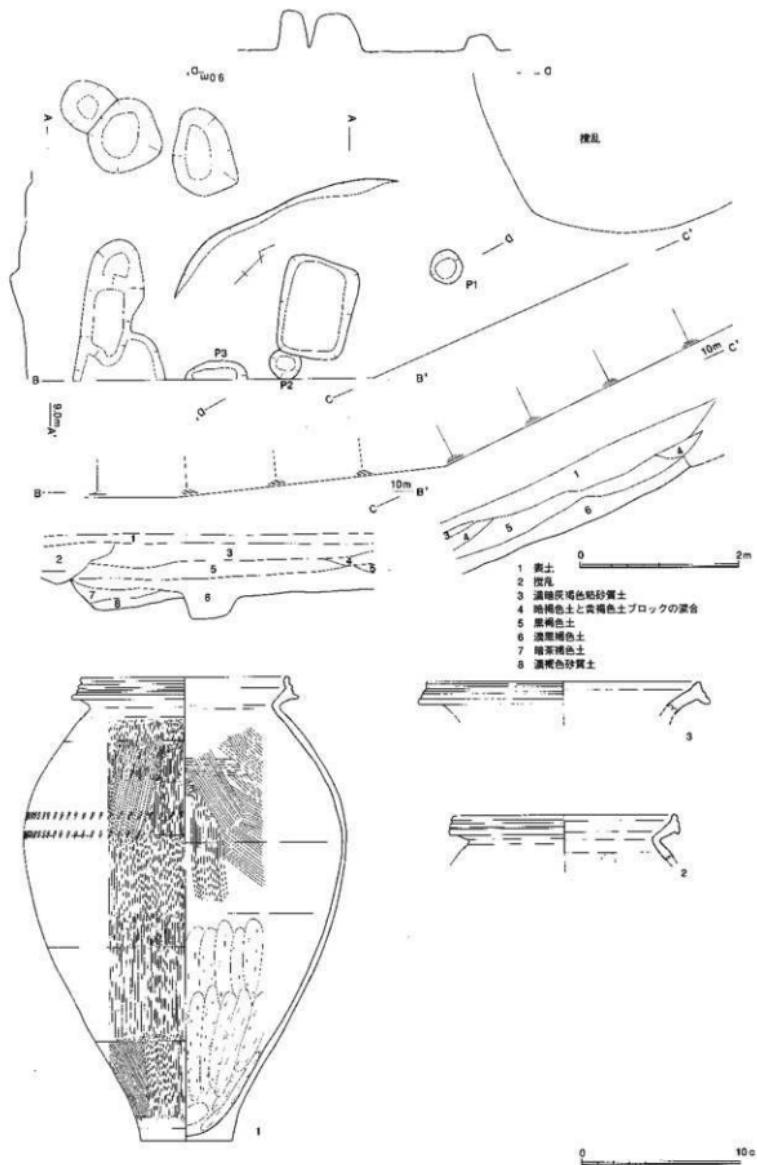
柱穴・壁体溝 柱穴は2本確認されている。P1・P2は共に直径40cm程度の円形の上端を持つが、深さは大きく異なり、P1が20cm、P2が40cmに達する。後述するS106・07同様、4本柱のうち2本の柱穴のみが深い形態をなすことが想像される。P3は、埋土を共有する長辺70cmほどのピットである。埋土の分層が困難であったことから、あるいはS103に先行するピットとも考えられるが、S103に伴う貯蔵穴の可能性も否定できない。P2の西に位置する長辺1m幅50cmほどの土壤は、P2を切っており、基本的にはS103と無関係のものと考えられる。壁体溝・中央ピット・焼土等については確認できなかった。

出土遺物（第198図） 遺物はいずれも床面から出土した。1は弥生土器壺である。1は口縁に3~4条の凹線を廻らし口縁部を上方・下方に引き出すタイプである。体部は綫ハケを施した上に、体部最大径付近にハケ工具小口などによるとと思われる列点文を2週廻らしている。内部の調整は体部中央付近までハケを施す。2は口径14cm前後の壺である。2は1と同様に上下に引き出す口縁

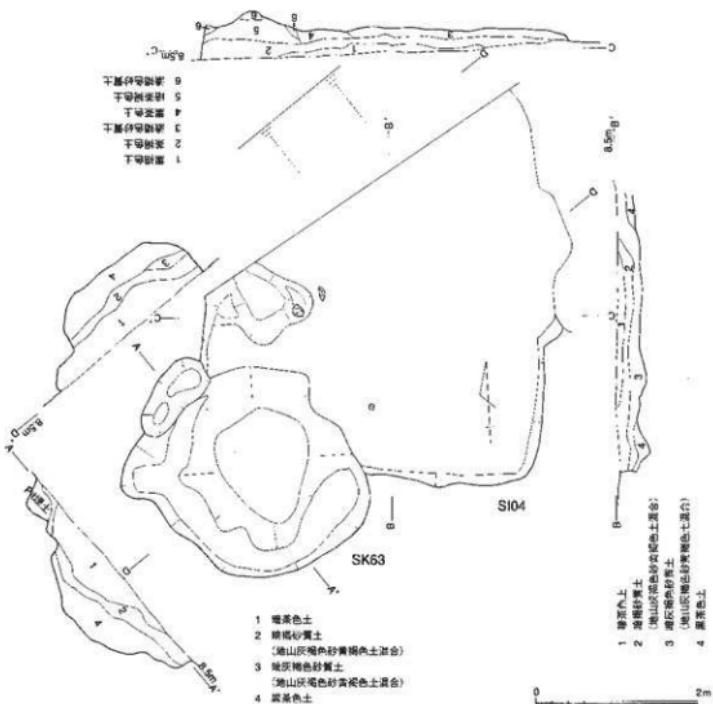




第197図 古志本郷遺跡E区土層図 (S=1/120)



第198図 古志本郷遺跡SI03実測図・出土遺物実測図 (遺構S=1/60 遺物S=1/3)



第199図 古志本郷遺跡SI04・SK63実測図 (S=1/60)

部に3条程度の凹線を巡らす。外面は縦ハケの上に肩部に列点文を1条廻らす。内面は肩部以上残存している部分はすべてハケで調整されている。3は口径17.3cmの壺で、口縁部は下方に拡張する。

年代 出土遺物はいずれもの松本IV-2様式のもので、本聚穴建物の時期も弥生時代中期末と見てよいであろう。

S I 0 4 (第199図)

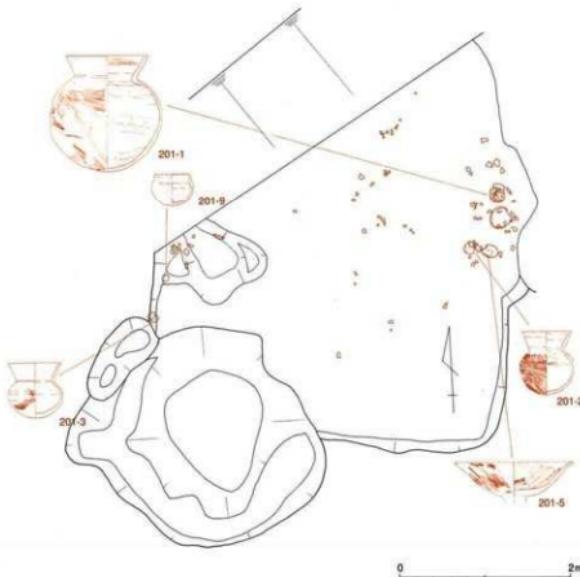
規模・構造 E区東側北寄りに位置する。検出した段階で調査区を工事用地界まで1.5mほど北側に拡張したが、検出できたのは半分程度であった。本調査中では検出状況の比較的良好な建物跡である。規模は東西4.2m、南北4.5メートルほどで、深さは西側で50cm程度である。西南隅はSK63に切られており、東側は擾乱を受けている。

土層堆積状況 上から黒褐色土(1層)、茶褐色土(2層)が堆積していた。また壁際土壙には暗茶

褐色土・濃褐色砂質土（5・6層）が堆積してた。建物の埋土と、壁際土壤の埋土は明らかに埋まつた時期の異なるものである。

柱穴・壁体溝 本堅穴建物内では柱穴は確認できなかつた。同様に壁体溝も明確には出来なかつたが西側壁面には建物内とやや異なる土（6層）が堆積する部分があり壁体に関わる可能性がある。

また、西側り部分には長さ約1mを



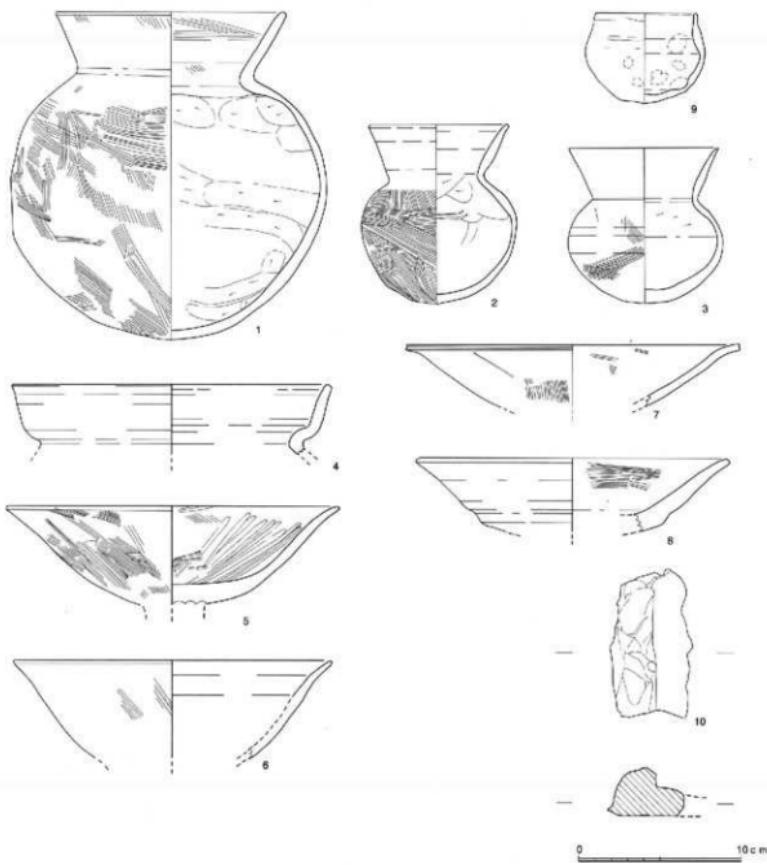
第200図 古志本郷遺跡S104遺物出土状況図 (構造S=1/60 遺物S=1/9)

測るいわゆる壁際土壤が存在する。土壤の断面型は逆三角形状を呈している。

遺物出土状況（第200図） 出土遺物は基本的には床面から出土した。特に建物東辺に集中し、甕3個体、高壺1個体が完形に近い状況で出土している。一方西側壁よりからは完形の小型丸底壺1個体、壁際土壤上面からは完形の手捏ね土器1個体が検出された。同土壤内部、床面中央部には土器小片が散在していた。なお、S104を切るSK63からは小型丸底壺（第225図5）が出土しており、これも西側に置かれてたものと推測される。

壁際土壤の性格 壁際土壤については、炉とする説と関連の施設とする説があり⁽²⁵⁾、近年、出雲東部の例について検討を加えた池淵後一氏は、炉ないし火に関わる施設であるとする。本遺構の壁際土壤の明確な性格付けは出来ないが、手捏ね土器が祭祀に関わるものとするならば、土壤の機能が停止し埋められた後に祭祀が行われたと見られ、火処廢棄に関わる祭祀との関連が指摘できる。

出土遺物（第201図） 1は単純口縁の甕で、外面、口縁部内面にハケを施すが、体部を全周する横ハケは見られない。2・3は小型丸底壺である。2は体部外面に縦ハケを施した後、横方向のハケを施すが、明確な形で一周はさせていない。口縁部は外反しつつも中央部が肥厚する。4は複合口縁の退化した甕である。5～8は高壺である。5は外面ハケ、内面縦方向のミガキで、底部は松山β接続法によって接続される。6・7は口縁部がやや外反するタイプで、若干のはけが施される。8は壺底部に段を有するもので、内面に横ハケが施される。10は器形不明の土製品で、板状の部分に手捏ねの張り出し部がつく。9は手捏ね土器である。内外面に指頭圧痕が残る。



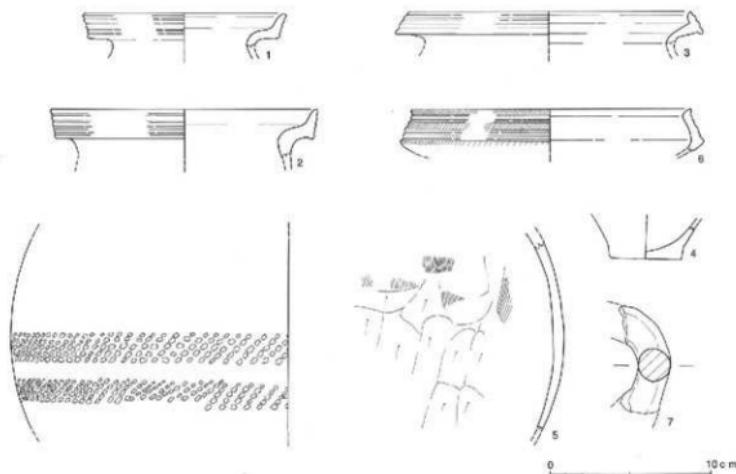
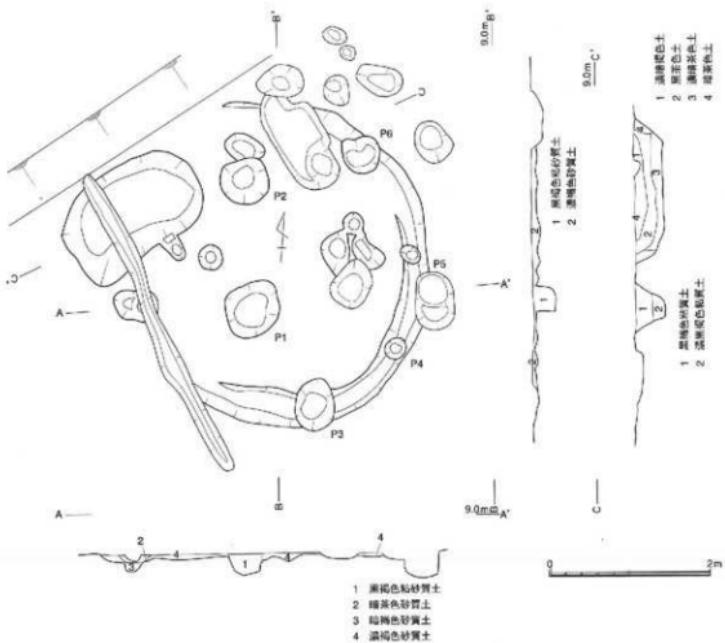
第201図 古志本郷遺跡SI04出土遺物実測図 (S=1/3)

年代 出土した遺物はいずれも松山Ⅱ期古段階の特徴を持つもので、本建物後出土のものは良好な一括資料である。SI04の廃棄の時期は古墳時代前期後半と考えられる。

S I 0 5 (第202図)

規模・構造 E区中央東寄りに位置する。ほぼ全面的に検出できたがこの部分は調査前に池状地形になっていた所で、特に堆積層が薄く、遺構の検出状態も良くなかった。規模は直径4mほどで、深さは10cm程度、床面の標高は8.5mであった。

土層堆積状況 堆積土は黒褐色粘質土(2層)であるが、検出状況が極めて浅いこと、主柱穴の堆



第202図 古志本郷遺跡SH05実測図・出土遺物実測図 (縮尺S=1/60 遺物S=1/3)

積土がこの2層を切ることから、遺構埋土ではなく張り床の可能性もある。

柱穴・壁体溝 柱穴は埋土などからP1～6が確実に本建物跡に伴うものと考えられる。このうちP1・P2は特に大きく深いことから、建物跡の主柱穴と考えられる。共に計50cm前後、深さ30～40cmを測る。一方P3～P6は壁体溝上に存在する柱穴で、共に建物跡の堆積層2層を切っている。大きさは計50cm近くのP3・P6がある一方で、計30cm以下のP4・5もあるが、これは検出状況の違いにも左右されており、いずれも深さは10cm程度と一致し、同性格の柱であったことは疑いない。これらの柱穴は堅体となる束柱的なものか。壁体溝は上述の小柱穴に切られる形で存在し幅30cm、深さ15cm程度である。なお、建物の北西隅には長辺1.8mほどの土壙があるが、本建物の関係は不明である。

出土遺物（第202図） 確実にS104に伴うものは2層から出土した第202図5のみであり、残りは前述の北西土壙から出土したものである。1～3は弥生土器甕である。1は口径14.6cmの小型の甕である。口縁部は上側に拡張され外反し、擬円線4条が施される。2は同16.8cmの甕で同じく擬円線が施される。3は1・2に比べると古い形態の甕で、口縁部は上下に拡張し、内径、四縁が施される。5は大型の堅体部であるが、S107下層土壙から出土した堅体部と接合した。堅体最大径下に5点からなる列点文2条を廻らし、内面は頸部以上はハケを施す。6は高杯7で口縁部に凹線を施すが、上下のみならず中間部にも刻目文を入れるものである。7は把手である。

年代 出土遺物は5が松本IV-2様式で、北西土壙の出土遺物は3を除き同V-1様式になる。S104の年代としては5の弥生中期末になろうか。

S106（第203図）

規模・構造 E区中央に位置する。今回の調査で検出された堅穴建物の中ではもっとも保存状況の良好なものである。なお、調査時には湧水に悩まされたが、これは現在周辺が水田化していることと無関係ではないであろう。規模は直径4.8m、深さは35cm程度である。底部の標高は8.3メートルであった。

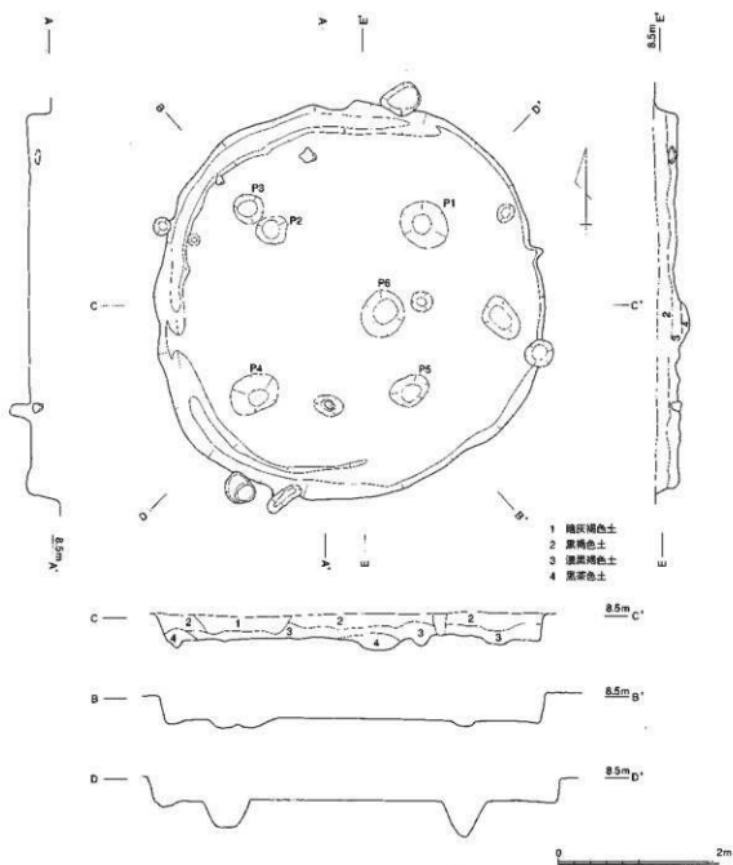
土層堆積状況 上から黒褐色土（2層）、濃黒褐色土（3層）が堆積し、中央ピットと壁体溝には黒茶色土（4層）が堆積していた。

柱穴・壁体溝 小穴は多数あったが柱穴として機能したのは次のものであろう。主柱穴（P1・P4）…径50cm深さ30～40cmを測る。補助的柱穴（P2・P3、P5）…径30cm、深さ10cm、P1・P2と対向する位置にある。中央ピット（P6）…径50cm、深さ20cm。焼土などは確認できなかった。壁体溝は西半分で良好に確認できた。幅20～30cm深さ10cm程度である。

遺物出土状況（第204図） 遺物は各層から溝遍なくなく出土しており、床面直上で押さえられたものはむしろ少數であった。

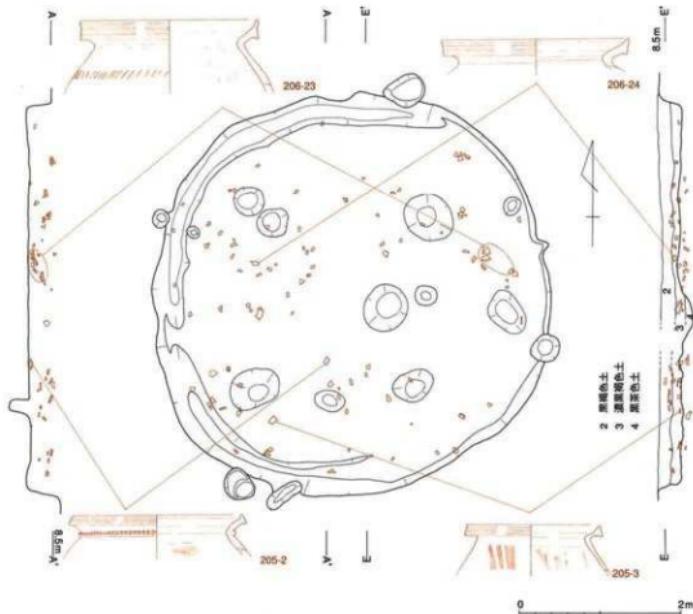
出土遺物（第205・206図） 床面直上出土として押さえられたのは1～4である。1～4は弥生土器甕で、1は肩が張らず、頸部内面の稜線も不明瞭で、内面は頸部までケズリ、一部ミガキを施すものである。2は頸部外面に凸帯を廻らし、ヘラ状工具によって刻目文を施すものである。3は最大径がやや下にくる甕で、内面はナデ後ハケを施す。

5～35は埋土からの出土品である。5～25は弥生土器甕口縁部である。いずれも外面に凹線



第203図 古志本郷遺跡SI06実測図 (S=1/60)

あるいは振凹線を廻らす。6は口縁端部を上方に拡張させ、内傾するものである。9・13・25は口縁端部を上下に拡張し、内傾されるものである。頸部内面にハケを施すものには口縁を内傾させるもの(11)、外傾させるもの(5・10)の両者がある。8・14・15・16・18は口縁を上方に拡張、外傾させる一群で、頸部内面には口縁部と体部を分ける明確な稜がないものである。21・22は同様の形態であるが、口縁部下半が内湾するタイプである。口縁部を直立・外傾させるものは口径の小さいもの(12・17)、中程度のもの(18・19)大型のもの(23・24)があり、頸部内面もやや後線を持つ。このうち18はハケ工具小口によって頸部に列点文が廻らされる。23は以上の弥生土器の中でも最も新しいものの一つで、頸部には貝殻復線による羽状文がある。



第204図 古志本郷遺跡S106遺物出土状況図 (遺構S=1/60 遺物S=1/9)

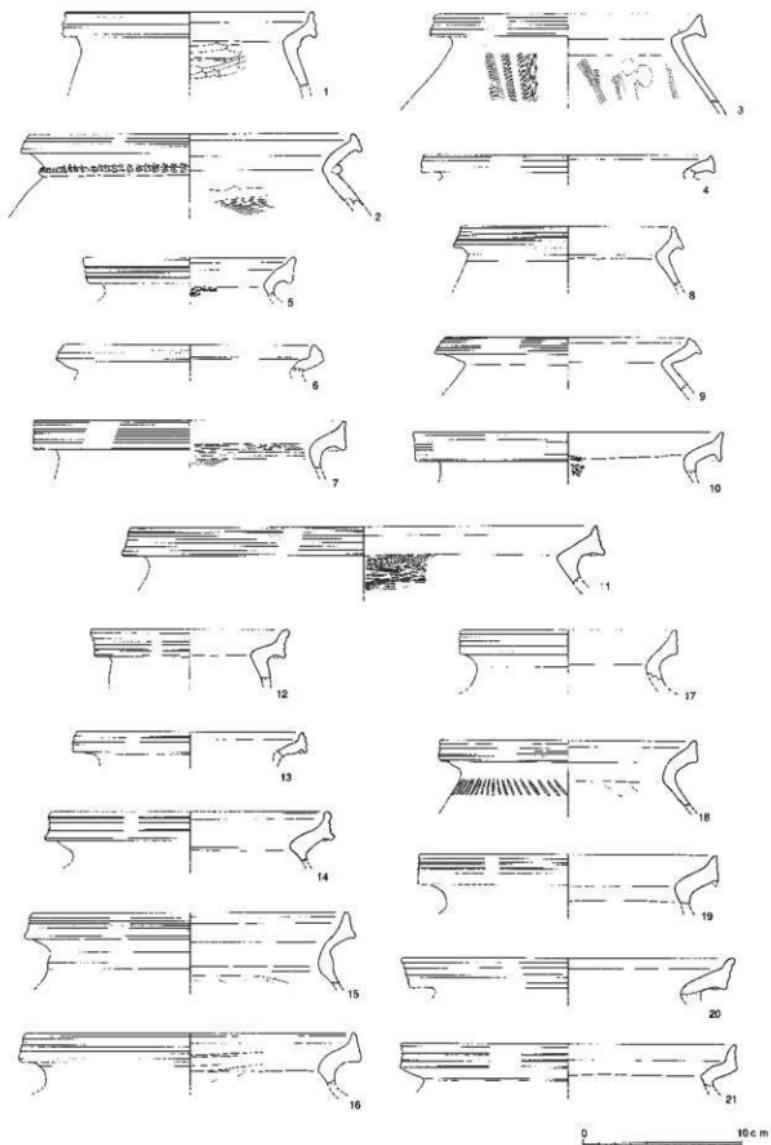
施される。26～28は壺底部である。29はやや小型の広口壺の頸部で、外面は縦方向のハケの後凹線を4条廻らし、内面もハケを施す。以上の弥生土器は松本IV-2様式から草田2期、弥生中期末から後期前葉のものになる。30は次期不明の壺である。外面にハケ、ミガキを施す。31も時期不明の土器で、口縁部には丁寧な横ミガキを施した上、内外面を赤彩する。また頸部には径2mmほどの穴が穿孔されている。32は土師質土器である。33は濃褐色の精緻な胎土をもつ鉢形の土器で、内面はミガキを施す。中世のものであろう。34は擦石、35は砥石である。

年代 床面出土の土器（1～4）は、1を除くと松本IV-2様式に含まれる。したがって、S106の廃棄年代は中期末に当たろう。埋土からの出土遺物は後期前葉まで続き、この間、本遺構は廃棄土壤的に機能したものと考えられる。

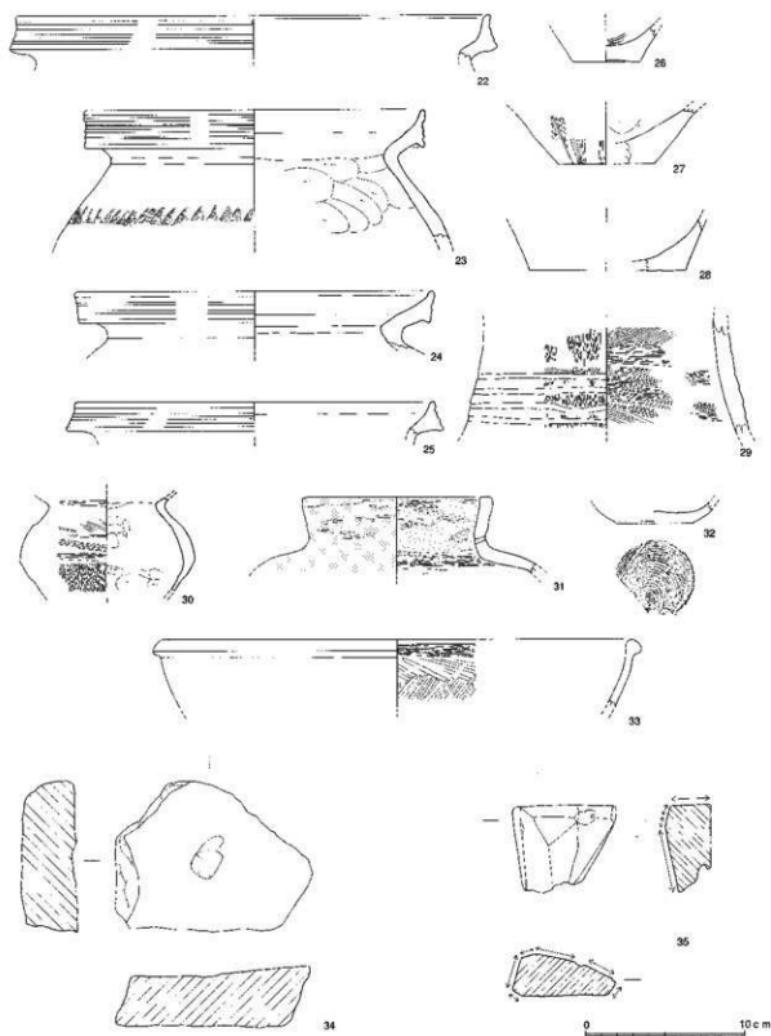
S107 (第207図)

規模・構造 E区中央やや西よりに位置する。規模は直径4.5m、深さは20～30cmである。底面の標高は8.4mであった。S106同様調査は湧水に悩まされた。

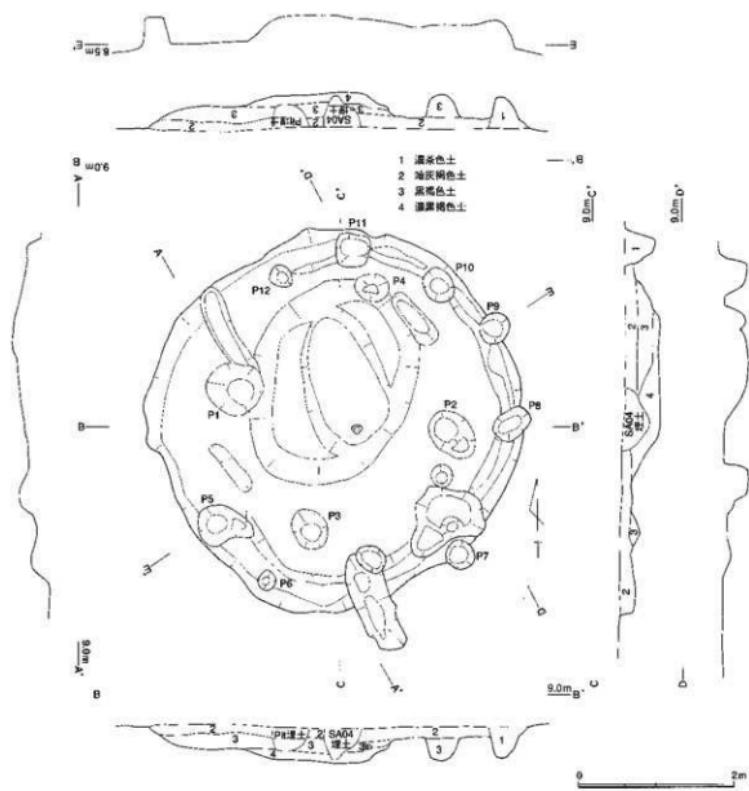
土層堆積状況 建物跡の埋土は事実上暗灰褐色土（2層）の一層のみであった。濃茶色土は、後述する壁体溝状の小柱穴の埋土であり、3・4層はS107と同時かそれ以前に存在した土壤（仮に



第205図 古志本郷遺跡S106出土遺物実測図1 (3=1/3)



第206図 古志本郷遺跡SI06出土遺物実測図2 (S=1/3)



第207図 古志本郷遺跡SI07実測図 (S=1/60)

中央土壤と呼ぶ)の埋土である。

柱穴・整体溝 SI 07ではそれに伴うP 1～P 12までの柱穴を確認した。P 1・P 2は上灌径60cm、深さ40cm(P 2については推定)の大型の柱穴で、本建物の主柱穴になるものと思われる。P 3・4はP 1・2と対向する位置にあり規模は、径30cm深さ30～40cmとやや小さい。P 5～12は、整体溝上にある小柱穴であるが、P 9のようにややはざれているものもある。また、全體の埋土(2層)を切って作られているは、SI 07との関係を疑わせるが、0.8～1mで等間隔に並ぶことから、SI 07の壁と何らかの関係があった遺構と解したい。整体溝は西側を除く全周に認められ、幅30cm、床面からの深さ10cm程度である。中央土壤はその大きさやP 1 P 3の切り合い関係からSI 07の形成以前のものと判断される。

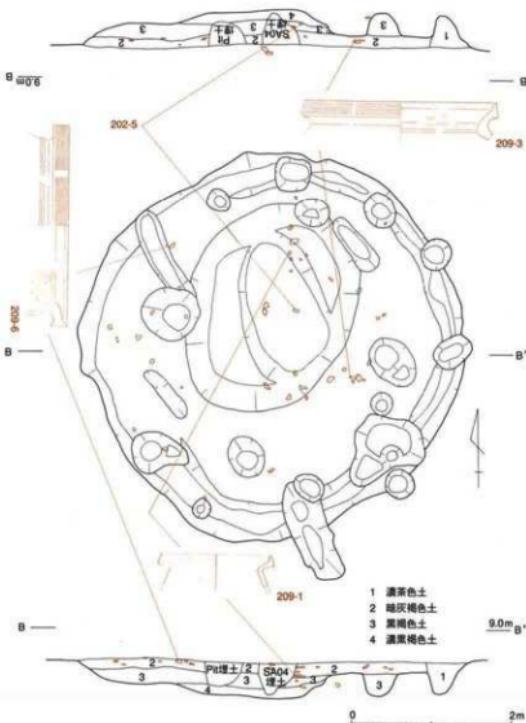
遺物出土状況(第208図) 遺物は、SI 06同様各層から出土しており、床面上の出土のも

のは少ない（第209図1～3・7）。SI05出土（第202図5）に接合した土器片は、SI07の中央土壙埋土から出土している。

出土遺物（第209図）
いずれも弥生土器である。1～3・7は床面から出土したものである。1・2は口径13～14cmの甕で口縁部に凹線を施し口縁部を内傾させる。1は頸部内側をハケで調整する。3は口径23.8cmの大型の甕で、口縁部はやや直立気味で、頸部も厚い。口縁部内面に若干のハケを施す。7は床面から出土した甕底部である。4～6は埋土出土の甕で、共に口縁を上下に拡張する。6は擬凹線を口縁に施し、内面はケズリの後頸部上半までハケ

を施す。外面はミガキを施す。8は口径13.4cmの小型の甕で、口縁部に凹線を廻らす。器壁は厚く頸部以下にはケズリを施す。9は無頸甕である。口縁部には凹線を廻らす。10は大型の広口甕頸部で、凹線、列点文、ヘラによる綾杉文が施される。11は金属製品であるが、SI07とは無関係であろう。

年代 出土した遺物は、床面のものが松本IV-2～V-1様式の両者にかかる位置のものであり、埋土から出土したものはIV-2様式からV-1様式までのものが含まれる。中央の土壙の時期は第202図5を見るかぎり中期のものになろう。SI07は中期後末の土壙の跡に竪穴建物が作られ、後期初頭前後に廃棄され、以後後期前葉にかけて廃棄土壙として利用されたものと考えられる。

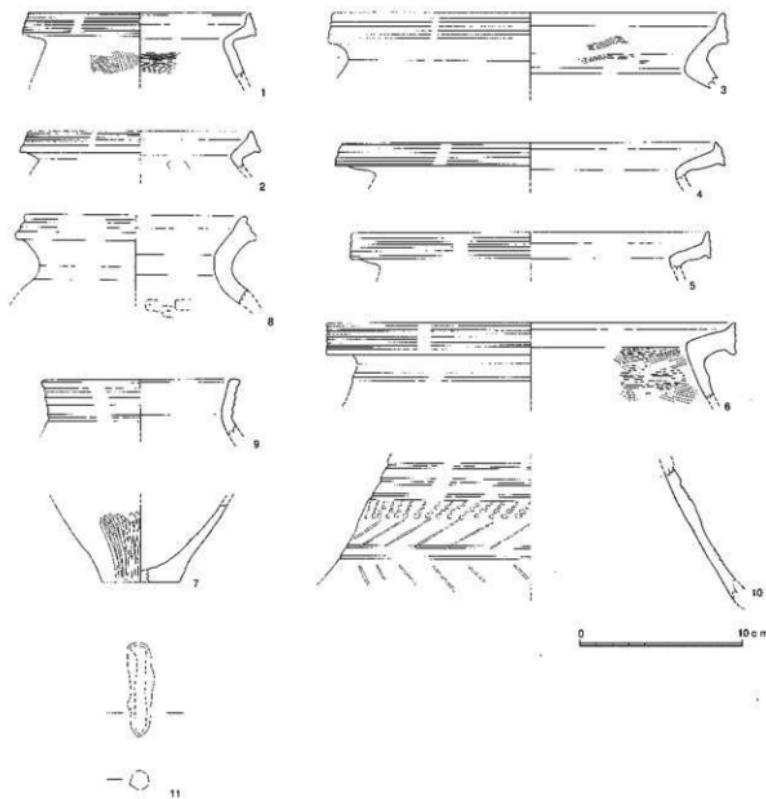


第208図 古志本郷遺跡SI07遺物出土状況図 (遺構S=1/80 遺物S=1/9)

B、掘立柱建物

S B 22 (第210図)

規模・構造 E区中央北辺区に位置する。規模は梁間2間(3.0m)×桁行2間(3.8m)以上の規模を持ち、C-C'を主軸と見た場合、N-14°-Wを指向する。柱間は、梁行(1.5m)に対



第209図 古志本郷遺跡SI07出土遺物実測図 (S=1/3)

して桁行（1.9 m）が幅広である。なお、本遺構の地山はよく締まった橙褐色土である。

柱穴 いずれも直径3.0 cm、深さ3.0 cm程度で、底面の標高も東南隅柱を除いては、8.1 mほどで共通する。なお、埋土は墨茶褐色系の土であった。梁方向の中央柱穴も、他の柱穴に比して特に大きいということはない。

年代 出土遺物はなく、年代は明確ではないが、埋土などから中世のものと推定される。

S B 2 3 (第211図)

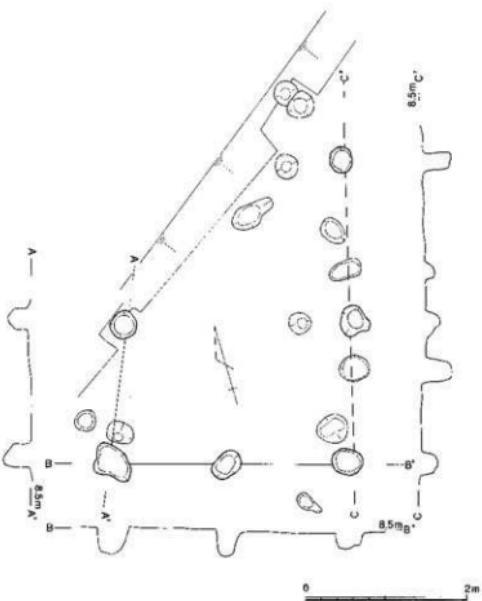
規模・構造 E区中央南辺に位置する。梁間2間×桁行2間以上の規模を持つ総柱建物で、B B'を主軸と見た他場合、N-6 1° -Wを指向する。ただし、平面型はE E'が北側にふれ不整形をなす。本遺構の地山もよく締まった橙褐色土である。

柱穴 いずれも径2.5cm、深さ4.0cm程度で、P1のみが径2.0cm、深さ2.0cmと浅く小さい。中央の柱も特に規模に変化はない、床束的な柱は想定できない。P3は東にずれる。

出土遺物(第211図1~3)

いずれも土師質土器坏で、西端の柱穴P1からまとまって出土した。後述するSB24の柱穴出土のように、祭祀行為として埋納された可能性もある。1はやや体部が内湾するもの、2・3は外反するもので、共に底部同軸糸切りである。

年代 出土遺物は土師質土器IV期に該当し、SB23の時期は中世末になろう。



SB24(第212・213図)

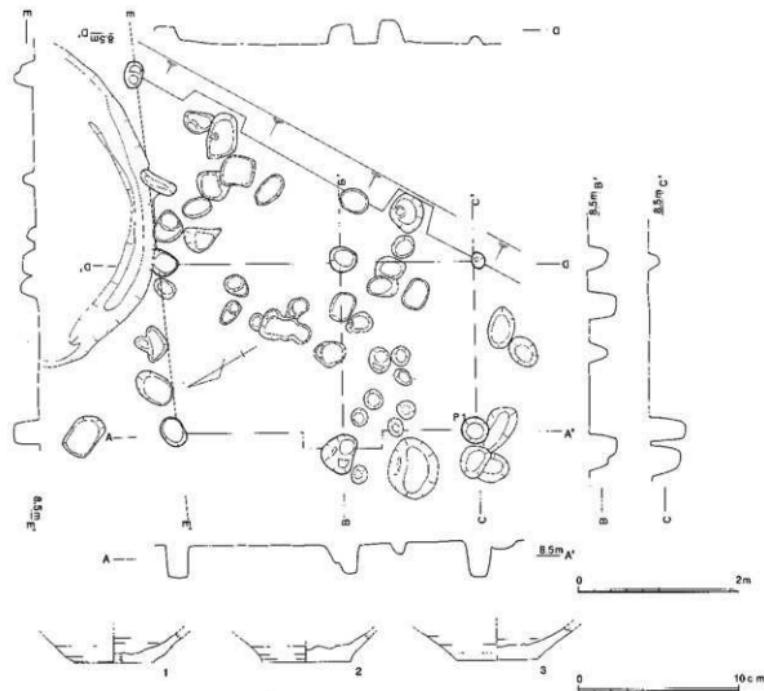
規模・構造 E区中央西側に位置し、調査区の全幅に及んでい

る。SB24・25は柱穴が切り合っており、新しいものをSB24、古いものをSB25とする。SB24は梁間3間(5.6m)×桁行5間(11.1m)以上で、北側は梁行の柱が見られないことから、調査区外に及んでいるものと見られる。梁行の柱間距離は西側の2間分が1.9m、東側1間分が1.5mと東側が小さく、この部分は庇をなし、西側梁間2間の身舎であったと考えられる。なお、地山は崩れやすい灰褐色砂である。主軸はN-27°Wを指向する。

柱穴 SB24の柱穴はP1~P14である。これらは側柱部分で、おおむね長辺1~1.5m、短辺0.6m程度の平面型で、深さ3.0~6.0cmの掘り方を持つ、それぞれ独立した柱穴として確認されている。この掘り方は大きいようにみえるが、平面型は必ずしも定型ではなく、断面もV形もあれば箱形ともみえるように多様であり、全体に統一が取れたものとは言い難い。堆積土は茶褐色型の砂質土を中心とする。P1・P3では直径1.5cm程度の柱根が検出されているが、P7・P10では砂質土の堆積する柱の抜き取り痕が確認されており、抜かれる場合もあったようである。身舎の東側柱列とほぼ重なるC'C'上のP21・22を切る独立の柱穴列は確認できなかったが、あるいはC'C'7~9層、10~12層、22層、29~31層がSB24のP2~6、P7~9に対応する可能性もある。

東南隅柱と出土遺物 これら柱穴のうち、東南隅のP1は複数のビットの切り合い関係の中で(図版74)、最後に位置づけられるもので、深さ約7.0cmを測り、底部から関係の土師質土器2点

第210図 古志本郷遺跡SB22実測図 (S=1/80)



第211図 古志本郷遺跡SB23実測図・出土遺物実測図 (遺構S=1/60 遺物S=1/3)

(第214図3・4)、鉄器3点が出土した。またP2から第214図5が、P5から同図2が、P6から同図1が出土している。

出土遺物(第214図1~8) 1~4は上師質土器である。1・2は、赤茶褐色で1mm大の砂粒を含むの胎土を持ち、強いナデによって作られる皿で、土師質土器Ⅲ期に当たる。3・4・6~8はP1から出土した。3・4は、直線的に立ち上がり、土師質土器Ⅳ期に類似する器形であるが、体部がやや丸みを帯びること、口縁部が厚いことからⅢ期に近い古段階のものと思われる。5は青磁碗で口縁が外湾するタイプである。上田D類に当たる。6~8は木質の付着した釘で、柾目材の板に打ち込まれていることが窺われる。全体としては箱状のものがあったのであろうか。先に述べた出土状況と勘案して、3・4・6~8はSB24造営に關わる何らかの祭祀に使用されたものと考えられる。

年代・性格 出土遺物は1・2と3・4で時期が異なるが、これは2の出土地点が、SB25を切って作られた柱穴であることによるもので、柱抜き取り痕跡のないP1から原位置に近い状況で出土した3・4すなわち、土師質土器Ⅲ期末~Ⅳ古段階が本建物の造営時期に当たるであろう。ほ

同規模のSB24が立て替え直されたものである可能性がある。

SB25(第213・214図)

規模・構造 SB24に切られる、連続上槽状の柱穴(P21~26)をもつ側柱建物である。梁間5.0m×桁行1.05m以上の規模を持ち、南側に梁行の柱列を持たないことから、さらに南に連続するものと思われる。主軸をCC'を見た場合、N-31°-Wを指向する。

柱穴 CC'、DD'は深さ40cm程度の連続土壌状をなしているが、CC'で見える柱穴(7~9層)に対応する柱はDD'では確認できないなど、SB24のように整っていはない。強いて桁行の柱穴を挙げればCC'で6間分(19層、7~9層、10~12層、6~14層、22~25層、29~31層、北辺)、DD'で6間分(1~2層、4~5層、10~12層、16~18層、19~20層、北辺に二つ)程度であろうか。柱穴埋土は茶褐色系ではあるが、地山灰色砂層が多分に含まれていた点もSB24の柱穴埋土とは異なる。

出土遺物(第214図9~15) 9~14は土師質土器である。12はP25出土、その他はP21出土である。9・10・12は1mm大の砂粒を含む赤褐色の胎土をもち、口縁端部が内湾、回転糸切りの底部で付近の側面を強くナデて、くびれさせる坏である。11は薄手で口縁部が内湾する坏で、本報告ではあまり類例がない。13・14は褐色の胎土で立ち上がりが丸く内湾するもので、SK60出土の土師質土器坏(第220図12)が同類である。15はP21の北端柱穴から出土した。底部外側も施釉する無高台の白磁皿で、大宰府分類の白磁皿X類、いわゆる口禿皿である。内面に陰刻はない。

年代 土師質土器はI~II期に当たり、SB25の年代は、中世後期初め頃と判断される。

SB26(第215図P1~P4)

規模・構造 E区西南端に位置する。西側、南側が調査区外に伸びており、梁間2間(2.0m)×桁行2間(4.8m)以上が確認される。BB'を主軸と見た場合、建物はN-52°-Wを指向する。SK27を切る。

柱穴 長径60cm短径30cmの楕円形をなし、深さは30cm程度である。底面の標高も8.6m程度で一定している。

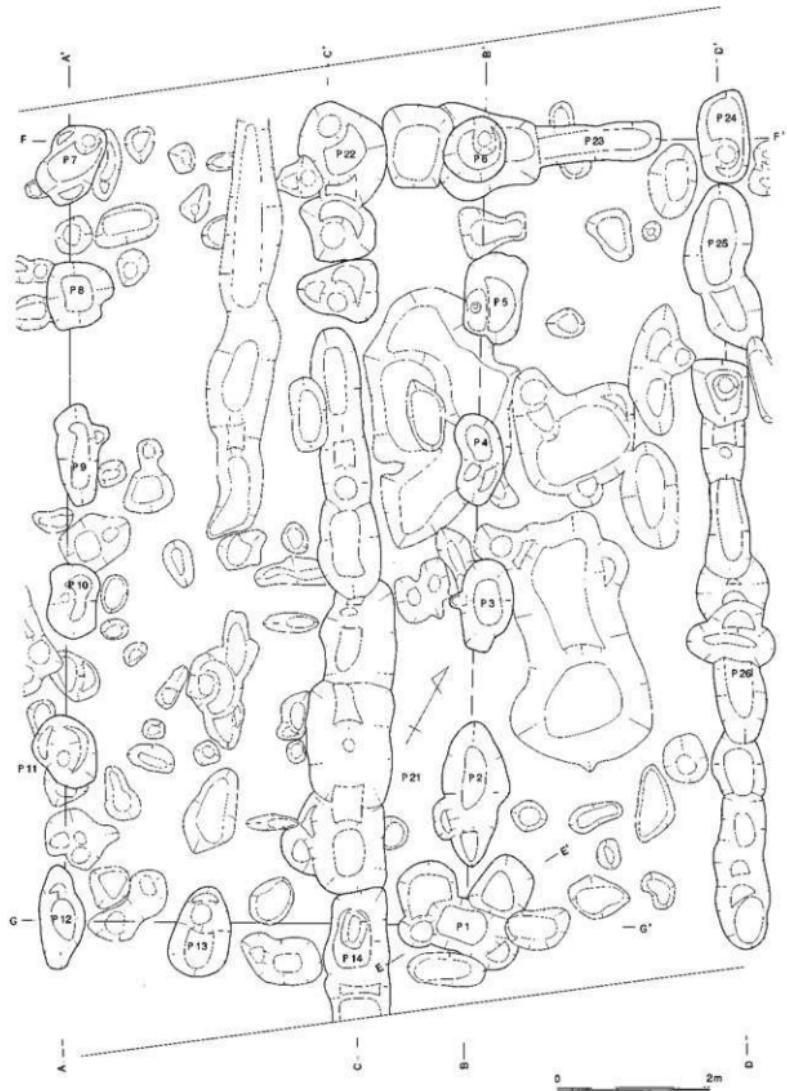
年代 出土遺物はなく、明確な年代は明らかでない。

SB27(第215図P5~P9)

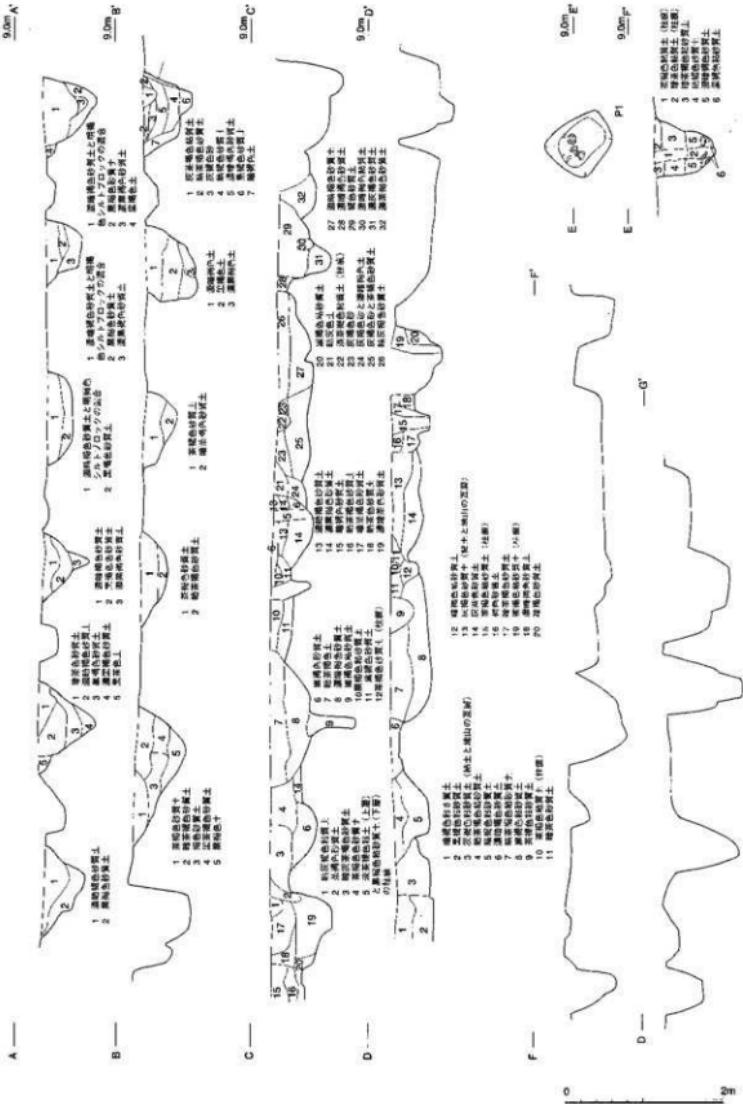
規模・構造 E区南西端に位置し、SB26と重なる。梁間3間(3.0m)以上×桁行2間(3.0m)以上の規模を持ち、AA'を主軸と見た場合、建物はN-52°-Wを指向する。CC'の北側にはピットが存在するが、それに対応するピットがAA'の延長上で確認できなかつたので、北側にはこれ以上建物が伸びないと判断した。東側に庇がつくことがわかる。柱間距離は桁行梁間とも1.5m前後である。

柱穴 多少形に変化があるが、長さ60cm、幅30~50cmの長方形をなし、深さは40cm程度、底面の標高8.4mと一定している。

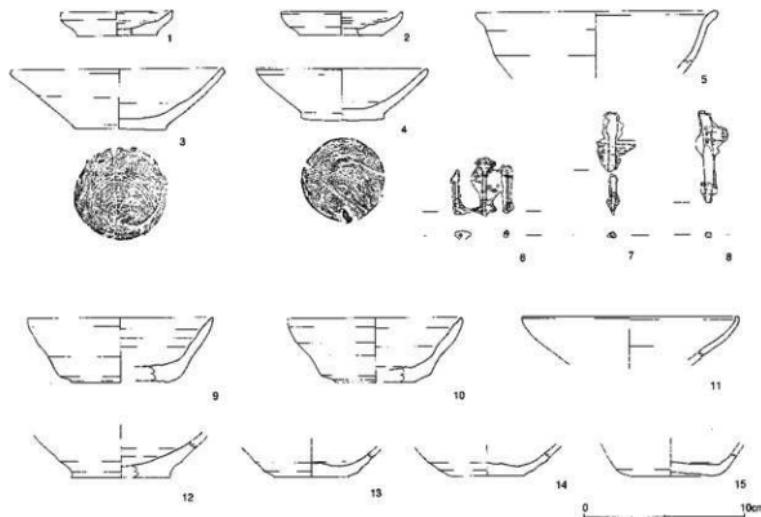
年代 出土遺物はなく、明確な年代は不明であるが、主軸方向はSB26と一致しており、両者は立て替えの関係にあったと思われる。柱間距離は小さいが、庇を持つことから大型の建物であつ



第212図 古志本郷遺跡SB24・25実測図1 (S=1/60)



第213図 古志本郷遺跡SB24・25実測図2 (S=1/60)



第214図 古志本郷遺跡SB24・25出土遺物実測図 (S=1/3)

たと推定される。

C、柵列

S A 0 4 (第216図)

規模・構造 E区中央をほぼ調査区と平行して伸びている。15間分、長さ23.6m程を検出している。主軸はN-55°-Eを指向する。柱穴はいずれも、長さ1.2m、幅0.6mの梢円形をなし、深さは0.4m前後である。茶褐色系の粘砂質土が堆積し、P1では径15cmほどの柱痕も確認された。

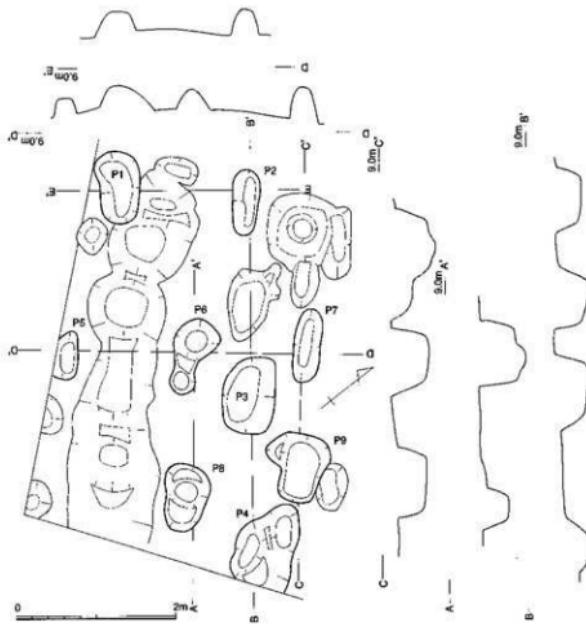
出土遺物 1・2は肥前系陶磁器である。1は緑灰色釉が施される陶器皿で、いわゆる溝縁皿である。2も同様のものであろう。

年代・性格 出土した遺物は17世紀前半に位置づけられ、S A 0 4 の年代もこの時期になろう。

D、井戸

S E 1 3 (第217図)

規模・形態 E区中央南辺で確認された。形態は上下2段をなしており、上段は1辺2m弱の隅丸方形をなし、深さは約0.8m、下段も上段同様一辺1.1mの隅丸方形をなす。湧水が激しく、調査区際にあることもあって、調査は下段を60cmほど掘り下げたところで停止した。下段には、横板を隅木で支える、横板組隅柱型の井側が確認されている。上段は後述のように井桁に囲われる土壙であろうか。SD4.2に切られる。



第215図 古志本郷遺跡SB26・27実測図 (S=1/60)

土層堆積状況 下段埋土5は粘質土で、上段に及ぶことから、井桁撤去時の埋土であろうか。1は地山ブロックを含み、井桁撤去に関わる埋土と見られる。であろうか。

年代 出土遺物はないがSD42に切られており、造構の時期は近世中期以前である。

E、土壤

SK58(第218図)

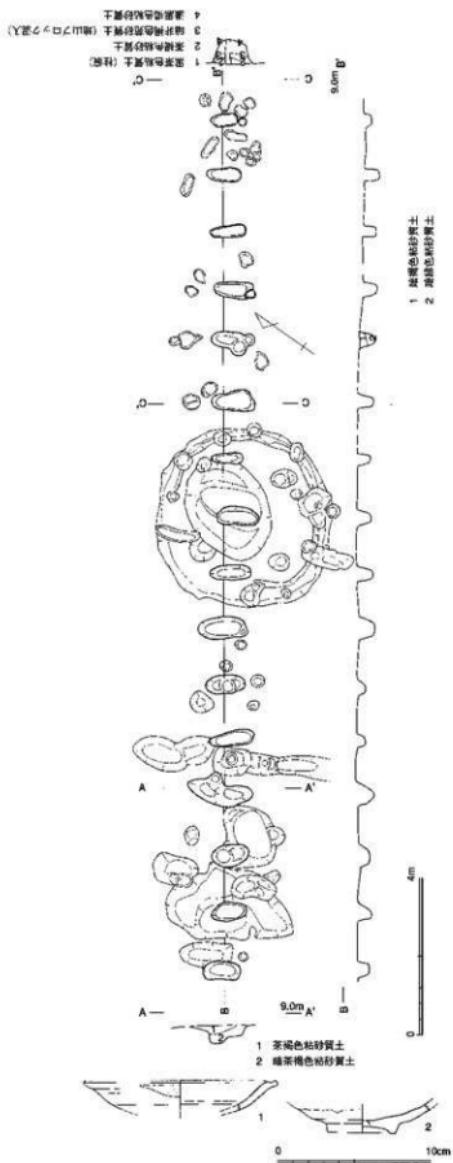
規模・形態 E区中央に位置する。一辺2mの隅丸三角形状をなす。深さは80cmで断面は箱形である。底部標高は7.8mほどである。

土層堆積状況 喰灰色系の土が堆積しており、底面から浮いた状態で径20~30cm人の石が存在する。石は、石組が崩壊した状況ではなく、投げこまれたものと推察される。

年代・性格 出土遺物はないが、SD42を切ることからSK58の時期は近世中期以降であろう。性格は廃棄土壠であろうか。

SK59(第219図)

規模・構造 E区西側中央に位置する。規模は長辺1.1m、短辺0.8mの梢円形の平面を持ち、深さ0.3mである。埋土は上層(1・2層)、下層(3・4層)に別れ、下層には地山が含まれ



第216図 古志本郷遺跡SA04実測図・出土遺物実測図
(遺構S=1/120 遺物S=1/3)

る。遺物は下層を中心に出土している。

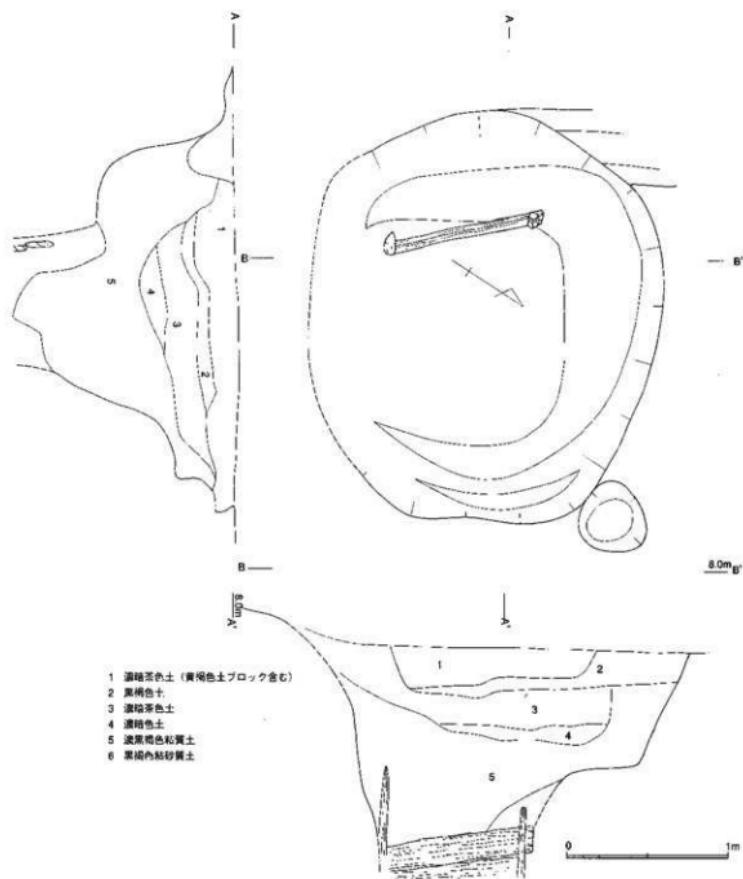
出土遺物（第219図） 1~7は土師質土器壺である。いずれも赤褐色で1~2mmの大砂粒を多量に含む胎土を持ち、底部は回転糸切りである。1・2は底部脇を強くナデてくびれされるタイプである。3~7は丸く内湾して立ち上がるグループである。前者が土師質土器I、後者がII期に当たる。8~11は土師質土器皿である。胎土は壺と同様で、11は強い回転ナデが内底部に残る。12は刃渡り19.5cm、全長29cmを測る小刀である。茎の部分には目釘穴が1カ所開いている。

年代 出土遺物は土師質土器I~II期に当たり、造構の年代は中世後期前半になろう。性格については刀の出土から土壤墓と考えることも出来るが、土師質土器は散在して出土していることから、廃棄土壙の可能性もある。

S K 6 0 (第220図)

規模・形態 E区西側南寄りに位置する。径1.3m前後の不整円形をなし、深さは60cmほどである。埋土は茶褐色系の土からなる1~5層と、地山灰色を多量に含んで構成される7~9層に分けられる。遺物は1~5層から、多くのものが破片の状態で出土している。また3~4層には径20~30cm大的石が含まれる。

出土遺物（第220・221図） 1~21は土師質土器である。12を除いていずれも1~2mmの大砂粒を含む、赤褐色の胎土を有し、底部回転糸切りである。1~8は底部周辺を強くナデ取り、くびれせるもので、口縁部の厚さも厚い。1・5などは底部の形状も楕円形をなし、1は器高も一定でないなど、大味な荒い作りである。復元図化してあるものは整った印象があるが、実態は1近いものが多いと推測される。なお、1には糸切りとは別に压痕が底面に残る。9~11は口縁が丸みを帯びるタイプである。12は乳褐色の胎土を持ち、内湾した器形であ

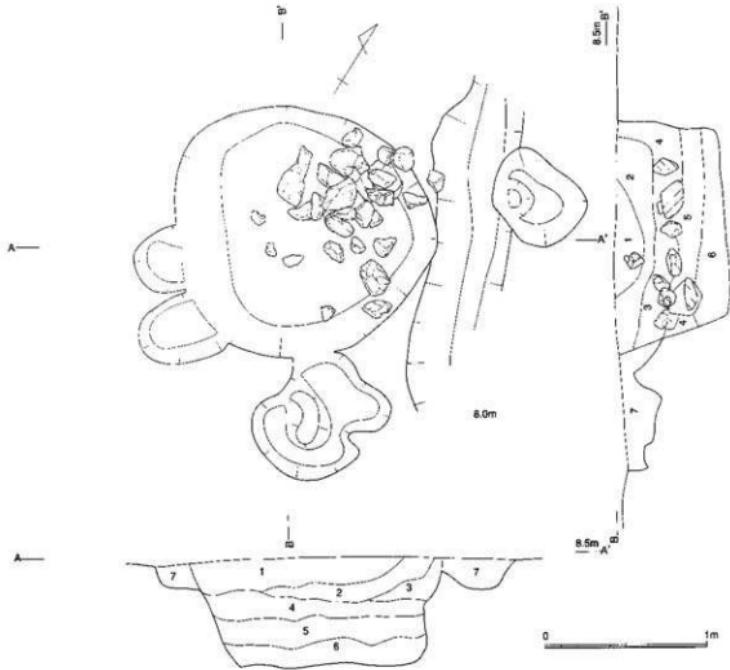


第217図 古志本郷遺跡SE13実測図 (S=1/30)

る。底部は回転糸切り。13～21は皿である。

17のように内面には強いナデ痕跡が残るものが多い。13～15、18～20は壺同様に底部周辺を強くナデ、くびれさせるタイプで、18は丸みを帯びて立ち上がるものである。17・21は両者の中間的形態を示す。22は陶器鉢である。暗茶灰色で1mm大的白色砂粒の胎土を持ち、口縁部に凹線状の沈線を2条程度持つ。この他、片切形のあるやや黄色みがかった青磁碗小片が出土する。

年代・性格 赤褐色の土師質土器は底部周辺がくびれる土師質土器Ⅰ期のものが主流で、遺構の年代も同じであろう。性格は廃棄土壤であろう。



第218図 古志本郷遺跡SK58実測図 (S-1/30)

SK 61 (第222図)

規模・形態 E区西端北側に位置する。長径2.8m、短径2.2mの梢円形をなし、中央から西側（深さ15cm）と、東側で深さが異なる（同35cm）。茶褐色土が堆積する。SK 62を切る。

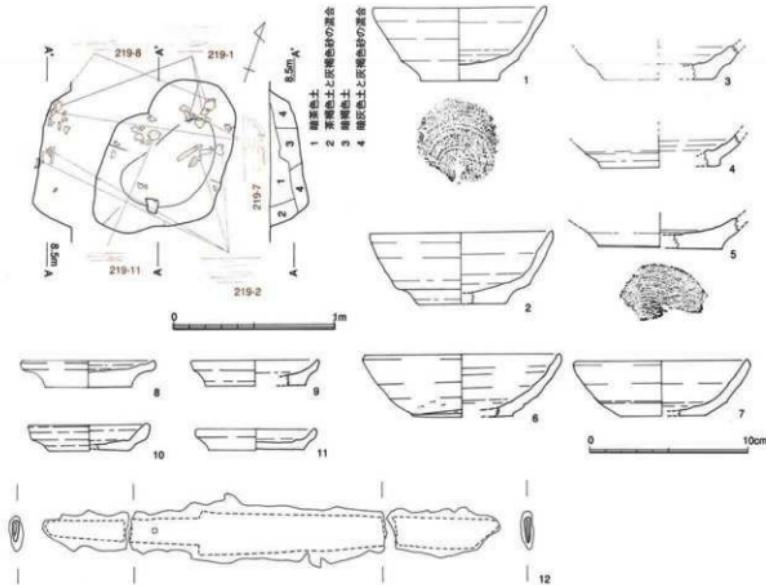
出土遺物 (第222図9) 全長14cm以上を測る鉄製紡錘車である。軸棒上側先端は糸をかけるためにJ字に曲げられている。はずみ車部は直径3.9cmで下側に湾曲する碗状をなす。

年代・性格 出土した土器は小片で造構の時期は明らかでないが、SK 62を切ることから、中世後期以降である。性格は不明である。

SK 62 (第222図)

規模・形態 E区西側北寄りに位置し、SK 61に切られる。径4.4mの不整円形の中に径1.8mほどの梢円の落ち込み分がある2段構造をなす。深さは上段で0.4m、下段で0.6mで、ともに断面は皿状である。茶褐色系の砂質土が堆積する。

出土遺物 (第222図1~8) 1・2は土師質土器の皿である。共に褐色の胎土を持ち、2は若干内溝する器形である。3・4は撚前焼擂鉢で、間隙皿期の所産である。5・6は小刀で5は9.6



第219図 古志本郷遺跡SK59実測図・出土遺物実測図 (遺構S=1/30 遺物S=1/3)

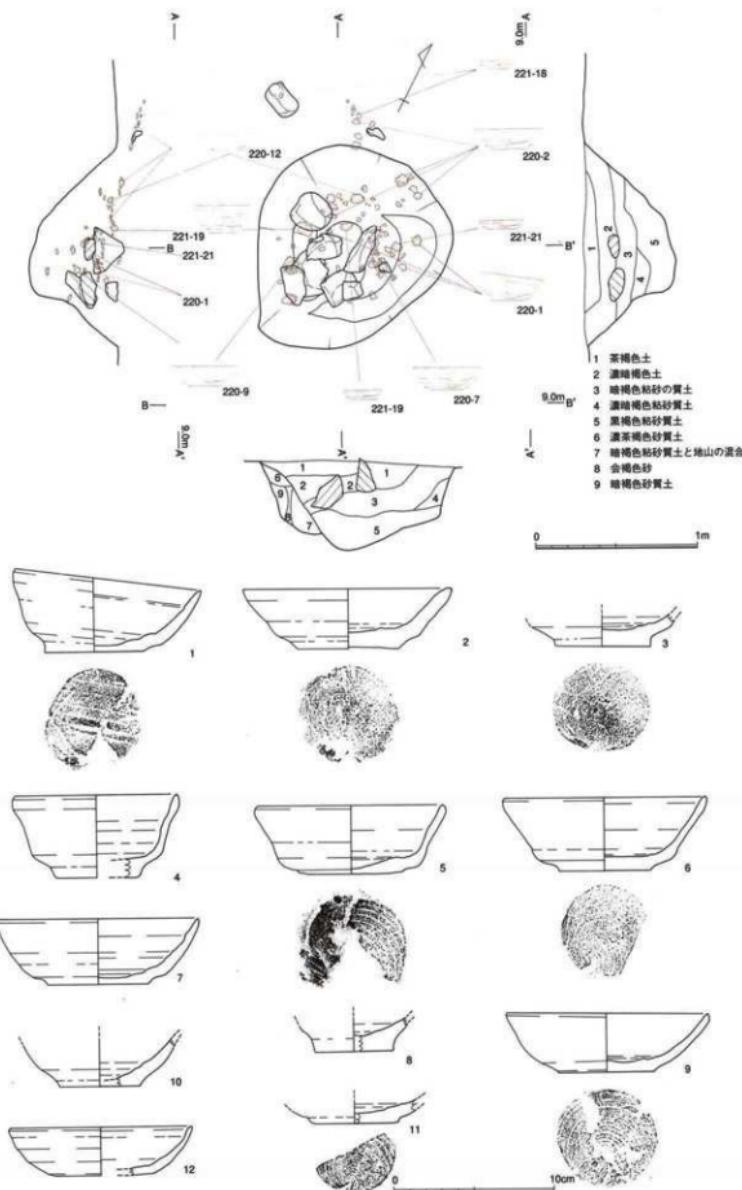
cm、6は10.8cmが残存する。7・8は板状鉄製品である。

年代・性格 遺構の時期は土師質土器からⅣ期、中世末と考えられる。遺構の性格は廃棄土壤であろうか。C区SK24、28と規模、時期が一致し、同類の遺構であると考えられる。

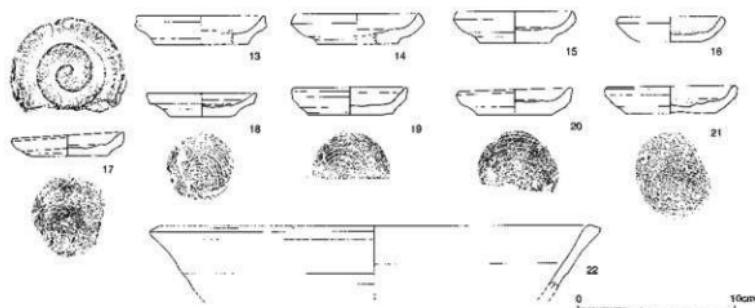
SK63 (第199図)

規模・形態 E区東側北辺に位置し、SI04を切っている。土壤は上下2段に別れ、上段の規模は直径3.0mの円形で、深さ0.3m、下段は直径2.0mの不整円形で、深さ0.5mを測る。底部の標高は7.7mである。暗茶褐色系の砂質土が堆積する。なお、第199図はSI04の形状を見るために遺構完掘状況で作成した図である。

出土遺物 (第225図4~13) 4は弥生土器腰口縁部で、端部を上下に拡張し、擬凹線を廻らす。頸部も器壁が厚い。5は小型丸底壺である。部外面にはハケが施され、全面に指頭圧痕が残る。6は単純口縁の壺の口縁で、内面に横向方向のミガキを施す。5・6は、前述のようにSI04内に置かれていたものであろう。共に松山II期古段階のものと思われる。7は須恵器高壺である。8は白磁の皿で底部のみ露胎とする。大宰府I類1bのものであろう。9~13は土師質土器である。9は茶褐色の胎土を持ち、内湾しつつ口縁が先細りになるもので、本報告では余り類例のないものである。13は柱状高台である。この他鎌蓮弁を持つ青磁碗小片などが出土している。



第220図 古志本郷遺跡SK60実測図・出土遺物実測図1 (遺構S=1/30 遺物S=1/3)



第221図 古志本郷遺跡SK60出土遺物実測図2 (S=1/3)

年代・性格 SK63の時期は、8や9・13から中世前期後半頃に位置づけられる、中世に関して言えば、本報告中で最も古い遺構である。性格としては素掘りの井戸が考えられる。

SK64(第223図)

規模・性格 E区東側に位置する。平面形は直径3mの不整円形で、深さ0.8mを測り、底部の標高は8.0m程度である。暗褐色土が堆積する。

出土遺物(第225図1~3) 1は須恵器低脚無蓋高杯の脚である。2・3は土師質土器坏で、2は比較的良質な胎土で、口縁部のみが外反し、外側に面を持ち、本報告内では類例がない。

年代 土師質土器の出土から中世であることは疑いないが、2・3の時期が不確定であり、詳細は不明である。遺構の形態はSK63に類似し、素掘り井戸ではないかと考えられる。

SK65(第223図)

規模・形態 E区東側、S103のすぐ北に位置する。直径1.2m、同2.0mの土壙が連結したような形状をなすが、埋土は共有している。黒褐色土が堆積する。

出土遺物(第225図14) 14は弥生土器壺である。口縁部に凹線3条を施し、内面頸部以下もハケで調整する。

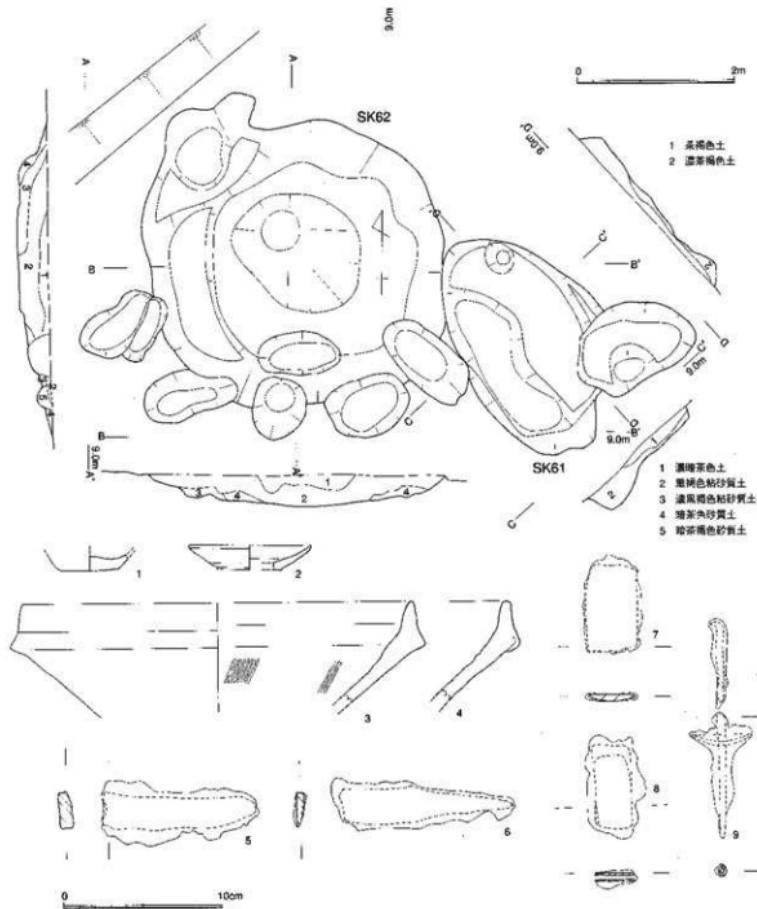
年代・性格 埋土や出土遺物から、弥生中期末の土壙と考えられる。

SK66(第223図)

規模・形態 E区東側、S103に西接する。長径3.6mの梢円をなし、両側は調査区外に続いている。深さは20~30cm程度である。黒褐色系の土が堆積していた。

出土遺物(第226図15) 15は弥生土器広口壺頸部である。外面は上部に凹線を3条以上廻らし、その下は縦~斜行のハケで調整した後、その上に3条の平行沈線からなる綾杉文と圓線を施す。内面にもハケが施される。

年代・性格 埋土や出土遺物から、弥生中期末の土壙と考えられる。



第222図 古志本郷遺跡SK61・62実測図・出土遺物実測図 (縮尺S=1/60 測定S=1/3)

SK67 (第223図)

規模・形態 E区の東側、調査区南辺で検出された。規模は長径2.2m、幅1.2m、深さ0.6mを測り、断面は箱形である。黒褐色の粘質土が堆積する。

出土遺物 (第225図16~20) 16~20はいずれも底部回転糸切りの土師質器である。

16は小型の皿で口縁部途中がくびれるタイプである。他はいずれも大型の皿である。

年代・性格 出土遺物の内16は土師質土器V期の大皿に近い形態を持つ。全体は同V~VI期、近

世前半のものと捉えられよう。性格は土塙墓と考えられる。

SK 68 (223図)

規模・形態 E区中央南辺に位置する。SK 69を切る。規模は長径4mを測る不整形で、深さは50cm、断面は箱形である。底面は平坦で、標高は8.3mである。暗褐色土が堆積する。

年代・性格 出土遺物はないがSK 69を切ることから古墳時代後期以降と考えられる。堅穴建物の一部である可能性がある。

SK 69 (第223図)

規模・形態 E区中央東寄り南辺に位置し、SK 68に切られる。直径3m程度の円形の平面を持ち、深さは約1m、底部の標高は7.9mである。断面は半円形をなし、途中にテラスがある。

出土遺物 (第225図21~23) 21・22は弥生土器壺底部、23は須恵器壺身である。

年代・性格 遺構の時期は古墳時代後期である。

SK 70 (第223図)

規模・形態 E区中央に位置し、長径1.8mの梢円形で深さは30cmで、暗灰色土が堆積する。

年代・性格 出土遺物はなく、時期や性格は不明である。

SK 71 (第224図)

規模・形態 E区中央に位置し、長径1.2m深さ、0.5mの梢円形の土塙である。

年代・性格 出土遺物はなく、年代は不明であるが、埋土から近世のものと推察される。

SK 72 (第224図)

規模・形態 E区中央北辺に位置する。1辺2~3mの三角形で、深さは0.8mほどである。堆積土は第1・2層と3・4層の2期に別れ、時期の異なる二つの土塙が重なっていると見られる。底部の標高は7.9mである。

出土遺物 (第226図24) 24は上下に口縁部を拡張する弥生土器壺である。ただし、前述の2期のいずれかから出土したのかは記録できなかった。

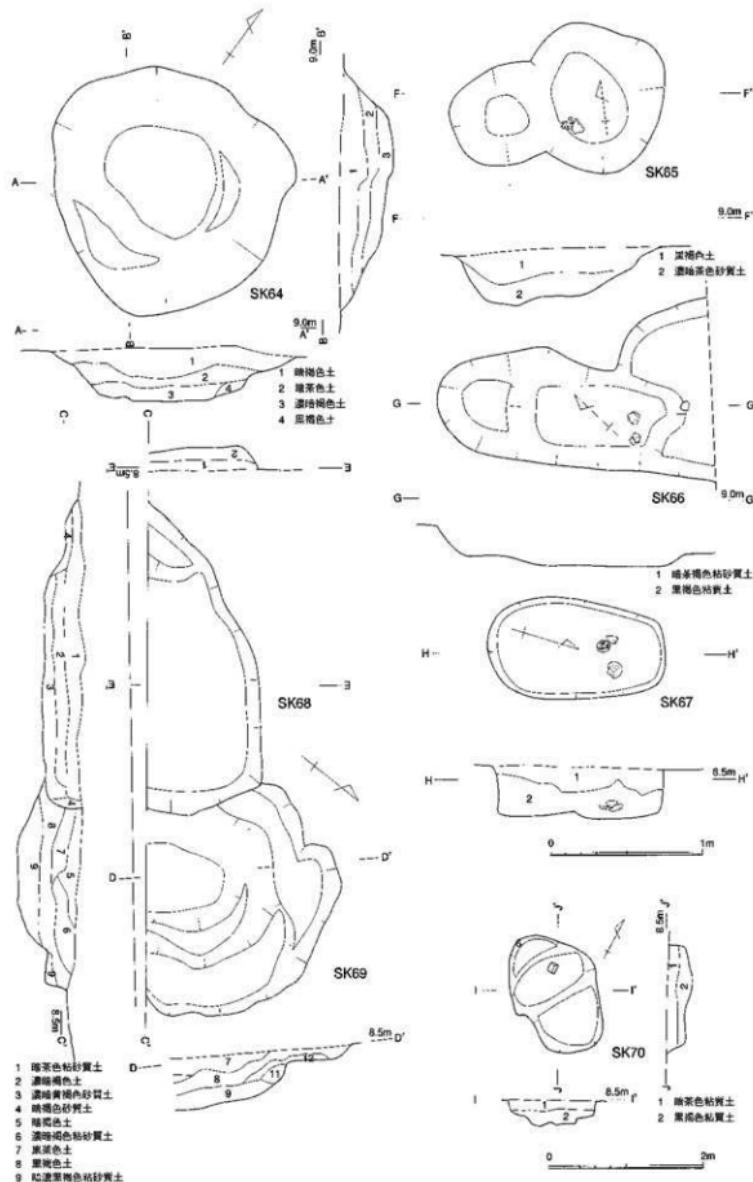
年代・性格 出土遺物から2時期の遺構のどちらかの時期は弥生時代中期末と考えられる。素掘り非戸であろう。

SK 73 (第224図)

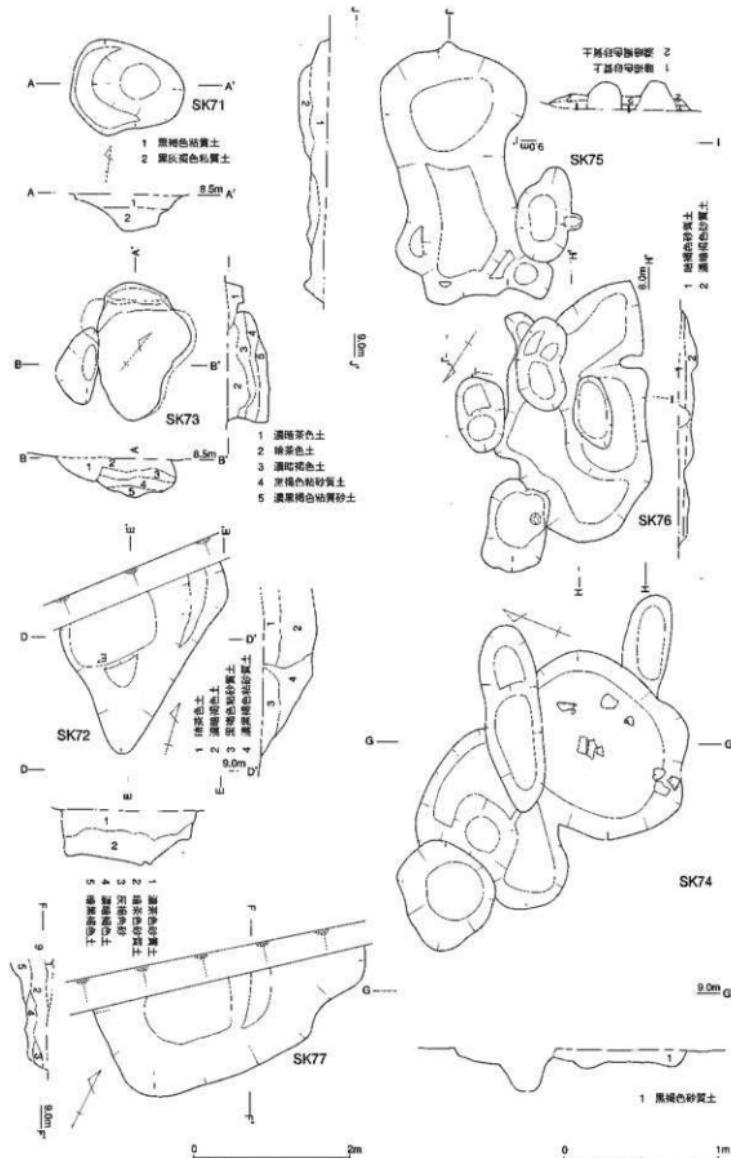
規模・年代 E区中央北辺に位置する。規模は長径1.8mの、短径1.4m、深さ60cmで、断面は袋状である。暗褐色系の土が堆積する。出土遺物はなく、年代性格は不明である。

SK 74 (第224図)

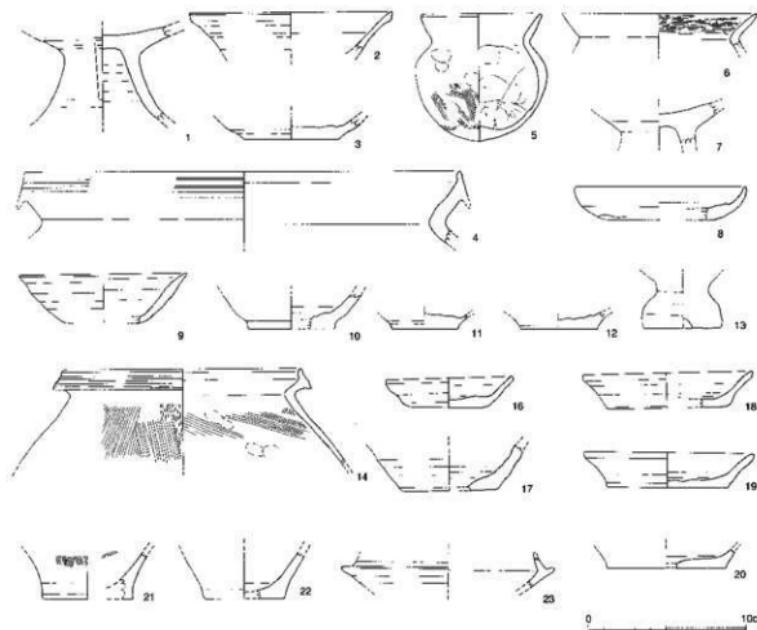
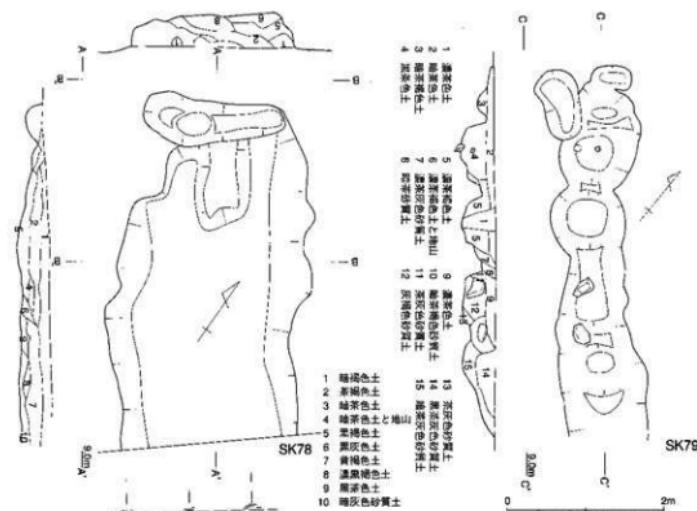
規模・形態 E区中央西より南側に位置する。径1~1.2m、深さ10cm程度の不整形土塙が重なっている。黒褐色土が堆積する。



第223図 古志本郷遺跡SK62~77実測図1 (S=1/60 SK65~67のみS=1/30)



第224図 古志本郷遺跡SK62~77実測図2 (S=1/60 SK74のみS=1/30)



第225図 古志本郷遺跡SK62~77実測図2 出土遺物実測図1 (S=1/3)

出土遺物（第226図28～30） 28～30は弥生土器壺である。いずれも口縁を上側に拡張する。29は内面頸部にハケを施す。

年代・性格 出土遺物は松本IV-2様式のもので、造構の年代もこの時期になろう。

SK75（第224図）

規模・形態 E区西側中央に位置する。長辺3.2m、短辺1.8mの楕円形で、深さは20cmを測る浅い土壠である。暗褐色土が堆積する。SA01に切られる。

出土遺物（第226図25） 25は弥生土器壺である。しかし、造構からは土師質土器小片も出土している。

年代・性格 出土遺物から造構の時刻は中世になる。性格については明確ではないが、C区SK24・28、E区SK61・62などと同じ、浅く平坦な造構である。

SK76

規模・形態 E区西より中央に位置し、SK75に南接する。南側は長径1.8m、深さ0.4mの椭円形をなし、北側は長さ1.5m、幅1.0m、深さ0.2mの長方形をなす。ただし、上層の埋土は共存している。埋土は暗褐色土である。

出土遺物（第226図26） 26は茶褐色の胎土を持ち、底部回転糸切りされる土師質土器の皿で、土師質土器I期のものである。

年代・性格 26から造構の年代は中世後期前半と考えられる。SK75同様、SK61・62と形態的に類似する。

SK77（第224図）

規模・構造 E区西側北辺に位置する。長辺3.6mを測る不正の長方形をなし、北側は調査区外に続いている。堆積土は暗褐色土が中心であるが、地山灰褐色砂の流入（3層）も見られる。深さは0.6mで、底部の標高は8.6m前後である。

年代・性格 出土遺物なく、造構の年代・性格などは不明である。

SK78（第225図）

規模・構造 E区西側に位置する。規模は完掘状況で幅2.3m、長さ4mを検出し、北側は二股に別れ、南側は調査区外に続いている。

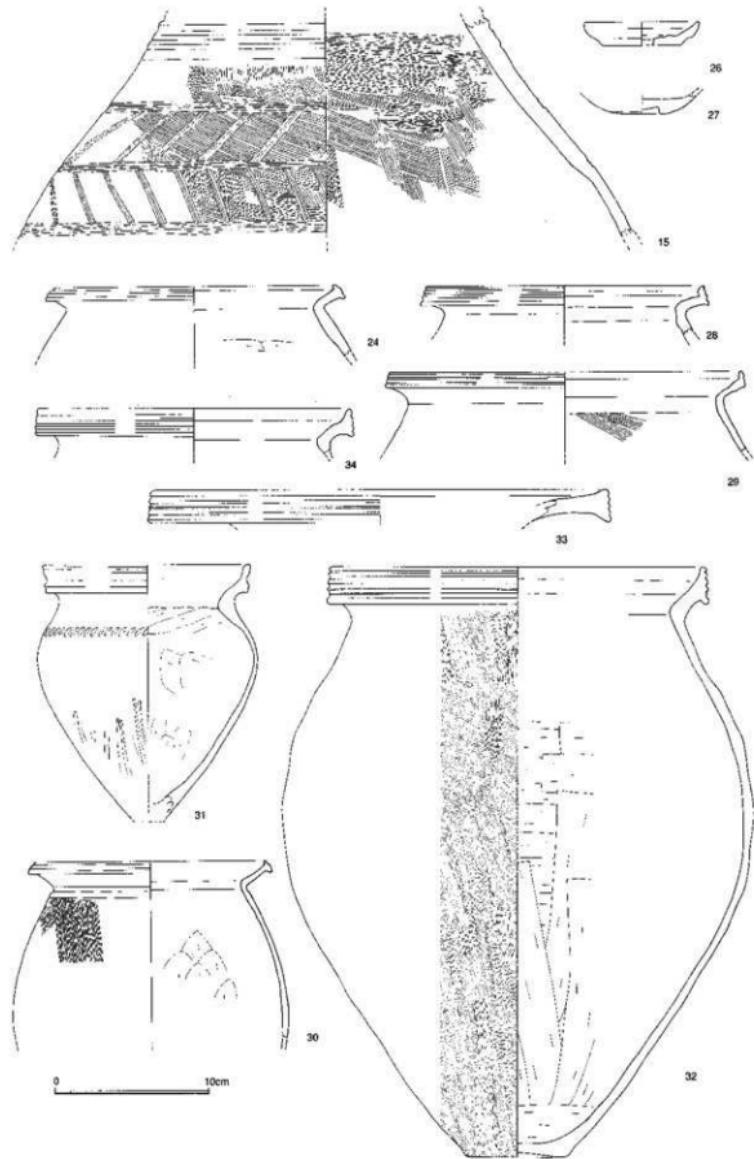
土層堆積状況 堆積土は上層（1～6層）と下層（7～10層）に別れ、前者は後者を切っていることから、南側（下層）が埋まった段階で、北側（上層）に拡張再掘削されたものと思われる。埋土に地山灰褐色砂が多く含まれている。

出土遺物（第226図27） 27は基筒底の白磁皿で、森田勉氏の分類のE類に当たる。

年代・性格 出土遺物からSK79の時期は、16世紀代と見られる。性格は不明である。

SK79（第225図）

規模・構造 E区南西隅に位置する。長さ4.5m程を検出し、南側は調査区外に続いている。道は



第226図 古志本郷遺跡SK61~77出土遺物実測図2・X地点出土遺物実測図 (S=1/3)

S B 2 5 の柱穴のように連続上擴状をなし、明らかに柱根が残る部分もあった（4層）。深さは最大で 5.0 cm 程である。

土層堆積状況 前述のように、複数のピットが切り合う形で検出され、4 層には直径 1.0 cm 程度の柱根が残る。1 層も柱痕跡と考えられる。一方、1.0 層、1.1 層で確認される石は、底部から浮いており、礫盤などとは考えづらいものである。

Z 地点出土遺物（第 196 図）

出土の概要 D 区西南端に近い、S K 7.8 と S K 6.0 の柱間地点付近（Z 地点）の地山面上から、数個体分の弥生土器が出土している。この部分は地山標高が高く、原表土が低い部分で包含層が薄く、堅穴建物の痕跡を飛ばしてしまった可能性もある。なお、周辺にはピットが多数あるが、これらピットから堅穴建物を積極的に復元することも出来なかった。

出土遺物（第 226 図 3.1～3.3、第 169 図 1・2）

第 226 図 3.1～3.3 は弥生土器である。3.1 は底部のみ復元できなかった、口径 1.3.4 cm の小型の壺で、口縁部は外傾し、肩部に列点文を施す。3.2 は底部まで部分的に復元できた壺で、口径 2.3.6 cm、器高 3.7.9 cm、底径 6.2 cm を測る外面は底部からの縦ハケを施し、内面は底部から体部までは縦方向のケズリ、体部からは横方向のケズリを施す。口縁部外面には擬凹線 5 条が廻らされ、頸部の器壁も厚い。3.3 は広口壺の口縁部で、端部に凹線 4 条が施される。第 169 図 1・2 は編集時に誤って S I 0.2 出土遺物としてしまったが、Z 地点出土の土器である。1・2 共に弥生土器壺で口縁部は断面三角形状を呈し、内傾し 1 は内面にハケを施す。

遺物の年代 出土遺物は松本 IV-2 様式から、同 V-1 様式、草田 2 期までが含まれており、このことからすると、Z 地点は土器窯り、あるいは廃棄土壠のようなものであった可能性もある。

F、溝

S D 4.2（第 196・227 図）

規模・形態 上幅 1 m、深さ 0.5 m を測り、南東—北西に存在する。茶色系の土が堆積する。

年代・性格 出土遺物はなく、年代、性格は不明である。

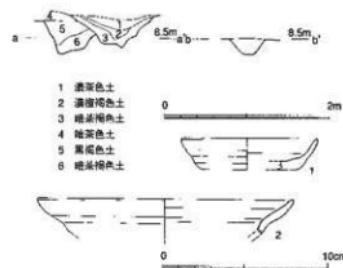
S D 4.3（第 196・227 図）

規模・年代 上幅現存 0.5 m、深さ 0.4 m を測る。調査区北区から南へ 2 m ほどの地点で途切れる。

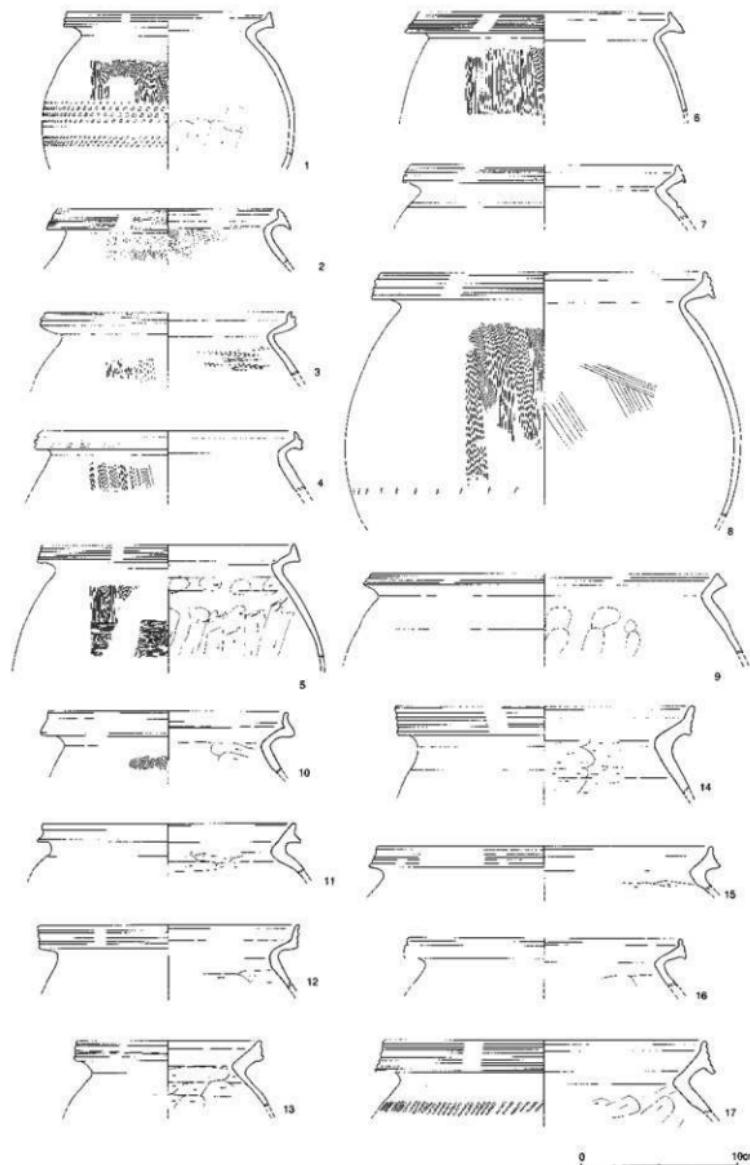
S D 4.2 に切られる。出土遺物はなく、時期・性格は不明である。

S D 4.4（第 196・227 図）

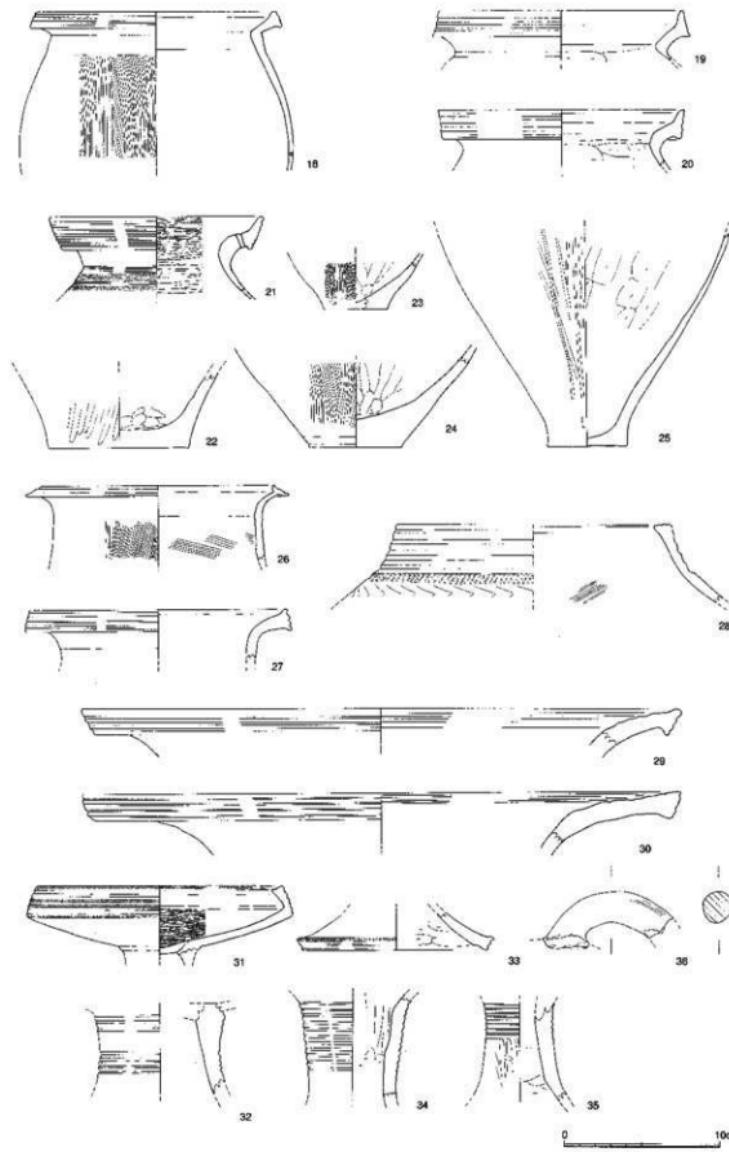
規模・形態 上幅 0.4 m、深さ 0.2 m を測り、南東—北西に存在する。



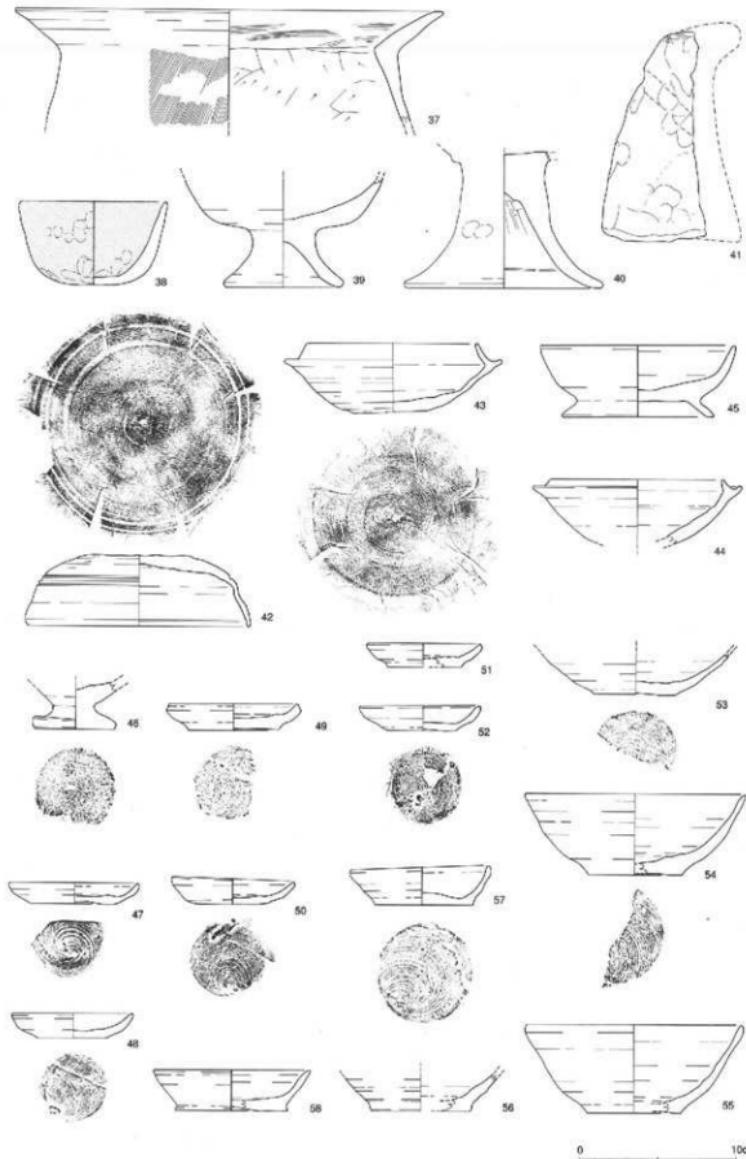
第 227 図 古志本郷遺跡 SD42～44 土層図・出土遺物実測図（土層 1/60 S=1/3）



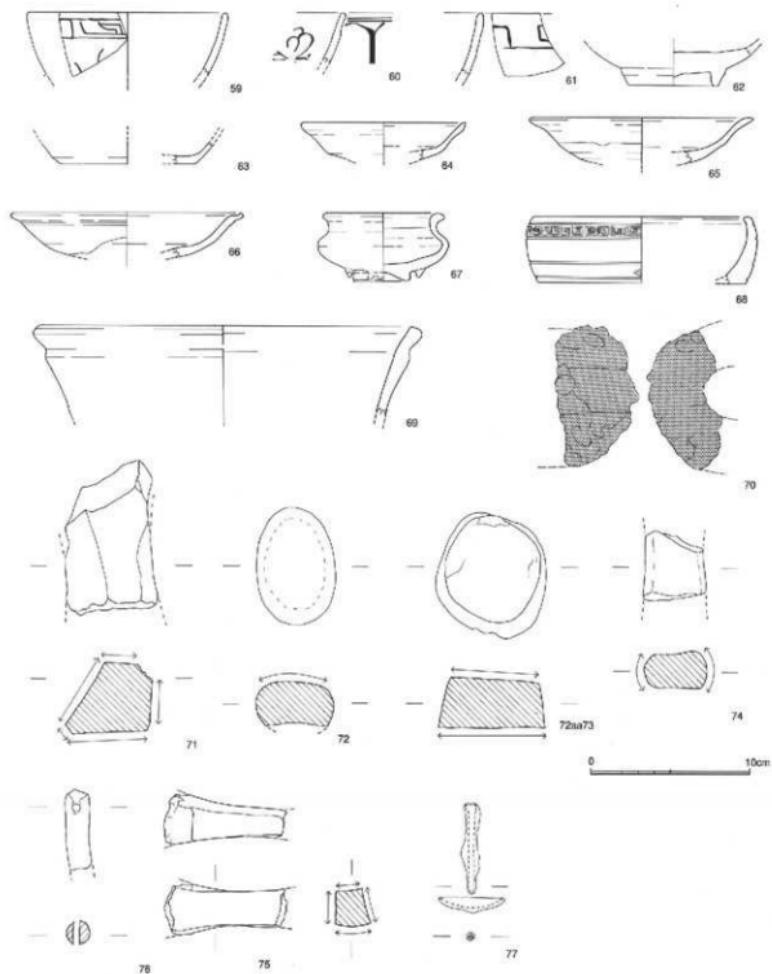
第228図 古志本郷遺跡E区出土遺物実測図 (S-1/3)



第229図 古志本郷遺跡E区出土遺物実測図 (S=1./3)



第230図 古志本郷遺跡E区出土遺物実測図 (S-1/3)



第231図 古志本郷遺跡E区出土遺物実測図 (S=1/3)

出土遺物 (第227図1・2) 1はVI期の上部質土器で、2は肥前系陶器の皿である。

年代・性格 遺構の年代は出土遺物から近世と考えられる。

E区調査区出土遺物 (第228~231図)

第228~231図にはE区調査区出土の遺物のうち、代表的なものを掲載した。1~21は弥

生土器壺である。1、3～5は口縁端部を上方に拡張し、2・7・8は上下に拡張するものである。いずれも外面は縦ハケを施し、5のみが横ハケも施す。1は体部最大系付近に3～4点…セットの列点文を2条廻らしている。内面は、1は体部下方までケズリ、上方はナデ、4・6・8が上方をナデとし、2・3・8はハケを施す。また、5には爪痕が残る。9は口縁部の拡張が不十分なものである。10・11は口縁部に凹線・擬凹線のみえないもので、11はやや直立気味の頸部を持つ。・13・15・17・18は口縁端部の断面が三角形状をなすものである。12・14・19・20・21は口縁部を上側に拡張させ、直立または外反させるものである。21以外は皆内面頸部までケズリが及んでいる。21は外面肩部に沈線とノの字状の刺突文を施し、内面は頸部下端まで丁寧なミガキを施すもの。口縁部には焼成前穿孔が行われ、台付壺の可能性がある。22～25は壺底部である。22・25は外面にミガキを施し、24はハケを施す。26・27は壺の頸部である。26は外面に縦ハケ、内面に横方向のハケを施す。28は直口壺である。やや内傾した頸部を持ち、凹線4条が廻らされる。その下に列点文、櫛状工具による羽状文が施される。内面には若干のハケが残る。29・30は広口壺で、29は口縁上面に4条の四線文が、30には同5条が施される。31～35は高壺である。31は口縁部に凹線5条を廻らし、上端下端に刻目文を加える他、凹線間の山の部分にもそれぞれ別個に刻目を施すもので、第191図3と同様である。32～35は脚上部で、32は最小部分で径8cmを測る大型品である。36は把手である。いずれも1区あるいは2区の凹線文帯を持つ。以上の弥生土器は松本IV-1様式から草田2期の間に収まる。

37～40は土師器である。37は壺で、水平近くまで口縁が外反するもので、口縁部内面にもハケを施す。38は手捏ねと思われる碗で、内外面を赤彩する。指頭圧痕が全面に残る。39・40は高壺である。41は頂部に2突起をもつ土製支脚で、背部上面から内部下方に向かって径1.5cm程度の孔が貫通する。42・43は須恵器壺と壺身で、同じ場所から完形で出土した(図版79)。42は頂部にやや雜なケズリを施すもので、内面は口縁端部に段を持つ43は底部にケズリを施すものである。ともに、大谷出芸A4類の壺で、同4期のものであろう。44は底部が不明であるが、43より時代の降るものである。45は高台のある須恵器壺である。

46～55は土師質土器である。46は柱状高台。47～52は荒い茶褐色の胎土を持つもので、底部脇をなでて絞るもの(48・49・51・52)、体部が外反し口縁部が丸く立ち上がるもの(47・50)がある。53～56は壺である。いずれも茶褐色の胎土を持ち、底部脇を絞るものである。以上は土師質土器I・II期の所産である。57～58は土師質土器VIの大皿であろう。

59～64は輸入陶磁器である。59・61は口縁部に雷文を廻らす青磁碗で、上田C-II類のものである。60は外面に丸彫り線描連弁を持ち、内面にも陰刻する。上田B-III類に該当する。63は白磁皿で底部全面施釉するものである。大宰府窯類に含まれよう。64は李朝と思われる皿で、濃灰色の釉に黒・白斑が混じる。この他、天目碗・同安窯系青磁碗・瀬戸美濃系陶器皿が出土している。65～67は肥前系陶磁器である。65・66は溝縁皿、67は青磁の香炉である。68・69は瓦質の鉢で、68は口縁部に雷文、底部近くに菱形文を持つ。70は羽口で、推定3cm程度の送風管を持つ。71～75は砥石である。74は内磨き砥石の同様両側面に研面を持つが、口は粗く、正作に使われたものではない。76は棒状土錘である。77は鉄製紡錘車で、直径4cm程度の内溝する円盤状のはずみ車と、上部に糸を結びつけるL字を部分を有する心棒からなる。また鉄鋤も出土する(図版149)。

註

第1節

- (1) 土師質土器の編年は第3章まとめで行ったものによる。
- (2) 戸戸千軒町遺跡では、不整形、廻岸施設なしの池と考えられる遺構が多数見つかっており、SK10もそれに準するものと考える(『草』「千軒町遺跡発掘調査報告書V』〔広島県戸戸千軒町遺跡発掘調査研究会編 1996年〕)。
- (3) 弥生土器の擬凹線については池淵俊一「まとめ」(『門生黒谷I遺跡・門生黒谷II遺跡・門生黒谷III遺跡』鳥根県教育委員会 1998年)の分類に従った。
- (4) 松山智弘「出雲における古墳時代前半期の土器の様相」(『鳥根考古学会誌』8 1991年)。
- (5) 鳥根県教育委員会「大角山遺跡」1988年。
- (6) 鳥根県教育委員会「宮田川河床遺跡Ⅲ」1983年。
- (7) 同上。

第2節

- (8) 鳥根県教育委員会「高広遺跡」1984年。
- (9) 川原和人・桑原真治「鳥根県斐川町西石後遺跡の中世墓」(『古文化談叢』18) 1987年。
- (10) 鳥根県教育委員会「陽徳遺跡・平ラⅠ遺跡」 1995年。
- (11) 八幡興「山陰における中世土器の変遷について」(『中近世土器の基礎的研究』) 1998年。

第3節

- (12) 秋山浩三「黒斑等の滑物属性からみた土師器焼成遺構」(『古代の土師器生産と焼成遺構』真陽社1997年)。
- (13) 木立雅朗「土師器焼成坑の分類」、森隆「中世上師器・瓦器の焼成窯」(火に前掲註12書)。
- (14) 上田秀夫「14~16世紀の青磁碗の分類について」(『貿易陶磁研究』2 1992年)。
- (15) 関望忠彦「備前焼」ニュー・サイエンス社 1990年。
- (16) 松本岩雄「出雲・隱岐地域」『弥生土器の様式と編年』木耳社 1992年。
- (17) 次山淳「初期布留式土器の西方展開」『古代』103 1997年。
- (18) 部遺跡階段状遺構出土遺物、山持川川岸遺跡に類似のものがある。鳥根県教育委員会『塩津丘陵遺跡群』1998年。出雲市教育委員会「山持川川岸遺跡」1996年。
- (19) 前掲註18書。ただし、大きさは山持川川岸遺跡のものが一回り大きい。
- (20) 鳥根県教育委員会「勝負遺跡・堂床古墳」1998年。ただし、時期的には勝負遺跡のものはやや降る。
- (21) 松山智弘前掲論文。
- (22) これら遺物の年代については、岩橋孝典氏に教示を得た。
- (23) 次山淳前掲論文。同「波状文と列点文」「文化財論叢Ⅱ」奈良国立文化財研究所1995年。
- (24) これらの遺物の年代については、次山淳・岩橋孝典両氏に教示を得た。
- (25) 出雲市教育委員会「上長浜貝塚」1996年。
- (26) 前掲註25書。

第4節

- (27) 川雲市教育委員会「出雲市の寺々(上)」1993年。

第5節

- (28) 池淵俊一前掲註3。
- (29) 太宰府市教育委員会「太宰府条坊跡Ⅱ」(『太宰府市文化財7』1983年)。同「太宰府条坊跡Ⅲ」(『太宰府市文化財8』1984年)。



第3章まとめ

第3章まとめ

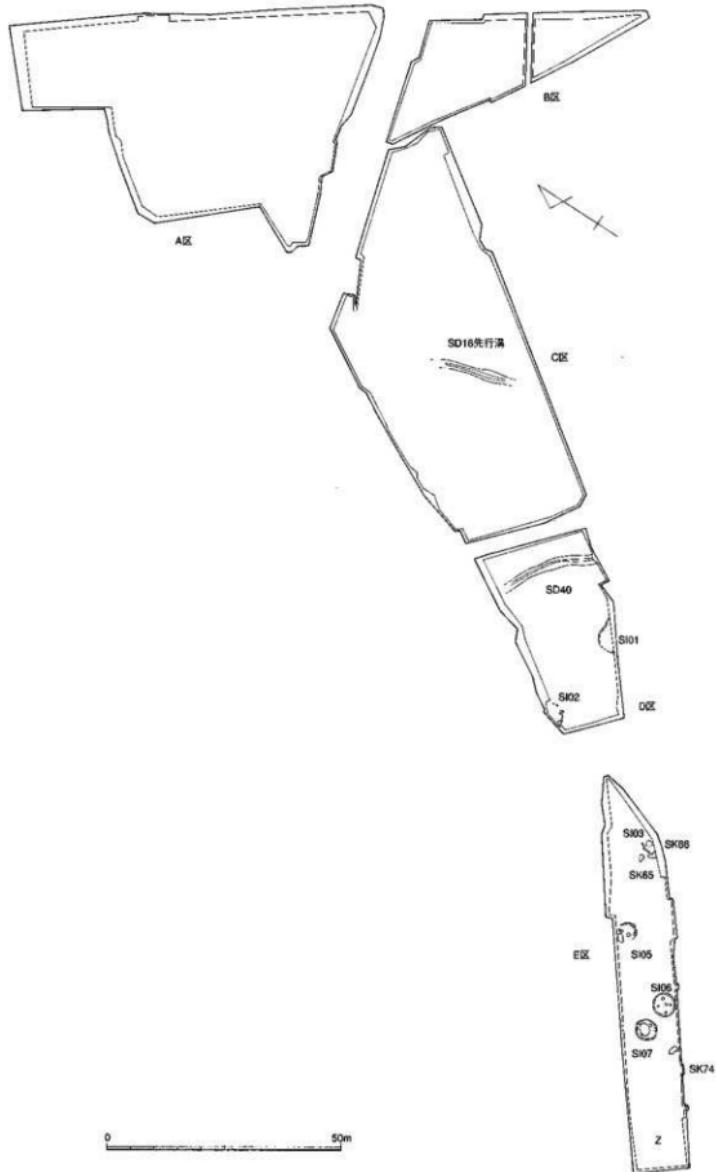
はじめに 平成7～8年度における鳥根県埋蔵文化財調査センターの古志本郷遺跡の発掘調査では、第2章で述べたように弥生時代～中世・近世にいたるまでの各種の遺構・遺物が検出された。本章では、各時代ごとに、調査区内の遺跡の特徴をまとめてみたい。ただし、本報告は古志本郷遺跡の一部であることや、隣接する下古志遺跡群の調査が行われていることなどから、いずれの時代においても遺跡総体の性格などについて言及するものではなく、調査区内の様相のみの報告であることをあらかじめ断っておく。

第1節 弥生時代の中期後半～後期前半の様相（第232図）

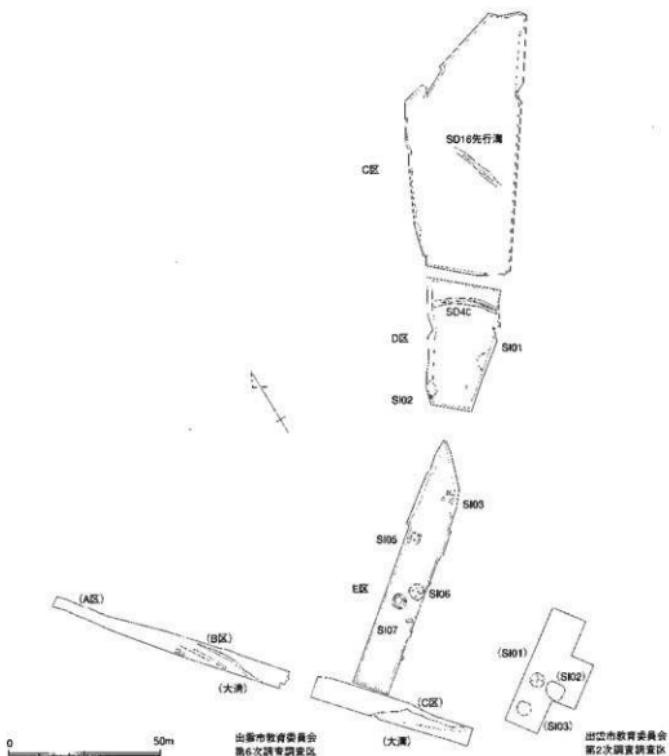
集落の範囲 弥生中期末～後期初頭という時期の遺構・遺物は、今回の調査で検出した遺構・遺物のうちで最も古い一群である。A区では縄文土器、C区では弥生前期の土器が出上するが、いずれも1点のみで、遺構にも伴わない。最初に調査区の全体的な傾向を述べれば、明らかに弥生中期後半～後期初頭と考えられる遺構はE・D区に集中しており、本報告で扱う範囲内ではE・D区に限られるといってよい状況である。A区SK06などからもこの時期の遺物が出土してはいているが、調査区出土遺物をみると、A～C区がE区に比して量的に大きく異なることが明らかである。

さらに、D区のSD40からは松本IV-2の土器が出土しており、この溝が当該期の集落における東を限る区画溝の一つであった可能性は高い（SD16先行溝については後述）。一方西側については、市道本郷新宮線以西については出雲市教育委員会による下古志遺跡群の調査の成果を得てあらためて検討する必要があるが、E区に西接する同市教育委員会の古志本郷遺跡第6次調査区（第233図参照）で、上幅4.0m、深さ1.0mを測る大溝が検出されている（表4参照）。以下大溝の概略を述べれば、4回以上の掘り返しが認められ、最下層からは松本IV-2様式の土器が出土して、特に同調査C区では今回報告のE区よりの束縛肩から松本IV-2様式の土器が出土している。この大溝が本報告D・E区で検出された弥生中期末～後期初頭の集落と関係することは明らかであろう。ただし、SD40と大溝の最初の掘削段階（第VI層）は底部標高が前者7.4m、後者7.0mと異なっており、存続時期もSD40は中期末には埋まっているので異なっており、両者の機能は別と考えるべきである。また、C区人溝SD16・17（第234図）の掘削開始時期は不明であるが、SD16・17の掘削時期がこの時代まで遡れば、これらが第6次調査の大溝に対応する可能性もある。一方、E区の南側では同じく出雲市教育委員会によって、当該期の竪穴建物3基、溝などが検出されており、集落はさらに南に広がっていたことが知られる。⁽³⁾

竪穴建物の形態 合計9棟の竪穴建物はいずれも円形で、S106・07以外は検出状況が不良で正確な大きさは測り難いが、おおむね直径5m～6mの範囲に収まる。ただし、S105のみは小型で、直徑4.8m程度である。柱は確認されているものでは4本（S106・07、第2次調査S101）と、2本（S105）で、前者は主柱穴と考えられる掘り方の深いものと、浅いものが建物の中心に対向する位置に各々2本セットになっている。S103の深さの異なる二つの柱穴も、この類型であろう。S105は小型であるため柱穴が2本であったと推定される。また、上層構造は不明ながら、壁体溝上に小柱穴を多數並べる形態のものが見られた（S105・07）。



第232図 古志本郷遺跡 弥生中期後葉～後期前葉遺構配置図 (S-1/1000)



第233図 古志本郷遺跡 D・E区周辺遺構配置図 (S=1/1500) 中()は出雲市教育委員会の遺構名

豊穴建物の同時併存 上述の範囲（出雲市調査分も含める）における当該期の遺構としては、豊穴建物9棟、土壙3、土壙墓1が検出されている。これらの中心となる豊穴建物は切り合ひ関係のあるものではなく、併存関係については明らかでない点が多い。しかし次に挙げる点から、すべてが同時併存していたとは思われず、一部建物には同時併存しないものがあったと見られる。

1 S I 0 5床面出土の遺物（第202図5）が、S I 0 7に切られる土壙出土の遺物と接合することから、S I 0 5→S I 0 7の時期差が考えられる。

2 出雲市第2次調査で検出したS I 0 1・0 2の距離は約1mしかなく、同時併存でない可能性がある。S I 0 6・0 7についても同様である。

なお、建物床面から出土する土器は、S I 0 7を除いて松本IV-2様式に収まり、出土遺物から細分することは困難である。

廃棄後の豊穴建物 その一方で、S I 0 5の北西土壙や、S I 0 6・0 7の埋土からは松本V-1様式、草田2期までの遺物が出土しており、調査区からも同様の時期の土器片が出土することから、

後期前葉までD・E区で生活が営まれた可能性が高い。このように松木V-1様式遺構の遺物が出土する地点は、廃棄された堅穴建物自体や、堅穴建物を切る土壁である(SI05北西の土壁など)。

同時期の土壤について これとは異なり、堅穴建物床面の遺物と同時期の遺物が出土する土壤は、堅穴建物の周辺に見られる(SK65・66・74)。

中期の集落の様相 島根県東部における弥生中期の集落の様相は、調査された遺跡も少なく、不明瞭な点が多い。鳥取県を中心に山陰の弥生時代の掘立柱建物を絶滅した小原貴樹氏によれば、斜面に立地する遺跡を中心とした分析ではあるが、弥生中期の集落には堅穴建物と共に長持建物、高床建物(1間×1~2間のもの)、貯蔵穴等があったとする。今回の調査では、確実に弥生中期とすることのできる掘立柱建物は検出できなかったが、堅穴建物周辺に同時期の土壤を確認し、土器大まりZ地点もあり、これが堅穴建物以外の何らかの施設と関連することも考えられよう。沖積地に立地する弥生中期後葉~後期前葉にかけての集落の様相については調査例の増加を待って再度検討を加える必要がある。

集落の立地 上述述べてきた、堅穴建物は、本報告の中でもっとも地山標高の高い地点から検出された(8.4~8.7m)。堅穴建物の底部標高のまとめたものが次に挙げる表3である。出雲市第2次調査の調査区はより標高の高い南側にあるために、床面の標高も高くなっているが、本報告分ではE区東側周辺にもっとも床面の高い建物があることがわかる。仮に堅穴建物の堀込が同程度であったとするならば、当該期の表土はD・E区の中間の道路付近での最も高い微高地状をなしていたと考えられる。

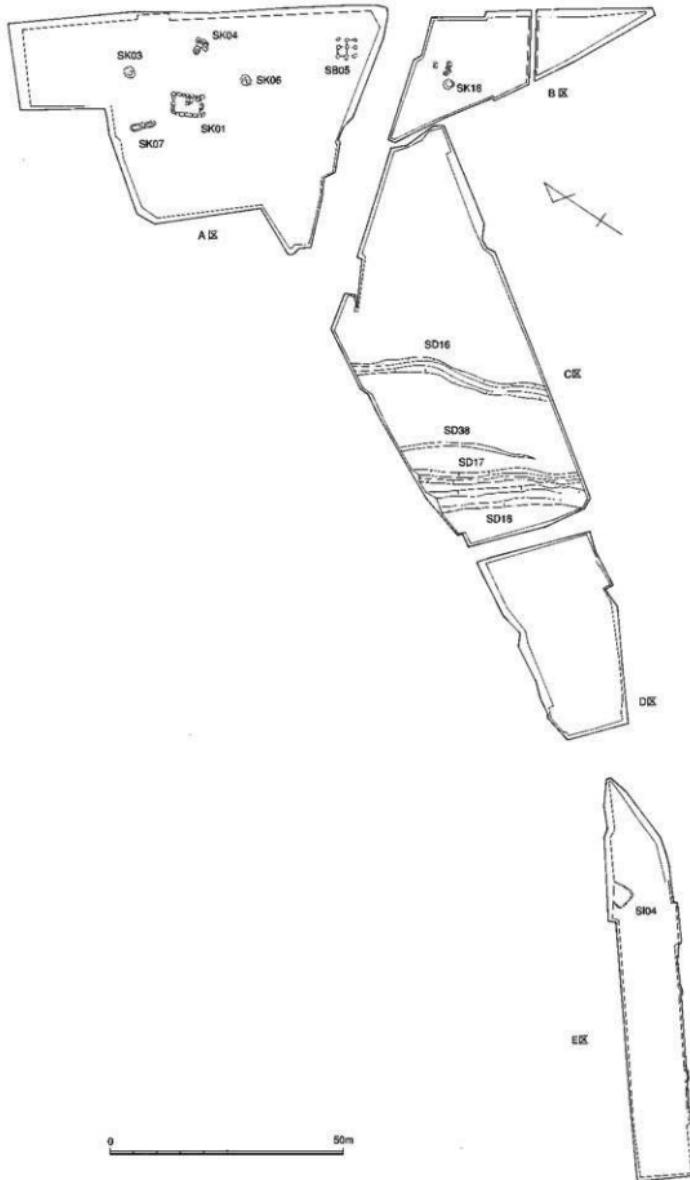
第2節 弥生時代終末~古墳時代前期の様相(第234図)

集落の範囲 第1節の弥生中期後葉~後期前葉の遺構・遺物分布と当該期の遺構・遺物の分布は、大きく異なる。すなわち、中期後葉~後期前葉の遺構がD・E区に集中して見られるのに対し、これらの調査区からは後続する時代の遺構は検出されず、時期的に間隔を置いてE区に古墳時代前期後葉のSI04が見られるだけである。一方、C区には大溝SD16~18が存在したこと明らかである。A・B区にも掘立柱建物跡2棟・土壙5が検出される。

集落の様相 A・B区は中~近世遺構の集中する調査区であり、標高7.0m付近まで、近世の遺物を含む土層で覆われ、古墳時代後期の遺物包含層が最も古い遺物包含層であるため(第2章第1節)、当該期の様相を知ることは困難である。また、当該期の遺物が調査区出土遺物に占める割合は至って低く、E区のように出土遺物の多くが弥生中期後葉~後期前葉の上器であるということもない。全体として、当該期の当該期の集落の様相は不明瞭であるが、D・E区には遺構が確認されなかつた。遺構の底部標高などからして、D・E区よりA~C区が当該期においても低地であったことは明らかで、第1節で述べた弥生時代中期後半~後期初頭集落が本節で述べた遺構群に移動したか否かは別にしても、低地へ遺構が進出する傾向は認めてよいと思われる。なお、古墳時代前期後葉の遺構はSB05・SI04・SD18と散在し、様相は明瞭でない。

遺構名	床面標高
DKS101	7.9m
DKS102	8.6m
EKS103	8.7m
EKS103	8.5m
EKS104	8.3m
EKS105	8.4m
#S101	8.5m
#S102	8.5m
#S103	8.7m

*DKS101は鉢座上面の高さ。



第234図 古志本郷遺跡 弥生時代終末～古墳時代前期遺構配置図 (S=1/1000)

S B 0 1について A区で検出した掘立柱建物 S B 0 1は、柱穴出土遺物などから草田7期、古墳時代初頭の造構と考えられるが、梁行は2間(4.0m)で、桁行も6間(5.8~6.0m)と規模が大きく、梁行の柱間が1.0mと狭いことが特徴的である。⁽⁸⁾また桁方向の東側柱列では、柱穴の上部を共有しているものが見られ、遺構掘りこみ面近くの削平を考えると、本建物が浅い布壙状掘り方に柱穴を掘りこむ形態の柱穴を持った可能性がある。次に柱穴の規模についてみると、柱穴底部の標高は最も低いもので6.3m、平均6.5mほどと大変低い。古墳時代前期後半の純柱建物であるS B 0 5が河6.7m前後であるので、S B 0 1の柱掘方は大きく、本建物が相応の上部構造を持つものであったと推定できる。以上、S B 0 1については、平面規模が大きいこと、柱掘り方が深く、布壙状の可能性があることなどを指摘しておく。

大溝SD 1 6~1 8 C区では当該期の遺物(草田5~7期)が出土する大溝SD 1 6・1 7、この時期に掘削されると見られるSD 1 8が検出された。これらの概要については第2章で詳述したが、得られた結論は、山雲平野の弥生時代~古墳時代前期の大溝をまとめた表4を参照されたい。なお、このような溝の性格の推定は、容易でないことが指摘されており、本報告でも再掘削の状況や時期他の造構との位置など、事実関係まとめるにとどめたい。

SD 1 6・1 7 この2条の大溝は共に底部標高が同じで、再上層V層の土器がほぼ同時期であることから、共通する性格を持っていたことが推測される。そして、SD 1 6では、第Ⅱ~Ⅲ層が、SD 1 7では第Ⅱ層が通水を示す第Ⅰ層を切って再掘削された後に、通水状態で堆積しているので、機能を停止した後に通水があったのではなく、溝として機能している間にも通水があったと見られる。また、SD 1 6第Ⅰ~Ⅳ層、SD 1 7第Ⅰ・Ⅱ層からは遺物の出土がない点については、第234図に見られるように、周辺に大溝以外の当該期の造構がない点に起因するとも見られるが、同様の条件のSD 1 8からは出土しているので、性格の差と考えることも出来るであろう。さらに、最上層V層は共に通水の痕跡は見られず、溝も幅広で浅い形態に変化しており、Ⅰ~Ⅳ層が形成された時期とは様相が明らかに異なる。以上のことから、SD 1 6のⅠ~Ⅳ層、SD 1 7のⅠ~Ⅱ層堆積に対応する時期のこれら大溝の目的は通水状態と関係が深いと判断される。

SD 1 6先行溝 この溝は、第1節で述べた弥生時代中期末葉~後期初頭に該当する溝である。SD 1 6に重なり合うように一部が検出されたもので、溝の両端がSD 1 6によって切られていることから、SD 1 6と同位置に存在したことが推測される。SD 1 6の掘削時期が不明であるので、両者の関係も不明であるが、重複することから、先行溝の機能がSD 1 6と連続性をもっていた可能性もある。ただし、断面形状・堆積状況などでは差異性を強く見てとれる。

大溝SD 1 8 SD 1 8はその再上層(V層)がSD 1 7の第V層を切っている(第120図)。ただし、SD 1 8の最初の掘削段階での切り合い関係は不明で、むしろ、SD 1 8第Ⅰ・Ⅱ層出土土器からは、SD 1 6の第V層、SD 1 7のV層との同時併存が考えられる。この時期のSD 1 8は断面が逆台形で、通水が認められ、その通水層を再掘削するなど、SD 1 6・1 7の第Ⅰ~Ⅱ層形成期との性格の類似が指摘できる。すでに第2章で述べたようにSD 1 6・1 7が性格を変容させると共に、西側にSD 1 8が掘削されたとみられるのである。SD 1 8はこの後、第Ⅲ層~断面V字(松山Ⅱ・Ⅲ)、第Ⅳ層~断面逆台形(同)、第V層~断面V字(大谷出雲5期)と形状を変えながら継続する。なお、断面V字になった時期にはその底部には黒色土が堆積し(カラー図版3参照)、通水が認められないことから、これらの間には大きな性格の変化があったと考えられる。

表4 出雲平野における弥生～古墳時代前期の大溝

番号	調査名	法区	地名	底標高	幅(高さ)	土質(特徴)	遺物出土状況	持続	被災高	その他
1	本郷台	C区	SD16	約32.4m 深さ12.2m	W=0.7m H=6.8m 北 6.65m	I-V層にわたる、 廃棄物堆积層、V層 に土器、石器、骨器、 貝殻等の遺物が出土 する。	V層に限らず、 廃棄物堆积層から、 大規模な土器、石器、 骨器、貝殻等の遺物 が出土する。	弥生終末～古墳 初期	約 50m	SD16は行方不明 中のまま)に亘る 5m。
2			SD17	福井2.0m 深さ1.0m	北面 北 6.85m 北 6.7m	I-V層にわたる、 廃棄物堆积層、 V層に土器、石器、 骨器、貝殻等の遺物 が出土する。	弥生終末～古墳 初期	約 35m	(まる時期)	
3			SD18	福井4.0m 深さ1.0m	W=0.7m H=6.8m 北 6.7m	I-V層にわたる、 廃棄物堆积層、 V層に土器、石器、 骨器、貝殻等の遺物 が出土する。	古墳初期～後期	約 30m		
4	古志木郷遺跡 第3次調査 (文部1)	A区	大溝	松原1.1m C区 深さ1.0m	W=0.7m H=6.8m 北 6.7m	廃棄物堆积層、 V層に土器、石器、 骨器、貝殻等の遺物 が出土する。	弥生時代中期 ～後期	約 24.5m	B区 C区	
5	天神遺跡 (文部2)	A区	大溝1	福井8.0m 深さ8.9m	W=0.7m (5層) ----- 4.9m	廃棄物堆积層、 V層に土器、石器、 骨器、貝殻等の遺物 が出土する。	弥生中期～後期		SD16と並ぶ	
6			大溝2	福井4.0m 深さ4.9m	W=0.7m (8層) ----- 5.2m	廃棄物堆积層、 V層に土器、石器、 骨器、貝殻等の遺物 が出土する。	弥生中期～後期		大溝16.3m以上	
7		B区	SD06	福井4.1m 深さ3.3m	W=0.7m (10層) ----- 15.8m	廃棄物堆积層、 V層に土器、石器、 骨器、貝殻等の遺物 が出土する。	上中下3段階に分 けた、V層に土器、 石器、骨器、貝殻等 の遺物が出土する。 V層以下では、土器 の出土地點が見ら れない。	5.5m 15.8m 6.8m	毎年堆積が高く、 北側に約11mほど 堆積がある。(土器 が少ないのが多 いからである。)	
8	21シテ	清1	上島3.0m 福井1.0m 深さ1.0m	W=0.7m (8層) ----- 6.8m	廃棄物堆积層、 V層に土器、石器、 骨器、貝殻等の遺物 が出土する。	各層ごとに土器 等の遺物が出土す る。	弥生中期	約1.8m		
9	小山遺跡 第2調査 (文部3)	古志木郷	SD01	福井2.2m 深さ6.4m	W=0.7m (27層) ----- 2.7m	廃棄物堆积層を有す る。V層に土器、石器、 骨器、貝殻等の遺物 が出土する。	古墳土器～後期	4.8m		
10	角田村遺跡	SD13	福井9.1m 深さ10.4m	W=0.7m (7層) ----- 3.9m	廃棄物堆积層を有す る。V層に土器、石器、 骨器、貝殻等の遺物 が出土する。	弥生中期～古墳 初期の折合は高い。	約1.8m	SD06(W=1.1m ～W)と比較 してある可能性 があり、平行發 掘によってどの程度 の堆積も考えら れる。		

文献1 古志木郷遺跡第6次調査報告書(1958年)

文献2 天神遺跡(古志木郷遺跡第1回発掘調査報告書)(1957年)

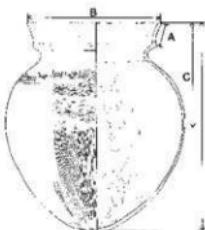
文献3 小山遺跡第2調査報告書(1964年)

出雲平野の大溝 ここで、現在報告のなされている出雲平野での弥生時代～古墳時代初頭の大溝と SD16・17 の比較を行ってみたい (なお、SD18については存続時期が大きく異なるので検討しない)。古志木郷遺跡第6次調査で検出された大溝 (4) とは規模、遺物の出土状況が異なっているが、底部の標高は SD16・17 が 30 cmほど低い程度である。天神遺跡で検出されている大溝 (5～7) も、最上層からの遺物出土状況は類似するが、下層から弥生中期の遺物が出土する点などは異なる。

大溝の性格 以上、SD16～18 を全体としてみた場合、長期間にわたって C 区に溝が作られ続けたということが指摘できる。SD16・17 から SD18 への作り替えが認められるならば、SD16・17 の V 層にみられる土器の廃棄も、決して同様の機能を持つ大溝の終焉を意味するのではないか。また、SD16・17・18 の下の堆積層の通水状態は大溝の機能を考えるうえで重要な

なる。従来、これらの溝には弥生時代の集落をめぐる環濠との解釈を想定してきたが、現状ではそのような性格を明確にすることは出来ず、今後の調査の進展を得て、慎重に検討する必要がある。

SD 16・17の出土土器の計測 SD 17では器種別に出土地点が異なる傾向があり、両者で廃棄の様相はSD 16と異なっている。しかし、巨視的に見ればSD 16・17の遺物出土状況は複数回に渡って一括的に廃棄されたものの集合と見ることができ、土器の形態は草田6・7期を中心としたまとまりのある資料となり得る。以上の前提の元に、甕について、複合口縁端部の幅(A)、口径(B)／口縁部から体部最大径までの距離(C)を計測しものが次の表5～7になる(測定部分については第235図を参照)。⁽¹²⁾なお、後者の数値は、この時期に進行すると考えられている体部球胴化の数値化を日指したものである。本表は、器高(D)／口縁部から体部最大径までの距離(C)等で数値化するべきであろうが、完形品が少ないことから、器高を口径で代用している。なお、表中の小は口径1.5cm未満、中は2.0cm未満、大は2.0cm以上のものである。⁽¹³⁾



第235図 古志本郷遺跡複合口縁甕の計測部位

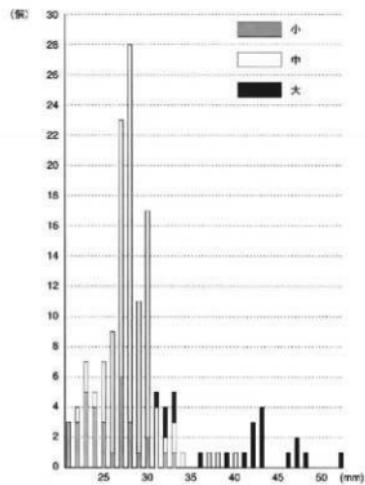
第3節 古墳時代後期の様相(第236図)⁽¹⁴⁾

造構の概要 第1・2節で述べた弥生時代～古墳時代前期と異なり、当該期の造構は溝が主体で、他には土塙2基、井戸1基、方形溝状造構1基が知られるのみで、明確この時期の建物と判断できるものも検出されていない。E区のSK 58が竪穴建物に推定できる程度である。ただし、これらの溝はSD 18をはじめSD 01・02・09・10・14・19など、土師器甕、瓶などの煮炊具を含む相応の出土遺物を持つものが多い。溝は前節で述べたSD 18を除くと、上幅は2mを測るSD 01と幅1m弱の溝とに分別でき、後者は現神戸川に平行する方向の溝(SD 01・09・10・12・20・41)が多い。なお、SD 09は底部の標高が西側と東側で40cmほど異なっており、東に向かって傾斜はのきつい。以下、D区の方形溝状造構SX 04と、出土遺物として土師器脚部有段高坏について若干ふれてみたい。

方形溝状造構(SX 04) 一辺8m程度の方形に、上幅1m深さ1.0～2.0cmの溝をめぐらした造構で、溝中から土師器甕、須恵器有蓋高坏、同蓋坏などが出土している造構で、第2章第4節で述べたように、方墳の周溝である可能性がある。出土した須恵器は大谷出芸4期に属するものである。この造構を検出したD区の南東300mには、墳丘形態・規模不明の大桜古墳が存在する。また、「倭陽誌」神門郡上古志条には「神門塚 高さ八尺周り二十八間、塚頭に樅あり神木と号してまつる、これ神門の臣等の葬所なり、これ古志町より七町辰巳の方にあり」とみえ、現在までに墳丘を消失した古墳が周辺にあったと推定される。ただし、溝内から土師器甕が出土する点、円墳の多い地域にあって方墳と想定される点など、この造構を方墳と推定するには問題点がないわけではない。⁽¹⁵⁾

脚部有段高坏について(第237図) 土師器の高坏で、脚部に段を持つことが形態上の特徴で、脚部有段高坏と仮称する。今回の調査では、推定のものも含めSD 01から9個体、A区調査区から1個体、SE 08から1個体、SD 18から5個体、SD 19から2個体、C区調査区から1個体が出土した。形態は坏部は浅く、口縁部は緩く内湾し、脚部は上方を著しくくびれさせ、下方に

SD16出土窯 複合口縁部幅 (A) 分布グラフ



SD17出土窯 複合口縁部幅 (A) 分布グラフ

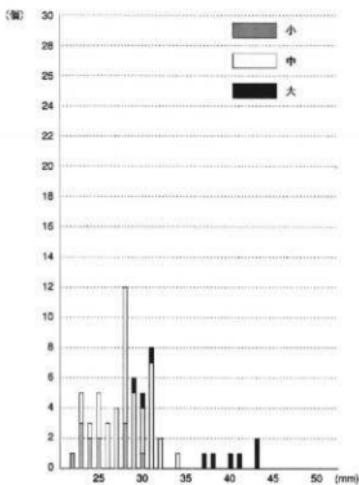


表5 SD16出土窯 複合口縁部幅 (A) 分布表 (単位mm)

幅	小	中	大	全体	編	小	中	大	全体	編	小	中	大	全体
21	3	32	1	43		4	4							
22	3	1	43	44										0
23	5	2	7	34		1	1	45	45		0			
24	4	1	5	35		0	46		1	1				
25	3	4	7	36		1	1	47	47		2	2		
26	1	8	9	37		1	1	48	48		1	1		
27	6	17	23	38		1	1	49	49		0			
28	3	25	28	39		1	1	50	50		0			
29	1	10	11	40		1	1	51	51		0			
30	2	15	17	41		1	1	52	52		0			
31	4	1	5	42		3	3	53	53		1	1		

表6 SD16 (窯) $\frac{B}{C}$ 値

比率	小	中	大	全体
1. 2	2			2
1. 3		1	1	2
1. 4		5	1	6
1. 5	3	4		7
1. 6		3	2	5
1. 7				0
1. 8	2	1		4

表7 SD17出土窯 複合口縁部幅 (A) 分布表 (単位mm)

幅	小	中	大	全体	編	小	中	大	全体	編	小	中	大	全体
21		0	32	32		2	2	43	43		2	2		
22	1		1	33		0	44		44		0			
23	3	2	5	34		1	1	45	45		0			
24	2	1	3	35		0	46		46		0			
25	2	3	5	36		0	47		47		0			
26	3		3	37		1	1	48	48		0			
27	4		4	38		1	1	49	49		0			
28	3	9	12	39		0	50		50		0			
29	5	1	6	40		1	1	51	51		0			
30	1	3	1	5	41		1	1	52		0			
31	7	1	8	42		0	53		53		0			

表8 SD17 (窯) $\frac{B}{C}$ 値

比率	小	中	大	全体
1. 2	2			2
1. 3		2		2
1. 4		2	5	7
1. 5	1	1		2
1. 6				1
1. 7		1		1
1. 8				0

段を持つ。段より下はふくらむもの（146-75）、反り返るもの（36-53）の両者がある。また、内部は段がなく、外面のみの調整で段を作り出したものが確認される（36-58）と同時に、内面にも段が残り、整形時に段を作り出すと考えられるものも見られる（36-53）。また、全体に薄く、外面に赤彩されるもの（146-77）や、段が2段にわたり複雑な形態を取るもの（151-6）もある。後者は、脚端部を内側に引き出す、という特徴的な形態を取る。なお、坏部と脚部は松山 γ 接続法によって接続されている。全体に、胎土も特徴的で、1~2mm大の砂粒を多量に含む褐色の胎土である。75では坏部内面に剥離が認められる。

⁽¹⁹⁾
分布 本遺跡の他に、出雲市巣丁田遺跡、同角田遺跡からも出土し⁽²⁰⁾（第237図）、前者は移動式窯を伴うことから、報告者によつて6世紀後半～8世紀の年代観が与えられている。

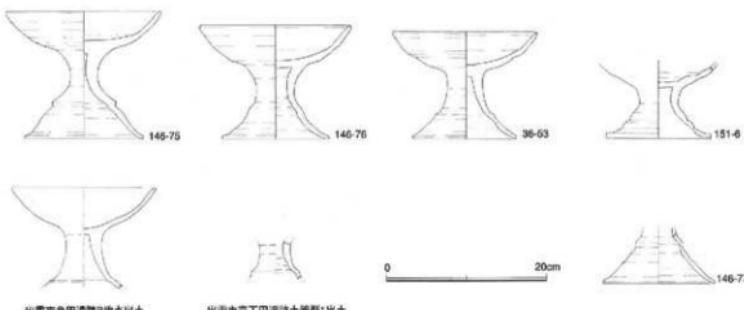
年代 出土した遺構は、SD01、SD18を中心で、いずれも出土した包含層は、時期区分ができないものであった。しかし、SD18は古墳時代後期遺構の遺物が中心で、SD19、SE08も同様であることから、少なくとも大きく古墳時代後期には存在したと見るのが妥当であろう。実際には、形態はさらに細分できると考えられ、類例の増加を待つ再検討を加える必要があろう。

第4節 奈良・平安時代の様相（第237図）

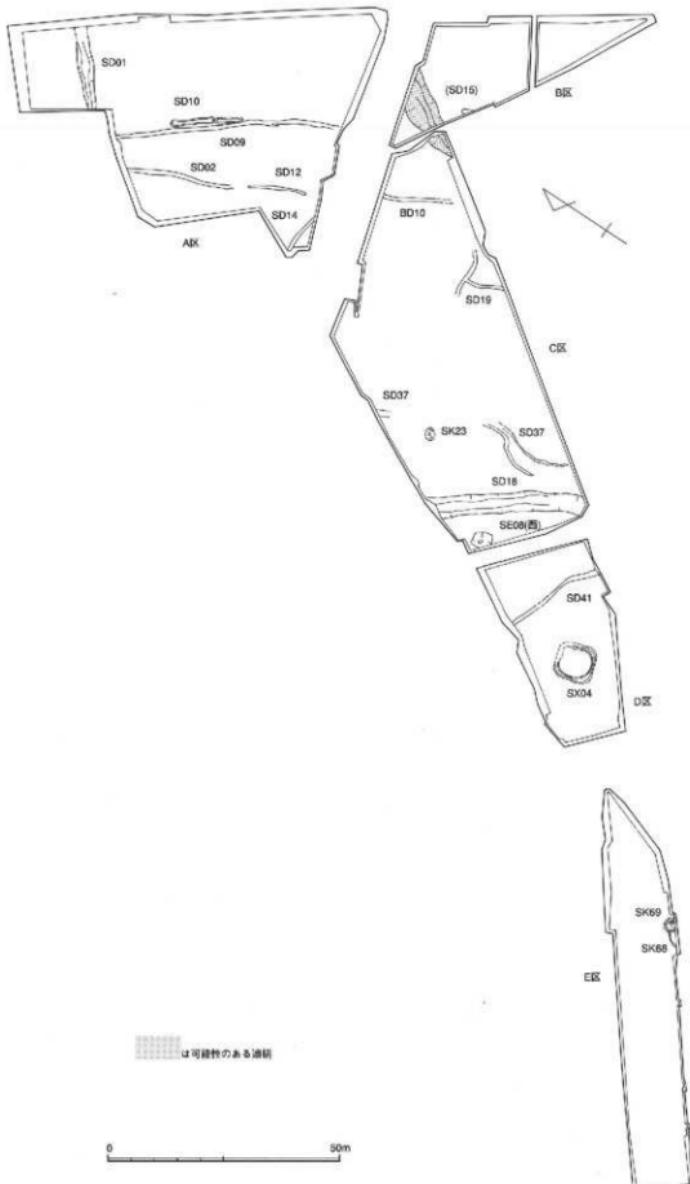
奈良・平安時代の遺構については、C区の中央から西側部分でのみ検出されており、A・B区、E区では当該期の遺物もほとんど検出されていない。

遺構の概要 C区で倒柱建物1棟、総柱建物1棟、井戸1基、土壤2基を検出した。掘立柱建物は主軸をN-16°-W（SB19）、N-75°-E（SB13）に指向する。いずれも建物の立て替えなどは認められない。柱掘り方も、特に隅丸方形を指向するなどの傾向も見られない。

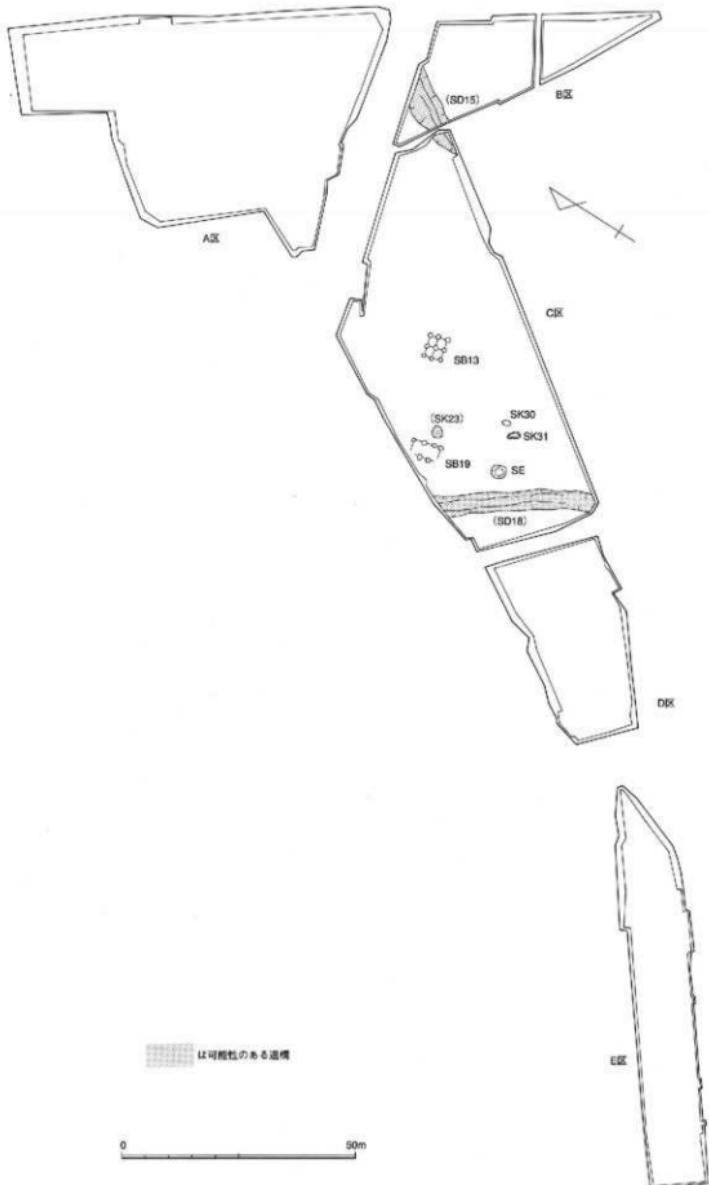
遺物の概要 出土遺物も量的には決して多いとは言えず、時期的にも高広IV期（8世紀後半～9世紀）を中心とするものであり前後しない。ただし、官衙関連遺跡に特徴的な遺物とされる円面硯（第157図52）、風字硯（第191図7）、墨書き器（第154図14・15）、綠釉陶器（第160図132）が出土し、製塩土器も全体の遺物量に比して多く出土している（第158図54～63）。



第236図 古志本郷遺跡 脚部有段高坏実測図 (S=1/6)



第237図 古志本郷遺跡古墳時代後期遺構配置図 (S=1/1000)



第238図 古志本郷遺跡 奈良・平安時代遺構配置図 (S=1/1000)

まとめ 古志本郷遺跡では平成10年度の調査で、本調査区の北側から神門郡家政府域と思われる遺構が検出されており、それらとの関係が問題になる。奈良・平安時代の様相については調査の進展を待つてあらためて総括を加える必要があるが、本報告書では、1 調査区内の一部でしか該当期の遺構が検出されなかった、2 遺構としては掘立柱建物、井戸などが検出されたが、顯著な大型建物などは見られず、存続時期も短い、3 しかし、建物群周辺では官衙関連の遺物が出土するの3点を指摘しておきたい。

第5節 中・近世の様相

(1) 中・近世の土師質土器について

はじめに 今回の調査において、量的に最も多く検出されたのは中世後期～近世の集落遺跡であった。当該期の集落遺跡の調査例は、近年の大規模調査に伴って増加してはいるものの、今回の調査では多数の上師質土器を初めとし、輸入陶磁器や国内産陶磁器が出上りし、対応すると思われる遺構も検出され、当該期の集落の様相を知る上で、重要な資料を提供するものである。

後述するように、この時期の古志本郷遺跡では近世前期に一つの画期が認められる。そしてこの時期区分は遺物の上でも比較的明瞭で、すなわち、第一義的には日用雑器としての肥前系陶磁器（唐津焼）の使用開始と、若干のずれがあるものの、ほぼ重なっている。しかし、詳細な集落の動向を在地の動きに即した検討を行うためには、当該期の土師質土器の年代観をつかむことは、必要である。かかる問題設定の上で、中近世の様相を概観する前に、まず、当該期の土師質土器について分類と編年を行ってみたい。

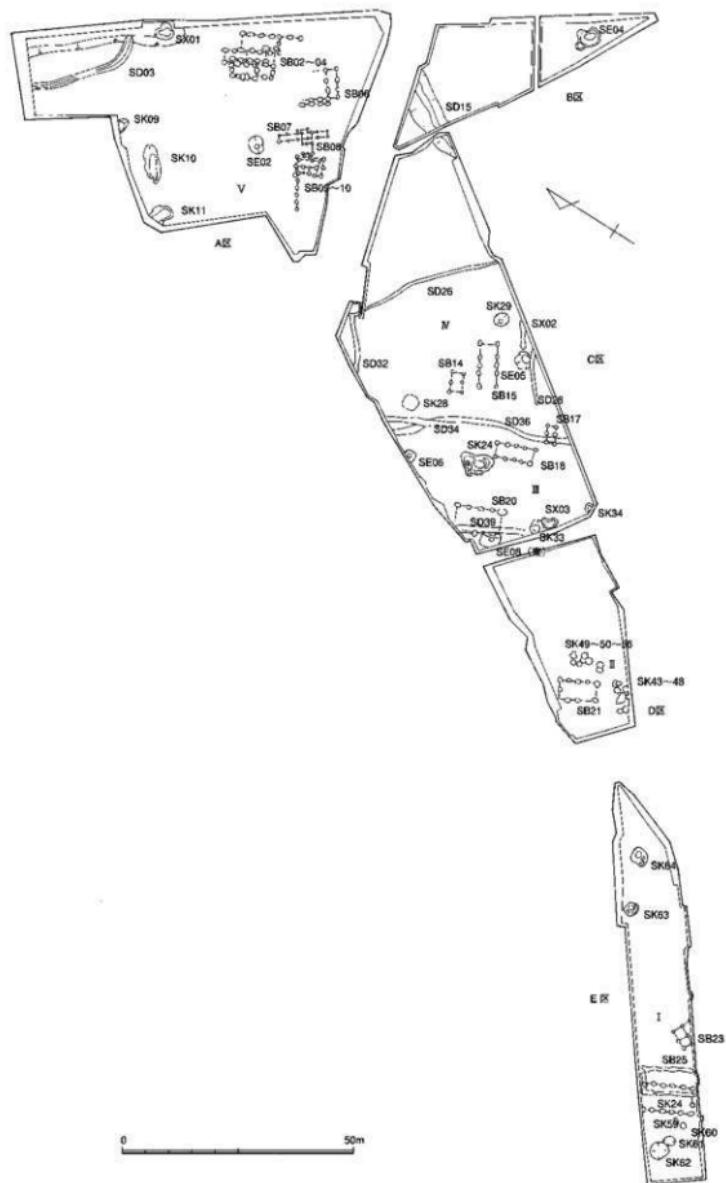
分類・編年の手法 古志本郷遺跡を含む出雲西部の中世～近世の土師質土器については、従来資料数の絶対的不足もあって、特に中世後期以降は余り明確でなかったといえる。この点は、広江耕史⁽²³⁾による研究以来、橋本久和氏や八幡興氏の研究に至るまで通じるものであるといえる。近年報告された八幡氏の分析も、当該時期の資料として挙げられるのは松江周辺の遺跡のものが中心である。これらの研究状況や、筆者自身が出雲東部の状況や、より広範囲での中世土器の動向に言及する能力はとてもないことから、基本的には古志本郷遺跡内でのみ機能する時期区分として以下の土器分類・編年を想定し、場合によって従来の編年との対応関係を考察することにする。なお、この編年観は、先に述べたように、あくまで本報告書で触れる古志本郷遺跡の分析のための設定であり、出雲西部域、あるいは島根県域に及ぶものではない。

遺跡内での土器編年の基準は、本来は良好な一括関係や、切り合いで確認されなければならないことは言うまでもなく、また、供膳具である壺・皿以外にも煮炊具・調理具等とのセット関係も重視されるべきである。しかし、資料数の皿・壺類への偏在と、良好な資料を持ちつつ切り合い関係を持つ遺構がほとんど存在しないことから、まず壺と、壺を共作しない皿の形態から分類を行う。次いで皿についてはそれとの供伴関係から位置付け、最後に伴出する陶磁器、切り合い関係や、そして先行研究による編年観などとの比較から、時期を区分する。

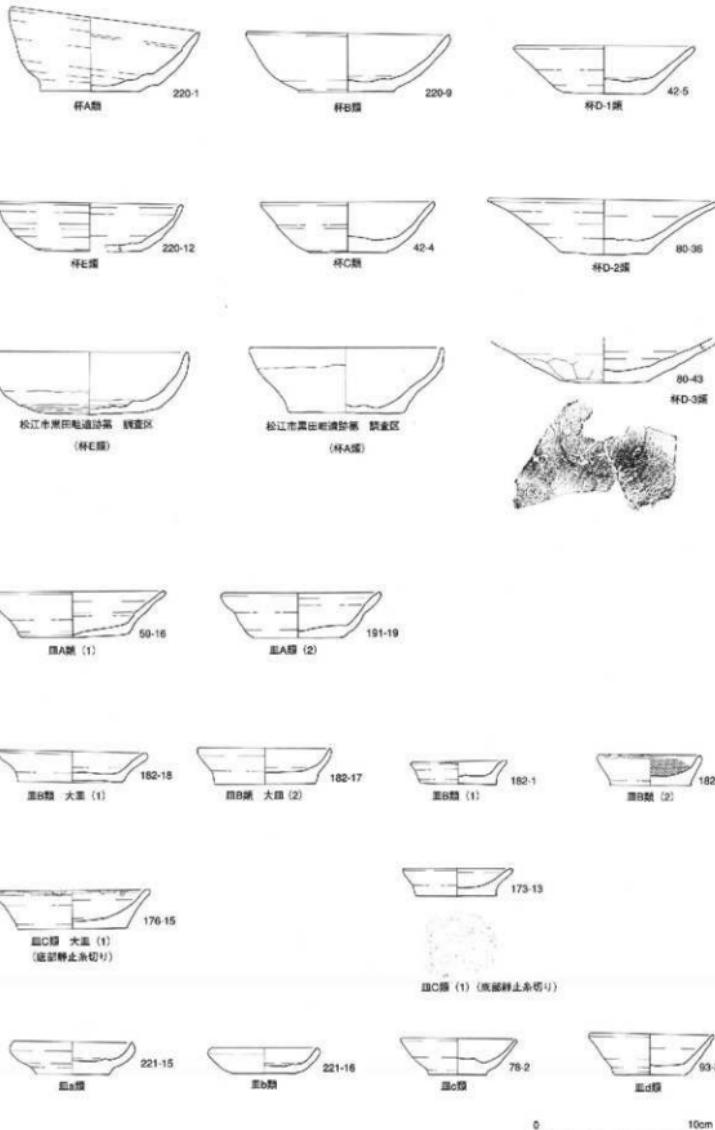
なお、壺・皿ともに特にことわらないかぎり、底部は回転糸切りである。

I 土師質土器壺の分類（第240図）

壺A類 器形は底部周辺をナデによって絞りこみ、絞りこみ部分からは比較的急な角度で立ち上がる口縁を持つ。口縁端部はやや内傾するものも見られる。器壁は全体に厚い。胎土は赤茶褐色で、



第239図 古志本郷遺跡 中・近世遺構配置図 (S=1/1000)



第240図 古志本郷遺跡 土師質土器坏・皿形態分類表 (S=1/3)

1～2 mm人の砂粒を含む。

环B類 器形は底部から内湾しつつ立ち上がる器形を持つ。器壁はA類同様に厚いが、器高は低くなる。ただし、底部周辺のナデはA類同様に見られ、A類と分別の困難なものもある。A類同様荒い作りのものが多い。A類と同じ赤茶褐色の胎土を持つ。

环C類 B類と同様に内湾しつつ立ち上がる器形を持つ。ただし、より直線的である。器壁はB類に比べて薄い。ナデも丁寧である。胎土は明褐色～褐色で後密な胎土である。赤茶色粘土ブロックが混入する。

环D類 器形・法量からD-1、D-2類の二つに区分する。実際にはD-1類とD-2類の中間的形態が多数存在する。胎土はともに精緻な褐色で、赤茶色粘土ブロックが混入する。

D-1類 直線的に立ち上がり、器壁はD-2に比してやや厚いタイプである。

D-2類 直線的に立ち上がり、途中からさらに外反する、あるいは底部から外反しつつ立ち上がる器形である。D-1類に比して大型化し、口径に対し器形は低くなる。

D-3類 D-2類とほぼ同じ形態で底部周辺をヘラケズリするものである。

环E類 器形は内湾する立ち上がりを持つが、断面がより円形に近い中央部の張ったものである。

胎土は白褐色の精緻な胎土である。

II 土師質土器皿の分類（第240図）

坏を伴わず、皿のみで出土する皿をA～C類に分類する。また、坏と共に出土するものをa～d類に分類する。

皿A類 口径、底径、器高のもので法量は一定している（あるいは大皿しか検出されていない）。器形は直線的に立ち上がるものの（1）と（59-16）、途中で屈曲するもの（2）がある。（19-1-19）茶褐色の胎土を持つ。

皿B類 底部回転糸切である。底径約5cmのものと、同約7cmのもの、大小2法量がある。器高は変わらない。口縁端部が外反するもの（1）と（182-18-1）、内傾するもの（2）がある（182-17-7）。茶褐色の胎土を持つ。

皿C類 底部静止糸切りである。口縁端部が外反し、内側内面の断面が半円状をなし、底部と口縁部の別がなく、皿B類（1）と形態が類似する。C類同様大小2法量がある。茶褐色の胎土を持つ。

皿a類 低平で、底部周辺を強くナデて絞りこむもの。胎土は赤茶褐色である。荒い作りで、ナデが内面によく残る。

皿b類 低平だが、立ち上がりが内湾するもの。胎土は赤褐色である。

皿c類 器壁は薄く、若干内湾する。器高もある。胎土は明褐色である。

皿d類 器壁は薄く、口縁は直線的に立ち上がる。胎土は明褐色である。

坏・皿各類型の併存関係 ここで、これら類型化した坏、皿について、本遺跡内で併存関係を想定できる事例について示したのが次の表11である。また、この表には共伴していた陶磁器類も加えてある。この表に挙げた遺構は、土師質土器が比較的多く出土した遺構の大部分を占めており、各遺構出土の遺物は型式学的には幅を持っていることになる。表11を見ると、まず坏A類とB類とE類は相互に関連することがわかる。また、坏C類とD類も相互に関連することも明らかである。さらに皿B・Cも同様である。皿と坏では皿a・bは坏A・Bと共に出土すると見られ、皿c・dも坏C・Dと共に出土すると考えられる。先に述べた器形・胎土などからも坏A-皿a、坏B-皿b、坏

	皿 (a-d)	杯	
I 期 E区SK60 E区SK25	221-15 皿a類	220-1 杯A類	220-12
II 期 E区SK59	221-16 皿b類	220-9 杯B類	220-12 杯A類 松江市雲出町遺跡
III 期 A区SD03	70-2 皿c類	42-4 杯C類	
E区SB24 AI区SK10 BI区SD15 CI区SK02 DII区SK24 DII区SK46 A区SD03 C区SK03	93-33 皿d類	42-5 杯D-1類	80-36 杯D-2類 80-43 杯D-3類 松江市下關田遺跡 SK01
V 期 B区SD15上層 A区SK08	古志本郷遺跡6次段階(SF)	50-16 皿A類	50-16 皿A類
D区SE09 深堀跡 VI 期 D区SK36 D区SE10 窓跡	182-18 皿B類	182-1 皿B類	182-17 皿B類 182-7 皿B類
	176-15 皿C類	173-13 皿C類	

第241図 古志本郷遺跡 土師質土器編年表 (S=1/6) ※は底部鋸歯切切り

C - 皿c、杯D - 皿dの関係は整合的に解釈できるので、以上のセット関係をまず認めてよいであろう。

各分類の前後関係 次に、杯A・B・E類、杯C・D類、皿A・B・C類の関係であるが、ここで、共伴する陶磁器を見てみたい。この併存関係は、陶磁器が小片であったり、また陶磁器自体が伝世される可能性があるなど必ずしも時期を考える上では良好なものではないが、杯A・B・E類と、杯C・D類、皿B・C類の間には明らかな新・古関係を見いだすことができる。すなわち古い方から、白磁皿類・片切彫青磁碗を作う杯A・B・E類と、青磁碗B 4類・E類・古瀬戸新段階を作う杯C・D類、18世紀の肥前系陶磁器を作う皿B・C類の順である。さらに、ここでSB24とSB25の切り合い関係を確認してみる。杯A・B類の出土するSB25は、杯C～D類の出土するSB24に切られしており、併存陶磁器の前後関係と整合する。なお、肥前系陶磁器が出土する遺構に切られる杯C・D類出土の遺構は多数あるので例示しない。

I 期～VI 期の設定 (第241図) ここで、再び各類型の形態に目を向けてみることにする。杯A・B・E類のうち、器形が内碗するという点ではB類が次のC・D類に近似する。杯C・D類ではA・B類に近似するのはC類である。したがって、杯についてはA類→B類→C類→D-1類→

表11 土師質土器の共伴関係

出土遺構	遺構の性格	土師質土器(环・皿)の供伴関係	土師質土器以外の供伴遺物
A区SK10	池	环D - 2類	
A区SK11	上塙	环D - 2類	
A区SD03	溝	环C、D - 1・2類	
C区SX03	廐棄土壤	环D類、皿c・d類	青磁碗D類。
C区SK24	上塙	环D類、皿c・d類	青磁碗B - IV類、備前播鉢IV期。
D区SE09	井戸	皿B・皿C	肥前系陶磁器。
D区SK36	土壤	皿B・皿C	肥前系陶磁器。
E区SB24	掘立柱建物	环C ~ D類	青磁碗D類。
E区SB25	掘立柱建物	环A・E類	白磁皿類。
E区SK59	土壤	环A・B・E類、皿a類	
E区SK60	土壤	环A・B類、皿a・b類	片切青磁碗(非掲載)
出雲市SE01	井戸	皿A類	肥前系陶器(唐津胎土目、鉄絵)。

D - 2類という前後関係が成立つ。さて、皿A類であるが、これは、良好な一括資料が山雲市教育委員会による古志本郷遺跡第6次調査区SE01（本報告書E区に隣接する）から出土している。^[25] すなわち、SE01では皿A類が胎目唐津皿、鉄絵唐津皿と供伴するのである。これらの年代は16世紀末～17世紀初頭と考えられるので、皿A → 皿B・Cの前後関係を認められる。形態的にも、皿類の中でもっとも器高が高く、口径と底径の比が大きいのがA類であり、環D類との類似性を指摘でき、環D類 → 皿A類と見てよい。以上のことから環A～D類、皿A～C類について前後関係をでき、それぞれの時期を土師質土器I～VI期と仮称する。それぞれの年代は、土師質土器V・VI期については、肥前系陶磁器との供伴関係から押さえることができる。また、環A・E類は松江市黒山塚遺跡、名古屋市広瀬廢寺跡SG01出土の皿と類似し、13世紀後半～14世紀代と見ることができよう。^[26] なお、皿B・C類については、基本的に併せて供伴するので、前後関係は断言できないが静止糸切りの技法が土師質土器V期以前には見られること、出土する肥前系陶磁器の新しいものほど、C類が多い傾向が窺われ、C類がより新相を示している可能性が高い。それぞれの絶対年代はごく大づかみに言って、I期が13世紀後半から14世紀前半、V期が16世紀末から17世紀初頭、VI期が17世紀中葉以降になる。

M期の時期について 問題は環D類の時期である。これは次の標識土器である皿A類との形態的差異が大きく、両者の間に相当の時期差があるようにも思えるからである。今回の調査においては、いわゆる京都系の手捏ねの皿類は一点も出土していない。橋本・八幡両氏によれば京都系土師器の山陰地方への伝播一つの波は16世紀代にあるとされ（前掲論文）、鳥取や山雲東部では類例が確認されている。環D類と皿A類の間に未発見の京都系土師質土器の皿が収まる可能性もある。一方で、環D - 2類の時期は供伴するC区SK24出土の青磁碗B - IV類から、16世紀前半程度まで降るとも考えられる。

16世紀代の上師質土器の実像は、なお、資料数の増加を待って再検討する必要があるが、遺跡全体では中国青花、李朝陶器、瀬戸美濃系大窯（第48図71・73）など16世紀の製品が見られることは、環D - 2類と皿Aの間はそれほど時期的にはなれない可能性を示すものであろう。

法量分布表について 次に挙げた表9・10は、主要な土師質土器出土造構の出土遺物（実測図掲載のみ）の法量分布表である。それぞれ若干の時期幅が認められるが、中心となる時期を記載し

た。なお、遺物の残存状況によって、計測できる数値が異なるため、口径・器高・底径で資料数の異なる造構もある。壺については、I・II期は器高が高く、口径が小さいが、IV期にかけて器高が低く、口径が広がる傾向を見せる。皿については、I・II期は口径が大きく、器高が低いが、III・IV期には、器高が大きく、口径が小さくなり、小型の壺のような形態になる。また、V期（皿A類）には大型のものが見られ、VI期には大小2法量が見られる。今のところV期に、VI期に見られる皿小の法量のものが見られないが、このことは、V期皿Aの起源が壺D類にあるのかにかかわると思われ、今後更なる検証が必要である。

IV-V期の間の画期 土師質土器の形態については、IV-V期の間に一つの画期がある。IV期まで、口径が広くなる動きがあるのに対し、V期から口径と底径がほぼ同じになる傾向へ変化する。また、統くVI期の皿B・Cには相当量の巻皿、證明皿がみえ、V期以前の皿との間には用途の差があったと見られる。また、V期には肥前系陶器（唐津焼）が流入しており、これらの変化には相関関係が認められよう。

（2）中・近世の古志本郷遺跡について

前述のような、土師質土器の編年や、あるいは陶磁器の時代観に基づいて、中・近世の古志本郷遺跡の変遷を追うと以下のようになる。

A期 土師質土器編年I・II期に該当する。E区に、本報告中、中近世遺構では最も古いSK63素掘り井戸跡（土師質土器1期に先行する）、その西側に掘立柱建物SB24が作られる。この部分はIII～IV期にはSB23・25が立てられ、B期まで造構が残る。なお、A～D区ではこの時期の遺物はほとんど見られず、遺構はこの部分には展開していないかったものと思われる。

B期 土師質土器編年III・IV期に該当する。遺構が調査区全体に広がる時期である。また、近世以降となるSD26が掘削される。掘立柱建物で、確実にこの時期のものである、といえるのはA区SB09・10、C区SB15・20で、主軸方位などからD区SB17・21もこの時期の可能性がある。建物はSB09・10を除くと桁行4間、梁間1～2間の規模で、それぞれ周辺に井戸と断面皿状の土壙を持つ（SK10・28・24・61・62）。さらに、SB15とSB17、20は溝によって隔てられており、上述の建物、井戸、皿状の土壙などのセットからなる遺構群のI～Vの存在が推定される。このような景観については、高知県南国市の田村遺跡群で報告されている。⁽²⁰⁾ただし、田村遺跡では区画が明瞭で、建物数などもはるかに多く、先に述べた土師質土器IV期の年代幅の問題も合わせて、I～Vが同時に併存したか否か、どの程度の期間存続したかについては不明である。この他、D区の土壙墓群が作られ始め、また、SD15も、この時期には確実に機能していたと見られる（掘削時期は不明）。東側落ち込み部の石敷遺構SX01が機能するのもこの時期である。

C期 土師質土器編年V期に該当する。A区SB02～04（単一の建物の可能性あり）、同SB06、SB08、これと方位を同じくするSB07等、B期に比べ、変化に富んだ複雑な建物群が立てられる。C区、D区では顕著な造構が検出されない。E区西側では井戸（出雲市教育委員会調査SE01）があり、D区のSE09もB期から引き続き機能している可能性がある。また、SD15は埋没し、隠地状になったと考えられる。

D期 土師質土器編年VI期以降に該当する。このD期造構については第239図には示していない。

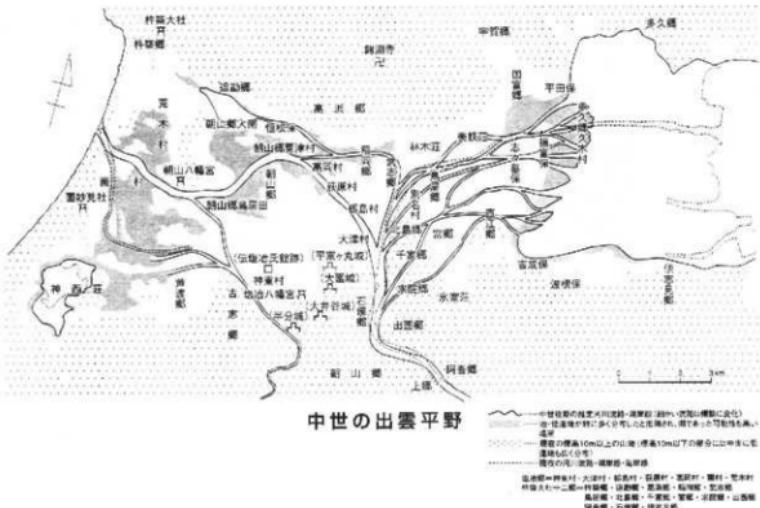
A区ではA区SE01、SK01などがあり、検出された遺構の大部分がこの時期に当たるが、A～C期と異なり、掘立柱建物として確認できるものはないという点が特徴として挙げられる。同調査区の堆積上の大部分もこの時期の遺物を含んでいることから、擾乱を受けている可能性もあるが、掘立柱建物が消失する可能性を想定したい。このことはD区でもの同様で、VI期以降の土師質土器、陶磁器では18世紀以降の肥前系磁器が大量に出土しているにかかわらず、井戸、土壤などしか検出されない。一方、調査区C区は上層遺構に見られるように耕地化し、全体に近代・現代に至る景観の基礎が成立したものこの時期である。

以上のように中近世の様相を把握した上で、以下2、3の点についてふれてみたい。

(3) 中世古志氏と古志本郷遺跡

中世の古志本郷遺跡を考える上で興味深いのが、中世の古志氏である。⁽²⁹⁾近年、中世の塩冶氏や「僧後古志文書」をめぐって出雲古志氏について検討を加えた長谷川博史氏は以下の3点を指摘する⁽³⁰⁾(イ～ハは編集者が付加したもの)。イ守護・戦国大名権力との関係では、尼子氏が「出雲衆」(帰属した国人衆)でありながら尼子家臣「富田衆」のように扱われ、かつ、強く拘束されていない。すなわち、大名権力からの相対的の独立性を持っている。ロ15世紀以来杵築大社社家と婚姻関係を含む緊密な結びつきを持っている。ハ隱岐国に権益を持ち、15世紀後半～16世紀初頭にかけて但馬山名氏と関係するなど、日本海域を通した広範な活動が認められる。

ここで、今回の調査で得られた知見との関係を整理してみたい。まず、イの戦国大名権力(尼子氏)に対する相対的の自立性の問題であるが、これは(1)古志本郷Ⅳ期の時期、述べたように出雲東部、すなわち尼子氏と密接に関わる地域で16世紀代に見られる京都系手捏ね土師器がみえな



第242図 中世の出雲平野(長谷川博史作図)。「富家文書」(島根県古代文化センター1997年)P167より転載)

い点と関係する可能性がある。次にハについて、今回の調査で、少量であるが古瀬戸後期の香炉・天日茶碗と思われるものが出土した点が考慮されるべきであろう⁽³¹⁾（第17図1、第31図26、第48図69、第48図70、第160図137）。藤澤良祐氏は出土品から古瀬戸灰釉陶器の流通について検討し、前期は鎌倉から集中して出土するのに対し、中・後期には地方都市、港湾、館跡から出土するようになると述べる。中世古志氏が持つ水運とのかかわり、神戸川河口の杵築大社との政治的連携が⁽³²⁾（第242図）、本遺跡への古瀬戸陶器の流入の背景となっている可能性がある。以上の相関関係は、現段階では憶測に過ぎず、政治的な関係が土師質土器の製作技法分布に関わるのか等問題点が多いが、今後の調査において考慮して良い視点であろう。

（4）正法寺について

II 古志本郷遺跡の位置と環境、III 第1章で述べたように、D区には大正10年まで正法寺が存在した。正法寺は雲陽誌にすでにみえ、18世紀前半にはこの地に存在したと見られる。『神門郡北方萬差出帳』（宝曆4〔1754〕年）によれば「寺四間ニ九間半茅葺…（中略）…右寺内ニ薬師堂有リ方二間茅葺」と見え、本堂と薬師堂が存在した。また、『神門郡寺院明細帳』には僧伝心によって貞治5（1365）年に創建されたとの寺伝がみえる。⁽³³⁾

今回の調査でこれら諸堂の遺構は検出されなかったのは前述のとおりである。また、寺伝に相当する時期の仏教関係遺物や遺構も検出されていない。問題となるのは、明治には墓地とされていた部分で検出した土壙墓であるが（SK42～57）、これも最も古いもので（D区SK46）、古志本郷IV期に当たり、14世紀代のものとはすることは出来ない。⁽³⁴⁾ただし、正法寺に関連すると見られる土壙墓群が中世後期まで遡ることは確認された。

近世以降の出土遺物を見ると、D区の出土遺物は同じ18世紀遺構の遺構・遺物の見られるA区とは対照的で、比較的高級な肥前系染付類（第192・193図、カラー図版2）が多い反面、A区で多く検出された波佐見・内野山などで生産された粗製の皿（第84・85図参照）はあまりみえない。古志本郷VI期の土師質土器も、ほとんどがD区で発見され、A区ではごく少量しか見いだし得なかった。また、すでに何度かか述べたようにVI期の土師質土器皿には、墨皿、燈明皿が多く含まれている。陶磁器・土器の組成分析など、時間的制約もあって行っていないが、以上の差異は集落的状況と寺院という出土地点の性格に関わると思われ、また近世土師質土器の皿の用途を考える上でも示唆するところとなろう。

註

- (1) 本節での弥生中期後半～後期前半とは、弥生土器で松本IV～V～I 様式に当たる時期のことを指している。なお、弥生時代～古墳時代前期にかけての古志本郷遺跡については、田中義昭・西尾克己氏の分析がある。田中義昭・西尾克己「出雲平野における原始・古代集落の分布について」〔『山陰地域研究』4 1988年〕、田中義昭「中海・宍道湖西部における農耕社会の展開」〔鳥根県教育委員会『出雲神庭荒神谷遺跡』1996年〕。
- (2) 出雲市教育委員会「古志本郷遺跡第6次発掘調査報告書」1998年。
- (3) 出雲市教育委員会「出雲市埋蔵文化財調査報告書第4集」1994年。
- (4) 田畠遺跡で検出された弥生中期の竖穴建物も、大小2種類各2本からなる4本の柱穴を持つ。ただし、同じ大きさの柱の組み合わせは建物の中心に対して対向する位置ではなく、隣同士である（出雲市教育委員会『神門地区遺跡詳細分布調査報告書』1989年）。
- (5) 小原貴樹「山陰の掘立柱建物」〔『弥生時代の掘立柱建物』埋蔵文化財研究会 1991年〕。
- (6) 本節で言う弥生時代終末～古墳時代前期とは、上器型式で草田IV期～草田V期・松山I・II期を指す。
- (7) 松山智弘氏は古墳時代前期における遺跡の衰退を想定している（前掲註2報告書）。
- (8) 弥生時代の掘立柱建物については、柱間間数が多くなるほど、柱間寸法が小さくなることが指摘されている（宮本長二郎「弥生時代・古墳時代の掘立柱建物」〔『弥生時代の掘立柱建物』埋蔵文化財研究会 1991年〕）。
- (9) 間隔2間であること、布堀りであることなどは東出雲町渋山池遺跡SB02と類似する（〔『渋山池・原の前遺跡』鳥根県教育委員会 1997年〕）。
- (10) 亦木克視「近畿道大版鏡における大溝の分布と環濠について」〔『弥生時代の環濠をめぐる諸問題』愛知考古学談話会 1988年〕。
- (11) この他、山陰市教育委員会による下古志遺跡群（旧正進寺周辺遺跡）の調査で、複数の大溝が検出されている。
- (12) 口縁端部の度数分布については中川掌氏から御教示を受けた。
- (13) なお、SD16、17の変換合1様式分布表は実測図非掲載の資料を加えて作成した。
- (14) II様式端部・球胴化率共に、明らかに差の大小によって異なっており、同一に検討することは出来ないため、このような分類を行った。
- (15) 奈良時代（大谷出雲7・8期、高広ⅢB期）以前の須恵器を含む遺構の様相である。
- (16) 「大日本地誌大系42 雲陽誌」雄山閣 1971年。
- (17) 徒歩、神戸川下流域は円墳主体といわれた地域である。ただし、神戸川右岸では刈山古墳群で2基の方墳が確認されており、皆無ではない（鳥根県教育委員会「出雲・上塩治地域を中心とする埋蔵文化財調査報告書」1980年）。また、左岸では三田谷2号墳（大谷同4期）、大井谷古墳（大谷出雲6期、以上2基については鳥根県教育委員会「上沢Ⅱ遺跡・孤迫谷古墳・大井谷城跡・上塩治横穴墓群」1998年）、三田谷3号墳（出雲市教育委員会調査、報告書稿集中）などが発見されており、三田谷2号墳の存在からSX04と同じ大谷出雲4期には、横穴式石室を有する小型の方墳があったことが明らかになっている。
- (18) 報告書では脚部有段高杯については、実測可能なものはすべて実測した。
- (19) 出雲市教育委員会「老丁田遺跡」1998年。
- (20) 出雲市教育委員会「出雲市埋蔵文化財調査報告書第5集」1995年。
- (21) 須恵器で高広ⅢB期以降が該当する。
- (22) 山中敏史「官衙遺跡の判定方法」〔『古代地方官衙遺跡の研究』培書房 1995年〕。
- (23) 広江磐史「鳥根県における中世土器について」〔『松江考古』8号 1992年〕。
- (24) 織本久和と「II 各地の土器様相 1.0、山陰」〔概説 中世の土器・陶磁器〕真陽社 1995年。八幡興「山陰における中世土器の変遷について」〔『中世土器の基礎研究Ⅳ』中世土器研究会 1998年〕。
- (25) 前掲註3報告書。
- (26) 倉吉市教育委員会「広瀬庵守跡発掘調査概報」1979年。なお土器の類似については、百瀬正恒氏から御教示を得た。
- (27) 鳥根県教育委員会「八雲立つ風土記の丘地内発掘調査報告書Ⅰ」1984年。
- (28) 松田直則「田村遺跡群の『溝に囲まれた居敷跡』」〔『中世宋から近世のまち・むらと都市』埋蔵文化財研究会 1990年〕。
- (29) 古志氏については、後述長谷川氏の研究の他、今岡清「神西城と古志城の城主について」〔『出雲・上塩治地域を中心とする埋蔵文化財調査報告書』1980年〕、「古志町誌」〔第三章 莊園制〕古志町誌編纂委員会 1990年〕などがある。
- (30) 長谷川博史「戦国大名尼子氏権力の形成」〔『史林』76-3 1993年〕、同「中世後期の塙治氏と出雲平野」〔『古代文化叢書』3鳥根県古代文化センター 1997年〕、同「戦国時代の古志氏」（1998年12月）

月13日古志公民館での報告資料)。

(31) 島根県内での古瀬戸出土遺跡としては以下のものがある。松江市天溝谷遺跡(前期新段階)島根県教育委員会『北松江幹線新設工事・松江連絡線新設工事予定地内 埋蔵文化財発掘調査報告書』1987年、広瀬町富田三太良遺跡(後期)「富田三太良遺跡出土の陶磁」「貿易陶磁研究」1 1981年、広瀬町富田川河床遺跡(後期)島根県教育委員会『富田川一般渠川河川改修に伴う富田川河床遺跡発掘調査報告書(4)』1984年、広瀬町塙谷遺跡(後期)島根県教育委員会『史跡 富田城関連遺跡群発掘調査報告書』1983年、出雲市戸小路遺跡(前期、間野大丞氏の御教示による)、浜田市横路遺跡(浜田市教育委員会『横路遺跡(原井ヶ地区)』1998年)。

(32) 古瀬戸施釉陶器の模式・時期については、藤澤良祐・守岡正司氏から教示を得た。

(33) 藤澤良祐「9、中世陶器〔1〕古瀬戸」(『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社1995年)。

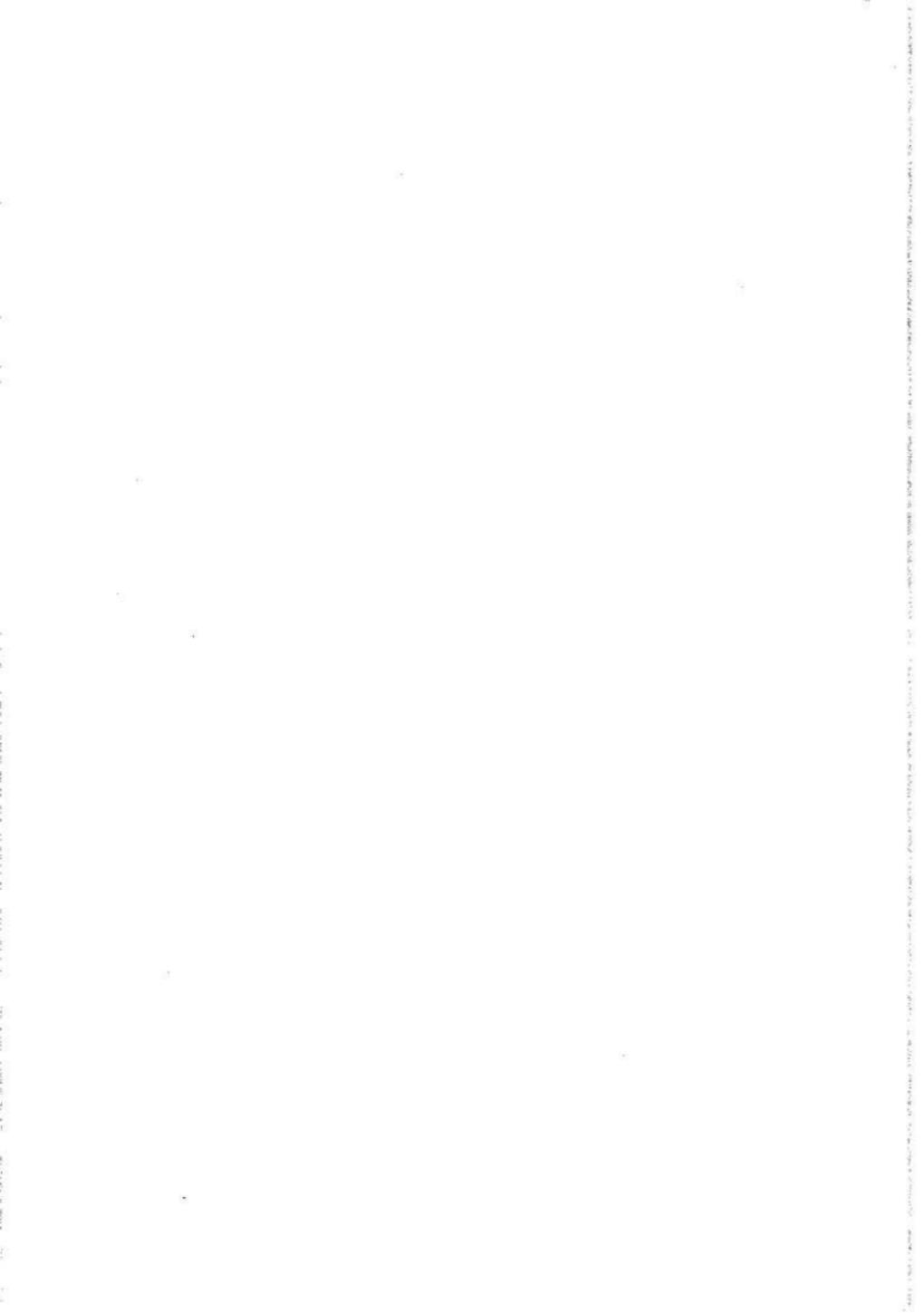
(34) 中世杵築大社領については井上寛司「中世杵築大社々領支配の構造と特質」(『大社町史研究』4 1989年)。同「中世都市杵築の成立」「大社町史上巻」1991年。

(35) 本節は全体にわたって、広江耕史・守岡正司両氏の御教示を得た。

(36) 以上は永田滋史『出雲市の寺々』(出雲市教育委員会 1993年)に依った。

(37) ただし、SK51・55には削り出し高台を持つ上部質土器が出上しており、これらの時期は不明で、編年上位置付けを行っていない。

補註1 本報告書脱稿後、遺物の収蔵保管段階で、D区調査区包含層出土遺物に、京都糸土師質土器皿の小片が一点あることが確認された。



IV 自然科学的分析

古志本郷遺跡SK21・22埋納桶の土壤分析

帯広畜産大学生物資源化学科 中野益男
(株)スコーシャ総合科学研究所 中野覚子、長田正宏

動植物を構成している主要な生体成分にタンパク質、核酸、糖質(炭水化物)および脂質(脂肪・油脂)がある。これらの生体成分は環境の変化に対して不安定で、圧力、水分などの物理的作用を受けて崩壊してゆくだけでなく、土の中に棲んでいる微生物による生物的作用によっても分解してゆく。これまで生体成分を構成している有機質が完全な状態で遺存するのは、地下水位の高い低地遺跡、泥炭遺跡、貝塚などごく限られた場所にすぎないと考えられてきた。

最近、ドイツ新石器時代後期にバター脂肪が存在していたこと⁽¹⁾、古代遺跡から出土した約2千年前のトウモロコシ種子⁽²⁾、約5千年前のハーゼルナッツ種子⁽³⁾に残存する脂肪の脂肪酸は安定した状態に保持されていることがわかった。このように脂肪は微量ながら比較的安定した状態で千年・万年⁽⁴⁾という長い年月を経過しても変化しないで遺存することが判明した。

脂質は有機溶媒に溶けて、水に溶けない成分を指している。脂質はさらに構造的な違いによって誘導脂質、単純脂質および複合脂質に大別される。これらの脂質を構成している主要なクラス(種)が脂肪酸であり、その種類、含量とともに脂質中ではもっとも多い。その脂肪酸には炭素の鎖がまっすぐに延びた飽和型と鎖の途中に二重結合を持つ不飽和型がある。動物は炭素数の多い飽和型の脂肪酸、植物は不飽和型の脂肪酸を多く持つというように、動植物は種ごとに固有の脂肪酸を持っていて。ステロールについても、動物性のものはコレステロール、植物性のものはシットステロール、微生物はエルゴステロールというように動植物に固有の特徴がある。従って、出土遺物の脂質の種類およびそれらを構成している脂肪酸組成と現生動植物のそれを比較することによって、目に見える形では遺存しない原始古代の動植物を判定することが可能となる。

このような出土遺構・遺物に残存する脂肪を分析する方法を「残存脂肪分析法」という。この「残存脂肪分析法」を用いて古志本郷遺跡から出土した土壤内埋納桶の性格を解明しようとした。

1. 土壤および板資料

島根県出雲市に所在する古志本郷遺跡の中で、17世紀のものと推定されている土壤内から出土した埋納桶のものと桶内外および土壤外の土壤試料を分析した。遺跡内での桶埋納土壤の配置状況は、本文第62図を参照されたい。^上土壤内外での試料採取地点は図1の1~6に示す。試料No1~No4はSK21埋納桶のもので、No1は桶内土壤、No2は桶の底板そのもの、No3-1とNo3-2はNo2の底板に付着していた桶の内容物らしいもの、No4は土壤の掘り方の土壤である。No5とNo6はSK22埋納桶のもので、いずれも桶内土壤である。No7はこれら2つの土壤外地山の土壤試料で対照試料にあたる。これらの試料のうち、No3-2とNo5には土壤中に白色の小粒状物質が多く混入しており外観が非常によく似ていた。

2. 残存脂肪の抽出

土壤試料27~1347 gに3倍量のクロロホルム-メタノール(2:1)混液を加え、超音波浴槽中で30分間処理し残存脂肪を抽出した。処理液を濾過後、残渣に再度クロロホルム-メタノール混液を加え、再び30分間超音波処理をする。この操作をさらに2回繰り返して残存脂肪を抽出した。付着物を搔き取った後の底板試料No.2は、予めベンゼンとメタノールでその表面を洗い流し、最後に土壤試料と同様のクロロホルム-メタノール(2:1)混液をかけながら残存脂肪を抽出した。この試料No.2だけは超音波処理は行わなかった。得られた全抽出溶媒に1%塩化バリウムを全抽出溶媒の4分の1容量加え、クロロホルム層と水層に分配し、下層のクロロホルム層を濃縮して残存脂肪を分離した。

残存脂肪の抽出量を表1に示す。土壤試料の抽出率は0.0025%~0.4064%、平均0.0956%であった。この値は全国各地の遺跡から出土した土壤、石器、土器等の試料の平均抽出率0.0010~0.0100%よりも非常に高いものであった。底板試料No.2は本体を直接溶媒に浸漬しなかったのでその重量は測定せず、従って、抽出率も算出されていない。

残存脂肪をケイ酸薄層クロマトグラフィーで分析した結果、脂肪は単純脂質で構成されていた。このうち遊離脂肪酸が最も多く、次いでグリセロールと脂肪酸の結合したトリアシルグリセロール(トリグリセリド)、ステロールエステル、ステロールの順に多く、微量の長鎖炭化水素も存在していた。

3. 残存脂肪の脂肪酸組成

分離した残存脂肪の遊離脂肪酸とトリアシルグリセロールに5%メタノール性塩酸を加え、125°C封管中に2時間分解し、メタノール分解によって生成した脂肪酸メチルエステルを含む両分をクロロホルムで分離し、さらにジアゾメタンで遊離脂肪酸を完全にメチルエステル化してから、ヘキサン-エチルエーテル酢酸(80:30:1)またはヘキサン-エーテル(85:15)を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで精製後、ガスクロマトグラフィーで分析した。⁽⁵⁾

残存脂肪の脂肪酸組成を図2に示す。残存脂肪から12種類の脂肪酸を検出した。このうちパルミチン酸(C16:0)、ステアリン酸(C18:0)、オレイン酸(C18:1)、リノール酸(C18:2)、アラキジン酸(C20:0)、エイコサモノエン酸(C20:1)、ベヘン酸(C22:0)、エルシン酸(C22:1)、リグノセリン酸(C24:0)、ネルボン酸(C24:1)の10種類の脂肪酸をガスクロマトグラフィー質量分析により同定した。

試料中の脂肪酸組成パターンをみると、大きく2つに分かれた。1つめは主要な脂肪酸がパルミチン酸であるもので、試料No.1、No.2、No.3-1、No.4、No.6、No.7がこれにあたる。2つめは、主要な脂肪酸がステアリン酸であるもので、試料No.3-2、No.5がこれにあたる。1つめのパターンの中では試料No.2のみが他の試料とはやや異なり、炭素数18までの中級脂肪酸がパルミチン酸、オレイン酸、ステアリン酸の順に多く分布しているものであった。他の試料中ではパルミチン酸、ステアリン酸、オレイン酸の順に多く分布していた。一般に考古遺物にはパルミチン酸が多く含まれている。これは長い年月の間にオレイン酸、リノール酸といった不飽和脂肪酸の一部が分解し、パルミチン酸を生成するためで、主として植物遺体の土壤化に伴う腐植物から来ていると推定される。ステアリン酸は動物性脂肪や植物の根に比較的多く分布している。オレイン酸の分布割合の高いものとしては、動物性脂肪と植物性脂肪の両方が考えられ、植物性脂肪は特に根、茎、種子に多く分

布するが、動物性脂肪の方が分布割合は高い。オレイン酸はまた、ヒトの骨のみを埋葬した再葬試料などにも多く含まれている。リノール酸は主として植物種子・葉に多く分布する。

一方、高等動物、特に高等動物の臓器、脳、神経組織、血液、胎盤に特徴的にみられる炭素数20以上のアラキシン酸、ベヘン酸、リグノセリン酸などの高級脂肪酸はそれら3つの合計含有率が試料No.2、No.3-2、No.5で約6~9%、No.4で約31%、他のすべての試料中で約16~24%であった。

通常の遺跡出土土壤中のアラキシン酸、ベヘン酸、リグノセリン酸の高級脂肪酸3つの合計含有率は約4~10%であるから、試料No.2、No.3-2、No.5での高級脂肪酸含有率は通常の遺跡出土土壤中の植物腐植土並みで、他のすべての試料中では高めで、試料No.4では非常に高かった。高級脂肪酸含有量が多い場合としては、試料中に高等動物の血液、脳、神経組織、臓器等に特殊な部分が含まれている場合と、植物の種子・葉などの植物体の表面を覆うワックスの構成成分が含まれている場合とがある。高級脂肪酸が動物、植物のどちらに由来するかは、コレステロールの分布割合によって決めることができる。概して、動物に由来する場合はコレステロール含有量が多く、植物に由来する場合はコレステロール含有量が少ない。

以上、古志木郷遺跡の試料の脂肪酸組成パターンは大きく2つに分けることができ、SK21埋納試料No.1、No.2、No.3-1、桶外試料No.4とSK22埋納桶試料No.6、対照試料No.7では主要な脂肪酸がパルミチン酸で、SK21埋納桶試料No.3-2、SK22埋納桶試料No.5では主要な脂肪酸がステアリン酸であることがわかった。高級脂肪酸はSK21埋納桶外試料No.4に非常に多く、SK21埋納桶試料No.1、No.3-1、SK22埋納桶試料No.6、対照試料No.7に多めで、SK21埋納桶試料No.2、No.3-2、SK22埋納桶試料No.5に通常の遺跡出土土壤中の植物腐植土並みに含まれていることがわかった。

4. 残存脂肪のステロール組成

残存脂肪のステロールをヘキサン-エチルエーテル-酢酸(80:30:1)を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで分離・精製後、ビリジン-無水酢酸(1:1)を窒素気流下で反応させてアセテート誘導体にする。得られた誘導体をもう一度同じ展開溶媒で精製してから、ガスクロマトグラフィーにより分析した。残存脂肪の主なステロール組成を図3に示す。残存脂肪から14~26種類のステロールを検出した。このうちコプロステノール、コレステロール、エルゴステロール、カンペステロール、スチグマステロール、シsstステロールなど8種類のステロールをガスクロマトグラフィー質量分析により同定した。

試料中のステロール組成をみると、動物由来のコレステロールは試料No.5とNo.6に約12~20%、No.1、No.2、No.3-2、No.4、No.7に約4~8%、No.3-1に約1%分布していた。通常一般的な植物腐植土中にはコレステロールは2~6%分布している。従って、コレステロール含有量は試料No.5とNo.6で多めで、No.3-1で非常に少なめで、他のすべての試料中で通常の遺跡出土土壤中の植物腐植土並みであった。

植物由来のシsstステロールは、試料No.3-1とNo.3-2に1%前後、他のすべての試料中に約8~20%分布していた。通常の遺跡出土土壤中にはシsstステロールは30~40%、もしくはそれ以上に分布している。従って、試料中のシsstステロール含有量は試料No.3-1とNo.3-2で非常に少なめで、他のすべての試料中で通常の遺跡出土土壤中の植物腐植土中でよりも少なめであった。

クリ、クルミ等の堅果植物由来のカンペステロール、スチグマステロールは、すべての試料中に

カンペステロールが約1~6%、スチグマステロールが約1~8%分布していた。通常の遺跡出土土壤中にはカンペステロール、スチグマステロールは1~10%分布している。従って、試料中のカンペステロール、スチグマステロール含有量はすべて通常の遺跡出土土壤中の植物腐植土並みであった。

微生物由来のエルゴステロールは試料No.3-1とNo.3-2で痕跡程度しか検出されなかったが、他のすべての試料中には約0.3~1.7%分布していた。この程度の含有量は土壤微生物の存在による結果と考えられる。

哺乳動物の腸および糞便中に特異的に分布するコプロスタノールは、試料No.3-1に約91%、No.1、No.2、No.3-2に約28~40%、No.6に約10%、他のすべての試料中に約3~4%分布していた。コプロスタノールは通常の遺跡出土土壤中には分布していないが、1%程度の量は検出されることがある。また、コプロスタノールの分布により試料中の哺乳動物の存在を確認することができる他に、コプロスタノールが10%以上含まれていると、コプロスタノールとコレステロールの分布比から試料中に残存している脂肪の動物種や性別、また遺体の配備状況などが特定できる場合がある。今回は桶内試料No.1、No.2、No.3-1、No.3-2にはコプロスタノールが非常に多く含まれており、特に底板付着物試料No.3-1はステロールのうち大半がコプロスタノールで占められていた。SK21埋納桶埋納土壤の掘り方土壤試料No.4、SK22埋納桶内試料No.5、2つの桶埋納土壤外対照試料No.7のコプロスタノール含有量は通常の遺跡出土土壤の植物腐食土中よりは多めであるが、他の試料よりも少なめであった。

一般に動物遺体の存在を示唆するコレステロールとシトステロールの分布比の指標値は土壤で0.6以上、⁽⁷⁾ 土器・石器・石製品で0.8~23.5をとる。また、コプロスタノールとコレステロールの分布比からは動物種が判定でき、ヒトの場合コプロスタノールとコレステロールの分布比は成人男性が4.25、成人女性が2.75である。試料中のコレステロールとシトステロールの分布比を表2に表す。表からわかるように、分布比は試料No.4とNo.7が0.6以下であったが、他のすべての試料は0.6以上であった。このことは試料No.4、No.7のような桶外や土壤外から採取した試料中には動物遺体または動物由來の脂肪が残存している可能性が少なく、他の桶内から採取した試料中にはその可能性があることを示唆している。また、コプロスタノールが10%以上含まれている資料についてコプロスタノールとコレステロールの分布比を算出すると、試料No.1とNo.3-1はコプロスタノール含有量が多すぎて分布比も大きな値になったが、試料No.2は3.58、No.3-2は4.23であった。コプロスタノールとコレステロールの分布比が男性の値に近いか、それよりも高いことや、試料No.3-2がSK21埋納桶の底板に付着した白色の小粒状物質であることを考えると、SK21埋納桶には男性の遺体が埋納されていた可能性が考えられる。

以上、古志本郷遺跡の試料中に含まれている各種ステロール類は、動物由来のコレステロールがSK22埋納桶内試料No.5、No.6に多く、哺乳動物の腸もしくは糞便由来のコプロスタノールがSK21埋納桶内試料No.1、No.2、No.3-1、No.3-2に非常に多く含まれていた他は、すべて通常の遺跡出土土壤中の植物腐植土並みか少なめであることがわかった。コレステロールとシトステロールの分布比はSK21埋納桶とSK22埋納桶内試料がすべて0.6以上で、これらの試料中には動物遺体または動物由來の脂肪が残存している可能性があることを示唆している。コプロスタノールとコレステロールの分布比はSK21埋納桶内試料No.2が3.58、No.3-2が4.23であったが、試料No.3-2が底板に付着

していた物質であり、俺もヒト男性の値に非常に近いことを考えると、SK21埋納桶には男性の遺体が埋納されていた可能性が考えられる。ステロール分析によるコレステロール含有量と脂肪酸分析による高級脂肪酸含有量の関係をみると、多めに含まれていた高級脂肪酸は植物体の表面を覆うワックスの構成由来のものである可能性が高い。

5. 脂肪酸組成の数理解析

残存脂肪の脂肪酸組成をバターン化し、重回帰分析により各試料間の相関係数を求め、この相関係数を基礎にしてクラスター分析を行って各試料の類似度を調べた。同時に出土土壤を土壤基と判定した兵庫県寺田遺跡⁽¹⁰⁾、出土土器を幼児埋葬用壺棺と判定した静岡県原川遺跡⁽¹⁰⁾、ヒトの体脂肪、出土土壤を再葬墓と判定した宮城県押戸遺跡⁽¹²⁾、ヒトの骨油試料など、各種遺跡試料や現生試料との脂肪酸の類似度も比較した。予めデータベースの脂肪酸組成と試料中のそれとでクラスター分析を行い、その中から類似度の高い試料を選び出し、再びクラスター分析によりバターン間距離にして表したのが図4である。

図からわかるように、古志本郷遺跡の試料No.1、No.2、No.3-1、No.4、No.6、No.7は原川遺跡、寺田遺跡の試料と共に相関行列距離約0.1以内でA群を形成し、よく類似していた。古志本郷遺跡の試料No.3-2とNo.5はそれらのみで相関行列距離0.05以内でC群を形成し、非常によく類似していた。対照試料はB群、D群を形成した。これらの群のうちA群とB群は相関行列距離0.2以内の所にあり、互いに類似しているといえる。試料No.3-2とNo.5が形成するC群は近くに類似する試料がなかった。

以上、古志本郷遺跡のSK21埋納桶の底板付着物試料No.3-2とSK22埋納桶内土壤試料No.5に残存する脂肪は、類似する脂肪を特定できなかったが、他のすべての試料中に残存する脂肪は、ヒト遺体を直接埋葬したことに関わる遺跡の試料やヒトの体脂肪と類似していることがわかった。SK21埋納桶の桶外試料No.4と対照試料No.7も桶内土壤試料と類似しているが、これは桶内での遺物残存量が少ないために通常の植物腐植土の影響を強く受けているためと考えられる。

6. 脂肪酸組成による種特異性相関

残存脂肪の脂肪酸組成から種を特定するために、中級脂肪酸（炭素数16のパルミチン酸から炭素数18のステアリン酸、オレイン酸、リノール酸、リノレン酸まで）と高級脂肪酸（炭素数20のアラキシン酸以上）との比をX軸に、飽和脂肪酸と不飽和脂肪酸との比をY軸にとり種特異性相関を求めた。この比例配分により第1象限の原点から離れた位置に高等動物の血液、脳、神経組織、臓器等に由来する脂肪、第1象限から第2象限の原点から離れた位置にヒト胎盤、第2象限の原点から離れた位置に高等動物の体脂肪、骨油に由来する脂肪がそれぞれ分布する。第2象限から第3象限にかけての原点付近に植物と微生物、原点から離れた位置に植物腐植、第3象限から第4象限にかけての原点から離れた位置に海産動物に由来する脂肪が分布する。

試料の残存脂肪から求めた相関図を図5に示す。図からわかるように、試料No.4が第1象限内に位置したが、全体的な群としては試料No.1、No.2、No.3-1、No.6、No.7と共にA群を形成し、第1象限から第2象限内の広い範囲に分布していた。試料No.3-2とNo.5も第2象限内に分布し、C群を形成した。これらの群の分布位置は、試料中に残存する脂肪が高等動物の体脂肪や骨油に由来することを示唆している。

以上、古志本郷遺跡のすべての試料中に残存する脂肪は、高等動物の体脂肪や骨油に由来することがわかった。

7. 総括

古志本郷遺跡から出土した土壤内埋納桶の性格を判定するために、埋納桶そのものと桶内外および土壤外の土壤試料の残存脂肪分析を行った。残存する脂肪の脂肪酸分析、ステロール分析、脂肪酸組成の分布に基づく数理解析の結果、SK21・22埋納桶に残存する脂肪はヒト遺体を直接埋葬したことに関わる遺跡の試料やヒトの体脂肪と類似しており、特にSK21埋納桶にはヒト男性遺体が埋葬されていた可能性が高いことがわかった。

参考文献

- (1) R.C.A.Rottländer and H.Schlichtherle : 「Food identification of samples from archaeological sites」, 『Archaeo Physika』, 10巻, 1979, pp260.
- (2) D.A.Priestley, W.C.Galinat and A.C.Leopold : 「Preservation of polyunsaturated fatty acid in ancient Anasazi maize seed」, 『Nature』, 292巻, 1981, pp146.
- (3) R.C.A.Rottländer and H.Schlichtherle : 「Analyse fröhgeschichtlicher Gefü β -inhalte」, 『Naturwissenschaften』, 70巻, 1983, pp33.
- (4) 中野益男 : 「残存脂肪分析の現状」, 『歴史公論』, 第10巻(6), 1984, pp124.
- (5) M.Nakano and W.Fischer : 「The Glycolipids of Lactobacillus casei DSM 20021」, 『Hoppe-Seyler's Z.Physiol.chem.』, 358巻, 1977, pp1439.
- (6) 中野益男 : 「残留脂肪酸による古代復元」, 『新しい研究法は考古学になにをもたらしたか』, 田中 琢, 佐原 真編, クバプロ, 1995, pp148.
- (7) 中野益男, 伊賀 啓, 根岸 孝, 安木教傳, 畑 宏明, 矢吹俊男, 佐原 真, 田中 琢 : 「古代遺跡に残存する脂質の分析」, 『脂質生化学研究』, 第26巻, 1984, pp40.
- (8) 中野益男 : 「真脇遺跡出土土器に残存する動物油脂」, 『真脇遺跡-農村基盤総合整備事業能都東地区真脇工区に係わる発掘調査報告書』, 能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団, 1986, pp401

- (9) 中野益男、根岸孝、長田正宏、福島道広、中野寛子：「ヘロカルウス遺跡の石器製品に残存する脂肪の分析」，『ヘロカルウス遺跡』，北海道文化財研究所調査報告書，第3集，1987，pp191。
- (10) 中野益男、中野寛子、福島道広、長田正宏：「寺田遺跡土壙墓状遺構に残存する脂肪の分析」，『未発表』，兵庫県芦屋市教育委員会。
- (11) 中野益男、幡口剛、福島道広、中野寛子、長田正宏：「原川遺跡の土器棺に残存する脂肪の分析」，『原川遺跡I-昭和62年度袋井バイパス（掛川地区）埋蔵文化財発掘調査報告書』，第17集，（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所，1988，pp79。
- (12) 中野益男、福島道広、中野寛子、長田正宏：「摺薪遺跡の遺構に残存する脂肪の分析」，『未発表』，宮城県教育委員会。

表1 試料の残存脂肪抽出量

試料No.	試料名	湿重量(g)	全脂質(mg)	抽出率(%)
1	桶153 桶内上 壤	1347.1	109.8	0.0082
2	〃 桶の底板	種類なし	10.3	-
3-1	〃 底板付着土壤	792.2	436.8	0.0551
3-2	〃 〃	26.6	108.1	0.4064
4	〃 土擴掘り方土壤	1144.1	56.0	0.0049
5	桶154 桶内土壤	211.8	230.4	0.1088
6	〃 〃	640.6	533.1	0.0832
7	上 壌 外地山土壤	1345.5	33.0	0.0025

表2 試料中に分布するコレステロールとシトステロールの割合

試料No.	コレステロール(%)	シトステロール(%)	コレステロール／シトステロール
1	5.71	8.84	0.65
2	8.31	17.67	0.47
3-1	0.91	0.86	1.06
3-2	6.62	1.87	3.54
4	3.60	13.32	0.27
5	20.39	7.65	2.67
6	12.18	17.67	0.69
7	5.16	19.99	0.26

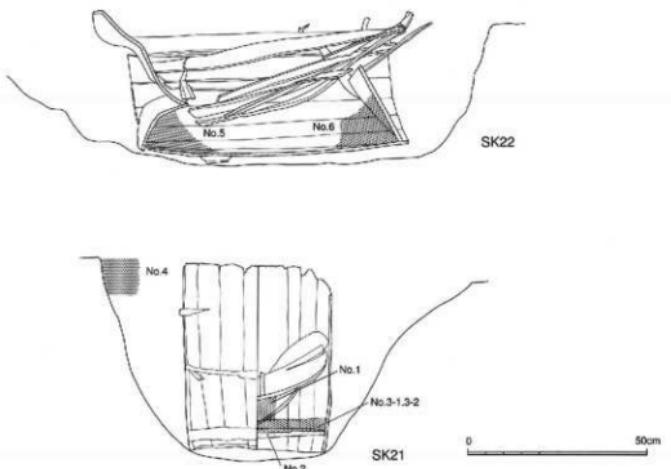


図1 SK21・22土壤試料採取地点

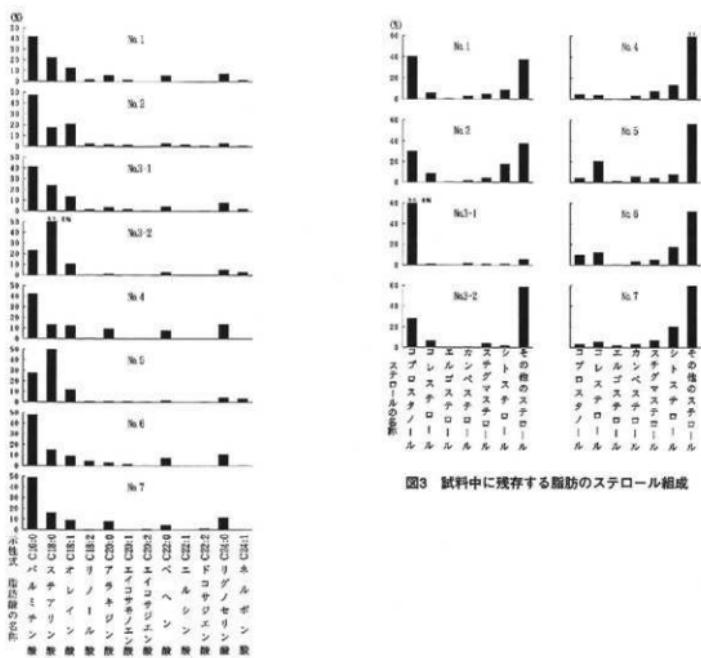


図2 試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成

図3 試料中に残存する脂肪のステロール組成

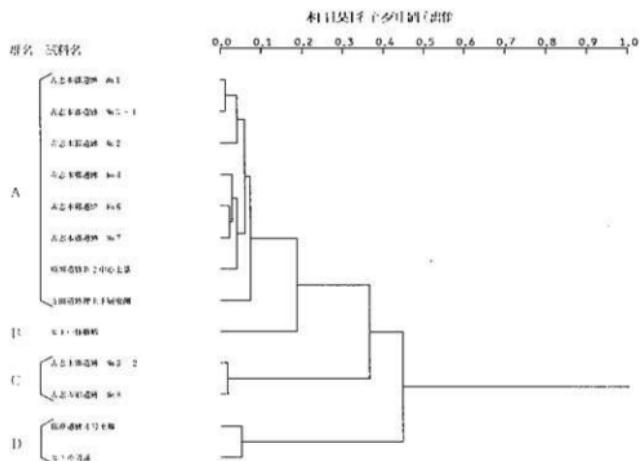


図4 試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図

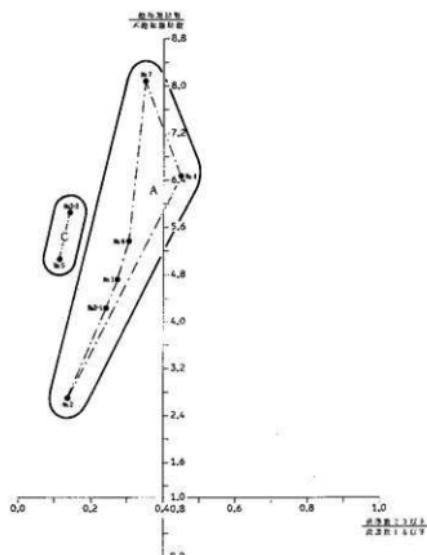


図5 試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関

古志本郷遺跡発掘調査に伴う花粉分析

川崎地質株式会社（担当者：渡部正巳）

はじめに

古志本郷遺跡は、島根県中部の出雲市古志町内に分布する遺跡であり、三瓶山の東南に水源を持つ神戸川が出雲平野に形成した扇状地上に位置する。

本報告は島根県教育委員会が遺跡周辺の古環境復元のために川崎地質株式会社に委託した分析調査報告書の概報である。

また近年、出雲平野内では発掘調査に伴い花粉分析が積極的に実施されつつある（たとえば、川崎地質（1998））。しかし、現在得られている資料から平野内および周辺地域の植生変遷を積極的に論じることは、資料数が少なくまだ不可能である。今後資料の蓄積を持って、出雲平野および周辺地域の植生変遷を総合的に解析する必要があり、本報がその一助になれば幸いである。

分析試料について

分析した試料は島根県教育委員会との協議の上、川崎地質株式会社が採取したものである。図1に試料採取地点を示す。図2～7の柱状図右側の数字が試料番号で、採取深度に示した。

分析方法および分析結果

（1）分析方法

処理を渡辺（1995）に従って行った。顕微鏡観察は光学顕微鏡により通常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1000倍を用いて行った。原則的に木本花粉総数が200個体以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本化石も同定した。

（2）分析結果

花粉分析結果を図2～7の花粉ダイアグラムに示す。花粉ダイアグラムでは、同定した木本花粉総数を基準にした百分率を各々の木本花粉、草本花粉について算出し、スペクトルで表した。また、右側の総合ダイアグラムは、針葉樹花粉、広葉樹花粉、草本花粉、胞子総数の比を百分率で示し、累積ダイアグラムで表したものである。

分析の結果すべての試料から花粉化石が検出されたものの、含有量が少ないためにほとんどの試料で統計処理に十分な量の花粉化石が検出できなかった。また、統計処理を行った試料では顕著な花粉組成の変化が認められなかつたことから、今回の解析では花粉分帯（地域花粉帶の設定）を行わなかった。

花粉化石の含有量の少ない原因について

花粉化石の含有量の少ない原因について、通常は以下のようない事が考えられている。

1. 堆積速度が速いために、堆積物中に花粉化石が含まれない。
2. 花粉化石の平均的な粒径（数～100 μ ）と堆積物の粒度が著しく異なり、堆積物中に花粉化石が含まれない。

3. 土壤生成作用にともなう堆積物で、堆積速度が極めて遅く、堆積した花粉化石が紫外線により消滅した。
4. 花粉化石が本来含まれていたが、堆積後の化学変化により花粉化石が消滅した。
5. 有機物に極めて富む堆積物で花粉以外の有機物も多く、処理の過程で花粉化石が回収できなかつた。

今回の多くの試料では、炭片が多く含まれていた（試料観察で試料が有機質に富んでいたのは、このことに起因すると考えられる）。さらに、土壤生成作用を受けた際に含まれる土壤菌も多く認められるほか、古土壤中で高率になることの多い孢子化石も相対的に多い試料があった。また、分析試料の多くは砂質堆積物であり、A区深掘地点の下部の試料は凝灰岩質であった。このような試料の状況から、花粉化石の含有量の少なかった主な原因として、上記の1～3が指摘できる。

堆積年代について

今回の分析地点Noと遺構名、試料Noと堆積年代（出土遺物による）の関係は表1のようにまとめられる。

のことから、花粉化石の検出できた6試料のうち、5試料が古墳時代後期（6C後半～7C）の堆積物、1試料が江戸時代前期（16～17C）の堆積物であることがわかる。

古植生の推定

（1）遺跡近辺

弥生時代中期に堆積したと考えられるSD40の試料No2,1では、検出された花粉化石総数が少ないものの、イネ科（40ミクロン以上）花粉の出現率が高い。また、これに続く時期の堆積物中からもイネ科（40ミクロン以上）花粉が連続して高率で検出される。これらのことから、遺構が検出されていないものの、遺跡近辺には弥生時代中期以降水田が広がっていたと考えられる。また、古墳時代の堆積物中からはソバ属花粉が検出されることから、水田の畦や休耕田にソバが栽培されていたと推定できる。これに対し江戸時代からの堆積物からはソバ属花粉が検出されず、ソバの栽培がほとんど行われていなかったと考えられる。一方、江戸時代の堆積物からはアカザ科ヒュウ科花粉が多量に検出される。アカザ科ヒュウ科には水田・島畠草が多く含まれるが、ホウレンソウなどの野菜も含まれ、江戸時代の一時期に遺跡周辺が野菜畑となった可能性が指摘できる。

（2）周辺の森林植生

木本花粉は一般に飛散距離が長く、草本花粉に比べ遠方の植生を示す。したがって検出された木本花粉の多くは遺跡南～東方に広がる中国山地縁辺部、西方の砂丘あるいは鳥根半島南側の植生に由来すると考えられる。

今回統計処理を行った試料の全てで、マツ属（複維管束型）花粉が卓越する。一方、宍道湖周辺地域でマツ属（複維管束型）が近世以降に卓越することははあるが、古墳時代にこれほどの高率を示すことはない（大西、1993）。このことから今回認められた古墳時代でのマツ属（複維管束型）花粉の卓越は、遺跡周辺の限られた地域での植生を反映したものと考えられる。遺跡西方約4kmには出雲國風土記に記される「齒の松原」があり、砂丘にはクロマツ海岸林が存在したことが明らか

である。したがって、マツ属（複維管束亞属）の供給源がここである可能性がある。一方で同様の現象は、遺跡南～東方の中国山地縁辺部にアカマツ二次林が分布していたと仮定しても説明可能である。このように、現状では古墳時代に卓越するマツ属（複維管束亞属）の供給源を判断することは、困難である。今後周辺地域での調査が進み資料が蓄積されて、明らかになろう。

一方、江戸時代には出雲平野周囲の丘陵～山地はアカマツ二次林で覆われていたと考えられる。また古墳時代に認められるスギ属花粉は、中国山地縁辺部の谷間に分布したスギ林に由来すると考えられる。

まとめ

古志本郷遺跡において実施した花粉分析結果から、以下のことを考察した。

(1) 花粉化石の含有量が少なかった原因について考察した。考察は以下のとおりである。

① A区深掘地点下部の試料については堆積速度が速いことが主な原因と考えられた。

② そのほかの試料では、堆積粒子のサイズが粗く花粉化石粒子が含まれにくかったこと、土壤化により花粉化石が消滅したことなどが主な原因と考えられた。

(2) 古墳時代と江戸時代の古植生復元を試みた。これらのうち、特筆すべき点は以下のことである。

① 古墳時代以降、古志本郷遺跡近辺には水田が広がっており、古墳時代にはソバ栽培も行われたと考えられる。一方江戸時代には、ホウレンソウなどの野菜が栽培されていた可能性が指摘できる。

② 検出できたマツ属（複維管束亞属）花粉は、出雲國風土記に記される「園の松原」のクロマツ海岸林のほか、遺跡南から東方に続く中国山地縁辺のアカマツ二次林に由来する可能性がある。

引用文献

川崎地質株式会社 (1998) 「小山遺跡周辺の古環境」『小山遺跡第2地点発掘調査報告書』77-90. 出雲市教育委員会.

大西都夫 (1993) 「中海・宍道湖周辺地域における過去2000年間の花粉分带と植生変化」, 『地質学論集』39 33-39.

渡部正巳 (1995) 「花粉分析法」「考古資料分析法」84-85, ニューサイエンス社.

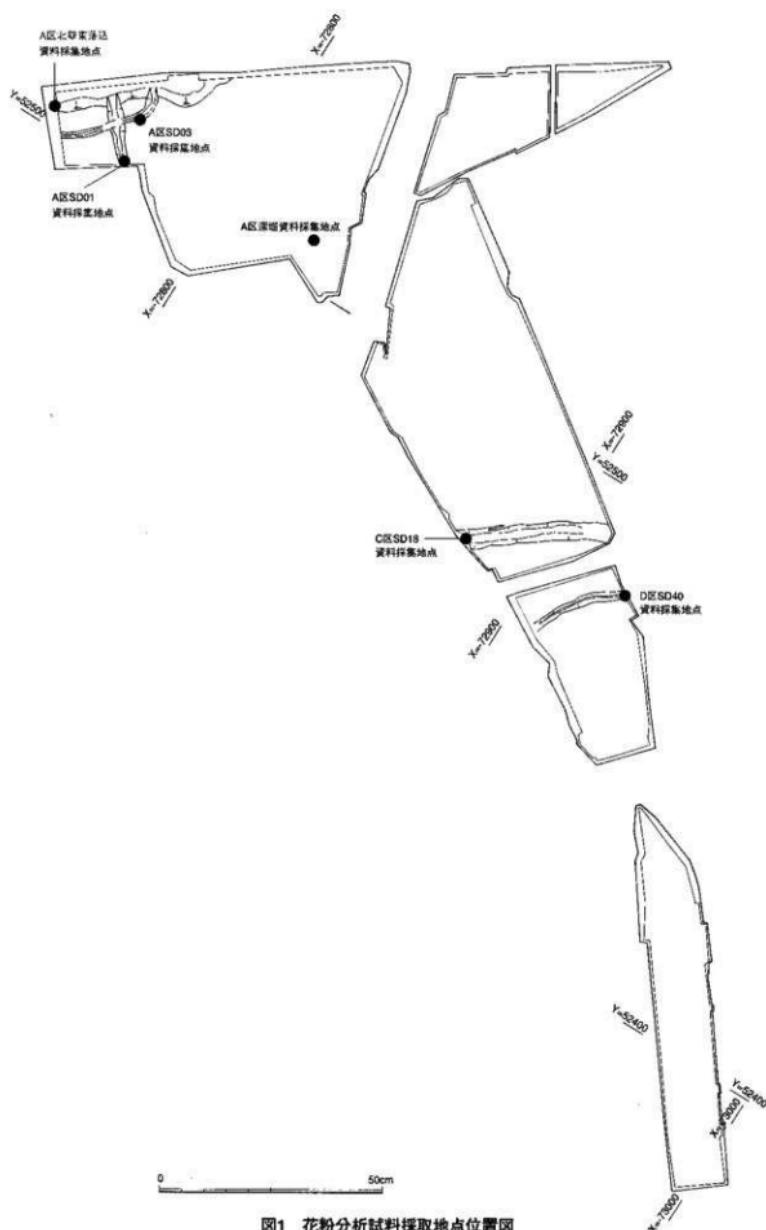


図1 花粉分析試料採取地点位置図

図2 A区深堀 花粉柱状図

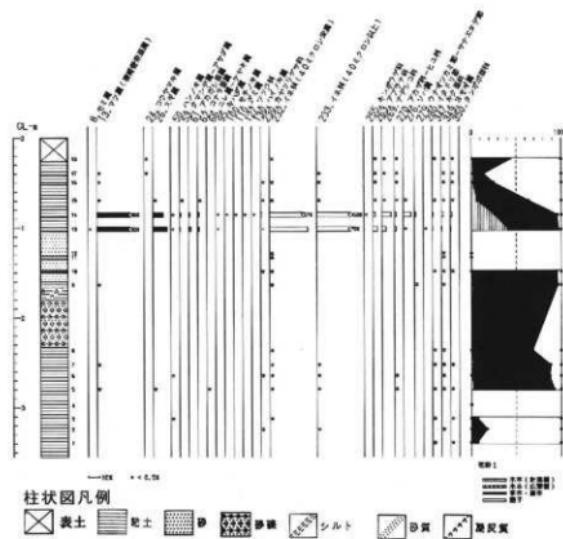


図3 A区 SD03 花粉柱状図

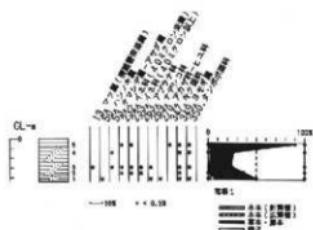


図4 A区SD01 花粉柱状図

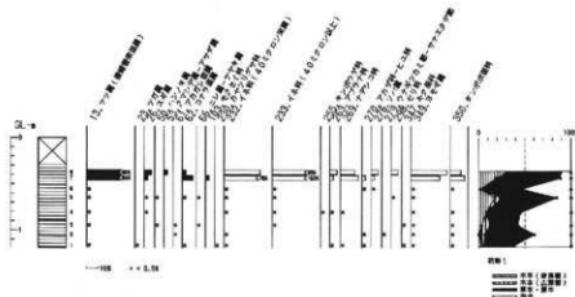


図5 A区北壁東落込 花粉柱状図

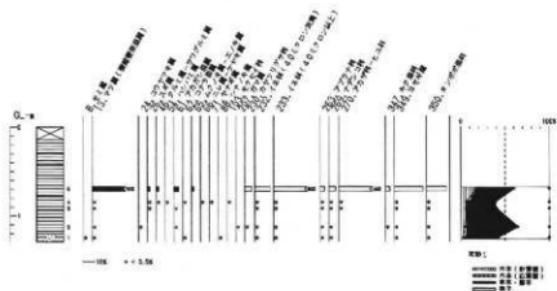


図6 C区SD18 花粉柱状図

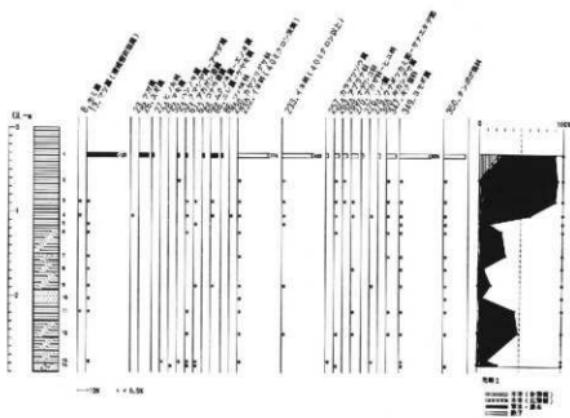


図7 D区SD40 花粉柱状図

